

---

# 神々のゲームと転生者

レティウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神々のゲームと転生者

### 【Nコード】

N5587W

### 【作者名】

レティウス

### 【あらすじ】

贖罪のために働いてきていたと思っていた紅那岐しかし！実はこれが神々が始めたゲームであった。紅那岐は今までと同じに戦うことを約束し再び戦いへと身を投じていった

これはチート・ご都合主義・えーな内容などいろいろあります  
また会話が多いのが特徴です

## プロローグ

「さて、何処から話しましょうかしら・・・」

今この場所には二人の男女がいた、しかし二人の表情はまるで違う男の表情は追い詰めている顔であり、女の表情は追い詰められない顔である

「ねえ、神様の寿命ってあると思う？」

女ことトールは紅那岐を転生させた兆本神であり、紅那岐は少なからず敬意を持っている

「はあ？神に寿命があるのか？」

意味が分からず聞きなおしてしまう紅那岐

「そうね・・・正確には神には命の概念がないわ、死なないからね  
まるでとんちをしているかのようで紅那岐は頭を捻っていた

「そうね・・・神には寿命は無いけど神としての力とかは実は上限するの・・・貴方達人間によってね」

その言葉を聞いた紅那岐はあることが頭をよぎった

「信仰か・・・？」

「そうよ、信仰によって私達の力って上限するのよ」

ある一定のヒントを得た紅那岐は結論に達したがそれでもまだ疑問は残っていた

「その信仰が一体俺の答えとどう関係あるんだ？」

「あせらないで、きちんと説明するわ」

そう言ってトールは目を閉じ深呼吸した後紅那岐の眼を見ながら話始めた

「始めはね、下の神々が始めたのよ転生者を異世界に送るってのは。原作ブレイクをすればその転生者の名前が売れるということ、つまりは転生させた神自体も信仰されると同義になって力を得られるわけ」

トール転生システムについて紅那岐に話した

紅那岐はあまりの内容で驚いて声が出なかった

「そして、それが我々のような上位神や最高神まで参加し最終的に多くの信仰を得られた人物の神が時代の最高神を名乗れるゲームが始まったわ。そして能力を与えるという部分において実際は制限は無かったの・・・ただ最初のほうであげられる能力を全部上げちゃうとほとんどの子が力に振り回されちゃうから1つづつと言つことを言っただけを見て話すことにしてるのよ・・・まさか二つ目の世界でこの答えにたどり着くとは思わなかったわ」

そう言ってトールは説明を終えた

「なるほどな・・・どおりで最初にいたときやさっきのことが矛盾

しすぎていてかみ合わないと思った」

紅那岐の矛盾とは・・・原作ブレイクをすればいいというのに紅那岐の敵になったりジャマをするやからと言うのがいる理由が、転生者を倒しジャマをすれば良いという事・マイナスのほうでも信仰されればそれは力になるということを言われても無いのに理解した

「で、貴方はどうするこの話をしたとき転生者はどうするかを自由にできるわ」

そう言ってトールは諦めた顔をして紅那岐を見た

「かまわんぞ？今までどおりにやってやろう、これも仕事としてやる分にはかまわないし何よりもう出会ってしまったからな・・・」

紅那岐の頭に浮かぶのは七星達だった、自分の妹・好いてくれる者・守ると決めた者の顔だった

「そお・・・ありがとう」

トールは泣きそうな顔をしながら礼を言った

「泣くな、綺麗な顔が台無しだぞ？」

紅那岐がさりげなく落としながら言うとトールは真っ赤になりながら怒鳴った

「馬鹿なこといわないで！／＼／＼それで能力はどうするの！私の力じゃ後5個くらいしか与えられないわ」

それでも十分すぎると思う紅那岐であった

「今のところ3つ欲しいものがある」

「何かしら？／＼／」

まだ若干赤いツールが聞いてくる

「一つ目として俺の力をfortissimoに固定してくれ」

「二つ目はダイマラオ魔法球をくれこれに関しては中のレイアウトは自由にでき、時間の調整もできなおかつ老化しないものが欲しい」

「三つ目はfortissimoの能力と言ったが最低限のリリナの力と他の力も使えるようにしてくれ」

紅那岐のお願いはかなり無茶苦茶であったがツールは納得した

「だましていたわけだしその条件はいいわ・・・最低限のレベルを教えてくださいるかしら？」

「空は飛べるじゃなくてその場でとどまれる位でかまわん。後は自分で移動するから、デバイスの形の七星をそのまま使えfortissimoの武器の入れ物にしてくれ、その他の力については関係ない武器を手にしても使えるようにな」

「分かったわ、ただfortissimoの能力でもニールベルグだけは与えられないは・・・アレは最高神のみの能力だから」

「やはりか・・・かまわん他の力が使えるならな」

「他のは大丈夫よ・・・ただ7個までしか使えないわよ?」

そう言つて紅那岐は納得した、正直7個もあれば十分である

「さて・・・別荘を作るのに時間がかかるから少し付き合つてあげる」

「何をだ?」

紅那岐が渋い顔をしていると関係なくトールは言い放つた

「幾ら能力を変えても使えなきゃ意味無いでしょ?だから最低限使えるようにしてあげるわ」

「お前にできるのか?」

「あげられるのに使えないつてそんな神は三流以下よ・・・というかあの力つて私達が元じゃない」

そして紅那岐はトールの特訓を受けた

「さて、別荘は作り終わったわある程度レイアウトは作つてあるから後は適当にやつて頂戴」

「世話になつたなトール」

「忘れてたわこれを渡しておくわ」

そう言つて紅那岐に一本の太刀と鬼の面を渡した

「これは？」

「貴方にあげてほしいと別次元の神から送られたものよ」

「そうか・・・最後に聞きたいことがある」

「何かしら？」

「お前達が始めたというゲームの名は？」

「・・・ラグナロクよ」

「そうか・・・ではな」

そう言って紅那岐は七星達がいるなのはの世界に帰っていった

「本当に変わった人間ね・・・この話を聞いても態度を変えないなんて」

そう言ってトールは自分の仕事に戻っていった



## プロローグ（後書き）

レティ「言うわけで紅那岐の能力変更！」

紅那岐「続いて俺の能力の変換を書く予定です」

レティ「では！感想ありがとうございました」

## 主人公設定 ちよつと修正

赤羽 紅那岐

神によって転生した人物、実際は神のゲームに巻き込まれた人  
過去の世界は異能の力を持った父と母を持つが世界は普通であった

### 武器

今までと異なりfortissimoの武器となった

モード1：イルアン・クライベル雷光を打ち砕くもの

ガントレット・パイルバンカーで殴りあい最適武器である

魔力サイクルの効果を持つ武器でありある程度の魔力はこれを通して自分の魔力へと変換できる

モード2：うたまる&メルセデス

白い銃（リボルバー）と黒い銃（オートマチック）である

魔力自体を弾丸に変えるため玉切れ自体は無い、弾速は訓練しだい銃口の下にはブレードがついてるため一応接近戦は可能

モード3：スウアフルラーメ

魔剣と聖剣の両面を持つ剣

通常時は黒き外殻を持つ剣であり開放時は光り輝く剣となるが強力すぎるため技は現在仕えない

モード4：グリモワール七つの大罪

七つの宝石のようなビットみたいなもの、それぞれに違った効果があり

赤Ⅱルシファー：嗅覚を奪う 青Ⅱマモン：触覚を奪う などのそ

それぞれの効果を持つが現在のはただのビット兵器のごとくそれぞれから魔力レーザーを放つことしかできない

モード5：ストリングロード

魔力のピアノ線を生成できるグロープ

線の長さは魔力量しだいで長くなる。絡み合わせて網見たくして対象を捕獲することも可能

モード6：ストリームフィールド

666本のナイフであり魔力消費量が少なく使いやすい

貫通力に長け突く攻撃にはもってこいである

また現在は使用不能だがこれの本来の能力を使えると全部のナイフと1本として打ち出せるようになる

モード7：高潔なる処女  
アイキスマイデン

自分が思い描いた幻想の獣のみを召還できる、構成が不十分だと能力の劣化が激しい

現在使用とすると魔力切れを起す

## スキル

fortissimoの能力を持つ、またおまけ程度の飛行能力は持っている

ダ・カーボ  
復元する世界

対象を24時間以内の状態に戻すことができる

24時間以内にあつた人物を召還することができる

ダ・カーボ・セカンド  
再現する世界

オリジナルにしたはずだが何故か直らなかつた

今まであつた人物の武器と技を顕現できる

## ノイトウンゲ 九つの世界

此方はオリジナルに戻った能力は以下の通り  
九つある平行世界にアクセス・リンクする力  
命中率や結果を持つてくる。今までどおり力の差が天と地の差があると発動が失敗する

## タイヒュランス 疾風迅雷

ネギまの雷天大壮と同じで自身に雷光の力を宿す、威力・速さを特に重視した能力  
欠点は他の能力を使うときはこの力を吐き出すか打ち出すしかない

## ヴァイス・シユバルツ 福音の弾丸

“音”を認識して追跡する能力

他は現在習得中

## 攻撃技

### トールハンマー 総てを射抜く雷光

雷に変換した魔力を槍状にし敵へと放つ技

特筆すべきは速度、雷光の名の通りすさまじい速度を持って敵を射抜く

威力はリリなの風に言えばAAA+

### シユトウラム・クロイツ 正邪必滅の流星群

魔導銃から生み出した音を追跡する魔弾を空中に固定する術式固定アインハルト  
にその固定を解除する術式固定解除ラーゼンを使用する。さらに、空中に大量の魔弾を固定し、それを一斉に放つ広範囲殲滅魔法

威力はC（単発威力は低いが弾丸の数によつてはAAA以上）

## ヴァイス・シユバルツ 福音の魔弾

上記の攻撃の単発版だが威力は上以上である、左右の銃の単発のため魔力を極限までこめられる  
これも音を頼りに追跡をしていく

威力はA A +

フェンリスヴォルフ  
神討つ拳狼の : 丸は使う武器で変わる

本来なら魔力パンチだが、あらゆる武器を使える紅那岐はこれだけはいろいろに応用を利かせた

剣や銃でもいろいろなもので代用可能

威力は魔力しだいA↘

レーヴァテイン  
迷い無き光闇の剣

本来なら穢れ無き桜光の剣なのだが、光と闇を内包する紅那岐はこの力となる

簡単に言えば収束攻撃である、威力がありすぎるため反動はでかい  
威力はSS↘

他は現在訓練中

その他スキル

アイテムクリエイト  
武器・装飾具精製能力

恋姫世界ではまった鍛冶の延長で、魔石や鋼を練成できる  
無から有は作れない

逆に素材さえあれば<sup>エクスカリパー</sup>約束された勝利の剣クラスの宝具ではない限り作れる

最大はBまでの宝具なら時間をかければ作れる(破戒すべき<sup>ルールブレイカ</sup>全ての

符は使い捨てなら何とかなるが、現状それを理解してないため作れない)

その他武器

劣化版覇煌刃・劣化版崩嵐槍・鬼菩薩・豪竜胆・龍騎尖・名前の無い刀が多数

**主人公設定 ちよつと修正（後書き）**

レティ「こんなところです」

紅那岐「ちよい、ちよいずるが入ってますが簡便してください」

レティ「では」

主人公以外設定 修正（前書き）

飛鳥忘れてたあああああ



## 主人公以外設定 修正

赤羽 七星

紅那岐のデバイスの人格である

紅那岐が能力を変えても顕現できる。もちろん逆も然り

能力は紅那岐の魔力供給量しだいで変わる

能力等は一部同じだが違うのもあり

スキル

九つノートウングの世界と復元ダ・カーボする世界系が使えない代わりに無フリーシンガメンに還エイレナイオスった少女（

“現象”の運動エネルギーを変化させる能力）と踊り狂う悪魔（あらゆる物体を魔力で自由自在に動かす能力）を使える

月村 すずか

変化は無いが、紅那岐と共同で別荘にてデバイスをパワーアップ

ルナティック ルナティック・ソル

今まで紅蓮のような爪形デバイスだったが使いづらいたるところとで可変式ガントレットに変わった

またランスロットの銃のような武器も使えるようになりカートリッジシステムを搭載している

フルドライブはアルビオンと聖天八極式の間でウイング・左手にシールド型ガントレット・右に可変型ガントレットをつける

バリアジャケットは何故かC・Cの2期に着ていた黒い奴みたい  
な感じ

呂奉 恋

呂布奉先のそれぞれ最初の文字を取った名字

年齢：?? 9歳

神が気を利かせて若がえらせた

### 【基本能力】

【筋力】 : A +

【魔力】 : C +

【耐久】 : A +

【幸運】 : C

【敏捷】 : A

### 【スキル】

騎乗 : C

馬や幻想種には乗れるが近代のものは乗れない

武芸 : A

武芸に精通してた為あらゆる武器を使える

飛翔 : EX

ある意味カリスマの能力、天下に名を馳せたものだけが持てるスキル

1対1の戦いにおいて能力が跳ね上がる、また兵を引き連れる戦いにおいても自身が前に出ることによって能力の補正が入る

## 【宝具】

ゴッド・フォース  
軍神五兵：EX

5つの姿を持つ方天画戟の能力いろいろな武器になるため状況を選ばない

詳しくない人はFate/EXTRAをやってみてください

## 【武器】

方天画戟

神と駄神（作者）の力によってFateの方天画戟となった

また、恋姫の方天画戟の形態にもなれる・・・と言うか駄神の力で方天画戟の絵が存在してるものに全部なれる

陸戦SSSランク

赤羽 飛鳥

多重人格＋それぞれの肉体を持つもの

実際は紅那岐より年齢は上だが、肉体と精神は成長しておらず見た目ともども5歳児

戦いも遊びとしてしか認識していない

魔力量が無限に存在しており自身の能力と合わせて実力はある意味最強

## 【スキル】

ワンオブスタイル

一つの理（能力修正しました）

基本的には見た技のコピーができる

また応用も可能であるが5歳児の精神ではそれはできない部分がある  
また見た技のコピーであるが実際は・・・

自身が見た時に思った能力になる

例：相手が消える 消えることができるという事であり自分も消える（消える＝何処にもいないなので攻撃を当てることすら不可能）

## 主人公以外設定 修正（後書き）

レティ「その他終了！」

紅那岐「おい・・・恋は狙ってたろ？」

レティ「まあね！だって恋を仲間に入れるのは決まってる能力どうしよう？・・・あ！Fate/EXTRAの能力あるじゃん！って気づいてね」

紅那岐「ある意味チートだな・・・俊敏以外は能力まんまだし」

レティ「まあね！ただ恋は飛べない！これは決定事項だよ」

紅那岐「あっそ・・・」

レティ「では次回で！」

## EP 1 デバイスを作ろう(前書き)

これから副題を乗せられるのは乗せる予定

## Ep 1 デバイスを作ろう

さて、この世界に戻ってきてから少し状況整理をするのに時間がかった

とりあえず時間軸で言うと七星達は1週間くらいしかいなかったらしい(トールの使いにすっかり説明は受けていたようだ)

問題は俺だった・・・2ヶ月ってなんぞや?ぶっちゃけ俺あいつらと別れたのどれくらいかはわからんが2ヶ月のラグはひどいよね

「それにしても別荘ってこんな凄かったか?」

トールにもらった別荘に来ていて今レイアウトの確認が終わったんだが・・・

訓練スペース(広さは把握できなかった)・動物エリア(なんか多種多様な動物がいた)・幻想エリア(幻想種がたくさんいた・・・何故か其処に碎刃がいたのが驚きだ)・鍛冶場(隣にモンハンの村の採掘エリアがあった・・・魔石とかオリハルコンや宝石が一日に10個手に入るとか)・開発室(ハッキングよろしくな機材から本当にいろいろなものを作るスペースだった・・・知識がないと作れないから意味なくね?)・休憩所・寝室・ゲームエリア(取説曰く最新ゲームが発売されると勝手にあるらしい)

どうよこれ?与えられるものでくれと言ったのは俺だが自重しないじゃすまんぞ?って感じだった。しかも移動するには転送しなきゃ移動できないほど広い・・・既に別荘じゃないよね?

今はある目的のために開発室に来てるんだが

「紅くんこれ本当に凄いな!」

と瞳をキラキラさせて話かけてくるすずか・・・マッドの片鱗が今こじに

「失礼なこと考えてると抜き取るよ？」

「なにを!？」

俺がツッコミを入れても聞いてないのか機材を見てうきうきしていた

「さて、もらったこれを携帯するためのものを作るか」

俺がもらった太刀と槍と面は正直こちら辺に置いておくのも危険である・・・てか槍については絶対零度すら超えてるから迂闊において置けない、今は太刀と一緒に置いておくことで±0状態だが

「うーん・・・俺の現状を考えるとマジで王の財宝ゲイトオブパピロンが欲しい・・・」

といても金輪際能力てきな部分ではもてないのでしょーもないので考えているんだが・・・

自分の才能の無さが恨めしくなっている時にすずかが話しかけてきた

「ねえ？私が考えたこれどうかな？」

すずかが見せてきたデータを見ると・・・

「お前マジでマッドになるぞ・・・」

データの内容が四次元空間のようなものを入れ物に対して付属するものだった

分かりやすく言えば四次元ポケットを作れるというものだった



「まあいいやすすかこのデータ借りていくね」

そう言つて俺は自分の場所に戻りデータを打ちながら作り始めた

なんやかんやで1週間くらいで作れた・・・八口とかカーペンターズとかが何故かいて作業を手伝つて貰えたんだが、気にしてはもらえなかった

「次は鬼菩薩に能力の付加をしなくちゃな・・・」

別次元の人からもらった鬼菩薩、使い方はやっぱり回りに浮かせないという意味が無いでしょ！つてことで考えていたら魔石のことを思い出した

「そついや、魔石をつけて擬似的に浮かせばよくな？」

そう言つて俺は鍛冶場の隣にある採掘所まで転送した

カーッン！・カーンッ！

ピッケルで掘つたらいろいろ出てきたがどれがいいだろう？普通の宝石だと負荷に耐えられないしかとってオリハルコンじゃ魔力伝達率悪いし・・・

と思つたらひときわ目を引く魔石を見つけた

「これは・・・ミスリルか？」

存在しないはずの鉱石として有名な奴だな

「これを使ってみるか」

そう言っただ俺は戻り鬼菩薩にミスリルを頭の部分に組み込んだら見事に成功した

ビームは出せなかったけど、何故かバリアを張れるようになって防御機能としては十分すぎるほど役に立つものが出来上がった

「後はこいつに組み込んで粒子化すれば問題ないだろ」

そう言っただ俺は一通りの武器をそれに入れた

《マスター名前をください》

忘れてたよw

名前はファフナーに決めました

能力はほとんど武器の貯蔵と非殺傷設定をつけるかつけないかのみとなりました

## Ep 1 デバイスを作ろう（後書き）

レティ「言うわけで帰ってきててもいきなり別荘で一日をつぶしている紅那岐でした。また今回から紅那岐ではなく別の人の出演となります・・・どうぞ」

トール「はじめましてトールよ」

レティ「紅那岐を転生させた神トールをこれからパーソナリティーとして迎えます」

トール「よろしくね」

レティ「さて・・・やりすぎじゃね？」

トール「やるなら徹底的にが心情だからこれぐらい普通よ」

レティ「普通なのか？まあいいや聞きたいことがある」

トール「何よ？」

レティ「トールといえば神話じゃ髭もじゃなオッサンじゃないっけ？」

トール「そこはアレね需要にこたえて・・・てかアレはあの馬鹿<sup>オーデイン</sup>が人間に伝えるならこっちがいいだろうとか言っただの姿になったのよ」

レティ「なるほど、強さに関して言えば神の中でも最上位の位置

にいるトールですが、実際のところ紅那岐の今の實力は？」

トール「並みの転生者じゃ瞬殺できるくらいにはしたわよ？てか私と修行してダメージを食らおうものならもう一回調k・・・もとい修s・・・でもなく修行をしてもらわないと」

レテイ「怖い言葉が出てきますが時間もあれなのでこの辺で」

トール「感想ありがとうありがとね」

## EP 2 飛鳥の実力は？

現在訓練スペースには紅那岐以外の関係者がそろっていた

「もう、お兄ちゃんったら何処行っちゃったのよ」

「ねー帰ってきたらあんなことやこんなものでやってあげるんだから」

「……？」

「兄様何処いっちゃったの？」

七星・すずか・恋・飛鳥と各々反応は違った……違うのか？  
因みにそのころの紅那岐はと言つと……

「ほらほら！その程度じゃ上位の転生者に苦戦するでしょ」

「ぎゃああああっ！」

「ほら休まない」

「くっそ！総トルハンマーてを射抜く雷光！」

「なにこれ？いい総トルハンマーてを射抜く雷光つてのはこう言つのを言つものよ」

「ちよっ！？……プスン」

とツールに拷m・・・調k・・・いじm・・・修行を受けていた

「それで私は何するの？」

と無垢に見える飛鳥が聞いた

「ん？お兄ちゃんが貴方が最強って聞いたからちよつと試してみたいな〜って（妹は一人で十分よ！）」

言葉とは裏腹に5歳児に対してかなり黒い七星であった

「遊ぶの！いいよ！」

飛鳥は飛鳥で遊び感覚でOKを出してしまう

「じゃあ行くわよ！ジークルーネ！」

《セットアップ》

ジークルーネ：紅那岐が七星に作ったデバイスで紅那岐がいないときはグランシャリオに内蔵されてるのが使えないため作ったもの  
能力はランチャー・ビットのみの簡易であるがカートリッジシステム搭載しているため能力は高い（七星が紅那岐と違って魔道師として戦えるのはデバイス人格のため）

「何処からでもいいよ！」

と飛鳥は可愛くガッツポーズをしていた

見ていた恋とすずかはその可愛さにダメージを受けた

恋にダメージだと!? BY作者

変な電波を受けたが気にせず戦いは始まる

「行くわよ！そらそらそら」

七星はライン・ヴァイスよろしくな高速移動をしながら分身攻撃を  
しだした

別荘の中でなら七星は紅那岐がいなくてもSS並みの実力は出せる

「えい」

飛鳥がなんとも言えない掛け声を出すと七星の分身と同じ数だけの  
自分を創り迎撃していた

「ちよっ!?!」

七星が驚いて止まっても飛鳥の分身は消えていなかった

「「「「「あれ？沢山のお姉ちゃん消えちゃったね」「」「」「」

と其処に残ってる本体+分身が一斉に言った

「何で消えてないのよ!」

「だってお姉ちゃんが沢山いたんだよね?」

そう、飛鳥の理解は七星が沢山になって攻撃をしてきたという理解  
だったために自分の分身を沢山作り迎撃をしただけである・・・そ  
の数20

「お兄ちゃんも言っただけ、見た内容を自分の都合にできるスキルは反則過ぎる」

「今度は私の番だよ！」

すると21人の飛鳥の腕には雷光がともしだした

「うそ！？ちよつと待って！」

七星は慌てて止めようとしているけど間に合わず

「いけとーるはんまー」

言葉とは裏腹の高威力の雷光の槍が七星に襲う

「ぎゃあああああ・・・」

どんなにがんばっても紅那岐の総てトールハンマーを射抜く雷光と同じ威力のを2  
1発食らえばひとたまりも無い七星・・・ご冥福をお祈りします

「死んでないよ！」

真つ黒こげで起きた七星

「あゝたのしかつたまた遊んでね」

そう言っただけ飛鳥はどっかに言ってしまった

「あんなちつちやな子に負けた・・・お兄ちゃんにお仕置きされる」



o r z

「ぼん）．．．ドンマイ」

「．．．」なでなで

すずかと恋に励まされている七星であった

勝負の結果を知った紅那岐に訓練と言う名のやつあて．．．お仕置  
きを受けたのは言うまでも無い

「誰が教えたのよ！」

「飛鳥だこのバカ！」

「ふええええええええええん．．．」

## Ep 2 飛鳥の実力は？（後書き）

レティ「飛鳥上げつないないあ〜」

トール「あの子の力はある意味創造の域だから勝てるほうが少ないけど・・・5歳児ってことを考えれば勝てる方法は沢山あるけどね」

レティ「ふ〜ん、話は変わるけど紅那岐の修行はあることがきっかけでやることになったんだけど・・・実力は？」

トール「まだまだだね、私の分身（実力の5%）が手加減して漸く虐められる程度だから」

レティ「虐める言っただよこの人・・・5%ってどのくらい？」

トール「さあ？比べる相手いないし」

レティ「そっか・・・」

トール「まあ最低でも人間の枠はまだ超えていないからまだまだ強くはなれるわよ？」

レティ「何処まで持っていくんだか」

トール「さあね？では感想ありがとうございました」

レティ「次回もよろしく」

EP 3 はやてに合いに行いっ(前書き)

当分は日常編

はやての喋り方わからん！違和感あつたら教えてください

### EP 3 はやてに会いに行こう

紅那岐 Side

どうやら原作開始まで1ヶ月をきったばい

ぼいと言うのはだいぶ記憶から薄れてきてしまったので流石に詳しい時期まで分からなくなってきてしまったんだ

因みにアースラなどのコンピューターにハッキングをかけて分かったことだが・・・転生者が俺以外にも最低2人はいるみたいだ

ツールを確認してみたところリリなの世界は人気がありすぎて管理が神全体になったようだった

俺がいない間に海鳴に一人・アースラに一人介入していたらしい(そこでちよつとした事件があったようだが、記録がされていなくて諦めた)

まあ別にねえ？俺って悪役だしどうでもいいやと思っただけ

そんなこんなで復学手続きが滞っているので仕方なしに家で暇をもてあまして(別荘は時間の感覚が狂いそうになったので一旦自粛中だ)

「さて、今日は姉さんいないしどうすつか？」

「任せてください！私がしっかりとお世話をしますよ！」

というドジツ娘メイドのファリンが言っているが信用できんし」

「ひどいですよ紅那岐さん！」

「心を読むな！ドジツ娘！」

「声に出してたよ兄ちゃん」

飛鳥が言ってくる・・・俺としたことが

飛鳥の頭を撫でながら考えているとすずかが言ってきた

「紅くんひさびさにはやてちゃんに会わない？」

おう・・・タヌ烏を忘れてたぜ

「そうだな、久しく会ってないからいいかもな」

そう言っつて俺は携帯を取り出し電話をする

トゥルルルルルル・・・ガチャツ！

「はい八神です」

電話に出たのははやてではなく別の女性メだった

「誰だ貴様？管制名を名乗れ！」

「ええ！？」

俺のポケに対応できないなんて本当にはやての家か？

「ちょー、誰か知らんけどうちのこをいじめんといてや」

とはやてが出てきたので改めてポケよう

「少佐ですか！？准尉であります其処に不審者が現れたようです直ちに援軍に向かいます！」

「・・・分かった！器官の援軍を期待しよう」

と話し終わり電話を切る後ろのほうで「はやてちゃん何をいつてるの？」と聞こえてきたが気にしてはやっていけないぞ？

因みに訳すと「今からお前んち行くけどいいよね？」「分かった待ってるで？」と言つ内容だ

「と言うわけで行くぞ〜・・・ファリンは適当にやっついて、飯はあっちで食ってくるから」

「うう・・・ひどいですよ〜」

なんかいじけていたけど俺達は出かけた

S i d e E n d

はやて S i d e

久々の友人やたつぷりとおもてなしをしてあげようと私は電話を切って準備をしようとした

「はやてちゃんさっきの電話は？」

さっきのダメージが抜けてへんな？若干涙目や

「ん〜？友達やよ、シヤマル達が来る前に知り合ってたな最近なんやらどっか行ってたみたいやけど帰ってきたみたいなんよ」

そう言つて私は出迎えの準備をしようと思つて居間に行こうとするとメールが来た

『紅くんがなんか夕飯作ってくれるって期待していてね \*。』

・（\*、。 ^人）'。\*』

すずかちゃんからのメールや・・・なんか顔文字すごいなあ

「なんか夕飯ご馳走してくれるみたいやから準備しよか」

そう言つて私は居間へ向かった

Side End

飛鳥 Side

なんか今日はアスカは眠いみたいでずっと寝ていた、真夜中までゲームやってるからだよ

だから珍しく今日は僕のばんみたいだ

兄ちゃんが友達に会いに行くつて言うから着いていくんだけど普段一緒じゃないから今日はとことん甘えるぞ〜

「えへへ〜兄ちゃん〜」

「どうした？今日はやけに甘えん坊だな」

そう言っつて僕を優しく撫でてくれる兄ちゃん大好きだ！  
なんか姉様たちが見ているけどわかんないや

「よい・・しよつとー！」

僕は兄ちゃんの背中によじ登り体を固定する、支えてくれないけど  
兄ちゃんはいやなことはいやっつて言っつからだいじょうぶだよ

「落ちるなよ〜」

「わ〜」

そう言っつて兄ちゃんは体を揺らして遊んでくれる

でなんかお買い物してから行くっつていうからスーパーで買い物し  
てる時にお菓子をお願いしたらすんなり買っつてくれた、姉様達は甘  
いっつて言っつけど何が甘いの？

で兄ちゃんにおぶられながら兄ちゃんの友達の家の前に来たらネコ  
さん達がいた

「あ！ネコさんだ〜」

「転ぶなよ〜」

分かってるよ！アスカじゃないからね、魔法はアスカのほうが得意



だけど運動は僕のほづがとくいなんだから！

Side End

紅那岐 Side

アレは、誰かの使い魔だったはずだな？まあ魔力は全員コントロールできるようになってるから多少もれていても気にしないでらう

ぴんぽーん ( ^ . ^ ) 「―― ( ^ ^ ) 。 。 。 はーい、  
ただいま！

というやり取りをして八神家に招待された俺達

「久々だなタヌ鳥」

「あつてそうそうそれはないやろ！？」スパーンッ！

ハリセンでツッコミを入れられた

「何処からそんなものを・・・」

すずかにあきられながらも俺達コンビにはアイコンタクトすらいらない

「これぞギャグ補正！」「」

違っわ！ BY作者

へんな電波がきたような・・・？

「改めて久々だなはやて」

「久しぶりや！みないうちにえらい増えたなあ」

「おお！？自己紹介しないとダメだなお互い」

そう言っつて俺は飛鳥と恋をはやては今いる金髪お姉さんと犬をそれぞれ自己紹介した

「・・・呂奉 恋 よろしく(コクン)」「ピロピロ」

「赤羽 飛鳥ですよろしくお願いします！」

「私ははやてちゃんの親戚のシャマルって言います、先ほどの電話に出たのも私です」

「・・・」

「この子はザフィーラっていうんよ」

シャマルと名乗った人はなにやら警戒をしているようだ・・・さっきの電話のせいだな

ザフィーラにいたっては既にヒトリによってもみくちやにされている

「すまんなはやて俺の親族が」

「かまへんよ子供のすることや！因みに男の子？女の子？男の娘？」

ヒトリについて聞いてくるはやてだが最後のはなんだ？お前そつち

方面もいけるのか

「気にするな！俺の家族ってことだ」

そう言っ言葉を濁す俺、飛鳥にいたっはいつどっちが出るなんて決まってないからなあ・・・普段誰かに紹介するときは関係者以外あいつはアスカと名乗るし、俺も普段は飛鳥って呼ぶし

「それにしても似てへんけど？」

考えているとはやてに更に聞かれた、どうやら兄弟っことで納得したようだ

「養子縁組で俺の戸籍に入っただけだ、因みにいなかったのはこの子を引き取るのにいろいろあってなあ、だから帰るのが遅れてしまっただ」

そう言ったら納得された

「さて、積もる話もあるだろうからな、コーヒーを入れよう」

「何でうちの家の構造把握してるんや！」

ツッコミが聞こえたが無視だ無視！紅茶は苦手なんだよ、だからコーヒーがいいんだ！

Side End

はやて Side

くーくと話をしていると面白いわ〜、ボケとツッコミを両方できるからやりやすいで

うちの子達はええこやからうちがボケても誰もがツッコミをくれへん・・・ザフィーラがたまにボソッとツッコミを入れてくれるけど私はそれじゃたりへん！

「そろそろ夕飯の支度をするか」

そう言ってくーくんが席を立つ、時間を確認してみるとまだ4時やった

「はやくへん？後1時間くらいは大丈夫やる？」

「大食らいがいるんでね、後1時間も話してたら準備がまにあわなんだよ」

そう言ってくーくんが玄関に向かっていった、材料をもってくるんやね・・・って

「多っ！？幾らなんでも多すぎや！」

私がツッコミを入れる理由は簡単や幾らなんでもスーパーの大袋6個って

「恋にとっちゃこれくらいなきや足りないんだ、まあ食わん時は食わんから大丈夫なんだがな」

そう言っって重そうな袋を難なく運んでいるくーくんにも驚きや、幾ら身長が高いからって小学生が持てる量やないで？

「お兄ちゃん手伝うよ?」「あ、私も」

そう言つて七星ちゃんとすずかちゃんが行くけど・・・

「七星は論外、すずかはガンバレ」

七星ちゃんはどうやら料理はダメみたいやね、うちのシャマルとどつちがすごいんやろ?

「つてうちも手伝うわ!」

台所に行こうとすると

「いや、俺の料理を食べて欲しいんだはやて」

とまじめな顔をして言ってきた・・・あんまみつめんといてな、流石に恥ずかしいで

実際は「今日は俺が作りたいただけだから気にすんな」と軽く言っているだけである・・・あれ?何処でフラグたったの?

そんなこんなで飛鳥ちゃん(呼び捨てかちゃんずけがいいって言われた)と恋ちゃんは手伝う気が無いのか最初からザフィーラと遊んでるな、そんな時にうちの末っ子が帰ってきた

「はやてたたいまー・・・誰だてめーら」

「なんだこのちびっ子は?礼儀がなつてねえな・・・」

くーくんがすごんでる・・・絶対悪乗りやなあれは

「うつせえ！誰がチビだ！」

ヴィータが絡むが・・・あかんよ！くーくんあほなくらい強いんだから

「遊びはこれくらいにしてこれでも食つてろ」

そう言つてくーくんは何故か持つていたチ　ツパチ　ツプスみたいなのをヴィータの口に突っ込んだ

「俺ははやての友人の紅那岐だ覚えときな」

そう言つてすずかちゃん達の自己紹介を終えて再びくーくんは料理に戻つていった

ヴィータはくーくんにもらった飴を一心不乱で舐めていた、私もちよっと舐めさせてもらったものすごく美味しかった・・・後で聞いたら手作りやって、何処までスペック高いねん

シグナムも帰ってきたときにもちよつとひと悶着あつたが恙無く挨拶は終わりいざ食事

「さつきも言つたが多くあらへん？」

「ん・・・クイ

とあとで恋ちゃんをさすと其処にはよだれをいっぱい貯めて触角がピコピコ動く恋ちゃんが居た・・・マジでかわええな！

「さて揃つたことだし・・・頂きます！」

みんなで挨拶をして食事についていった  
以下それぞれの反応

ヴィ「ギガ・・・いやテラうめえ！」

シャ「どうやったらこの味に・・・」

シ「うむ・・・最高だ」

ザフィ「・・・むぐむぐ」 肉系のものを作っであげている

は「負けた・・・いや勝負すらになってへん」

す「相変わらずのだね・・・」

七「お兄ちゃん結婚して！」

恋「はぐ・・・むぐ・・・はぐ」 ひらすら食っている

飛「あ〜ん、美味しい兄ちゃん！」 隣に座って食べさせて貰っている

Side End

紅那岐 Side

料理は概ね好評のようだった

「さて、これでお暇させて貰おうか」

そう言っで立ち上がるとはやてがビックリすることを言っできた

「泊まっでいかへんの部屋の準備をしてたんやけど」

「そっだよ兄ちゃん！泊まっでいけよ」

ヴィータには特になっでたな

「気持ち嬉しいんだがな、うちのメイドからさっきいじけたメールが来てな・・・」

そう言っで俺は携帯を出すと其処には

『どーせ私は存在意義の無いただのドジですよ イジイジ（ ）  
（ ）』

見せるとはやてたちは若干引いていたが了承してくれだ

「じゃあな！」

「ほなまたね」

「次はぜひ手合わせを」

最後のはシグナムだが、ドンだけバトルマニアだよ！とツッコミたくなる人の気持ちがあつた。実際武道をしてるといつたら俺と恋にしっこく頼んできたよあの人  
そんなこんなで家路につく途中男性に引き止められた

「まで、あいつらにはかかわるな」



そう言ってきたんだが・・・マジで思い出せんな

「だが断る！なにゆえ友人について家族でもない貴方に指図されな  
いといけないんですか？」

「あいつらは魔法使いだ！貴様らを呪うぞ」

うん、俺以外もきちんと痛い人を見る目になっているな

「おい聴いたか？魔法使いだってあの歳になって、きっと今「俺は  
自分の夢に向かってるんだ！」とか言って自宅警備員してるぞあ  
い  
っ  
」

とこそそそと（聞こえるように）言っていると

「黙れ！いいな警告は一回だけだ」

そう言っただけで消えた・・・目の前で魔法使うなバカか？  
そんなこんなで家に帰っていった俺らであった

### EP 3 はやてに会いに行こう(後書き)

レティ「はやてを出してみました」

トール「きちんとした理由はあいわよ」

レティ「で今回は飛鳥について」

トール「あのこがどっちになってるか分からない人多いんじゃない？」

レティ「読んでる人いるのか分からないけどここで改めて容姿などの説明を」

トール「容姿はブラックラグーンのヘンゼルとグレーテルを5歳児にした感じね」

レティ「因みに飛鳥のくくりで出してるのは需要にこたえて女の子がいい人は女と見てもらうため、シヨタっ子がいい人はそう見てもらうためにあえて名前の表記は飛鳥としています」

トール「細かい見分け方は呼び方の違い、アスカなら紅那岐の事を兄様他の男性なら 兄様、女性陣は姉ちゃん」

レティ「ヒトリの場合は、紅那岐を兄ちゃん他の男性を 兄ちゃん、女性陣は姉様と呼びます」

トール「それ以外は基本的には喋り方は変わらないのでわからないかも？」

レティ「気まぐれで両方出る場合はあります」

トール「では感想ありがとうございます」

レティ「次回は武器を作る紅那岐になります」

トール「じゃあね」

EP 4 (前書き)

友人に東方でいいの無いと聞いたら夢想夏郷 - A Summer

Days Dream - を紹介されてみたら面白かった

意味？知らないから知識として吸収しようとしたんだw

「自分に起きた異変」

「やはり起動できないか」

そう言つて自分におきてる異変を感じながら紅那岐は己の能力の再確認を行っていた

「1・2・3・4・・・後は出ないな」

紅那岐が確認しているのは自身の武器と能力が詰まったデバイス・グランシヤリオ

何が出ないかと言うと彼の武器は全部で7個、しかし現在出せるのは4つまでであった

「トールに確認するしかないのか」

そして彼は自分で作った魔法陣の中に入ってトールのいる場所に向かった

「トールいるかぁ！」バアンツ！

遠慮もなしに思いつきり扉を開け放ち中にいるであろうトールに声をかける

「ぐっ・・・！ちよつと静かに入ってきてなさいよ！      ゲホゲホ」

中でのんびり茶を飲みながら急な来訪によって喉に詰まらせて咳き

込みながら紅那岐を睨むトール

「そんな事より聞きたいことあるんだが・・・」

そう言っただけは自分に起こっているであろう異変をトールに話した。  
・  
・  
すると驚きの回答が帰ってきたのであった

「それじゃ何か？俺の力が上がって3つは耐えられないから使えないのか？」

「端的に言えばそう言う事ね」

つまり紅那岐の能力に武器がついていけなくなってしまったのである

「・・・七星ジークルーネを貸せ」

今まで後ろにいた七星にジークルーネを借り何かの作業をしている  
紅那岐

作業が終わりジークルーネを返す紅那岐

「お兄ちゃん何をやってたの？」

「4〜7までの奴をお前の奴に組み込んだ、その代わりにランチャーとかはなくなっただけだな」

「ホント！？」

《本当ですマスター今の私には七つの大罪から高潔なる処女までが  
グリモワール  
アイギスメイデン

組み込まれています》

「俺はガントレット・銃・剣があればいいから後はお前が使えばいい」

そう言つて紅那岐はツールを軽く睨む

「な、何よ!」

「何、少し訓練をしてくれ今までのように何でもできるわけじゃなくなつたからな」

「・・・後悔しないことね」

そう言つて紅那岐はツールと別の場所に向かつていった

「でもお兄ちゃんグリモワール七つの大罪使えるのに何で私に?」

《マイスター曰くそれだと遠距離の武器が無くなってしまうからだ  
そうです》

「お兄ちゃん・・・」

なにやら感動をしている七星

「ますます食べなくなつちやつたじゃん!」

・・・何処まで行つても変態妹であつた

「シマツジメソルト極光の断罪者は惜しかつたな・・・」

「ほらほら 余所見をしてる暇は無いわよ」

「しまっ！？ぎやああああああ」

薄れいく意識の中で新しい刀が必要だなと思っていた紅那岐であった

End

く刀を作ろう

カーン！カーンッ！

其処に響き渡るは金属同士がぶつかる音だった

「・・・」

邪念を持たずただ無心にハンマーを振るう

カーン！カーンッ！

「後は研いで終わりだな」

出来上がったものをみて次の場所へと向かっていった

「完成した、今度こそうまくいってくれよ」

そう言って次は訓練スペースに向かっていく

ヒュンッ ヒュッ



「普通に振る時は問題は無いな・・・じゃあ！」

すると体からは莫大な魔力が噴出してきた、刀は今までと変わりふるふる震えていた

「ちっ・・・やっぱダメか」

舌打ちをし魔力を止め刀を見ると何もしていないのに罅が入っていた

「これで何本目だ？いい加減魔力に耐えられる刀を作らないと原作介入ができないぞ」

面白くなさそうに言い放つ、彼が今持っている剣は西洋剣であり彼が好きな剣は刀という風に矛盾している

「玉鋼だけじゃ流石に無理があるかな、重ね刃にしてもこれじゃあ・・・魔石を混ぜてみるかな？」

妙案が浮かんだらしくまた火事場に戻っていった

・  
・  
・

そして別荘内で1ヶ月ほどたつと其処には5本の刀が並んでいた

「満足に作れたのはこれだけか、後は耐えられなくて打ってる段階で砕けちまった」

彼が満足そうに見ている刀は黒・蒼・白・翠・紅のそれぞれ刀にしては変わった色を持つ物だった

「とりあえず振ってみるか、これでダメならスウアフルラーメを開放しないで使うしかないな」

訓練所にやってきてみると其処には多種多様なが存在をしていたのはずか謹製である程度自分が望む動きをしてくれるものである

「では行くぞ！」

刀を持ち的に向かって走り出していった

・  
・  
・

「ふ、フフフ・・・やっとできたあああー！ー！ー！ー！」

歡喜の雄たけびを上げながらガッツポーズをしている

「長かった・・・本当に長かったよ」

なにやら感涙しているようだったがここには誰もツッコミを入れてくれるものはいなかった

「さて、後は名前だな」

そしてそれぞれの刀に名前をつけていった

黒 〓 絶影  
白 〓 白凰  
蒼 〓 蒼麟  
翠 〓 天翠  
紅 〓 輝紅

とそれぞれ名づけていった

「・・・これって質量兵器になるのかな？」

最後の最後でどうでもいいことが頭に浮かんでしまった

Ep 4 (後書き)

レティ「言うわけで紅那岐の能力が劣化した!？」

トール「劣化と言うよりより選定をしたといったほうがいいんじゃない？」

レティ「私が作ってるのにどんどん変わっていく紅那岐w」

トール「ひどい人ね」

レティ「沢山能力あっても使わないかな?って思っちゃってさw」

トール「だめな人」

レティ「そういうな、では感想ありがとうございました」

トール「またね」

**EP5 AS 最初の介入前編（前書き）**

原作始まります

## EP 5 AS 最初の介入前編

その日の夜紅那岐はなんとなしに本を読んでいた、近くにはさすが・七星・恋がいる

飛鳥は既に寝ておりのんびりとした時間を有意義に過ごしていた紅那岐だったのだが・・・

ピンッ！

どこかで魔法が発動したのを感じた

「ふ、フフフ・・・そうか俺には平穩は訪れないのか、フフフ」

どこか据わった目をしながら怪しく笑う紅那岐、さすが達はそれを見て相手に同情した

最近何故かボロボロの状態が多い紅那岐であるがその分ストレスが異常に溜まっていることも知っているからである

「まあ、俺が出ないのが一番だけどな・・・もし俺が出ることがあるなら、フフフ」

やはり精神的に安定してないのが分かる一行だった

現場に着くとちょうどなのはが撃墜されたところだった

「ありや、なのはが撃墜されるなんてな〜・・・アレはヴィータか？」

どちらとも知り合いな紅那岐はのんびりと状況を見守ってた

「そんな事より助けてあげようよ！さすがに分が悪いよ！カートリッジ無いのに戦うのはきついから」

なのはの親友のすずかはなのはを助けようと提案するが紅那岐は却下する

「ダメだ、てか知らん奴がなのはのそばにいるから大丈夫だろ？」

視線の先には今までいなかった魔道師がいた、それにおいて助ける意味が無いなと判断する紅那岐である

(アレはフリーダムか？なんかいろいろ付いているが？)

Side End

フリーダム？ Side

始めましてだな！俺はちょっと前にこの世界に転生してきたいわゆる転生者だ！神の奴が力をくれるって言うからそこでガンダムでフリーダムの力を人間の姿で使える力をもらったんだ！しかも神がズルをしたらしく能力はオールSSSだったらしい

前から夢だつたりりなのの世界にいけるって言うんでそりやもう興奮したね！これで憧れのなのはを落とせるぜ！今回はちょっと遅れちまったがこれから助けてあげればそりや高感度も上がるね！

手な訳で、ヴォルケンリッターには悪いが俺のためにの布石になつて貰うぜ

「よくもなのはやってくれたな！覚悟しろこのチビ！」

そう言つて俺は背中中の羽を広げて飛び上がる！フルドライブは必要ないなこんな奴に

「うつせえ！てめえも敵だ」

そう言つてロリやろつは俺にハンマーを向けてくるが、PS装甲のジャケットに打撃が効くと思うなよ？

ガキーンッ！

「なんだつて！？」

あ、衝撃が吸収できないの忘れてた、すげえ痛いぞ……この痛みも含めてお返ししてやる

「痛えなこいつ！」ブンッ！

ビームサーベル（魔力剣）を抜いて相手を斬る

「ちっ！」

くそ、すんでのところで避けられちゃった

「てめえ何者だ！」



「俺の名前はキラ・ヤマト（大和 吉良）覚えておけ！」

そう言っ羽のバラエーナを撃とうと魔力を貯めているとピンクの髪の剣士と青い犬男が現れた、アレはシグナムとザフィーラだったか？シグナムはいい女だ

「大丈夫かヴィータ？相手を見る一人ではやられるぞ！」

シグナムが此方に構えながらヴィータに説教しているとこっちの援軍も到着したようだ

「大丈夫かキラ？」

其処に現れたのはダブルオーの姿をした俺の相棒だった

Side End

ダブルオー？ Side

やっと俺のターン！俺もここにいるキラ同様転生者の一人だ！どんなテンプレ？って最初は思ったが世界がリリなのなら話は別だ！最終的にあのエロエロボディのフェイトを落とせるってなら転生なんてこっちからお願いしたいぜ！

神の奴が力をくれるって言うんで俺はダブルオーの力を望んだんだ、だって最終的に最強あいつだべ？それを人間として使えるならヒーローなんてちよろいぜ！

って思い転生したらなんか他の転生者がいたんだよね、で話してみるとなのは落としたいらしいから俺達は協力することにした、実際一緒に戦うとこれほど頼りになる奴もいないしな

さて、フェイトにいつちよいいところ見せてフラグの強化をするかな

「遅れてすまねえ!」

「気にすんな俺達2人がいればあいつらなんて楽勝だぜ!」

相棒がいう、そうだな俺達に敵う奴なんているわけねえ! ってな訳で行かせてもらうぜ

って話をしていたらフェイトが突っ込んでいた

「フェイト何を先走って!?!」

「きゃあああああっ!」

一瞬目を離すとフェイトはデバイスごとシグナムを斬られていた  
ぜってえ許さねえ・・・ぶっ殺す

「相棒いくぞ!」「おう!」

相棒もなのはが落とされていたらしく切れていて今ので完全に切れたな

「刹那・F・セイエイ目標を迎撃する・・・まずはこいつだ!」「  
なら俺はこれだ!」

俺はGNソード?のライフルモード、相棒はビームライフルを構えて撃とうとしたとき何かが来るのを感じた

Side End

紅那岐 Side

どうなっかな？とみているとフェイト達が見たら案の定また転生者が来ていた

・・・アレはダブルオーか？何でガンダムなのかな？まあ二人ともガンダムだしバランスは取れてるな

それにしても二人とも殺る気まんまんだな、ここでがんばりすぎると原作崩壊しすぎるしなあ

「しょうがない、茶々入れるかな」

そう言っただけ俺は双銃を取り出す

魔力をこめるとそれぞれの銃に同じ色の魔力に変化をしていく

狙いは・・・あの二人でいいか、能力高そうだし

「さて、久々の登場は一人でやるから帰っていてもいいよ？」

「ここで見てるよ」「私は一緒に行きたかったけど我慢するよ」「

・・・ん」(コクン)

七星・すずか・恋が頷いてくれた・・・さあ久々の登場だ派手にいくなあ？

「じゃあ景気づけに『ヴァイス・シユバルツ福音の魔弾』！」

狙いをガンダムに向けて白い弾丸と黒い弾丸を発射する、そして俺も駆ける

Side End

シグナム Side

目の前の装甲を着た魔道師たちが私達に攻撃をしてこようとした瞬間白と黒の魔力弾があの人二人に直撃をした、弾丸が飛んできた方向を見ると其処にはバイザーをつけた双銃を持つものがいた

「貴様、何者だ！」

「貴方は始めましてですね、私は永劫アイオーンと申します」

仰々しく挨拶をしてくる永劫という男

「お前は味方なのか？」

今の私達は目の前の奴らと戦えるほどの力はない、なのでどうしても戦力が必要なので聞いてしまった。ヴィータは「なにしてんだよ！」と言ってるがこの際体裁にこだわっても勝てない、なので聞いたが返ってきたのはやはり否定の言葉だった

「違いますよ」

「そうか・・・なら」

命をも捨てる覚悟で私の剣レヴァンティンを構えるが

「しかし、あちら側の味方でもありません、今回はあなた方が不利すぎるのであの方達と戦うのを譲って貰おうと思ってきただけです、なのでかかってくるなら貴方も相手をしてあげましょう」

そう言ってどこか余裕を感じる男は私を無視し先ほどの装甲をつけ

た魔道師のほうを見た  
私はどうやって逃げるかを考え出していた

Side End

三人称 Side

紅那岐がシグナムの話を終えるのと同時になのは達サイドの転生者達も同じように復活を果たした  
ほぼ不意打ちに食らった魔弾だったがなんとかなったようだった

「てめえ何者だ！」

「其処をどけ！」

二人の転生者は激高していた、突然食らった不意打ちだった何が何と  
か持ちこたえられたしかし、見せ場を作ろうとがんばっているのを  
邪魔されては怒るのも当然であった  
紅那岐が再び名乗ろうとすると

「「永劫！？（さん！？）」」

なのはとフェイトが声をかけてきたのであった

「お久しぶりですねお二人とも、怪我は大丈夫ですか？」

「大丈夫なの、でも何でここに？貴方もそっち側なの？」

「お久しぶりです、あの時お礼を言えずに申し訳ありません・・・  
でも、もし貴方が敵なら容赦をしません」

まっすぐに紅那岐を見つめる二人、しかし紅那岐は小さく笑っていた

「それならジュエルシードの時も同じようにフェイトさんの味方をしていたでしょう？今回も前回と同じですよ」

そう言つてクスクスと笑っている紅那岐、それを見た二人は苦い顔をしながら思い出していた

「おいお前！なのはに話しかけんじゃねえ！」

「フェイトにもだ！」

二人の転生者は無視されていたことと自分達が好きな者と話しているのが気に食わなく怒鳴り散らしていた

「そう思うなら掛つてくれば良いでしょう？何故律儀に待っているのですか？」

分からないという態度で聞いている紅那岐を更に怒り心頭の二人

「さて、貴方達の力を見るには銃よりもいいものがあるのでそちらを使わせてもらいましょう」

そう言うと紅那岐は双銃をリリースした

「さあ初公開！とくにご覧あれ！ファフナー、セットアップ！」

《セットアップ》

セットアップが終わると其処には赤い鬼の面が浮かんでおり手には

太刀を持っていた

「鬼菩薩・覇煌刃、初めての実践ですが共に行きましょう！」

太刀を抜き放つと周りには信じられない熱気に包まれる  
それが太刀からと言うのに気づかないものはいなかった

Ep 5 AS 最初の介入前編（後書き）

レティ「戦いの前に区切る！これ以上は長い」

トール「さて、紅那岐？被弾なんて許さないわよ？フッフ」

レティ「コワッ！？時空の旅人様から頂いた武器覇煌刃と畏無さまから頂いた鬼菩薩が登場しました」

トール「この子達とは私は戦ってないからどうなるか楽しみだわ」

レティ「では次回で！」



EP 6 AS 最初の介入後編（前書き）

なんか文章構成がぐっちゃになってるかな

## EP 6 AS 最初の介入後編

「さて、お手柔らかに」

丁寧に挨拶をしているのはなのはサイドVSヴォルケンリッターの戦いに割って入ってきた紅那岐

「ざけんな！」

「ぶっ殺す！」

紅那岐に大して憎悪の視線を向けているのは最近転生をしてきた転生者今まさに規格外同士の戦いの火蓋がきつて落とされようとしていた

「行けえ！」「食らえ！」

先に仕掛けたのはガンダムの装甲を纏った転生者達、紅那岐の装備を見て遠距離が苦手と思い魔力ビームを撃ってきたのである

「鬼菩薩」

紅那岐が呟くと同時に直撃する、威力が高かったためか当たりは煙が舞い上がり紅那岐の安否が分からなかった

転生者達は勝利を確信していたが、一度でも戦ったことがある者たちはこの程度で終わると思っていなかった  
煙が晴れると其処には無傷の姿があった

「なっ!?!」「馬鹿な!?!」

驚きの声を上げる中紅那岐は自身の横に浮いている鬼の面：鬼菩薩の状態を確認していた

「ふむ、どうやら機能は十二分に発揮できるようですね。しかもセミオートで動くのもいい感じですよ」

満足そうに頷いている紅那岐、逆に転生者達はイラついた表情をしていた

「遠距離がダメなら接近戦だ！」「援護する！」

そしてダブルオーの少年はGNソード？を剣モードにし突っ込み、フリーダム少年は搭載されている武器を乱射し回避場所をなくした遠距離からの魔法は鬼菩薩によって防いだため余裕でダブルオーに対応する紅那岐

「ちっ、くそっ、アタラネエ」

剣を振り回すが一向に当たる気配は無かった

（おせえ・・・なんだこれ）

紅那岐もまたあまりの遅さにビククリしていた

それもそのはずでここ最近はずっとツールと訓練をしており自分の何倍も強い相手の攻撃を受けてたため目の前の攻撃は止まって見えるまでになっていた

「これならなのはさんとフェイトの方がよっぽど強かったですね」

「つざけんなあああ！」

挑発され渾身の一撃で攻撃をしてきたので紅那岐は太刀で受け止めようとしたら

スツ・・・

相手の剣は紅那岐の太刀に触れたらバターの用になんの抵抗もなしに切れてしまった

「・・・」

場に沈黙が訪れる、紅那岐を除く他の者たちは驚愕して紅那岐はその性能に驚いていた  
チンツ！

と紅那岐が太刀を納刀すると全員正気に戻る

「てめえ！何でしまってるんだ！」

「俺達を嘗めてるのか！」

怒り心頭の転生者コンビだが

「いえ、この太刀ですとどんなに手加減しても殺してしまうレベルなのでやめます」

(ありえねえw流石10000の熱を持つ太刀だまさか斬ってる抵抗すら感じないで切れるとは)

簡単に言えば金属の融点を超えてしまっているのでも刃が触れると其刃は防御を超えるのが目に見えてしまっているのでやめたのである、同様に鬼菩薩もリリースした紅那岐

「さて？次からは私本来のスタイルで特別に相手をしてあげますよ。

この力はなのはさん達すら知らないので貴方達は運がいいですね」

そう言つて紅那岐は右腕にパイルバンカー型ガントレットを装備した

「さあ！逝きますよ？」

Side End

なのは Side

永劫さんは相変わらずの強さだったの、気持ち悪いとは言え吉良君は私より断然強い、それなのに赤子の手を捻るくらいの感覚で二人を相手にしていてもどこか余裕を感じるの

「なのは回復は終わったけどレイジングハートの方が参っちゃってるからあまり無理はしないで」

ユ一ノ君に声をかけられレイジングハートを見ると全体に罅が入っていたの

「ごめんね、私が弱いばかりに」

《いえ、私の能力不足によるものです。マスターはベストを尽くしていました》

そう言つて慰めてくれるレイジングハートだけど、今回は私が相手の力量を測れなかったミスなの

前に永劫さんが言っていたの、相手の強さが分からず気持ちだけで向かつて負けるって

なのに同じ事を繰り返しちゃった・・・

《マスター？》

「な、なんでもないの！」

《・・・》

レイジングハートが心配してくれるけど、それでも私は・・・

Side End

フェイト Side

永劫、姉さんと母さんを助けてくれた私の恩人であり敵であった人  
今また敵として立ちふさがると言ってきた、私も前より強くなった  
つもりだったけど永劫はその上をいつていた

セツナが私達に合流した時のランクが既にSSSだったのに永劫は  
SSS二人を相手にしても疲れを見せてない、それどころか時々私  
達やあの人たちが巻き込まれないように場所をうまく移動しながら  
戦っていた

「すごい・・・」

「フェイト大丈夫かい!？」

私が戦いに見ほれているとアルフが来てくれた

「うん・・・でもバルディッシュが」

そう言つて手元にはあの女の人に斬られてしまったバルディッシュ  
が、淡く光っているから完全に壊れたわけではないけど完全に油断  
した私が悪い

《気にしないでくださいサー。私の力不足です》

私は弱いな・・・なんでいつも誰かに心配をかけちゃうんだろう  
永劫見たく強くなりたいたいと思ってたとき落雷と同じような轟音が響  
き渡った

Side End

紅那岐 Side

さて、もらった物の性能の把握はできたから次は俺のスタイルで戦  
うか、と言ってもこの力にしてからのスタイルだけだな！

「貴方たちには勿体無いですが特別に見せてあげますよ、タービュラ疾風迅  
雷インス」

轟音と共に俺は自身に雷光化する、俺のスタイルの一つの疾風迅雷  
ネギまを知っている人にはなじみが深いかもしれないが、簡単に説  
明をすると俺のフェイバリットアーツトルハンマーの総てを射抜く雷光のエネルギーを体内に取り込み身体能力を倍化するスキルだ、ネギまの用に  
副作用なんてものが無いのが特徴だな・・・誰に説明  
してるんだ？

この姿になると髪の色が金髪になり、目が碧眼になるってのを忘れて  
た・・・だから誰に？

「それがどうした!」「防御を無くしたのを後悔しろ!」

そう言つて二人は再び攻撃を開始してきた・・・実力差まだわから  
んのか

さっさと終わらすかなと思いつながら俺は風舞で相手を交わし被害が  
出ない場所まで移動した

「消えた!?」

と叫んでるころには俺の準備は終わっていた

Side End

三人称 Side

其処にいる者たちは信じられない光景を見ていた

圧倒的に有利かと思つた2人組みは結果を見てみるとボロボロだった轟音と共に姿が変わつた紅那岐が相手が捕らえられないスピードで攻撃を繰り返し既に装甲はボロボロで息も絶え絶えであつたのである

「終わりですよ!」

急に現れた紅那岐の腕には槍の形状をした魔法が準備をされていた、その魔力量を感じた二人は慌てて逃げようとしたが

「トルハンマー総てを射抜く雷光」  
「————っ!」

紅那岐の腕が振りぬかれ雷光の槍は逃げようとした二人を一瞬で貫いていった・・・結界もろともに

直撃した二人は落ちて行き地面に倒れてるとリンカーコアが浮かんでいた、どうやら蒐集されたようだ

紅那岐はなんとなしに見ていると急に胸に手が生えてきた

「・・・どうやら貴方達も痛い目を見たいようですね」



胸から生えている腕を掴む紅那岐、どこかで「うそっ!?!?」「と言っ  
声が聞こえたかもしれない

「『ダ・カーボ復元する世界』」

手をお前にかざしながら呟くと其処にはゲートに手を突っ込んでい  
る緑のジャケットをきている女性がいた

「そんなどうして!?!?」

驚いているのをよそに紅那岐は女性に近づき思いつきリグナムの  
方に投げ飛ばした

「きゃっ」

小さい悲鳴と共にザフィーラに受け止められたが、自体が悪くなっ  
たのを悟ったのか青い顔をする一同

「少し反省をなさい!」

先ほどの雷光とはかわり今度は青い魔力が腕に集中していた

「大丈夫ですよ先ほどよりは手加減してあげます」

そう言って先ほどと同じように腕を振りぬく

「フェンリスヴォルフ神討つ拳狼の蒼槍」――っ!  
――」

青き魔力光はさながら大顎を開いている狼のごとくヴォルケンリッ

タワーに襲い掛かった

紅那岐は結果を見るまでもなくなのは達に戻り別れを告げた

「では、今回は私の立ち位置は微妙ですが再び戦うかもしれません・  
・己が力量を持って掛つてきなさい」

そう言つて紅那岐は消えていった

Ep 6 AS 最初の介入後編（後書き）

レティ「後書き座談会！って思ったんだけどツールがおらんし」

????「ツール様でしたら紅那岐さんの訓練に向かいましたわあ」

レティ「あんたは？」

????「申し送れましたあゝ私<sup>わたくし</sup>はあゝツール様の部下のジークルーネと申しますうゝ」

レティ「え？オーデインじゃないの!？」

ジークルーネ（以降ルーネ）「はいゝ何でも昔の戦いが終わったときに私の仕事能力が欲しいと言ってえゝ引き抜かれましたあゝ」

レティ「のんびり屋さんなのに仕事できるんだあ」 うつつた

ルーネ「はいゝ、で、伝言なのですがあゝ」

『あのバカ、能力確認なんてやる余裕あるのね 偉くなったものだわ』

と言ってうきうきしながら行きましたよあゝ」

レティ「(････) ナムナム」

ルーネ「でわあゝ感想ありがとございますうゝ」

レティ「次回はコラボ予定」

EX1 コラボ 紅那岐VS神威(前書き)

時空の旅人様とのコラボ

## EX1 コラボ 紅那岐VS神威

女神 Side

私は今自分が転生させた転生者の神威君の能力を上げるにはどうするかを考えていた

もともとチートとして送ったけれど、彼が『知っている』魔法しか普段は使えないから知らないのを覚えさせてあげるのも良いかな？  
って思っていたときに扉が開かれた

「やつほー、相変わらず真面目ね」

入ってきたのは別世界の管理を担当してる神ツールだった

「珍しいわね、貴方がこっちに来るなんて・・・あと それ何？」

ツールが引きずってきたのは黒い炭の塊だった

「これ？私が転生させた子でさっきまで鍛えてあげていたんだけど  
ね力加減間違えてこうなっちゃった」

じゃ無いでしょうに、神の中では最強の力を持つのは知っている  
けど人間をここまでするかしら？

「で？それを見せる為に来たのかしら？」

「違うわよ、たまには私以外の人とも戦ってもらいたいからわざわざ来たのよ」

なるほど、確かに戦いにおいては色々な人と戦ったほうが経験値は稼げるわね

「ちょっと待ってね聞いてみるから」

Side End

神威 Side

今日は珍しくなのはと優奈と一緒に出かけられて俺は一人暇を持て余していたら

『神威君聞こえるかしら?』

『女神様珍しいですね?どうしたんですか』

女神様が本当に珍しく念話を送ってきた

『貴方と戦いたって人がいるけどどうする?』

暇だし良いかな?

『大丈夫ですよ』

そう返事をすると足元に魔法陣が現れて俺は転送された

転送されたところに着くと女神様以外に知らない女性と炭があった

「えつと・・・此方の方は？」

「紹介するわね知神のトールよ」

紹介してくれたのは良いけど戦うのってこの人？

「ちよつと待っていてね今対戦相手起すから」

トールさん？が近くの炭に近寄ってなにやら叩いてると炭から声が聞こえた

「だ・・・」

「だ？」

「『ダ・カーボ復元する世界』」

魔法陣が展開されると今まで炭だったものが人間になった・・・人間だったのか

急に立ち上がるとトールさんに詰め寄って怒鳴り散らしていた

「トール！いい加減訓練で瀕死に追い込むのは勘弁しろ！意識失ってる時変な花畑がいつも見えるんだぞ！」

つまりいつも臨死体験しているって？俺は流石に勘弁してほしいな

「弱い貴方が悪い、てか今日は私達来訪者だから行儀よくしてよ」

「だから……ん？此方の方々はどなたですか？」

急に口調が変わったなこいつ

「今日は私以外にも戦ってもらおうと次元の壁壊して違うところの神の転生者と戦ってもらうために来てるのよ」

「なるほど、ツールが迷惑をかけてスイマセンね」

謝ってくるけど、戦うためにきたんじゃないのか？

「いいわよ、神威君も鍛えられるし」

「神威さんですね、私は紅那岐つて申します」

丁寧に挨拶をされてしまったから此方もしなければ

「気にしないで良いですよ。それと俺は呼び捨てでかまいませんよ？」

「それなら私も紅那岐と呼び捨てに」

お互い少し話して丁寧に喋るのも禁止となった

「さて、話を聞く分模擬戦をすればいいのか？」

「そうね、後はできるだけ貴方のスキルを見せて貰えないかしら？」



「????かまわんが」

分かってない様子だなあれは

「彼は見ただけで相手の力を覚えることができるのよ」

「ふん」

え！？驚かないのか？持つてる俺でもチートすぎると思ってるのに

「うちの飛鳥と変わらんしな」

誰だそれ？まあ何だかんだで場所を用意してくれたから其処でやることになった

「さて、まずはファフナー輝紅を出してくれ」

指輪が淡く輝くと其処から一本の刀が出てきた

「それがお前のデバイスなのか紅那岐？」

「そんなもんだ」

お互いの世界がリリカルなのは世界って聞いた時はビックリしたが、次元が違うから会うことは無いそうだ

「じゃあ俺もナイトソウル ファーストモード！」

俺は天鎖斬月を出して構える、紅那岐は左手で持っているだけで構えてなかった

「構えないのか？」

「これが俺が刀を持つときのスタイルだ」

そう言っつて今も自然体のままで俺と対峙をしていた

「準備は良いわね？では・・・始め！」

女神様の合図で俺は一気に駆け紅那岐に斬りつけようとした

「早いな、目で追うのが大変だぞ？」

見えてるのかよ！最速ではないにしろ相当のスピードのはずなのにかわされてしまった

「トールのほうがえげつないからな、次は俺の番だ」

すると急にあいつの体がぶれ始めた

「フッ！」

殺気を感じその場に斬月を振るうと紅那岐がいつの間にか

「今のは風舞って言って相手の視線を利用してぶらす動きで場所を掴めない様にする技だ・・・速さは瞬動の半分くらいかな？」

言い終わると急に刀をしまっていました

「どうしたんだ？」

「刀を使ったスキルは今のでおわりだぞ？俺がもらったものって刀使わないし」

なんだそれ！？つまりは身体能力だけで俺と対抗できたのかよ

「次はこいつだ！」

すると今度は白と黒の銃を取り出したんで俺も魔導双銃を取り出した

「そんなものまで持つてるのか、スキル沢山だと使う機会あるのか？」

それは俺も知らない

「んじゃ行くぞ？」

そういうと銃で魔力弾を連射してきた、威力は高くないけど数が多  
いな

「だがこれ位なら！」

俺は双銃から虚閃を発射して紅那岐を貫いた

「ぐふ……」

どうやら致命傷は避けたようだけど、左腕が完全に逝ってしまったようだ

「これで終わりかよ」

あまりな結果に少し残念に思っている

「お前は何を言ってるだ？」

するとまた魔法陣が展開すると左腕は直っていた

「その力は……」

「これはさっき見たんじゃないか？俺の力の一つで『ダ・カーボ復元する世界』  
って言って24時間以内に対象を戻すことができる能力だ」

後は使い方しだがなと言っているが、つまりは再生魔法に近いのか？

「さて、再開と行こうか……ラーゼン術式固定解除！『シユトゥルム・クロイツ正邪必滅の流星群』」

紅那岐が急に言っていると俺に魔力弾が何処からとも無く襲ってきた  
避けようと瞬歩を繰り返していても魔力弾は何処までも俺を追い

けてくる

「まだ終わりじゃないぞ？」  
『ヴァイス・シユバルツ 福音の魔弾』！」

紅那岐は今まで以上の威力があるであろう魔力弾を俺にはなくあらぬ方向に向けて打ち出した

「何処に撃つていやがる」

そう言つて油断したのがいけなかったのか、魔弾は急に角度を変えて俺に向かつてきた

「俺のスキルの二つ目福音の弾丸は相手の音を頼りに向かつていくものだからな、無機物以外はどうかやっても音が出るから何処までも向かつていくぞ？それに俺も撃つて終わりじゃないしな」

紅那岐はまた最初と同じような魔弾を撃ちまくってきた、俺は虚閃や鬼道を使い総て打ち落とした

「・・・凄いな」

素直に褒めてくれるのは嬉しいが、そっちは疲れを見せてないから結構ムカつくぞ？

「最後は俺の最大のアーツで決めようかな？」

するとあいつは銃をしまつと今度はガントレットを装備していた

「行くぞ？今度は殴り合いだ！」

面白い、だったら俺もそれに乗ってやるよ！

Side End

紅那岐 Side

最後のアーツで決めようとしたら神威の奴も同じように殴り合いに来るらしく双銃を消して俺に向かってきた

「ハアツ！」

拳と拳がぶつかり合って周囲に衝撃波が飛ぶ、こいつは本当に色々な能力を持っているな

だったら俺も最大の力で戦ってやるか

一旦距離をとって話しかける、理論は違えど知ってる奴は多いからな

「神威ってネギま！の雷天大壮って知っているか？」

聞くと頷いてるから知っているみたいだな

「これから見せるのは似たようなものだ、副作用がない分こっちのほうがいやすいが、欠点とすればツールに許しをもらってくれ」

そう言っただけ俺は自身の魔力を雷光に変え唱える

「タイビュランス疾風迅雷！」

轟音と共に俺は雷光化し身体能力を跳ね上げる

「今までの100倍早いからな？」

そう言っただ俺は雷舞・瞬動などを使い殴りかかるが同じようについてきて俺と殴り合っている  
今まで転生者と戦ってきたけど、ここまで強い奴は始めてだな

「食らえ！『トールハンマー総てを射抜く雷光』！」

「食らうか！『雷吼炮』」

俺は自身のフエイバリットを出すも相手も似たような技を出して相殺された

「おいおい、威力は同じでも速度は光速だぞ？よく打ち落とせたな」

感心しているとなにやら睨まれる

「お前全力か？なにやら余裕を持ってるように見えるんだが・・・」

ああ、そういうことか

「トールと戦ってるとな辛そうな顔をしていると恍惚とした表情で更に熾烈な攻撃してくるんでな、だから常に余裕な表情をするようになってしまったんだ・・・まあ模擬戦だから限界まで力は出さないのもあるが」

そういうと同情と納得できないと言う表情で俺をみってくるが、悪いが俺一回でも死ぬとそこで終わりなんだよ

「さて、そろそろ終わらせようか？お互い最大の一撃でやろう」

「分かったよ」

俺は魔力を貯める

「俺は時間がかかるからお前から攻撃してきていいぞ」

「その言葉後悔するなよ？はあっ！」

すると神威は俺に接近すると思いつき殴ってきた

「・・・それが最大の攻撃か？」

「馬鹿な！？クラッシュが聞いてないだと!？」

クラッシュって随分危険な名前だな・・・まあいい俺のチャージも  
終わったからこれで最後だ

「終わりだ『レーヴァテイン迷い無き光闇の剣』！」

俺の神話魔術（魔法）に完全に飲み込まれた神威は見事吹っ飛び模  
擬戦は終了した

「大丈夫か？」



気がついた神威を起しながら聞いてみると

「お前なんでクラッシュが効かなかったんだ？使った俺が言えるものじゃないがアレは総てを壊す攻撃だぞ？」

おいおい、人間に使うようなものじゃねえだろ

「ああ、復元ダ・カーボする世界を常時発動してしてから食らう前の俺に戻し続けた結果殴られたダメージしか入らなかったのか」

「それなんてチートだ？」

「魔力が切れたらそれで終わりだからな、チートでも限界はあるぞ」  
なにやら納得してくれたようだ

Side End

神威 Side

「もう良いかしら？そろそろ戻すわね」

「女神様早いですね」

「……あっちみて御覧なさい」

言われてみると紅那岐がツールさんに首根っこをもたれていた

「さて、アンタの課題も分かったことだし帰ったらまた修行ね」

「待て！模擬戦で疲れたから勘弁しろ！」

なにやら凄く哀れに思えるんだが・・・

「黙れ」ガスツ！

あ、殴られて沈黙した

「じゃあ、ありがとね またね」

そんな感じで二人は帰って行った

「・・・送るわね」

「お願いします」

そうして俺も帰って行った

S i d e E n d

予断だが神威が帰ったのならのはは既に帰っており何処に行っていたか問いただされたとか？

## EX1 コラボ 紅那岐VS神威（後書き）

レティ「終了、実は紅那岐は顔に出てなかったけど相当きつかった状態です」

ルーネ「そうだったんですか〜因みにツール様は紅那岐さんの修行でおりません〜」

レティ「人様のキャラを書くのは難しいと思った」

レティ「違うところがあつたら言ってください、大幅修正も辞しません」

ルーネ「感想ありがとうございます〜」

レティ「ではまた〜」

レティ「因みに、神威に使ったのはアインハルト術式固定・ラーゼン術式固定解除・シユ正邪トルム・クロイツの流星群・ヴァイス・シユバルツ福音の弾丸・ヴァイス・シユバルツ福音の魔弾・タイピュランス疾風迅雷・トルハン総てを射抜くマレーヴァテイン雷光・迷い無き光闇の剣です、使うかどうかはお任せします〜」

EP 7 何故こいつらいるし!?! (前書き)

2話投稿です

Q: 何故このキャラを出した?

A: 気まぐれです

## EP 7 何故こいつらいるし!?

「ふうふうふう・・・」

ゆっくりと息を吐きながら目を瞑り瞑想する

前回神威との戦いでは偶然勝ちを拾えたものだった

俺の力は今はまだ持っている力を使っているだけに過ぎない

なら、俺が使える力を更に俺自身専用までもって行かなければこれから先もしかしたら負けてしまう可能性がでかい

どうすれば勝てるか・どうすれば良いかをこれからの課題にしつつ修行をして行こう

「紅くんそろそろ時間だよ」

すずかが声をかけてくる、そうだったな今日はフェイトがこの海鳴市に来るって言うんで会いに行くんだったな

「分かった今行く」

俺は瞑想をやめて立ち上がりすずか達の下へ行く

やってきました翠屋今それぞれが注文をしている最中だ

「俺はアレとガトーショコラで、飛鳥はショートケーキと飲み物はアイスティーで」

「私はショートケーキとアイスティーで」

「恋は・・・ここからここまで」

「私は紅くんと同じで飲み物はアイスティー」

一人おかしいのがいたが気にしない、どうせ俺の金だ  
今ここには俺達月村組+なのは・ありさ・テスタロツサ姉妹がいる  
注文を待つ間に改めて自己紹介タイムとなった

「はじめましてですね、私は赤羽 紅那岐と申しますよろしく願  
いしますねアリシアさん、フェイトさん」

「私は妹の七星だよ」

「私は飛鳥ですよろしくお願いします」

「・・・恋よろしく」

と初めてあう俺達はそれぞれ名乗った

「それにしてもアンタ初対面の人に必ずその敬語を使うのいい加減  
やめなさいよ、知っている私達からしてみれば気持ち悪いわよ」

なんか久々の登場のバーニングスが言うてくるが・・・大きなお世  
話だ」

「アンタぶっ飛ばすわよ！」

な、何故心を読める!？」

「声に出てるよ」

「え、えつとその・・・」

「フェイトちゃん気にしていると疲れるよ? こういうのはスルーってのをすると疲れないの」

「おもしろい」

マジか!? ワザとだけどな・・・あとなのは黙れ、アリシアは既に順応しているな

てかおいアリシアお前5歳で止まってなかったか? フェイトと同じ身長になってるぞ?

「まあ、アリサ弄りはここら辺にして改めて紅那岐だ好きなように呼んでくれ」

「分かった・・・く、く・・・」

くなぎって呼びづらいのか? 確かに同じ名前って聞いたこと無いからな

「ナギでも、なっちゃんでも好きに呼んでいいぞ?」

「じゃあ、なっちゃんです!」

アリシアはそれを選ぶか、俺と同じセンスをもってそうだ

「じゃあナギで」

フェイトも決まったようだな

「それでアンタは助かったとでも？」

なんかバーニングスがうるさいな？

「どうしたアリ・・・バーニングス？」

「あんなんで言い直すのよ！」

決まってるだろう？お前の反応が面白いからだ

「お待たせしました」

俺とアリサがキヤイキヤイ騒いでいると注文をした品物がきた

「・・・はあ！？」

俺は驚いて声を上げてしまったが・・・何故いる？

もって来てくれた人は栗色のウェーブのかかった髪、恋みたいに触觉を持つており翡翠のような綺麗な緑色の瞳の女性がいた

「そんなに驚いてどうしたの？」

えー本当になんでいるの？

「なのはちゃんこの人は？」



「紹介するね、お父さんの友人の娘さんでフィアッセさんっていうの」

「」「」「よろしくお願いします」「」「」

「うん、よろしくね」

俺が固まっている間に挨拶が終わったようだ

「それで君はどうしたのかな？」

「あ……すみません、フィアッセさんってクリステラ音楽スクールの？」

「よく知ってるね、ママがやっているのがそうだよ」

あーマジでビックリした

そんなこんなで喋っているとプレシアが来たんだがここでまたビックリしたと言うことを先に言っておこう

「アリシアー！フェイターー！」

行き成り美人の女性がテストアロツサ姉妹に抱きついてきた

「ママくるしいよ」

「母さんビックリしたなあ」

……マジで？

「あらこの男の子は？アリシアとフェイトはあげないわよ？」

「母さん何言ってるの!？」

「ママ失礼だよ？」

「本当に母親ですか？」

こう言っちゃなんだがプレシアって最初あったときは既におばさんに近い外見だったのが今はどこをどう見ても20台なんだが？リリなの世界の母親は若いのが定番なのか!？

「うふふ・・・子育てって良いものね、若返っちゃったわ！」

「分かります、いいものですよね」

「にゃ!?!お母さん!?!」

桃子さん登場、若いねうん

てか、プレシア若返ったレベル超えてるよ？化学か？化学なのか？

「あ、紅那岐君士郎さんが呼んでたよ？ブレンドがもう直ぐ切れるから作りたいたいならおいでって」

「分かりました」

因みに俺が翠屋で頼んでいるアレというのは俺オリジナルブレンド  
コーヒーだ

前にサッカー試合の助っ人で出たときの頼みで俺オリジナルブレンドを作らせてくれて事だ

因みに、モカベースにしつつマンドリンなどを加え酸味を少し利かせた1杯になっている

「土郎さんきましたよ」

店に入ってみると其処にはなにやら修羅場が

「恭也?」「恭也!」

なにやら女性二人が恭也さんを取り合っていた

「あ!紅那岐助けてくれ」

「土郎さん?」

「無視するなああー!」

笑顔で般若を背負っている女性に挑めど?無茶言つな姉さんはいつの間に来たんだ?

俺は無視しつつ土郎さんとブレンドを作っていた

その後フェイト達が転入してくるようになってその後は解散となった、俺は家に帰ってそのままラボでなのは達のデバイスの改造案を特殊経由で管理局に送った

~~~~~

「そう言えば、みんなは大丈夫なん?」

この前なにかオイタをしたのか家族のほとんどがボロボロになって

帰ってきた

「はい主、心配をかけました」

シグナムがそういつてくるけど、心配になってしまっわ

「それではやてちゃんごめんなさい今度の病院の時ついていけなくて」

シヤマルが謝ってくるけど

「大丈夫や、シヤマルたちが来る前の時は一人で行っていたしな」

私が言ってもまだ心配顔のみんな

「そっだ！兄ちゃんにたのもうよはやて」

ヴィータが言ってくる・・・この前の飴で完全になつたヴィータ、かわええな

「くーくんか？迷惑になるんちゃうかな？」

なんだかんだで忙しいからなくーくんは

「聞いてみましょう」

シヤマルがパタパタと電話に向かっていくと直ぐに帰ってきた

「はやてちゃん〜」

涙目まシャマルが帰ってきた・・・またやったな？くーくん

「くーくん、いい加減うちの子泣かさんといてな」

『はやての家だつてのにボケによわいとは、この先やっていけるのか？』

全く反省の色が見えないくーくんが最初に言ったのがこれって・・・

「大丈夫や！その内イヤでも慣れるわ」

「ちよっ！？はやてちゃん？」て言う声が聞こえてくるけど今は無視や

そんなこんなでくーくんが病院に着いてきてくれることになった

「ごめんなあ？うちの子が無理言って」

「かまわんよ？友人の頼みだし」

こともなにげにいつてくれるのはうれしいわあ

「でね、石田先生が新しい先生を呼んで助手になるらしいんよ」

私はある程度の事情を説明しながら病院に着いた

「八神さーん」

呼ばれたからいかんとな

「はじめまして、これから八神さんの担当になるフィリス・矢沢です」

中に入ると銀色の長髪の綺麗な人が居った・・・くーくんが固まっているな、美人なのは分かるけど見とれすぎちゃうか？

「本当はカウンセリングが専門なんだけど、八神さんの症状が不明って点で私も協力することになったのよろしくね」

「よろしくお願いします」

くーくんはまだ固まっているな  
診察が終わり帰り道くーくんをからかおうとさっきのことを掘り返してみた

「くーくんってああいう人がタイプなん？」

「あー確かにタイプであるが固まってた理由は別だ」

ってホンマにタイプなんか！

これから先銀髪さんには要注意やな

「その理由って？」

「秘密だ」

その後どんなに聞いても教えてくれなかった・・・いつか絶対聞い

てみせるで

その後うちで夕食を<sup>ご</sup>馳走してくーくんは帰って行った

予断だがヴィータが<sup>ご</sup>飴をねだって5本ほど貰ってたのは<sup>ご</sup>うらやまし  
かった

EP 7 何故こいつらいるし!?(後書き)

レティ「日常編終了」

トール「とらハキャラを出したのは本当に気まぐれらしいわね」

レティ「んだ、まあいいんじゃないかね?って理由しかないけどね」

トール「つたく、この後大して出さないのにひどいわね」

レティ「好きなキャラだから出すかも」

トール「あつそ・・・」

レティ「では感想ありがとうございました」

トール「またね」



## EP 8 テスタロツサ姉妹が転校してきました

久々の私の出番なの！この小説主人公がメイン過ぎて私達なんておまけになってるのは許せないの！・・・私誰に話をしてるんだろう？

「みなさん、本日は転校生がやってきました・・・それでは入ってください」

今日はフェイトちゃんとアリシアちゃんが転校してくの、朝から私はわくわくして止まらないの  
そして入ってくる時に・・・

「へぶ・・・」

フェイトちゃんが足を絡ませてこけちゃった・・・顔を真っ赤にして起きたけど萌えるの！

「・・・のは・・・なのは！」

「はっ!?!」

アリサちゃんが声をかけてくれたんだけど私一体？

「何を恍惚とした表情でトリップしてるのよ」

呆れ顔のアリサちゃんだけど私どんな顔をしていたの？

それはもう変態的な by 作者

『ちよつと頭冷やそうか?・・・ディバインバスター!』

えっ!?!それはちょ・・・てかどうやって?・・・ぎゃあああ

ああああ！ by死体

悪は滅びたの！そしてフェイトちゃん達の自己紹介が始まったの

「アリシア・テストロッサですよろしく」

「フェイト・テストロッサですよろしくお願いしましゅ・・・あう  
／／／」

「刹那・F・セイエイだ」

アリシアちゃんはフェイトちゃんとは正反対の性格で明るく挨拶をしたんだけどフェイトちゃんは最後の最後で噛んじゃってまた顔を真っ赤にしたの・・・お持ち帰りしたい！あと一人いるようだけど気にはいられないの

「なのは帰ってきなさい！」

「そつよなのはちゃん！そういうのは私の役目でしょ！」

「七星ちゃん・・・紅くんに報告しとくね？」

「ちよ！？すずかやめて！」

言っている間にすずかちゃんは目に見えないほどの速度でメールを打っていた・・・先生に怒られるの

「はいはい、聞きたいことがあるでしょうけどHR終わった後にしてね」

先生がそう言ってHRをはじめたの

質問やらなんやらあったけど今は屋上でお昼になったの

「たく、このバカはいつも言ってるだろうが」

紅那岐君が七星ちゃんを説教しているところだった、  
大きなたんこぶがとても痛々しいの

「さて、飯にするか」

そう言っつて紅那岐君が弁当箱らしいものを取り出したんだけど・・・  
でか!?

「恋とすずかは食って良いぞ、七星はしばらく正座してから食え」

「お兄ちゃんなくなっちゃうって」

幾らなんでもそんなこと・・・半分くらいもうなくなってたの

「はぐ・・・むぐ・・・はぐ」

恋ちゃんが口いっぱい食べ物詰め込んでハムスターみたいにな  
つてっただけど・・・カワイすぎなの

「ほら恋、無くならないからそんなに慌てるな」

そう言つて口を拭いている紅那岐君・・・うらやましいの」

「ん？なのはも口を拭いて欲しいのか？」

「ふえ？どうしてそれを」

「声にててたぞ？」

「／／／」

恐らく私は真つ赤になっていると思つたの、顔が熱くてしょうがないの

「お前なのはに何言つてるんだ！」

だれか知らないけど、紅那岐君に向かって罵詈雑言をはいてる奴がいてとてもわずらわしいの

「あ？年上に向かつてその口の利き方・・・修正をしてやるつ」

「やれるもんなら・・・は？ぎゃあああああああ」

そんな事を思っていたら紅那岐君はモブA（キラ・ヤマトです）にアイアンクローを決めて沈めていたの  
相変わらず変なところで強すぎるのと私は思ったの

Side End

フェイト Side

初めての学校で緊張してちょっと失敗しちゃったけど、みんな良い人でよかった

今は屋上でお弁当を食べてるんだけど、ナギって何だかんだでみんなの中心なんだってのが話していて分かった

さすがの家に居候つてのをしてるらしいからさすがや七星と仲がいいのは分かっていたけどなんだかんだでアリサやなのはも楽しそうだ

「どうしたフェイト？俺の顔になんかついてるか？」

あう、見つめちゃっていたのがばれてたみたいだ

「きっと一目惚れってやつだよなっちゃん！」

「そうかそうか。プレシアさんを何とかしてから考えよう」

「ぶーなんか余裕あるね」

「ハハハ！女の子に好感もたれるのは悪くないからな」

「あうあう・・・／＼／」

うう・・・アリシアじゃないけど余裕がありすぎる

それにすずかや七星、恋がいつもいるってことは常に女の子と一緒に  
つてことでしょ？・・・アレ殺意が

「おおう、フェイト怖いな」

え！？私なにかした！？

「フェイトちゃん黒いオーラがでていたの」

なのはが言ってくるけど私そんなのでてないよ

「次の時間は体育のドッチボールだったね」

さすがが話題転換と言った感じで話を変えてきた・・・ナイス！

「懐かしい思い出・・・」

え？紅那岐が遠い目をしてどこかを見てる

「あゝ紅くんっていつも1対その他全員ってのをやってるから」

「ドッチのときはひどかった、ボールが3つ使われてな」

「でも、あんた全員倒したって言ってなかったっけ？」

もちろん！って言ってるけど小学生で其処までできるものなの？

「ま、お前らはがんばってやってくれ」

そう言っただけは弁当を片付けながら言っていた

「お前らもそろそろ食い終わらないとベルなるぞ？」

ウソ！？時計を見るとほとんど時間が無かったから私達は急いでご飯を食べたのであった

EP 8 テスタロッサ姉妹が転校してきました（後書き）

レティ「なのはを変態にしてみました」

トール「いいのそんな事して？」

レティ「いいんじゃない？なのはは百合属性もちなのは一般常識だし」

トール「それにしても紅那岐はフラグを乱立してるわね」

レティ「最初は二人はつけるつもり無かったけど・・・気づいたらこうなった」

トール「これ以上増えないことを祈りましょう」

レティ「感想ありがとうございます」

トール「もう一話日常はさんだらコラボをするわ」

レティ「お楽しみにはでは」

## EP 9 ドッジと携帯

（ドッジ対決）

お昼が終わり午後の最後の授業

其処には今はもう絶滅種といわれるブルマを履いた少女達とその他が校庭で集まっていた

「チーム分けはくじ引きにて厳正に行うわ」

そう言つて先生は用意していた箱をだしみんなの前に出す

「うづ、みんなと別れたら私どうしょ」

「だよね、すずかや恋と分かれたら死んじゃうかも・・・」

運動音痴のなのは他の人間よりは動けるが基本スペックが低い七星はひたすら分かれないうちに祈っているだけだった  
くじの結果はこうなった

Aチーム：恋・なのは・フェイト・アリシア・その他の皆さん

Bチーム：すずか・アリサ・七星・その他の皆さん

面白いくらいに丁度いい感じに分かれたのであった

「じゃあはじめ！」

先生の合図で始まった

以下台本形式にて



アリサ「行くわよ!」「シュッ

なのは「にゃああ!」「ヒュン

アリサ「ちっ!避けたか」

なのは「舌打ち!?!」

フェイト「今度はこっちの番だよ」「シュッ

すずか「甘いよ、それ!」「パシ シュッ

アリシア「きゃっ」「バン アリシア・アウト

フェイト「アリシア!?!よくも!」「シュッ

七星「あぶな!?!」「ヒュン

フェイト「くっ……」

七星「私にうらみあるの!?!」

フェイト「なんのこと?」「黒

一同(「コワッ!」)

ナレーション:そんなこんなで内野陣は減っていきました

アリサ「それ！」シュッ

なのは「きゃっ」「バン

フェイト「任せて！（アレなら魔法使わず取れる）狙うはさすが！  
ファイア！」シュッ

すずか「ふっ……それ！」シュッ

フェイト「あう……」「フェイト・アウト

アリサ「ついでになのはも！」シュッ

なのは「にゃあああ」「バン　なのは・アウト

アリサ「これで勝ったわね」

恋「……まだ終わりじゃない」

アリサ「げ……恋忘れてた」

恋「逝く」「ゴウン

アリサ「字が違う……きゃあああ」「ドゴウン　アリサ・アウト

七星「ちょ！？私まで？出番少ないよーっ！」「ガン　七星・  
アウト

ナレーション：恋とすずかの活躍で残りは二人に

すずか「恋ちゃん今日こそ決着をつけよう」

恋「・・・負けない」

ナレーション：この後決着がつかずそのまま授業は終わりとなると  
思ったが・・・

すずか「まだまだあ！」

恋「・・・えい」

ナレーション：結局勝負がつくまでとなり先生も最後の授業と言う  
ことでやらせていたら、他の学年は終わっていたのか歩いている生  
徒がいた

恋「・・・たあ」

すずか「甘いよ」

モブ「ちよつと私取れないよこれ！」

ナレーション：恋が一際威力を持ったボールを投げたがすずかは避

け外野は取れずボールはなぜか威力を落とすことなく歩いている生徒に直撃した（ギャグ補正によりボールへの反応ならびに危険だという声に気づけず）

すずか・恋「あ……」

ナレーション：しかし、当ててしまった相手が悪かった

当てた相手は何を隠そう紅那岐である。紅那岐は身体能力などは普段出さないで優に一般格闘家の能力を超えるものを持っている

紅那岐「お前ら覚悟はいいな？」フラリ

すずか・恋「う……」

紅那岐「くたばりやがれーーーーーっ！」

ナレーション：ギャグ補正のせいか能力を超えた一撃を貰いすずか・恋は撃沈しこうして体育の授業は終わった

End

）携帯を買いに行こう）

翠屋にていつものメンバーがお茶を楽しんでいた  
するとその時誰かの携帯電話が鳴ったのである

P i p i p i p i p i p i p i

「すまん俺だ、ちょっと出てくる」

そう言っつて席を立つ紅那岐

「えっと、今のは携帯だっけ？」

フェイトは良く分からず質問をしていた

「そうよ、フェイトやアリシア、恋は携帯持ってなかったわね」

アリサがそういえばと言う感じで行った

「うん・・・今まで必要なかったし」

「だね、それに何だかんだで難しそうだし」

「むくむく」

フェイトはなんだか悔しそうに、アリシアは難しそうに恋は興味が無いのかひたすら口にお菓子を詰め込んでいた

「あんた達も持ったらどう？あると便利よ？」

アリサが提案する

「でも、母さん忙しそうだし」

「ママって研究者で今なんだか色々やってる最中で話しかけづらいんだよね」

「呼んだかしら？」

「母さん!?(ママ!?)」

話をしていた忙しいはずのプレシアが何故かそこにいた

「娘が私を呼んだっぽかったから、来てみたの」

「一同はその言動を聞きながら思った・・・」どうやって?」と

「それで携帯だったかしら?良いんじゃないかしら、お友達も持っているなら持っておきなさい」

そう言っつて二人の娘の頭を撫でながら微笑むプレシア

「あう・・・」

「恥ずかしいよママ」

恥ずかしそうに頬を赤く染めながらも嬉しそうな二人

「むくむく」

「恋・・・アンタって本当にマイペースね」

「・・・ん?」コテン

「ブハ・・・」

ツッコんだアリサだったが頬をパンパンに膨らませながらコテンと首をかしげる恋の様子を見たら吐血してしまった

「お〜い戻ったぞ・・・プレシアさんいつの間？」

「こんにちわ紅那岐君、娘はあげないわ！」

いつものやり取りに苦笑いするしかない一同だった

何だかんだで買うことになった携帯、そして其処にはいつものメン  
バーが集まっている

恋も何だかんだで持つと言うことになった、ただ恋の場合は必要な  
書類を持つてくると言う形になっている

「さて、どれがいいんだろう・・・」

「いっぱいありすぎてわからないよ〜」

「・・・？」

三者三様の意見で中々決まらない一同  
アリサたちも機能の説明やデザインなどを説明したが、余計決めら  
れないようであった

「紅那岐のはどれ？」

「俺か？俺はこれだが」

恋が聞いてみると紅那岐はポケットからなにやら平べったい形の携

帯を出した

「アンタそれって高くてあまり出回ってない奴じゃない」

紅那岐が出したのはGALAXYSと言うタッチパネル式の携帯だった

「そうなのか？正直金には頓着してないからな」

そう言って再びしまっ紅那岐

「じゃあ、恋それでいい」

「「「「「「！！？」「」「」「」

そう言って恋は紅那岐と同じのを選ぶとした

「ちょっと恋ちゃん？それ高いよ」

「そ、そうよ他のにしたら？」

「お兄ちゃんと一緒なんて・・・」

「ず、ずるい！」

などの意見が聞こえてるが恋は気にせず向こうに行った  
因みに恋や七星の食費やその他もろもろは基本的に紅那岐の財産から出しているのどこで何を買おうと問題なかったりする

「ナギはアレ以外に使ったこと無いの？」



と其処にフェイトがやってきて質問する

「ないなあ、携帯持ったのも実は最近だし・・・ここら辺いいんじゃないか？デザイン・機能とかいい感じだし値段も丁度良いだろ？」

紅那岐が選んだのスライド式の携帯電話だった  
それをみたフェイトとアリシアは迷うことは無かった

「ナギが選んでくれたからこれにするね」

「私は色違いで〜」

二人はその後プレシアに頼みに行ったのだが・・・

「紅那岐君ちょっと良いかしら？私の実験動物・・・実験動物で良いわ、にならないかしら？」

「あんだ、選ばうとして結局それしかないんかい！」

と親馬鹿にツツコムしかなかった紅那岐であった

EP 9 ドッジと携帯（後書き）

レティ「なんかドンドン紅那岐がフラグを立てて行ってる・・・」

トール「アリスなんかもたってるっばいわね」

レティ「おかしいなあ〜？」

トール「自重？何それ？美味しいの？状態ね」

レティ「まあいいや苦労するの紅那岐だし」

トール「因みに紅那岐が持つてるお金は生前稼いでいたもので億単  
位持つてるわ」

レティ「ガキには過ぎた金額だ」

トール「ヤサグレんじゃないわよ」

レティ「（、（ケツ！」

トール「（無視）感想ありがとうね〜 またね〜」

EX2 コラボ 紅那岐VS霧夜(前書き)

畏無様とのコラボ

## EX2 コラボ 紅那岐VS霧夜

『ちょっとこっちにきて貰えるかしら?』

家で本を読んでいたら急にトールに呼び出されていってみると其処には男の娘と神らしき女性がいた

「トール?此方の方々は何方ですか?」

トールに説明を求めるとどうやら神威と同じで別の次元の神と転生者のようだ

「初めましてですね、私は紅那岐です。気軽に名前で呼んでください」

「ん? 俺は霧夜だ。名字はとりあえず遠坂な」

お互い自己紹介を簡単に済ませ、話していると

「んじゃ、模擬戦でもしてちょうだい」

うちのトールが言ってきた・・・かまわんが何故にいつも模擬戦なんだ?

「仕方ない、お互いがんばろう」

「おう」

男の娘にしては口と態度があれだなあ・・・もっとかわいいこぶって

相手を油断させるのも一つの手だと思っただが

「今、なんか考えたら、お前」

勘が鋭いようだな、これからはマジメにやりますか

「さてね・・・ファフナー、輝紅を出してくれ」

《了解しました》

ファフナーが俺の愛刀の輝紅を出して左手に持つと霧夜も太刀と鬼の面を出した

「ああ、お前が鬼菩薩送ってくれた奴か」

「お前が送った奴か」

そう言うってお互い確認しあうと俺も鬼菩薩を出した

「使えるのかお前も？」

「まあ、防御しか使えないけどそれでも便利だからだな」

そう言うって俺はツールに視線を送るするとツールも分かったらしく頷いてくれた

「では始め！」

合図と同時に俺達は駆けけた

Side End

三人称 Side

キンッ!

金属と金属がぶつかり合う音が響きあう

「ギアをあげさせて貰おう」

紅那岐は今まで以上のスピードで駆ける

「甘いな… - 斬空閃!」

霧夜が紅那岐がいるであろう場所に放つと紅那岐は避けて驚く

「うお!? 神鳴流の技使えるのか?」

「知ってんのか?」

「生前オタクなめるな」

そう言つて紅那岐は同じよう霧夜に近づき斬りにかかる

「はあっ!」

キンッ!

金属音が鳴り響き鏝迫り合いに持ち込まれた

「お前今の状態が全力か?」

「うんにゃ、実力見たかったからな」

そついうとお互い突き飛ばす形で距離をとった

『ナラ全力で殺ツテヤルヨ』

すると霧夜が異形の姿に変わった

「おお！ペルゼインかカツコいいな」

紅那岐は霧夜が変わったことに驚くことより感動していた

『才前知ツテイルノカ、ト言ウカ驚カナイノカ』

「そつか？まあ俺も全力で行こう疾風迅雷」  
タービュランス

紅那岐は自身に雷光の魔力を取り込んだ

『逝クゾ』

「さあ、来い！」

そしてお互い再び斬り合いが始まった

「はあっ！」

『オラ！』

紅那岐は雷の力を頼りに体を活性化しスピードと威力を上げていた

しかし、霧夜はペルゼインになる事で体長が2mになり身長的に不利なっていた

『チヨロチヨロ鬱陶シイナ』

すると霧夜の鬼菩薩や鬼墓参に光がともりだす

『食ラエ・・・ 鬼牙流・殲滅せんめつノ型 雷迎枝らいこうえ!!』

「マジか？鬼菩薩モードバリア！」

霧夜からの無数の魔力ビームを紅那岐は鬼菩薩を操りバリアを展開した

「あぶねえ・・・お前手加減ないのな」

『鬼菩薩ヲソクナ風ニ使ワレテイルホウガ驚キダ』

それぞれ、言うことを言うと再び駆け出した

『次ハコレダ！ 鬼牙流 眩異断血まふいたち!!』

「その斬撃貰った！」

霧夜が斬撃を放つと紅那岐は刀を振るうと斬撃は消えてしまった

『ナニ？』

「驚いてる暇は無いぞ!! 鬼牙流 眩異断血まふいたち!!」



驚いている霧夜をよそに紅那岐は霧夜と全く同じ斬撃を放った

『チイツ!?!』

霧夜はなんとか避けたが驚きが大きかった

『何ダイヤモンドハ』

「この刀の特性でな、相手の斬撃や衝撃はなどは刀に纏わせて同じように返すことができるんだよ」

そう説明すると紅那岐は刀をしまっってしまった

『モウ終ワリカ?』

「うんにゃ、お前相手に普通の刀だと力負けが明白だからなもう一本の奴を使おうとな・・・ファフナー、蒼麟を出してくれ」

《了解です》

すると紅那岐の手には一本の刃が蒼い野太刀が握られていた

『才前・・・色々持ッテンダナ』

「ああ、昔から武において才能は持つてるんでな」

そう言っつて蒼麟を構える

「さあ逝くぜ?なんちゃって真・雷光剣!」

紅那岐は自身の雷のエネルギーを刀に纏わせて振り落ろして霧夜を

攻撃した

「鬼牙流きがりゅう 眩忌まふい獲愚えくり璃」

霧夜は本来対人で使うはずの技を使い紅那岐の雷光剣を切り伏せた

「今のもだめなのかよ」

「・・・ナンチャッテツテ言ウ割二、凄イ魔力量ダツタンダガ・・・

」

紅那岐は自身のエネルギーの大半を使った攻撃をかき消されたことがショックで

霧夜は霧夜で今の攻撃を何とか退けられたがダメージも受けていた

「さて、そろそろ終わりにしようぜ？」

「・・・イイゾ」

お互いある程度距離をとり力を貯める

その時間が1分かはたまた一瞬なのかはわからないがお互い限界まで力を貯めていることが分かった

「鬼牙流きがりゅう・斬撃ざんげきノ型 千慄せんりつ桜華おうかのまいノ舞！！」

「櫻舞・瞬華終刀！！」

お互い舞うように斬撃を放つ

それぞれの一撃はお互いの命を奪うのには十分な威力を持っていたがそれぞれの攻撃で迎撃をしているので決定打は与えられないでいた

「はあっ！」

『オラアッ！』

しかし、お互い防御を捨てた形で攻撃を繰り出した

「くっ……」

『ガハツ……』

そしてお互いの一撃が決まり二人とも倒れてしまった

「はい終了、結果は引き分けね」

トールが決着を言うがお互い気絶していた為聞こえていなかった

Side End

紅那岐 Side

いやあ、刀を使う相手に何処までやれるか試したかったから良かったが最後のは正直きつかった

聞けばお互い胸が奇跡的にくっ付いてるだけだったそうだ

「楽しかったよ、次は俺本来の戦いでやるっ」

「お前、アレで本気じゃなかったのかよ・・・」

面白くなさそうに言う霧夜だが

「全力だったぞ？ただ俺のスタイルはいくつもあって状況によって使い分けるだけだ、今回はお前が刀を使ってたんでなあわせてみた」

「ハア・・・次は、そんな事言わせねえからな？」

「次までに俺も強くなっているさ」

そう言うってお互い笑う、そういえばアルテミスがいないが？

「ああ、彼女ならなんか呼び出された〜って言って途中で帰ったわよ」

心を読むなよ・・・

「霧夜はどうやって返すんだ？お前無理だろ」

そう言ってる与其処に・・・

「霧夜さん迎えにきましたよ」

「「「あ、幼女」「」」

「幼女じゃありません！」

なんか幼女がやってきた、霧夜の名前を出してることとは知り合いか

「幼女なにをやってるんだ」

「幼女じゃないもん！」

「幼女でしょ」

「トール様！？あなた前から私知っているのにその言い方ひどくないですか！」

「だってねえ〜？ルーネに比べると」

「呼びましたか〜」

話しているとルーネがやってきた

「・・・紅那岐知り合いか？」

「ああ、トールの部下のルーネだ、戦乙女・・・まあ天使みたいなもんだな」

「なるほど、幼女と言う理由が良く分かるな」

そう言つて霧夜は幼女弄りをしていた・・・因みにルーネは分かりやすく言つとボン・キュツ・ボンだ世の女性は羨ましがる体系をしている

トール？美女と美少女の中間だな

「さて、帰るとするか」

そういつって霧夜が帰ろうとする

「あ、霧夜これやるよ」

そう言っつて俺は一本の刀を渡す

「・・・これは？」

「絶影っつて言っつてな、影を纏わせることによつて刀身の形を好きにすることができ、ぶつちやけ斬艦刀みたいなもんだな・・・お前今の姿で鬼蓮華振るうとき両手だろ？だったら刀身の長さ変えて片手でも持てるようにすると良ささ」

「そつか・・・んじゃ、ありがたく貰つとくよ」

そう言っつて霧夜は帰つていった

別次元だがいい友人がまた増えたな

EX2 コラボ 紅那岐VS霧夜（後書き）

レティ「幼女」 幼女」

トール「最低の性癖ね」

レティ「私的には男の娘・ロリータ・幼女・ロリ巨乳が好きだ」

トール「最後の3つは一緒でしょうが」

レティ「違う！いいか？

幼女＝10歳までの女の子（見た目も含まれる）

ロリータ＝年下でカワイイ子

ロリ巨乳＝20歳代までの女性で身長とはアンバランスな巨乳（美しい体）

のことを言うんだ！」

トール「あつてるのかしら？」

レティ「しらん！私的の解釈だからな」

トール「それは別として、霧夜の口調とか気になったところは教えてね」

レティ「全力を持って直させていただきます」

トール「では感想ありがとうございます」

レティ「次回は漸く4話あたりに行くかな？では」

EP 10 本編か・・・久々じゃね？

とあるビル郡の屋上で少年と少女が現在起こっている所を見守っていた

「さて、データは使ってくれたのかな？」

「・・・」

少年は少女達のこれからを見守っており少女はただ黙って見守っているだけだった

「聞いて頂戴、何処からかは分からないけれど貴方達のデバイスの強化案が流れてきてそして2基は望んだのもっと強くなって主を守りたいって」

盗聴をしているとそんな内容が聞こえてきた

「言ってあげなさい、貴方達のパートナーの新しい名前を」

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

「セットアップ！」

それを聞いた少年は嬉しそうに頷く

「どうやら採用されたようだな、まだまだカートリッジシステムに



ついでには甘い管理局だからなこれでは達も少しは大丈夫だろ」

「……ん」(コクン)

少年……紅那岐は確認すると少女……恋に確認をする

「いいか恋？間違っても怪我させるなよそれ以外なら好きにすれば良いさ」

そういうと紅那岐は双銃を取り出した

「動くようだな、行くぞ！俺はなのはの所に行く」

「恋はフェイトの所に行ってくる……」

そうして二人は屋上を駆けた

Side End

なのは Side

レイジングハートがパワーアップした……これでヴィータちゃんともお話できるの

前に永劫さんとやったときよりうまくやりたいなと思っていたら

「なのは下がってるここは俺がやるよ！」

そう言ってキラ君が前に出て行こうとするけど私の邪魔しないで欲しいの！

「おやおや、女性のやる気をそぐとは男の風上にも置けませんね？」

「なっ！？ガハッ」

すると急に現れた永劫さんがキラ君をぶっ飛ばしたの・・・本当に永劫さんの言うとおりなの

「永劫さん！」

「なのはさんはあちらの方と戦いたいんでしょう？だったらお好きに殺ってきなさい、無粋な輩は私が止めてあげますよ」

「字が違うの！」

「気にしてはだめですよ？」

でもありがたいの！

「では願います」

そう言って私はヴィータちゃんに向かって飛んでいった

Side End

紅那岐 Side

なのははヴィータの元へ向かったか

「てめえ！一度ならず二度まで邪魔するんじゃないー」

そう言っつてガンダム君（彼の名前しりません）が向かってくるけど

「・・・」ドントッ！x???

無数の魔弾を放ち迎撃する

「チツ、これなら！」

ありゃ、アレはフリーダムのハイマツトか？半分くらいしかあたらんかったな

「ゲホツ、なんだこの威力」

まあ一発になのはのディバインバスター程度の魔力を込めてるからな半分でも落とされたのはショックだな

「まあいいです」

すぐさま雷舞で横に回って蹴りを入れた

「なっ！？ガハッ」

うゝむ、特性でPS装甲なのか？砕くつもりで蹴ったのに罅で終わっちまった

「硬いですね、肋骨全壊のつもりで蹴ったのですが」

「テメエ・・・」

さっきから、「テメエ」とか「なッ」とかしか言っつてないなこいつ・

・神威や霧夜見たく面白くもなんと無いから終わらせるかな  
双銃をしまい輝紅を出す

「行くぞ輝紅！・・・見よう見まね！！ 鬼牙流 眩まぶ異断血！！」

この前の霧夜のときに使われた斬撃を俺流にアレンジして放ってみた

「ガハア・・・」

斬撃を食らい装甲を全壊にしガンダム君は落ちていった

「恋はどうなってるかな？」

俺は刀をしまいながらうまく手加減できてるか心配だった

Side End

三人称 Side (恋側)

其処には防戦一方の恋の姿があった

「邪魔するなーーーーーあ！俺はフェイトの元へ行きたいんだよ！」

そう言って自身が持っているソードで切りまくっているガンダム（  
刹那）

そんな攻撃を方天画戟（恋姫版）で防いでいる恋

「とつとと落ちやがれーーーーえ！」

一際強い斬撃を放つも恋は無難に避けた

「くそ、何で華蝶仮面なんて居るってんだ。それに攻撃してこねえし」

面白くなさそうに言う刹那である

一方恋はというと

(・・・手加減難しい)

と上手く手加減が出来ずに攻めあぐねていたのであった

「まあいい、これで終わりだ！ロードカートリッジ！」

《カートリッジロード》

デバイスが合図すると刹那は全体的に赤く輝きだした

「食らえ！トランザムライザー！」

すると刹那はトランザムを使いライザーソード（GNソード？版）を放ってきた

「・・・ん！」

しかし、隙が多すぎだった。恋は簡単に範囲から離れると真横から刹那に一闪

「ふっ！」

一撃で刹那を撃墜したのであった

「・・・疲れた」

そう言っつて恋は紅那岐の元へ向かったのであった

Side End

三人称 Side (全体)

紅那岐達の介入により原作と同じようにそれぞれの戦うべき相手と戦えたのであった

また、同じようにクロノが闇の書の所持者を見つけ捕まえようとした時に仮面の男の介入も受けていた

「使え」

そう言っつて闇の書を起動し結界を破壊しヴォルケンリッターは撤退をしていったのであった

すずか達はと言っつと

「おいしーね!このカニ」

「だねー、紅くんも恋ちゃんも何処いったんだろ?」

「やなー、これを食べられへんっつて勿体無いわぁ」

すずかの家で美味しくカニ鍋を食べていたのであった

「でも、お兄ちゃんのことだからこれより美味しいの作ったりして・  
」

「「ありえる!」「」

と取り留めの無い話をしていたのであった

Ep 10 本編か・・・久々じゃね？（後書き）

レティ「今回は恋を少し書いてみた」

トール「本当に活躍らしい活躍ないわね」

レティ「それと畏無様無断で技使ってしまったんでイヤなら言うて  
ください、修正します」

トール「それにしても、転生者弱いわね」

レティ「能力におんぶに抱っこに負けるわけ無いでしょうが」

トール「負けたらお仕置きだしね」

レティ「おー怖っ・・・それは置いといて感想ありがとっござい  
ました」

トール「またね」



EP 11 修正力ってのは何処までも存在(前書き)

タイトルと文章が微妙に食い違ってるのはデフォウ

EP 11 修正力つてのは何処までも存在

とある管理外世界にて今白き魔道師・ガンダム（フリーダム）・鉄槌の騎士そして・・・紅那岐が対峙していた

「やっぱり、お話を聞かせて貰うわけにはいかないの？」

「なのは！こんな奴の言う事なんて聞いても意味ねえよ！」

「うるせえ！テメエに話すことなんてねえよ！」

「やれやれ、相変わらず無粋ですね」

4人とも違う反応でそれぞれの思いを言っていた

「て言うか、テメエは一体誰なんだよ！俺達の邪魔ばかりしやがって！」

ガンダム・・・キラが紅那岐に怒鳴りつけるように聞く

「・・・（ガン無視）さて、なのはさんは相変わらずO H A N A S H I！好きですね？まあやり通すと言うなら邪魔はしませんよ」

「なんか響きが失礼な気がするの」

聞き流しながら紅那岐はあくまで邪魔はしないと宣言するとガンダムを睨む

「あなたはいい加減戦うのも飽きました・・・いい加減散れ」

そう言うと紅那岐とキラを包む結界が発動した

その結界はなのは達が使う結界とは全く異なりどこか現世うつしよとは違い  
幻想的な場所だった

「な、なんだここは!？」

「ここはな転生者同士が戦う為のスペース・・・アイ・スペースだ」

やれやれと言った感じで説明する紅那岐

「転生者・・・やっぱり teme かもか」

「そうですね? まああなたと違い私のほうが格が上ですが」

紅那岐は遠まわしにお前は敵じゃないと言っている

「ざっけんなー!」

ついに切れたキラ、するとカートリッジをロードすると装甲が変わり  
りだした

「装甲を変えたんですか・・・変わったんですか?」

正直フリーダムがストライクフリーダムになっただけなのであまり  
見た目は変わらないのである

「一気にてめえを殺してなのは元についてやる」

「やれやれ、その気持ちに不順な部分が無ければ生かして差し上げるのに」

頭を振りながら溜め息を吐く紅那岐、それをみてますます激昂するキラ

「嘗めるのも大概にしゃがれ！ドラグーン！」

ストフリ特有の翼の青い羽が飛び出し紅那岐を襲うが

「何処を狙ってるんですか？」

「なっ!?!」

いつの間にか今までのいた場所から遠い場所にいた紅那岐が双銃を構えていた

「その羽邪魔ですね？打ち落とさせて頂きます、ヴァイス・シユバルツ『福音の魔弾!』」

すると黒と白の魔力弾がドラグーンに向かい総てを打ち落とした

「くそっ!」

舌打ちをし紅那岐を睨む

「はぁ・・・マジでつまんねえお前もついいやマジで終われ」

今までの口調は何処へやら本当につまらなそうに言い放つと紅那岐の周りに7つの魔力スフィアが浮かんでいた

「な、なんだこの魔力は!？」

「終われ……『多重式屈折次元収束魔導砲!』」  
デュアル・レーザージェイン

七つの極大の魔力砲がキラに向かっていき飲み込んだ

「……ふう終わったか」

そういうとふらりとした紅那岐

「っとと、流石にここまでの威力の魔導砲は魔力の消費が激しいな」

そう呟くとアイ・スペースから抜けると紅那岐は信じられない光景を見た

「おいおい……今にして蒐集受けてるのかよ」

そう、空間を出ると仮面の男に胸を貫かれ収集を受けていた

「やれやれ……助けるか」

そう言つて紅那岐は刀を出すと男に切りかかった

「はっ!」

一閃……それにより男が吹き飛ばされなのはは落ちていきそれを抱きかかえ助ける紅那岐

「……ヴィータさん今は逃げなさい、この方は私が助けておきま

しよつ」

「分かった・・・だけど次は倒してやる！」

「・・・調子にのるなよ小娘？」

すると殺気があふれ出しヴィータを襲う

「うっ！？な、なんだこいつ・・・」

「良いから行きなさい、時間が惜しいので」

するとヴィータに背を向けてどこかに言ってしまった紅那岐であった

「くそ・・・」

悔しそうに呟くヴィータも転送してその場から消えた

「さて、恋はどうなったかな？」

そうして紅那岐は恋に連絡を入れる

Side End

恋側 三人称

「恋そのフェイトどうしたんだ？」

紅那岐はなのはを安置させた後恋に連絡を入れてきたらフェイトをお姫様抱っこをしていた

「・・・腕生えた、倒れた、助けた」

と単語で答える恋、他の人間が聞けば何を言っているかはわからないが、慣れた紅那岐にとってはわかるものであった

「そうか、そつちも襲われたのか・・・俺から離れたら直ぐにそつちに向かったのかな？取り合えず回収する少し待っていてくれ」

「・・・ん」（コケン）

頷く恋に満足したのか通信をきった

「・・・ふっ」

息を吐き空を仰ぐ恋だった

Ep 11 修正力つてのは何処までも存在（後書き）

レティ「恋側はぶっちゃけ原作どおりだよ？」

トール「・・・ガンダム君いるよね？」

レティ「え？恋に邪魔されて終わりだよ」

トール「倒してないの？」

レティ「紅那岐に禁止されているよ、それにアイ・スペース展開で  
きるの紅那岐だけじゃん」

トール「まあね、それにしても紅那岐はまずまずになったわ」

レティ「アレでまずまずなのか？」

トール「まだまだね、あの程度でふらつく程度じゃもっと鍛えない  
と」

レティ「やれやれ・・・では感想ありがとうございました」

トール「またね」



**EP 12 再開と手伝い（前書き）**

2行以上の地の文の時にスペースを追加してみました

EP 12 再開と手伝い

なのはを抱きながら恋がいる場所まで転移するとそこで管理局員の連中が出てきた

「お前達直ちに武装解除し此方に投稿しろ」

「・・・何処をどう見たら武器を持っているように見えるんですか？」

ツツコミを入れるも華麗にスルーされる

「黙れ！従わない場合強制的に逮捕させて貰う！」

「いやだから、私達敵対してないですよね？」

「というか、何で管理局ってここまで威圧的なんだ？二次小説でボコってる連中の気持ち分かるな・・・二次小説ってなんぞやw」

「投降の意思が見えない。やれ！」

そして此方に攻撃をしてくる連中・・・殺っていいのかな？

「待て！」

其処に現れた黒い奴・・・

「貴方は確か・・・ク、クロ・・・クロネ！」

「クロノだ！ふざけてるのか」

「ええ」

ぶっちやけると顔を真っ赤にして憤ってる、マジメな奴ほどからかうと面白いな

「冗談はこれくらいにして、管理局と言う組織は問答無用で攻撃してくるものなんですか？悪いですがちょっとでも攻撃してこようものなら物理的に排除しますよ？」

軽く殺気を出すと多くの管理局員は足がすくんでいるように見える、実力無いのに突っかかってくるなよ

「く・・・永劫この子たち怯えてる」

「え？おおう、私としたことが」

間近で殺気を受けているのはとフェイトは気絶しながらもカタカタ震えていた

「失礼しました、さてこの二人は貴方に預けたほうがいいですかね？それとも私達が届けますか？」

「此方が預かるよ」

クロノがそういっているので俺は二人をクロノに預け帰ろうとした

「逃がすと思ってるのか！」

一人の管理局員が魔力弾を撃ってきた、俺と恋は簡単に避けたがクロノは青い顔をしていた

「さて、クロノさんに質問です・・・これは貴方達全員の意思ですか？それとも個人の意思ですか？」

ある程度殺気を出しながらクロノに問う

「待ってくれ！ここは「答えてください、出なければ貴方も、其処に寝ているのはさん達も全員殺しますよ？」・・・個人だ」

苦渋の決断と言った表情で言い放つクロノ、言われた管理局員はどうして！って顔をしているが俺の実力をまだ測れないのか？

「そうですか・・・恋<sup>ラブ</sup>帰っていていいですよ？瞬殺して追いますから」

恋は頷くと転送方陣を作るアイテムを起動し帰って行った

「さて・・・覚悟はいいですか？ああ心配なさらずとも殺しませんよ、貴方を殺しても意味が無いので」

死刑宣告すると他の管理局員たちは下がってしまい、クロノも二人を抱え下がるが一番前にいる・・・さしずめ責任としてかな？

「先ほども言いましたがこちらも中々忙しい身なのでね一瞬で終わらせませす」

そう言って輝紅を出し一閃それでその局員は沈んだ

「貴方達の言い分もあるでしょうが敵対していないものに行き成り攻撃・威圧的態度など取っていると敵が増えますよ？私が言えた義理じゃないですが」

そう言つて俺は魔法陣を展開する

「では、機会があればまた会いましょう」ダ・カーポ・エンド『反転する世界』」

そして俺は転送してクロノ達の前から消えた

Side End

クロノ Side

く・・・あいつの言い分が正しいのは分かる、だが僕は最低の決断をしてしまった

「クロノ君・・・」

エイミィが近くで声をかけてくれるが、エイミィもどういつ対応を取ればいいのかわからないようだ

「そついえばなのはやフェイトは？」

「今ユーノ君やアルフと一緒に試してみているよ」

蒐集を受けてしまった二人、二人の事だから大丈夫だろう・・・だからあいつも素直に置いていったんだらうな

「そついえば刹那君がキラがって言っていたけどクロノ君はキラッ

て人知っている？」

「いや、知らないけど」

そういえば、刹那も時折おかしな事言っているな、ブレイクがどうたらこうたら

その後グレアム提督に会いに行くとアリアとマリアが何故か怪我をしていた

Side End

紅那岐 Side

さて、アレから少し時が立つたんだがはやてが倒れたらしい  
気になったんで俺だけ個人的に会いに行くとリスティさんに呼ぶとめられた

「ああ、丁度良かった、少しいいですか？」

そして少し話を聞いてみるとはやての病気は原因不明と言うのは前から分かっていたが、医学的に見ても科学的に見てもどうやっても解析できないのはおかしいとのことだ

俺も有る程度原作知識は持っているが、流石に最近劣化してきたから詳しいことは忘れかけているが、確か闇の書が原因でリンカーコアを蝕みながら体の組織が支障をきたしていた気がするな

「とりあえず、お友達ならまめに会いに来てくれと嬉しいんですけど」

そう言って儂げな顔をして頼んでくるリスティさん・・・大人な

のに少女っぽい表情やめてくれませんか？めっちゃかわいいです

「わかりました、俺も大して用事があるわけじゃないので余裕がある時は来させて貰います」

別れを告げてはやてに会った後俺は帰るとヴォルケンスの動きを見るために別荘の画面を起動した。其処には管理外世界の魔獣を狩っているヴォルケンスがいた

「このままでは潰れてしまうな、助けてやるか」

そう言つて俺は別荘内の転送陣を起動し一番苦戦してるであろうヴィータの元へ向かう

「て、てめえ・・・」

息も絶え絶えな状態で毒づくヴィータ

「助けてあげますよ、流石に分が悪いでしょう？ああ、お仲間も私の仲間が助けに入ってるんで大丈夫ですよ」

俺は双銃を取り出しかまわず倒しまくる

「ほら、蒐集するなら早くしなさい」

急かしとつとと蒐集をさせる、この前見たく管理局が来るとめんどくさい

「さて、さようなら・・・主が早く治ることを祈ってますよ」

「お前何処でそれを！」

ヴィータが突っかかってくるが無視して帰った、帰った後他のところへ向かった七星に話を聞くと他の面子も精神的にきてるようだった

「最後の部分で救うにはアレの完成を目指すしかないな」

俺は研究室に行つて一冊の魔導書のデータを見ながら研究に没頭した



Ep 12 再開と手伝い（後書き）

レティ「そろそろ大詰めのアス'編」

トール「どうなるかはこれからの展開に期待してね」

レティ「感想ありがとうございました」

トール「では次回でね」

Ep 13 クリスマスの戦い（前書き）

リリなのAs、も佳境に向かいました

次の世界は

月姫

Fate

真・恋姫

のどれかです

## EP 13 クリスマスの戦い

クリスマス当日紅那岐達一行ははやてのお見舞いに来ていた

「こんにちわ〜」x 8

はやての病室にはいる紅那岐達。病室にははやての家族のヴォルケ  
ンズがいた

「っ!?!」x 5

なのは・フェイト・ヴォルケンズが息を呑む声が聞こえるが紅那岐  
は気にせず話す

「よ〜タヌ鴉、クリスマスに病室は寂しいだろうと思って見舞いに  
来たぞ?」

「またそれかい!」スパーン

紅那岐のボケに勢い良くツッコミを入れたはやて、それにより病室  
の空気は和やかになった

「ボケはこれくらいにして、ヴィータとかも久々だな元気にしてい  
たか?」

「お、おう!兄ちゃんも元気だな」

まだ若干引きつってはいるものの紅那岐の存在により和やかな空  
気で話は進む

「さて、寂しいはやてにクリスマスプレゼントだ!」

そう言っつて大きい箱を渡す紅那岐

「わくうれしいわ、てかさつきから寂しい寂しいやかましいわ!」

ツッコミを入れながらも顔は綻んでる

「開けてええ?」

紅那岐が頷きはやては箱を開けると

ビヨーンッ!

とバネを利用して出てくる顔の模型・・・ぶっちゃけビックリ箱である

「プ・・・ブハハハハハハハ」

大声で笑う紅那岐、他の一同はしばし放心してしまった

「いまどきこんな悪戯すなああああ」スパコーン

「げふっ」

今度はかつ飛ばす勢いでツッコミを入れたはやて

「あゝ面白かった今度は本当にプレゼントだ」

そう言っただけは先ほどより小さい箱を渡した紅那岐

「今度はまともなものなんよね？」

「二度ボケはせんよ」

そう言っただけ箱を開けるはやてそこには

「ターキー？」

「おう、この日の為に作ってきたぞ？ソースも特別製だ美味しく食ってくれ」

其処にはクリスマスの定番のターキーが入っていた

「びみょくやない？」

「食ってから言ってみ？自信作だ」

「はやて食おうぜ！」

自信作と言う部分で反応したヴィータがおねだりをしてきた

「最初はケーキにしようとしたんだがな、なのはの家が喫茶店だな  
そこのケーキを持っていく話になったから俺はターキーにしたんだ」

「ありがとな」

何だかんだで感動したのか涙目のはやて  
そして面会時間が終わり紅那岐達は帰って行った

「あれ？なのはちゃんにフェイトちゃん？」

なのはとフェイトはなにやら用事があるらしくずかずか達と分かれた

『紅くんこれって・・・』

『ああ、シグナム達に会いに行つたんだろ。俺は少ししたら見に言ってくるお前らは当分一緒に行動してろ』

『・・・ん』

『はい』

そして各々の帰り道急に結界が張られた

『しまった！？起動の時期を忘れてた！』

『え？それってつまりは・・・』

『ああ、俺はこれから行つてくるお前らは出来るだけアリサを急かしてここから離れる！いざとなつたら転送魔法使つて離脱しろ』

それだけ言つと紅那岐はなのは達の下へ駆け出した

Side End

なのは Side

シグナムさん達が闇の書に飲み込まれた後、はやてちゃんが変わっ

ちゃった・・・

「また、繰り返されるのか・・・」

涙を流しながら語る闇の書さん

「はあっ!」

フェイトちゃんがソニックフォームになって戦っているけど・・・  
あのフォームはやばいの(ゴクリ)

Side End

紅那岐 Side

現場に着くと其処にはトリップしてるなのはと辺りをきよるきよ  
ろと見回しているフェイト、そして闇の書の管制人格がいた

「・・・なにをやっているんですか?」

なのはははっとした表情で戻りフェイトは何故か涙目だった

「新手が来たか・・・」

そうして手を構える管制人格

「アレは!」

フェイトが気づいたか

「逃げますよ！私はなんとでもなりますが貴方達はダウンしてしま  
います！」

フェイトがなのはを抱えて逃げ出すのを見て俺も駆け出す

「ふえ？どういうことですか」

なのはが聞いてくるが

「あの魔導書の真の能力は蒐集行使、つまり蒐集をした対象の能力  
を使えるのです。今回は貴方のスターライトブレイカ-を放とうと  
してるんですよ」

「だからってこんなに離れなくなたって・・・前に永劫さんに撃った  
時防がれちゃったし・・・」

「バカですか？バカですね・・・私はあの時慢心相違で動いてるの  
が奇跡の状態だったんですよ？それに実力的に倍以上の私と貴方達  
だとダメージ量が違います」

そう言ってるときにバルディッシュから報告が入る

《前方300ヤードに民間人がいます》

つてまさか！

「なのはアレって！」

「アリサちゃん！すずかちゃん！七星ちゃん！恋ちゃん！」



おいおい、まだいたのかよ・・・

《きます!》

バルディッシュの報告が入る間に合わねえ・・・こうなったら!

『すずか!七星!恋!』

『わかった!』x3

ズドオオオオオオン!

桃色の砲撃が当たり一面を埋め尽くす、俺はダ・カーポの応用で  
防御結界を張り防いだが他は・・・

Side End

フェイト Side

なんとかすずか達を守ろうと庇おうとしたけど間に合わなかった。  
・・・また私は守ることができないんだと思っていたら

「あ、危なかったよお」

「なのはのSLBって威力高かったんだね」

「・・・痛かった」

「え?あんた達一体・・・」

霧が晴れてきて見えたのは防御結界を張っていたはずか達だった

「ふえ！？ずずかちゃん達その姿は……」

なのはが驚いてる声で私も我に帰った

「そ、そうだよ！その姿はまるで……」

「今はソナナ暇ないですよ？きました」

永劫の声で前をみると闇の書が……

Side End

三人称 Side

闇の書の管制人格が書に溜まった魔物のデータを使いフェイト達の動きを止めるが紅那岐が助けたりしていると

「はぁあっ！」

フェイトが斬りにかかって行く

「あの人は……聞きなさい！これから何が起ころうとも貴方達は騒がず自体の收拾に努めなさい！」

そして紅那岐は駆け出す

「お前も我が内で眠れ」

闇の書がフエイトに何かをしよとしたときに紅那岐が割って入った

「あなたも大概無茶をしますね？」

そういうと紅那岐の体は粒子となり闇の書に吸い込まれていった

Ep 13 クリスマスの戦い（後書き）

レティ「クリスマスのイベントと言えば私はバイトの記憶しかないです」

トール「うわっ！寂しい」

レティ「黙れ！では感想ありがとうございました」

トール「As' 本編も残すは2・3話！」

EP 14 夢は叶えるもの・叶うもの(前書き)

某サウンドトラックから引用(50%)

## EP 14 夢は叶えるもの・叶うもの

「ここが、闇の書の中か・・・何も無いな」

闇の書に取り込まれてから訪れた空間だが、正直何も無い。立っている感覚はあるが地面は無く傍から見れば浮いていると言つ表現がぴったりである

「何で貴方は夢をみないの？」

突然現れた白金と言つ言葉が似合う女性に紅那岐は迷うことなく答える

「夢は見るためにあるんじゃない、叶えるものであり、叶うものと言つのが俺の持論だからだ」

「でも、貴方はその夢を叶えようとしていない」

女性に言われて紅那岐は苦笑い気味に答えた

「それはもう叶っているからさ」

「どづいづいと？」

「簡単さ・・・昔の俺は何処までも一人であつた、友人もいなければ話し相手すらな・・・それが今はどうだ？俺を兄と慕う奴、俺を好きと言ってくれる奴、それに異次元で友人すら出来た、そんな俺が夢を叶えようとしない？違つたる」

そう言って笑う紅那岐である。女性はそんな紅那岐に自愛の目を向ける

「そう、だったら早く行って上げなさい待っているわ」

「分かってるさ」

そう言っていこうとすると再び女性が止めた

「貴方に力を」

そう言って女性が言っていると紅那岐の体に青い光と赤い光が宿る

「これは？」

「貴方が持っていた因子を覚醒させただけ・・・でも貴方はまだ使い方を知らない」

「そうか、いずれ使うこともあるということかな？」

「ええ、でも使わないことを祈るわ・・・それは人には過ぎた力だから」

「与えといてそれは無いんじゃないかな？」

再び苦笑い気味に問いかけると

「あなたは何も持てなかったから・・・」

「そうか・・・もう行くよ」

「もう会うことは無いでしょうね」

「そうだね・・・じゃあね母さん」

そう言っつて紅那岐はいつの間にか持っていた本を片手に今度こそその場を後にした

「紅那岐あなたの行く道は何処までも自由になったわ、私達が与えられなかった自由を貴方は好きに進むと良いわ」

そう言っつて白金の女性・・・紅那岐の母は消えていった

Side End

はやて Side

おぼろげな意識の中目を向けると其処には銀髪の女性がおった・・・

「敵や！」

「あ、主？行き成り何を言っつて！？」

「銀髪女性は敵や！胸も大きし敵や！」

私は力いっぱい叫ぶとおぼろげな意識は完全に覚醒したようやった

「て・・・あれ私はいっつたい？それに貴方は・・・」

自分の今の状況が理解できなかった、暗い空間にこの銀髪さんと



私しかおれへん空間にただあるだけやった

「私は闇の書と呼ばれる管制プログラムです、主を侵食してしまい今の状況に至ります」

そう言って説明してくれる管制プログラム、そしてこれ以上どうにも出来ないと言明した時一人の男のこがここに来た

「お、お前は何故ここに！」

「探したぞはやて、力を使って探知しても転移できないって言うんで手繰り寄せながら探して見つけてみれば何で二人とも泣いているんだ？」

そういわれて初めて自分の頬に涙が伝っていることを知った

「そ、それよりも誰なん？私の名前を知ってるみたいやけど」

「え？わかんないのか？ひどいな」

「そんな今時流行らなそうな仮面つけた友人なんて居らんわ」

そついうと目の前の男のこは「ああそうだった」と言っつて仮面を外すと其処にはつて

「くーくん！？なんでこんなとこに居るんや！」

「いや、なんでつて言われたら取り込まれたからとしか言えんがこの後のため？」

「いや、疑問系に言われても……ってこの子見たらあかん！」

そう言っただけは目の前の子を隠す様に手をわたたさせてしまった

「ついに沸いたかはやて？」

本気で疑問そうに聞いてくるくーくん……orz(どつやって！  
?)

「まあいいや、お前もそろそろイジイジしてんな、折角目の前に今までの主と違うのが現れたのに諦めて終わりか？勿体無いと思わな  
いとな？」

そう言っただけは目の前の娘に優しく語り掛けるくーくん……やっぱ敵  
やったか

「さて、俺はそろそろ戻るとするか後はお前しただはやて……  
ダ・カーポ・エント  
『反転する世界』」

するとくーくんは見たことも無い転送魔法陣を作り消えてしまった

「……くーくんの言うとおり諦めるのは早いな」

「無理です、暴走プログラムは止まりません」

「私は管理者や、なんともしてあげられる。そして名前を上げる、  
もう闇の書や呪いの魔導書と呼ばせへん」

そうして私は外で戦っている人に語りかける

「外の方・・・えと管理局の方、この子の管理者八神はやてです」

「はやて(ちゃん!?)」

「なのはちゃんやフェイトちゃん!?!それにすずかちゃんや七星ちゃんまで!?!」

外にいたのは友達のなのはちゃん達やった・・・私は事情を説明し後の事は任せるし無かった

「夜天の主の名において汝に新たな名を送る」

私はこの子の顔を両手で包むように撫でながらいったげる

「強く支えるもの幸運を生かせ祝福のエアール・・・リインフォース」

私が名前を与えると同時に世界は白く染まる

Side End

紅那岐 Side

俺は恋の近くに転送した、理由はこれからあるだろう戦いにおいて恋の力も必要だからだ

恋は飛べない特殊な状況か飛べるものに乗るしかないからである、そのため今はすずか達とは違い一人見ているしかないであろう恋の場所に跳んだのである

「・・・お帰り」

いの一番恋が言ってくれるこのこの言葉が何より俺には嬉しかった  
あの中でもあったように俺の夢は既に叶っているのであるから、  
そして俺の大切な友人を守る為にもこれからが正念場だ

「く、紅那岐あんたも・・・」

近くにいたアリサが驚いてた・・・そういえばさっきは俺マスクしてたしな

「それは後で話すよ・・・」ダ・カーポ『復元する世界』

そして俺は復元ダ・カーポする世界を使うと其処には体表を黒に覆われ、角と鬣は体とは変わり真っ白に輝く聖獣を

「碎刃よこれから正念場だ、恋をつれてきてくれ」

『分かりました、主』

「・・・よろしく」

『恋様よろしくお願いします』

すると碎刃に鬣が現れ恋がたずなを握りしめると同時に俺達はなのは達の下へと向かった

Ep 14 夢は叶えるもの・叶うもの（後書き）

レティ「碎刃が聖獣になりました！」

トール「いつの間？」

レティ「別荘で碎刃が幻想種エリアにいたら黒麒麟が何暴走しそうだったらしくて紅那岐に自分を滅することをさせる為に能力を全部上げたらなっただって」

トール「そういえばあの子確かに自分が暴走しそうで危なかったとか言っていたような・・・」

レティ「そんなの放り込むなよ・・・」

トール「だって、暴走したらしたでそれより強いがいるから滅して終わりだし」

レティ「へ〜」

トール「では感想ありがとうございました」

レティ「次回は紅那岐が中にいたときの外での対決編（短いだろうけど）を掲載予定」

トール「またね」

## EP 15 月の輝く夜の戦い

紅那岐が闇の書に吸収され色々とやっている時同じ頃外ではなのはとフェイトは防衛プログラムと戦っていた

「やあっ!」「はあっ!」

なのはとフェイト、本来なら遠近の戦い方をする二人のコンビネーションならたとえ格上だろうが早々負けることや苦戦することも少ないはずだが今は状況が違った

「消えた!」「また!?!」

なのはとフェイトの連携が上手くいきダメージを与えられると思うときには何故か消えてしまい攻撃を外されてしまっていた

「なのは後ろ!」

「え?きやあ!」

先ほどから似たようなやり取りを行っており、被害はどう見てもなのは達のほうがかい

「アレは確か刹那君がやっていた量子化ってやつだよな?」

「うん、どうやら蒐集された人の力を使えるみたい・・・」

量子化：自身を量子化することで移動や回避に应用を利かし相手を追い詰めることが出来るのである

もちろん再現率は100%近くであるが、時々上手く行かない時は普通に防御を使い防いでいるのであった

「穿て・・・ブラッディ・ダガー」

すると今度は防衛プログラムから反撃と言わんばかりに赤いナイフのような魔法が放たれたのは達を襲おうとしていたが、その攻撃は後からきた二人によって防がれた

「大丈夫？なのはちゃん」

「フェイトも大丈夫？」

「「すずか（ちゃん）、七星（ちゃん）！」」

恋と一緒にアリサを逃がしていたうちすずかと七星が二人のピンチを救ったのだ

「さて、多勢無勢だけではやてちゃんを助ける為にも負けられないよ」

「それに、お・・・永劫を助ける為にもね！」

そう言つて二人は戦う姿勢をすると自分の武器を取り出した

すずかには光り輝く魔力で作られた羽と手には銃を持ち、七星は腕にグローブをつけ周りにはナイフが浮かんでいた

「私達も負けてられないね、レイジングハート！」

《イグニッション》

「バルディッシュ私達も」  
《イエス、サー ザンバーフォーム》

なのはとフェイトもお互いの最大の力を出せるそれぞれのモードに移行した

なのはのレイジングハートはまるで槍みたいな形状になり、フェイトのバルディッシュは大剣という言葉がぴったりの形状になったのである

「繰り返される悲しみも悪い夢もきつと終わらせられる」

そう言っただけなのははレイジングハートを構えながら防御プログラムに語りかける

「誰もがきつとそうでありたいと願うのはきつと悪いことじゃない、けどそれを都合のいい言い訳にしちゃいけないんだ」

自分がかつてあったこと、ありえたことを語る

「それに、たとえ誰がどう言おうとも誰もが望むものはきつと其処にあるから」

さすがが自身に起こったこと、救われたことを語る

「誰かがくれる夢は夢じゃなくて唯の絵、自分で見ることをとめることは決して出来ない」

七星は言う、自分が限りなく人間に近いものでも違つと言うことを思いながら



「・・・」

防御プログラムは無言で構えると其処には無数の魔力スフィア・  
・フェイトのファランクスシフトである  
闇の書の特徴・・・相手から蒐集したものを行使することが出来るのである

「みんな私の近くに！」

七星が叫ぶと同時に放たれた

「打ち砕け・・・雷槍」

「『無に還った少女！』」  
フリーシニングガメン

本来なら七星達に襲い掛かるはずの無数の魔力弾だったが、何故か七星達を避けるように飛んでいた

「何をした・・・」

「簡単だよ？此方に飛んでくる運動エネルギーを私達を避けるようにしただけ」

フリーシニングガメン  
無に還った少女：これは発生した運動エネルギーをグローブから発せられる魔力線に触れたところから任意の方向に帰ることが出来るものである

「まあ、返そうと思ったんだけど流石に量が多くて逸らす程度しか出来なかったよ」

そう言っただけで苦笑いする七星だが、遠距離攻撃にとってこれ以上脅威なことは無い、なぜなら撃つたら返されるか逸らされてしまうからだ

「それに余所見してる場合じゃないみたいだよ？」

七星が言うとなのはが攻撃の準備をしていた

「アクセルチャージャー起動！ストライクフレーム」

《A・C・Sスタンバイ、オープン》

するとレイジングハートの杖の先端から魔力で出来たまるで針のようなものが生え、次いで杖には羽をあしらったものが生えた

「エクセリオンバスターA・C・S・・・ドライブ！」

すると砲撃系のものには珍しく・・・珍しくなくそのまま突進していった

防衛プログラムはとっさにシールドを張り防ぐ

「く、硬い」

本体なら抜けるであろう突進力と魔力だが、蒐集した相手にキラ（もういない）のデータも入っており防御能力も上がっているのがある

「はああっ！」

反対の場所から今度はフェイトが斬りにかかっていたがそれも防がれていた

「あと、一手あれば」

誰かが言うと同時にそれは現れた

「それじゃ私だね！」

するとなのはとフェイトの中間と言える場所から声が聞こえた

「範囲を限定して撃てば被害は無いよね！」

右手に金色の爪の形をあしらったものの手のひらから魔力を集めていた

「お願いルナティック！」

《ロードカートリッジ》

2発のカートリッジをロードしそれは放たれた

「ブレイズ・・・バスタアアアアアアアア！」

手のひらから魔力砲を放ち防衛プログラムを打ち抜く

もちろん、体にフィールド系防御を張り直撃は免れたがそれでも両手に張っていたシールドは緩みなのははシールドを貫き先端に魔力を貯めフェイトの方はシールドに罅を入れていた

「っブレイクウ・・・」

二人が魔力を解き放った

「シュウウウウウウウツッ！」

「スラアアアアアアアシュ！」

二人の攻撃は方やシールドを抜け解き放たれ、方やシールドを切り裂きながら解き放たれた

辺りには煙が立ち込められているため、どうなったのかが分からない状態であった

「煙が晴れるよ！」

其処には多少はダメージを受けていたがまだ健在の防衛プログラムの姿があった

それぞれに緊張が走る中構えている動きがぎこちなくなつたと同時に念話が聞こえてきた

『外の方・・・えと管理局の方、この子の管理者八神はやてです』

「「「「はやて(ちゃん)！?」「「「「

『その声はなのはちゃんやフェイトちゃん!?それにすずかちゃんや七星ちゃんまで!?』

その後はやてちゃんにどうにかしてって言われた時にユーノ君から連絡が入った

「なのはやフェイト!それに其処にいる子達聞いて!どんな方法でもいい魔力ダメージでぶっ飛ばして。全力全開手加減なしで!」

それを聞いた4人は・・・

「さっすがユーノ君わっかかりやすい！」  
《その通りですね》

「行くよバルディッシュ！」  
《イエス、サー》

「良いね！私達も続くよルナティック」  
《分かりましたお嬢様》

「ジークルーネ、アレで行くよ」  
《アレって何？》

「ちよつと！ここでボケないでよ！」  
《冗談です、踊り狂う悪魔ハーフプット》  
エアレナイオス

それぞれ必殺の構えを取り防衛プログラムを見る

「行くよみんな！」

「」「うん！」「」

なのは構える自身が得意とする必殺の砲撃を

「エクセリオオオオン」

フェイトが構えるその大剣を振るうにふさわしい体勢で

「スプライト・・・」

さすがが背にきらめく翼をはためかせ銃を構える

「ブラスタアアツアアア」

七星は舞うナイフと踊るように構えた

「『黙示録ネロに』・・・」

そして4人は放ったはやてを救う為に

「バスタアアアア！」

「ザンバアアアア！」

「ウイイイイイング！」

「『アポカリユプス  
記されし皇帝！』」

そしてそれが命中すると光が世界を照らすように眩いた

Side End

はやて Side

白い光に包まれてる中私に語りかけてくれる声があった

『リインフォースを認識、管理者権限を使用可能です』

そう言ってくれるリインフォースやけど声が少し暗い気がする

『ですが、防衛プログラムの暴走は止まりません。・・・時期に強大な力は暴れだします』

「んー、まあなんとかしよ」

そして私はリインフォースを抱くように持つ

「行こかりインフォース」

『はい、我が主』

「管理者権限発動」

『防衛プログラムに割り込みをかけました、数分程度ですが時間の遅延が望めます』

「それだけあれば十分や・・・おいで私の騎士達」

S i d e E n d

三人称 S i d e

空には白き球体に覆われたものがあり、海には黒き球体に覆われたものがあつた

そして今白の方が眩い光があふれ出した。一同が驚いていると白の方の周りに守護騎士・・・ヴォルケンリッターの姿が現れたのである

「ヴィーたちちゃん!」「シグナム!」

なのはとフェイトはそれぞれに思い入れがあるのか嬉しそうに呼んだ

しかし、ヴォルケンリッター達は目を伏せ主の目覚めを謳う

「我ら夜天の主に集いし騎士」

剣の騎士シグナムが謳う

「主ある限り我らの魂尽きることなし」

湖の騎士シヤマルが謳う

「この身に命ある限り我らは御身の許にあり」

盾の守護獣ザフィーラが謳う

「我らが主夜天の王八神はやての名の下に」

鉄槌の騎士ヴィータが謳う

すると光が割れ中からはやてが出てきた

「「「「「はやて（ちゃん）！」「」「」

はやてはなのは達に微笑むと杖を構える

「夜天の光よ我が手に集え祝福の風リインフォース・・・セットアップ！」

そしてはやてはセットアップを終わりみんなと話いた時後ろから声



が聞こえた

「どうやら無事に終わったようだな」

どこか聞きなれた声を聞きながら後ろを振り返ると其処には

「よー」

と軽いノリで右手を上げて挨拶していた紅那岐と馬？にまたがりついでにきていた恋がいたのであった

Ep 15 月の輝く夜の戦い（後書き）

レティ「短くなるとか言ってたくせに長くなつたが後悔は無い！」

トール「それはどうでも良いけど、すずかの技が分からない人おおいと思うわよ？」

レティ「簡単だよ？最初のは紅蓮が使う直射型の輻射波動で後のはランスロット・アルビオンが使ったエナジーウイングとライフルの合わせ技っただけ」

トール「順番逆じゃないの？」

レティ「威力は変わらないけど、範囲が違うからこの順番だよ？」

トール「へ〜」

レティ「次は決戦編」

トール「感想ありがとう」

レティ「次回で〜」

EP 16 聖なる夜〜終わりの戦い〜(前書き)

敵をネタ化

EP 16 聖なる夜〜終わりの戦い〜

「え、え・・・ええええええええええええええええええ！？」

はやての復活に喜んでいたなのは達だが急に後ろから声をかけて振り返ってみれば意外な人物がいた

「な、なんで紅那岐君がいるの！？」

「何でって俺も魔導師（つか魔法使い？魔術使い？）だからだよ簡単に説明する紅那岐でこれ以上の説得力が無いものだったのだから達は黙ってしまった

「な、なんで正体隠していたの？」

「え？なんとなく」

「・・・」×紅那岐達以外

場に沈黙が訪れた

「話し合ってるときにすまないが、時間がないのでこれからの事について話したい・・・そいつについては後でO H A N A S H I！すればいいさ」

「待て！なに不穏な事いってやがる、ギャグ補正にや俺ですら太刀打ちできんぞ」

急に現れたクロノによって話が勝手に進み紅那岐はありったけのツッコミをするも悲しいかなスルーされてしまう

「方法は現在2つ。強力な氷結魔法で封印するか、アルカンシエルで消滅させるかの2つだ」

「えっと、1つ目は恐らく無理かと魔力の塊なので」

「アルカンシエルもダメだ！はやての家がなくなっちまう」

1つ目はシャマルが否定し、2つ目もヴィータが腕をバツテンにして否定している

なのははアルカンシエルが何かが分からなかったのでユーノに説明を受けていた

「ここで撃たんで宇宙<sup>ウツク</sup>で撃てばいいだろ」

紅那岐が何気なく言った一言が場を再び沈黙させていた

「で、でもそんなこと出来るの？」

「出来るだろエイミィ？」

そう言っただけで通信ウィンドウを開いた紅那岐

「な、なんで」

「後で教えるよ、それより結論を」

「ええ出来ますとも。管理局の技術を嘗めないで」

そう言って親指を上げながら答える

「んじゃ、後はアレをぶっ飛ばそうぜ？」

こうして決まったフルボッコタイムの方法、なのは達はダメージを受けていたのでシャマルに回復をさせて貰っていた

「俺はクロノのサポートをする、ガンバレみんな！」

Side End

紅那岐 Side

まだ、黒い球が割れないけどいやな予感がする・・・触手が何故か緑なんだよね

(いくら原作と違うと言っても最終形態其処まで変化したっけ?)

考えているとどうやら割れるみたいだな

「キシャアアアアアアアアア！」

「うわぁ・・・」

誰かが引いてるけど何でアレなんだ・・・

どういうものか想像して欲しくありません土台らしき本体？体？みたいなものがあり其処から触手がうねうね動いている

ここまでではイイヨね？誰でも分かることだし

次にその土台についている体があるんだきちんと頭（しかもなかアソテナっぽいものがついている）や腕もある土台がある程度でかいからか体もでかいここで既に原作っぽくないよな  
極めつけが触手の一部には顔があるんだよ、しかも牙がいっぱい凄  
いことに

もういいや何かって言うと・・・

「何でデビルガンダムなんだよおおおおおおお！」

あれか？ガンダム＋生物＝デビルガンダムなのか！取り込んだの  
SEEDと00だろ！なんでGになるんだよ！

なのは達がデビルガンダム？って言うてるが気にしちゃいられん、  
負けないだらうけどね

「気色悪いがやるぞお前ら！」

声をかけてなのは達を叱咤すると返事が返ってきたのでよしとする、  
シールドは全部で6枚

それぞれヴィータ・なのは・シグナム・フェイト・七星・すずか・  
はやての順でやる事になっている  
俺と恋は最後の時まで温存だ

Side End

三人称 Side

「チェーンバインド」「ストラグルバインド」

「縛れ、鋼の軛！でいいいいいいいやあああああああ！」

まずはユーノ・アルフ・ザフィーラがそれぞれ魔法を使い邪魔して



くる触手を一掃した

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン」

《ギガントフォーム》

「轟天爆砕ギガントシユラアアアアアアク！」

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン行きます！」

《ロードカートリッジ》

「エクセリオンバスター！                   ブレイク・・・シユウウウト！」

ヴィータによる轟撃・なのはの魔力砲によりバリアを撃ち破った

「次！シグナムとテストロッサちゃん」

「剣の騎士シグナムの魂炎の魔剣レヴァンティン、刃、連結刃に続くもう一つの姿」

《ボーゲンフォルム》

「駆けよ隼！」

《シュツルムファルケン》

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュ・ザンバー行きます！  
・・・はあ！」

「撃ちぬけ雷刃！」

《ジェットザンバー》

シグナムによる弓矢による射撃・フェイトによる斬撃によりバリア

を打ち破り切り裂いた

「お願い！七星ちゃん、すずかちゃん！」

「今度はただの生物、本気で撃つよジークルーネ！」

《りょうかゝい、踊り狂う悪魔全射出》  
エイレナイオス

「いつくよー！ネロ・アボカリユプス黙示録に記されし皇帝！」

「ルナティック、アレを不可視モードで出しといて」

《はいお嬢様》

「月村すずかとルナティック・ソル行きます！      プラスタア

アアアアア・・・ストラアアアアアイク！」

七星によるナイフによる一点集中攻撃にすずかによる腕部による

輻射波動照射とウイングの魔力砲でバリアを打ち破った

すると、デビルガンダムはあせったのかガンダムヘッドを出し攻撃  
をしてこようとしたが・・・

「盾の守護獣ザフィーラ、攻撃なぞさせええん！」

ザフィーラの魔法により槍のようなものに串刺しにされ落とされた

「はやてちゃん！」

「彼方より来たれ宿木の枝、銀月の槍となりて撃ち貫け・・・石化  
の槍ミストルティン！」

はやての魔法により全体が石化していくと思われたが、直ぐに割れ

体を変化させながら対峙していた

「うわ、まだ」

「攻撃しても直ぐに再生されちゃう」

再生され変化もされまわりも引いているが・・・

「攻撃は通っているプラン変更はなしだ」

「その通り！クロノ援護する俺の後に続け」

そうすると紅那岐は一本の綺麗な槍を出す

「こつという使い方すると怒られるかな？まあいい、行くぜ！崩嵐槍  
総てを凍てつかせろ」

紅那岐は取り出した槍を逆手に持つと槍投げの容量でデビルガンダムに放つするとデビルガンダムが槍が刺さった部分から凍りだした

「クロノあの基点から凍らせろ！」

「分かった、悠久なる凍土よ凍てつく棺のうちにて永遠に眠りを与えよ・・・凍て付けえ！」

《エターナルコフィン》

紅那岐・クロノによる氷結により完全に動きが止まってしまったデビルガンダム

「行くよみんな！」

「うん」×4

なのはの呼びかけに全員が返事をした

「全力全開・・・スタアアアライトオオオオ」

「雷光一閃・・・プラズマザンバアアアア」

「ごめんな、お休みな。響け終焉の笛ラグナロク・・・」

「不可視解除！月光砲ルナアクティブ！」

「・・・征く！アキユ軍神」

それぞれが最大の必殺技の体制をとり闇の書の闇を葬ろうとした

「っっブレイカアアアア！」

「月光砲ルナ・・・フルバアアアアスト！」

「フォース五兵・・・」

そして五人の必殺技が決まりまわりの外郭が総て落とされた

「本体コア露出・・・捕まえた！」

「長距離転送」「目標軌道上」

「転送！」

そしてユーノ・アルフによりアースラの前に転送された  
その時にはある程度の大きさまでになっていたがそれにかまわず発  
射される

「アルカンシエル・・・発射！」

そして強力な攻撃により総てが終わったかに見えたが・・・

「艦長反応あり！ダメです効いていません！」

「何ですって！？次弾発射準備を」

「ダメです！チャージには30分かかります」

それを聞いていた総ての人が終わりと思ったが

「後は俺がやる、全員手をだすな・・・それと映像記録もつけるな  
よ」

其処に割り込んできたのは紅那岐であった

「幾ら貴方が強いと言ってもこれ以上は・・・」

「良いから！」

そうすると連絡が切れたのである

Side End

紅那岐 Side

いやな予感がしていたが本当に当たるとは

「ミームスブルン対兵器戦略思考発動、現状態総ての可能性を示せ」

俺は総てを使い現状起こっていることを予想し戦略を組み立てる

「く、紅那岐君いったいどうするの」

「そつや、いくらなんでも一人じゃ」

「そつだよ、私達も」

そう言ってくる三人娘だが

「イボ魔力を使い切ったお前らじゃ無駄だ俺に任せとけ……復元する  
世界」

デビルガンダムを空中に固定召還しどうするかを決めた

「これで屠る！タービュランス疾風迅雷『ノートウンケ九つの世界』」

雷光化し総ての力を上げ、俺は準備をした

「え？今までと違う……」

「これが全力の総てを射抜くトルハンマー雷光だ見ている」

俺は眼前のデビルガンダムを睨む……最終形態になってるんだけど

「行くぜ！」「トールハンマー・フルアクセス総てを超越せし九つの雷光！！」

そして九つの雷光はデビルガンダムに飛んで行き跡形も無く吹き飛ばした

トールハンマー・フルアクセス総てを超越せし九つの雷光：ノートウング九つの世界の力を使い平行世界の結果をトールハンマーに乗せ放つ九つのトールハンマー。威力は通常の9乗だが結果を持つてくるので必然的に必殺である。因みに九つのライト世界を使わないと撃てない

「雷神トールの力の前に消えうせる」

俺が言うと同じりは啞然としていた

「どつした？」

「どつしたじゃない！」

がやがやと言われたがまとめると・・・最初からやれよ！とのことだった

「すまん、お前らの敵であったから俺がでしゃばっちゃまずいかな？と思って手を出さなかったただけだ」

そついうと何とか納得してくれた

「さて、かえってクリスマスパーティーでもやるっぜ！」

「おー！」×全員

「あ！」

「どうしたの？」

「アリサ忘れてた・・・」

本当に忘れていたらなのは達もそうだったと言っ顔をしておりど  
うしようと話しているとはやてが倒れたようだった

これからの事を考えながら俺は誰にも悟られないように魔導書の準  
備をしたのである



Ep 16 聖なる夜〜終わりの戦い〜（後書き）

レティ「と言うわけでA・S編もう直ぐ終わりです」

トール「ガンダム君は？」

レティ「もう少し後で出すよ？てか、彼病んでるしw」

トール「はあ？」

レティ「キラいなくなっただね」

トール「え？ガチホモなの！？」

レティ「ウホッ！いい男・・・ってじゃ無くてまあ親友を殺されてしかも誰も知らないってなったらねえ」

トール「ああなるほど」

レティ「と言うわけで秋代様と時空の旅人様に貰った武器を使わせてもらいました」

トール「崩嵐槍は回収してるわよでは次回で〜」

**EP 17 おわりとはじまり(前書き)**

し、仕事が忙しくて書けなかった・・・

学生なのに

Ep 17 おわりとはじまり

はやてが倒れたが調べてみたら急に魔力を使った副作用と言うことだった、そのあとはやての入院している病院へ運んでやったらフリスさんに怒られたんだが何故俺まで？

そして、その後アースラから呼び出しがあったから行ったんだが・  
・

「何故俺は拷問にかけられているんだ？」

何故かギザギザの床に正座をさせられ膝の上には重りが乗っているという効果が抜群な拷問にかけられた

「紅那岐君、何で敵になつてたのかな？かな？」

「そうだよ？わざわざ私達と戦う必要なかったと思うんだけど？」

黒い笑顔でたずねてくるのはとフェイト・・・こええ

「いや、どちらかに味方してみる戦力バランス崩れすぎただろ？お前ら二人で掛かって来ても敵わないのに」

その言葉がいけなかったのかなのは達の眼のハイライトが消えた

「これはO H A N A S H I！なの」

「手伝つよなのは」

「待て！拷問受けてるのに何で更に受けにゃきやならん！」

そう言って制そうとしたら

「それはママが好きでやってることだよ？」

となりにいたアリシアが教えてくれた

「プレシアアアアアアアアアアアアアアアアア！恩人になんにしてくれやがるうううう！」

力の限り叫んだために足のダメージが・・・

「え？好きな人（この場合恩人）には悪戯するものでしょ？」

なに言ってるのこの人？って顔で返してきやがった・・・

「ぎっけ、つゝ・・・痛くて続けられなかった」

「「さあ！お前の罪を数えろ！」」

二人そろってそんな事言われたってな・・・

「だが断る！逃げさせて貰おう」

そう言って拷問から力技で抜け出して逃げようとしたら

「ガッ！バインド！？だがこんなもん」

バインドで足を止められたが逃げられと思っていた時期が俺にもありました

「ちよっ！誰だこんなにかげやるのは！」

そう言って周りを見るとユーノ・クロノ・アルフ・シャマル・ザ  
フィーラ・その他の管理局の皆さんが俺に向かってバインドをかけ  
てました・・・ぶっちゃけ全員だね

「「「さあ！O H A N A S H I ! の時間だよ！」」」

「待て！一人増える・・・はやてなんでお前も参加してやがる！」

「そんなんきまっとする・・・ノリや！」

ノリなら仕方ないか〜

「「「さあ、行こう（なの）（や）」」」

「・・・はい」

そうして俺は今まで見たこと無いO H A N A S H I ! を見  
ました・・・二度と思い出したくない

S i d e E n d

三人称 S i d e

闇の書事件と呼ばれるものが終わり少したった後リインフォースが  
あることを頼んできた

「なにか？お前がいるとまたはやてが倒れるから消して欲しいと？」

「ああ、今は防衛プログラムがないがいずれ再びできるようになっているのでな、それが起きないように今のうちに私を消して欲しい」

「かまわんが、はやてには了承を得ているのか？」

「いや、主はきつと反対するだから内密にお前に頼んでるんだ」

そう言ってリインフォースは紅那岐にお願いをした

「・・・俺の言ったことを忘れたか？」

少々怒気のコもった声で返してきた紅那岐に思わず息を呑む声が聞こえた

「しかし・・・」

互いに思っている為の行動というのは紅那岐も十分理解しているがそれでも自分勝手な行動をし、自分以外に迷惑をかける行為を何より嫌っている紅那岐にとっては今回のお願いは正直お断りであった

「だが主を失いたくないんだ・・・たのむ」

それでも決めた事を貫くと言う行為を良しとする紅那岐にとっては今回の事は正直迷うところである

「・・・はあ、しょうがないか」

深い溜め息を吐きながら答える紅那岐に直ぐに反応するリインフォ

「ス

「そうか！だつて、ただし条件がある！」・・・条件？」

容認してくるとは思ってなかった紅那岐に了承を得て喜んだのもつかの間、紅那岐は条件を出してきた

「条件は3つ、1つ目は俺なりのやり方でやらせてもらうこと、2つ目はなのは達を参加させること、3つ目ははやてをその場に参加させること・・・3つ目に関しては俺が無理やりでも黙らせるから」

3つ目に関してはリインフォースの意見を無視したものだが、紅那岐にとってリインフォースの意見を通す最低限の譲歩であった

「・・・分かった、ありがとう赤羽」

そう言って礼を言ったが

「ああ俺の事は名前で呼んでくれ、正直名字で呼ばれるのは好きじゃないんでな」

「了解した・・・クナギ」

そうしてはやて説得に向かった二人

「なんでや！なんで消えなあかんの、一緒にいようや！」

案の定泣きながら否定するはやて

「言ったただろう？遠からずあの悲劇が再び始まることが決まってし

まっているんだ。だったらここはこいつの意思を尊重してやるっ」

そう言っつて優しく諭す紅那岐であるが

「イヤヤ！くーくんも何で消そうとするんや、それでも人か！」

そう言っつて力の限り叫ぶはやてだったが

「いつまでも甘ったれるんじゃないわよ！」

今まで黙っつてた七星が怒声を飛ばした

「黙っつて聞いてれば、何を甘えたこと言っつてんのよ。そりや家族が消えてしまつのは悲しいけど、それはあんたを思っつての行動でしようが・・・しかもなに？お兄ちゃんのことを否定してるの？だつたら私がやっつてやるわよ、あんたの意見なんて聞く義理は無いからね」

普段おちやらけている七星が見たことも無いような形相ではやてを睨んでいた

「あ・・・あ、あ」

七星による殺気によりはやては声を出すことは愚か涙すら止まっつてしまっつていた

「七星その辺にしる、はやて確かに俺は人じゃないかもしれない、それは俺自身が思っつていることだ。しかしな、今回は俺がリインフオー・スに依頼として受けたからなそれを実行するだけだ・・・それでも諦めきれないなら俺を恨め」



それだけ言つと紅那岐は七星の耳を引つ張りながら出て行つてしまつた

「主、不義理をお許しください・・・私は消えてしまつかもしれませんが将達は残り貴方を支えます。そして私の名を次に生かしてください」

はやてと目線を合わせ涙を流しながら語りかけるリインフォース、そしてはやても止まっていた涙が再び流れ出す

「明日に行われます、どうか主もいらしてください」

そついうとリインフォースは紅那岐と同じように出て行つてしまつた

「「はやて(ちゃん)」」

今まで黙つてみていたなのは・フェイトが声をかけてきた

「紅那岐君がね私達も参加させるつて言つてきたの」

「うん、紅那岐はね無駄なことをしないつてはやくも知っているでしょ?・・・悪ノリの時は別として」

そしてはやてを諭す二人

「確かにくーくんは無駄な事はせんな、悪ノリときは別やけどね」

何処まで行つてもしまらない所に誰かの絶叫が響き渡る

「ぎゃああああああ・・・ごめんなさあああああああい・・・」

・・・」

誰かと言うより七星しかいないのだがどうやらお仕置きを受けているようであった

「とにかく明日の結果を見てからきめよはやてちゃん」

「そうだね、ナギの事を本当に見極める最後の機会かもね」

そう言つて二人も出て行き、病室で一人考えるはやてであった

↳翌日↳

「集まつたか・・・さて準備を始める、なのは・フェイトはリインフォースを送るのを手伝つて貰う」

「え？でも紅那岐君はどうするの？」

「そ、そうだよ私達にやらせるの？」

と本来なら紅那岐が送るはずなのだが何故か二人に遅らせようとしていた

「俺は別のことをやる・・・ファフナー例のアレを」

そついうと紅那岐はファフナーから一冊の本を出した

「それは？」

「これはな・・・紅天の書と言つた魔導書だ」

そう言っつて説明を始めた

「方法は簡単だ、なのは達が送る時に俺が干渉し本来消える存在のリインフォースをこの魔導書の管制人格として登録するんだ」

説明を聞いていたメンバー全員が紅那岐に食って掛かる

「だ、だっつたらはじめから言っつてえな！私の涙は「最後まで聞けえ？」

「ただし問題がある、それは・・・これがはやての魔導書ではなく俺の魔導書となっつてしまうと言っつことだ」

それを聞いたメンバーが再び息を呑んだ

「もちろん後ではやてにも使えるようにはするつもりだが・・・金輪際こいつは俺のデバイスとしてしか100%機能はしなくなっつてしまっつんだよ」

その説明を受けたメンバーはなんともいえない空気になる

「ゆえに夜天の書は消滅し、紅天の書として俺と共に歩むことになる・・・それが俺に今できる最大の方法だ、決めろどうするかを」

そして現在の主であるはやてを見据える紅那岐、その表情はどこか悔しげであつた

「・・・救つたっつてこの子を」

「分かった・・・なのは・フェイトはじめてくれ」

「うん」

今まで大人しく聞いていたなのは達に開始の合図を送ると紅那岐もはじめた

「今ここに降りるは紅く染まる天の守護者、天を染めよ夕焼けのようにあかく・赤く・紅く、そして我と共に歩もう無限の荒野を我は進むもの、我と共に行くこう無限の天に向かって」

言葉に乗せどこか悲しくもしっかりとした言葉に全員聞き惚れていたそしてリンフォースが薄く消えて行きやがて完全に消滅したように見えたが・・・

「紅天の書・・・セットアップ！」

紅那岐が紅天の書を起動すると当たりは光に包まれた

光が晴れると其処にはリンフォースが暴走体として戦っていた時の服がズボンになり黒が主体だったのが赤と黒の色合いになった紅那岐の姿があった

「ど、どうなったんや?」

夜天の主のはやてが声をかけた

「・・・」

しかし紅那岐は答えなかった

「ま、まさか失敗・・・」

何処からそんな声が聞こえてきたが・・・

《大丈夫です・・・私はここにいます》

そして何処からか声が聞こえてきたのは

「リイン！」

そう、消えたと思われるリインフォースであった

「ふう・・・これで終わったな」

セットアップを解除し紅那岐は元の姿に戻ると其処には今までと同じようにリインフォースが立っていた

「くーくんありがとな、この子を救ってくれて」

「いや、本当の意味では救えなかった・・・だから礼は言わないでくれ」

「だが、私が消えずにまた生とは違うが歩むことが出来るのは貴方のおかげだ、だから例を言わせてくれ・・・我が主よ」

そうして傳いたリインフォース、その姿を見て照れくさそうに頭をガシガシとかきながら呟く紅那岐

「ったく、主って柄かよ俺は」

「しかし、この名前ははやて様がくれた名だ新しい名を貰えないで  
しょうか主」

そう言っつて再び紅那岐に問いかける

「ん？今のままでいいだろう、ただし愛称はリースだな。リインと  
言う名ははやて次にお前が持つかもしれない奴につけてやれ」

「わかつたわ！」

元気に返事をしたはやてと隣で嬉しそうに微笑んでいるリイン改め  
リース

「ああそれとなリース、堅苦しい言葉はあまり使わんでくれ嫌いじ  
やないがつまらん」

「分かりました、主」

全く分かってないリースであった

「紅那岐君そういえばこの子の能力って？」

なのはが急に性能が気になったのか聞いてきた

「ああ忘れていた、能力は蒐集行使に似ていてな見た技をコピーで  
きると言うものだ」

さらつと言った紅那岐だがものすごい言葉が聞こえたのである

「え？見ただけって・・・それって前より凄いやね？」

フェイトが聞くのと周りが頷くのは同時だった

「まあ、それでも単体で使える範囲は狭いからな・・・そうそうリースは基本的に人間と大差ないぞ？正直俺がセットアップしても無用の長物だからな、だから基本的にはその書自体がリースのデバイスだ」

つまり、リースはデバイスとしてではなくほぼ人間として過ごすというものであった

「ど、どうやってそんな技術を」

急に通信ウィンドが開きリンデイが聞いてきた

「覗き見とは感心しないなあ、まあ良いがなのは達のシステムも送ったの俺だしな・・・設計したのはさすがだが」

なのはとフェイトはさすがを見ると其処にはピースサインをしていなかった

「で、技術だが・・・後で見せてやるよ」

そうすると話を変えろという雰囲気だ紅那岐がみんなに言った

「さあつて、かえってリース誕生会とはやて復活祝いでもするぞ！そのためにご馳走を機能のうちから用意しておいた！」

「やったああああ！」×その場の全員

そして全員は帰って行った

後日自分達の進むべき道を決めたのは達は親や友人に自分たちの事を説明するのであった



Ep 17 おわりとはじまり（後書き）

レティ「A・S 編終了！最近忙しくて書く体力無かった」

トール「あの子ついにあの力の片鱗が・・・」

レティ「どつたの？力って」

トール「何でもないわ、それよりこの後は直ぐに次の世界に飛ばすのかしら？」

レティ「お前が聞いてどうするし」

トール「読者の変わりよ」

レティ「呼んでる人少ないだろうけどね。まあいいや、この後はマテリアルとStetsに続く話を書いてからある程度年がたったら飛ばす予定だよ」

トール「ふん」

レティ「では、感想ありがとうございました」

トール「またね」

A E P 1 三人娘修行1 (前書き)

A E P 1 アフターエピソード

A E P 1 三人娘修行1

闇の書事件から数日後俺は三人娘なのは・フェイト・はやてに話があると言われアースラに呼び出された

「来たぞ〜ってかお前らもいたのか」

三人娘以外にもヴォルケンスがいたのである

「んで話って？」

「紅那岐君お話があるの」

お話って部分で俺は速攻で踵を返して逃げようとしたが

「またバインドか！だが今度は・・・ってまた取れねえ」

バインドなんて速攻で外せるのに何で外せないんだ？

「これがギャグ補正や！」

「そっか〜なら仕方ないな」

「何で素直に受け止められるの？」

フェイトが純粹に聞いてくるがな、ギャグ補正は逃げるよりも受け止めたほうが後々のダメージが少ないんだ

「んで、O H A N A S H I! ってなんだ？」

「絶対勘違いしているの」

なのはの O H A N A S H I! だぞ? 逃げるにしても何故受けなきゃならんのだ

「なのはちょっと変わって私が説明するから」

そう言ってなのはと変わったのはフェイト

「えっとね、ナギって強いでしょ? だから私達を鍛えて欲しいなって」

そう言って節目がちに言ってくるフェイト、かわいいじゃねえか

「それなら最初から言えよ、なのはが O H A N A S H I! って言うからってつきり……って待てなのは取り合えずそれしまえ!」

レイジングハートを俺に向けて構えているなのはを制して話を続ける

「にゃ!?! なんではれたの」

「俺を嘗めるな、半径10m圏内なら動作は愚か話し声まで聞こえるわ」

ぶっっちゃけ戦闘時しか使わないスキルを何故使ってるかって? フェイトと変わったときのなのはの表情が怖かったんだ

「で、鍛えてくれたのはどづいづこった? お前ら十分強いだろ?」

「でも、ナギみたいに強い人が現れたら私達どうしようもないし、それに前見たく不意打ちされたらどうしようもないから・・・」

正直リースに魔法をぶち込んで覚えさせようとしてたんだがついでだしいつか

「かまわんが、期間は？」

「「「え？」「」」

三人娘達全員考えてなかったな

「はぁ・・・」

「そこで残念そうに溜め息つかんといてえな」

直ぐに強くなる薬があるわけじゃないし、どっいう風に強くなるって考えてなかったのかよ

「じゃあない、久々にアレ使うか」

「あれ？」×紅那岐以外のその場の全員

「お前ら明日から3日間親とかに帰らない+連絡取れないって伝えとけ。んで明日の10時にうちに集合な？」

そう言つて俺はバインドを壊しその場を後にした、さくアレの設定変えなきゃな

Side End

三人称 Side

〈翌日〉

「おじゃましまーす」×家に来た人たち

「いらっしゃいませ、紅那岐さんならテラスにいらっしゃいますのでござ」

出迎えたノエルが案内をし紅那岐の所へ向かう一同

「おゝ来たか？」

のんびりとコーヒーを飲みながら迎える紅那岐

「さて、これから俺の部屋に向かうからついて来い」

そう言っつて移動を始めた紅那岐についていく一同

〈移動中〉

「到着つて何してやがるはやて！」

「きまっつとるエロ本探しや！」

どや顔でいうはやてに紅那岐は問答無用でアイコンクローをかました

「あだだだだだだだだだだ」

「小学生の俺が持つてるわけねえだろうがお前だけ修行なしにしてやるのか？」

「あだだだだだ……ご、ごめんやからゆるして」

メキヨツ！

なにやらへんな音をしたので放しその場で倒れるはやて

「あたた……もう直ぐで変な性癖に目覚めるところやったで」

スス

そう発言するはやてだが、みんなははやてと距離をとる

「さて、変態はほつといてみんなこの魔法球の前に集まれ」

そう言つて紅那岐達はダイオラマ魔法球の前に立つと魔法陣が現れ中に吸い込まれていった

「用こそ我が別荘に」

そうして案内したところはこの別荘のロビーエリアであった

「お兄ちゃんおそいよ〜」

「流石に入るのが早かったね」

「ん」

「それにしてもすさまじいなここは」

上から七星・すずか・恋・リースである

「え、え？ここは一体」

なのはが混乱のきわみのように聞いてきた

「ここはな、ダイオラマ魔法球といってさっき見たジオラマみたいなものだ」

そう言っつて説明を始めた紅那岐

「お前達はこれからここで3ヶ月ほど修行をしてもらう」

しれつと言う紅那岐だが、この別荘のシステムを知らないのは達  
はさらに混乱した

「さ、3ヶ月って・・・年越しちゃうの！」

ちょうど大晦日の日に帰れると説明を受けていたなのは達だがこ  
こで3ヶ月過ごすという言葉は正直考えてなかったのである



「安心しろ、ここと外では時間の流れが違うからな」ここで3ヶ月は外で3日だ」

そう言っつて説明をすると安堵した溜め息が聞こえてくる

「んじゃ、訓練エリアに飛ぶぞ？」

そして転送ポートまで移動した一行

「んで右からフェイト・なのは・はやて・ヴォルケンスの順に入っ  
てけ」

「え？全員一緒にするんじゃないの？」

聞いてこられたので答えた紅那岐

「お前ら全員戦闘スタイル違うだろうが、だから個別だ」

そしてとつと入れというしぐさのままなのは達を急かした

「みんなまた会おうなの」

「うん、今度は三カ月後外で」

「きばっていいこうな」

「では主私達も行ってまいります」

「あ、忘れてたけど最後の日に俺と模擬戦だから」

「先に言ええええええ！」

そつツツコミを食らった紅那岐であった

A E P 1 三人娘修行1 (後書き)

レティ「三人娘改造計画序章終了」

トール「どういう風に改造するかは次回以降ね」

レティ「今回はコマメデで感想ありがとうございました」

トール「では」

## A E P 2 三人娘修行2

「なのは修行 Side」

「さて、なのはまずお前のスタイルはなんだ？」

「私のスタイルは砲撃なの！」

自信満々で答えるのはに対し紅那岐はどこか疲れた顔をしていた

「はぁ・・・」

「なんで溜め息ついているの！」

腑に落ちないなのはは紅那岐にツッコムが紅那岐はスルーしながら言う

「確かに砲撃がお前の主力の技だがそうじゃないだろうが、お前は魔導師としてはある意味完成系の砲撃とそして何より誘導弾の能力だ」

「私と変わらないんじゃない？」

「違う。いいか？お前の真の能力としての特徴は多数の誘導弾をことも何気に使えることだ」

「どっぴいっぴいとっ」

分ならず頭に？マークを浮かべながら聞くのは

「一度に多数の誘導弾を使ってるの回りにいるか？フェイトは愚か七星やすずか、はやてですら基本的には直射が基本なのにお前の基本は誘導弾が基本魔法になっているんだ」

「ふえ？」

「いまだ理解が出来てないなのは相変わらず？マークを浮かべていた

「・・・お前の場合は体で覚えたほうがよさそうだな」

「そういうと紅那岐は双銃を取り出した

「あ、前と違うの」

「いまさらかよ、まあいい」ドンッx？

「紅那岐はそこらかしこに魔力弾を打ち出したその数1000以上

「さて、ここからが修行だまずは静止しているこの魔力弾をお前の魔力弾で相殺しろ」

「それなら簡単なの「ただし！」にゃ！？」

「お前が使える魔力弾はこの半分だ」

「無理なの！どうやってこんなに」

「それを行うのが修行だ、これは本当に簡単だぞ？動いてないんだからな」

そういつと紅那岐は何処からともなく一つの機械をだした

「それは？」

「まずか謹製カウンント君だ、俺が撃つた魔力弾とお前が撃つ魔力弾を計測してくれるそして・・・復元する世界・EX術式固定データカーボ・EINHALTアインハルト」

紅那岐が何かをしたが、何も起こらなかった

「な、なにをしたの？」

「ん？お前が数値を超えた場合魔力弾を元に戻すようにしたただけだ。んじやがんばれよ？次はフエイトのところか」

それだけ言つと紅那岐は轉移しその場にはおびただし数<sup>の</sup>魔力弾となのはだけが残された

『そうそう、お前の魔力が切れたらそこで終了だ無理しようものなら俺が物理的に寝かせるからな』

念話で念を押してきた紅那岐になのはは考えがばれたと思つた顔をしていた

「ううここで無理して看病してくれるならいいけど、紅那岐君きつと放置しかしないの・・・だったらやっつてやるの！」

そして意を決したようになのはは修行を開始した

Side End

くフェイト修行 Sideく

「悪い待たせたか？」

「ううん、そんなに待ってないよ？（これって恋人の会話みたい／＼）」

ほんのり顔を赤くして答えるフェイトだが紅那岐は気にせず続けた

「さてフェイトお前の戦闘スタイルはなんだ？」

やはりなのは同じように自分のスタイルの確認をさせる

「私は高速戦闘による近く中距離がメインの戦い方だと思う」

「正解だ、ただしお前の武器はその限りじゃないけどな」

「どづいつこと？」

なのは同じように？マークを浮かべるフェイト

「お前のバルディッシュのザンバーフォームはぶつちやけ高速戦闘には不向きだ、正確には不向きと言うよりお前のスタイルと合っていない」

「えつと・・・」

「つまりだ、大剣つてのは大概力押しなんだよ。それに対してお前は力押しには向いてないむしろ手数で相手を倒すというのがお前に

は向いているだろう」

説明を受けなるほどと理解するフェイト

「え、でもそうするとバルディッシュの意味が・・・」

《サー！私を捨てないでください》

必死の様子で懇願するバルディッシュ

「つつてもいまさら変えられないから後でそれについては鍛えてやる」

「分かった」

《ほっ・・・》

返事と同時に安堵の溜め息をついた主人と愛機

「でだ、お前のスタイル以外に特徴があるが分かるか？」

「変換資質のこと？」

「そうだ、お前は俺と同じように雷の力を使える。逆に言えばその力いかによって威力が大きく左右することがある」

其処まで説明すると紅那岐は準備を始めた

「何してるの？」

「ん？ちよいと待て・・・よし！」



そうすると一つの機械を設置した紅那岐

「これはなお前の動きを観測してくれる機械・・・ぶっちゃけビデオカメラだな」

「それをどうするの？」

「これから行う修行は二つ動きの最適化と無効化だ」

説明を受けるがどういつ風にするかの説明を受けてないフェイトは相変わらず？を浮かべていた

「まあ待てって・・・再現する世界」

ダ・カーポ・セカンド

紅那岐が魔法を発動すると其処にはフェイトの愛機が浮かんでいた

「ウソ！？バルディッシュがなんで」

「行くぜ、サンダーフォール！」

すると紅那岐は空に飛ぶとフェイトの技の一つサンダーフォールを放った

「きゃあ！」

そこらかしこに雷が落ちはじめフェイトにあたりかける

「さてフェイトこれが修行だ、お前はこれからこの雷を必要最低限の動きで避ける・・・ああ防御するのは禁止だそして最終的には食らっても大丈夫なようになれ」

それだけ言うと紅那岐は去ろうとするが思い出したように言った

「ああ、止めたきゃその機械弄れ、逆に出したいなら弄れば再現してくれるから」

それだけ言うと今度こそ紅那岐は転移していった

「やるしかないよね・・・」

それだけ言うとフェイトは修行に打ち込んでいった

Side End

〈はやく修行 Side〉

「待たせたタヌキ」

「待たせといてそれ言うか！」スパーン

「お約束って必要だと思っんだ」

「私かてそれは思わんでもないけど、それを今やる必要があるんか」

ボケていた紅那岐が急にマジメな顔をしてはやくてを見つめた

「な、なんや行き成り見つめんといてな／＼／」

ほのかに顔を赤らめて逸らすはやくてだが

「ぷっ、お前はやっぱり面白いな」

「またかあああっ！」ズガーン

ハリセンで出せる音の限界を超えたツツコミを紅那岐にかましながら息を荒げているはやて

「さて、ボケはこの辺で修行だが・・・」

「ゴクリ」

「お前のデバイスが完成するまで待つてくれ」

「ちょ！？ここまで引つ張つといてそれが！」

「まあ待てもう少ししたら「お待たせ」来たみたいだな」

其処にやってきたのはさすが・アリシア・プレシアだった

「はやてちゃんが使うデバイス作ってきたよ」

「ご苦労様」

「紅那岐君あの施設は素晴らしいわね、思わず興奮しちゃったわ」

「ね、なっちゃんと一緒にいると退屈しないよ」

そう言ってテストロッサ親子（フェイト以外）は研究エリアの充実度に満足していた

「はい、はやてちゃんのデバイスのシュベルクロイツと夜天の書を模した魔導書だよ」

そう言つて渡すとはやてが驚いていた

「や、夜天の書を模した物やて？どうしてそれを」

「全く同じものじゃないけどな。ただ能力的には大差ないぞ？作れた理由は取り込まれたときにある程度の内容をコピーしたからだ」

「やったら、リースを救えたんじゃ」

「言つただろう同じじゃないつて、それはあくまでお前のスキルの蒐集行使における魔法の保存しか能力を発揮できん・・・後はあいつを入れるだけの能力をもつ魔導書は俺やすずかががんばつても2年はかかるからだ」

それだけ言つと納得できるようなできないような顔をしていた

「わかつたわ、それで私はなにをすればええの？」

「お前はな・・・その前にお前ちよつと魔法使つてみ？詠唱のあるやつ」

「そんなんでいいの？分かつたわ」

それだけ言つとはやては取り合えず魔導書に乗っていた魔法を詠唱して魔法を放つた

「ふむ・・・プレシアどう思つ？」

「そうね、素質は十分だけど遅すぎるわね」

「どういうことじゃ？」

「戻ったか、お前はまだ自分のスタイルが分からんと思うから説明するが、お前のスタイルは広域殲滅型だ・・・ぶっちゃけ大きいのが撃って一気に敵をまとめてぶっ飛ばす大雑把なスタイルだ」

「う・・・なんかひどい言われようじゃ」

「だが、威力は高いからな使いようだな」

「そ、そうじゃ！威力ならなのはちゃんに負けんで？」

「負けるぞ？あんなに詠唱おそけりゃいいだしな」

そういうとはやてはorz状態になってしまった

「改めて言われるとへこむわ」

「そこでお前の修行だよ・・・これをつける」

「これは？」

「それはな一定時間詠唱を続けると電流が流れるというものだ・・・罰ゲームで使う奴よりきついからな？」

「どんな拷問じゃ！」

「だ〜から修行だつて言ってるだろうが、いいか？マルチタスクつて言うのがあってなそれは並列思考と呼ばれているが簡単に言えば一度に何個かの考えを出来るということだ」

「なるほど」

「でだ、それを使えるようにし詠唱を何個かに分けて撃てるようになれば詠唱はぐっと短くなるぞ」

「それが私の修行つてことなんよね？」

「ああ、因みにプレシアは大魔導師と呼ばれるくらい凄いらな詠唱魔法の速射とかもできるらしいぞ」

「ホンマなんですか？」

「ええ、前は体が病んでいたけど今は出来るわよ？」

するとプレシアは誰もいないところに手をかざしちよつと詠唱するとどどかい魔法を放った

「凄いな」

ポツリと呟く紅那岐であったが

「貴方なら避けるでしょ？」

「当たり前だ、ちよつとでも詠唱してるならその隙を狙って近づいて斬り捨てる」

「ホント規格外ね」

「まあな、さてはやてがんばれよ？」

それだけ言つと紅那岐達は転移していった

「やったろうやないか！くーくんを絶対ギャフンといわしたる！」

『ギャフン』

「念話でいちいちいうなあああ！」

ツッコミをしながら修行を開始したはやてであった

Side End

〈ヴォルケンス修行 Side〉

「すっかり待たせてすまないな」

「かまわん、もともと我らはずいでだ」

「兄ちゃんアタシ達はなにをすればいいんだ？」

「お前達などどうするか考えて一つの結論に至った」

「なんなの？」

「……お前達は成長はするが正直三人娘に比べればほとんど言つていいほど少ない、ならば技術を大きく成長させたほうがいいだ

るっ」

紅那岐はそれだけ言うと宝石を二つ取り出した

「なにをするつもりだ？」

「俺が契約してる奴を出そうとしてな」

「なんだと!？」

「コール!黒龍王シングルバラム・白龍王サヴァンティル!」

すると二つの宝石が輝くと其処には黒き鎧鱗を纏った黒き龍と白き毛鱗を纏った白き龍が圧倒的な威圧感を持ちたたんづんでいた

『我らを呼ぶとは珍しいな主よ』

『どつしたのだ?それにこの小兵どもはいつたいなんだ?』

「すまんな2体とも、ちょっとこいつらの修行の手伝いをしてくれ」

それだけ言うと紅那岐はヴォルケنزズに向き直る

「お前達の目標はまずこいつらを傷つけることだな、今のままじゃ正直傷は愚か本気になれば瞬殺されるから気をつける?」

『主の頼みだ、当分は動かんでやるからな』

『しかし、見込みがなければそれまでだ』



「これは本当に竜なのか？私が前に見たときはもっと小さかったが」

「それに喋ってるし」

「・・・むう」

『そこらの弱きものと一緒にするな』

『我らは王、竜の中でも最上位だ人語を話すのも当然と思うがよい』

「因みに最強の竜もいるがそれは見せるだけだな、俺ですらマジにならんと倒せんくらいだし」

「分かった、感謝する赤羽」

そう言って代表としてシグナムが礼を言って修行を開始したヴォルケンズ

「あ、ヴィータが行き成りぶっ飛ばされた・・・まあガンバレや」

そう言って紅那岐は転移していった

Side End

くリリース Side

「リリース体の調子はどうだ？」

「きわめて好調です主」

「そうかよかった、でだお前の相手はな・・・飛鳥」

「は〜い兄様」

紅那岐が呼んだのはカワイイ飛鳥である

「飛鳥はカワイイなあ、ウリウリ」

「くすぐつたいよ兄様」

とことと現れた飛鳥に頼ずりしながら撫でる紅那岐に嫉妬の視線をぶつけるリース

「主はそれを見せる為に私をよんだのか？」

「うんにゃ、お前の魔導書の保管をさせようと思ってな。リースはこう見えて俺並に強いぞ？遠距離に関して言えば俺を超えるわ」

それだけ言つとリースは驚愕していた、紅那岐を超えろと言つのが想像できなかったのだ

「さてと、飛鳥お前に渡したゲームは終わったか？」

「うん！」

「そうか、だったらこのおねえちゃんと一緒に魔法ごっこをしていていいぞ？」

「ホント！よろしくね姉ちゃん！」

「あ、ああ・・・主よろしいのですか？」

「かまわんぞ？遠距離攻撃こいつには効かなくなっちまったからな」

「分かりました、よろしくな飛鳥」

「うん、リース姉ちゃん」

そうしてリースと飛鳥の弾幕ごっこが始まったのであった

Side End

（紅那岐一人 Side）

「さて、なのはは魔力弾の質の上昇と操作性、フェイトは最適化と体制、はやては詠唱速度の高速化と威力維持・・・一週間くらいで終わるかな？」

それだけポツリと言うと紅那岐は魔法陣を展開する

「あいつらだけ修行をして俺が適当とも言えんからな、トールの所で修行してくるか」

それだけ言うと紅那岐はトールの所に飛んだのであった

AEP 2 三人娘修行2（後書き）

レティ「前・中・後で行こうと思ったたら思った以上に長くなりそうになった」

ルーネ「そうですね〜あ、ツール様は紅那岐さんの修行に向かいました〜」

レティ「あいつも負けず嫌いだからね〜」

ルーネ「今回出てきた龍はなんですか〜？」

レティ「アレはジュエルスオーシャンってゲームに出てきた龍だよ。シングルバトルは2速歩行型でサヴァンティルは東洋の龍に似た外見だね」

ルーネ「ふえ〜紅那岐さんはそんな方と契約してるんですね〜」

レティ「一応紅那岐が契約してるのは、黒龍王・白龍王・黒麒麟の3体だけだけど、裏技で神竜とも契約してるよ」

ルーネ「ふえ〜凄いですね」

レティ「使う機会めったにないけどね、それでは感想ありがとう〜」  
「ございました」

ルーネ「次回もお願いします〜」

### A E P 3 三人娘修行3

#### 1日目

「なのは修行 Side」

「シュウウト！」

《アクセルシューター》

なのはの声と共に10個の魔力弾がレイジングハートから放たれ紅那岐が出した魔力弾にそれぞれ向かっていった

「にゃ！？私のシューターのほうが壊れちゃった・・・」

《マスター、どうやらアレには私達のバスター並の魔力が込められているようです》

簡単に壊せると思い普通のシューターで撃つたはいいが実際は自分のほうが壊されてしまう事態が起きたのであった

「だ、だったら私もバスターで」

《マスターお忘れですか？あの方はシューターで打ち落とせとっております》

「分かってるよ・・・だったらカートリッジロード」

《ロードカートリッジ》

なのははカートリッジを1発ロードすると改めてシューターを放つと何とか相殺し消せたが、あくまで相殺なので自分のシューターも消えてしまっていた

「うう、紅那岐君一体どれだけ魔力込めたのはつきり言って半分で消せるとは思えないの」

《がんばりましょうマスター》

そうしてなのは再び修行に打ち込んでいった

Side End

～フェイト修行 Side～

「きゃあっ!」

悲鳴を上げながら紅那岐のサンダーフォールから逃げまくるフェイト

「うう、怖いよぉ・・・」

所かまわず落ちる雷、逃げたところを狙い済ましたかのようにも落ちてくる為大きく飛びのいても危険はついて回っていた

《サー、一発でも当たれば我々はそこでアウトになるくらい強力ですので気をつけてください》

「どっやって!?!」

涙目になりながらフェイトは必死に雷から逃げていた。紅那岐の言う最低限の動きと言うのが分からずとにかく当たらないように逃げるのに必死であったのだ

「とにかくがんばんなきゃ」

《がんばりましょう》

Side End

「はやく修行 Side」

「彼方より来たれ宿木の枝、銀月の槍となりて」

彼女はとにかく詠唱魔法の練習をしていた、この前のプレシアと  
言う例を出されてしまっている為出来ないとはとてもじゃないが言  
えなかったのだ

「撃ch・・・あばばばばばばば」

そして今詠唱が一定時間を越えてしまったために電流が流れそれに  
感電しているはやてである

「あたたた・・・ちよー本当にシャレにならんくら強いやないか！」

彼女もまた紅那岐の言うマルチタスクなるものの習得自体は簡単  
に出来たが、それと詠唱の分割化は別物であり上手くいっていないか  
つただ

「それに、唯分割しただやったら意味なかったし・・・」

元来詠唱とはその魔法の特性を出し、威力を上げるものなのであ  
る。紅那岐の言う分割化とは矛盾が孕んでいた

「絶対終わらせてくーくんをギャフンて言わせたる！」

違うところで情熱を燃やすはやても同じように再び修行に打ち込む

のであった

Side End

（ヴォルケンス修行 Side）

『どうしたお前ら、先ほどから何をやっている？』

『我らは動いてないんだぞ？何ゆえ攻撃が通らん』

「くそ、なんだこのでたらめな強さは」

「私って意味がないんじゃないや・・・」

「でいいいいいいやあああああ！」

「オラア！」

紅那岐が召還した龍2体はヴォルケンスを相手に赤子と遊ぶような感じで相手をしていた

「紫電・・・一閃！」

「ラケーテンハンマー！」

シグナムはシングルバラムにヴィータはサヴァンティルに攻撃を繰り返したが、全く効いていなかった。否攻撃が届きさえしていなかったのである

『炎を纏わせて攻撃力を上げるのはよいが、炎とはこういうものだ



！』

『どうした小さきものよ、その槌は飾りか？我に衝撃すら届いてないぞ』

「な！？これが炎だと、なんだこの熱量は」

「小さい小さいうつせえ！アタシはヴィータだ！」

『私の炎は総てを無に帰す炎、貴様の炎は我から見ればただのマッチの火だ』

『覚えて欲しいのならば我を認めさせるくらいの事はして見せよ』

そして2体は再び動かず己の翼や大気を操りヴォルケンスを攻撃（超手加減）していた

Side End

（リース修行 Side）

「姉ちゃん、逃げてちゃ戦いにならないよ？」

「そつは言うが、この量を裁けと言うのか！」

リースは必死になって逃げていた、見た目にはフェイトと同じように魔法から逃げているようにも見えるが、こっちはある意味もつと鬼畜だったのだ

「くそ、主の言葉を冗談と思っていた報いか」

「よそ見してちゃー！」

「しまっ！……ぐ」

リースの修行は飛鳥が放つ魔法を受け止めるか相殺するかによって自身に記録し自身も使えるようにすると言うもののだが、飛鳥の魔法はほとんどタメがなかったりするため受け止めるのは何とかできるが相殺は凄く難しかったのである

「なんだ、あたり一面を灼熱で燃やされて攻撃されたと思ったら次は大爆発を起して攻撃されるとは」

因みに飛鳥がやったのはドラ エ・F など汎用性が高そうな魔法ばかり出てくるゲームであった

「兄様の為にもがんばんなきゃね！」

「主、私はやってみせます！」

そうして再び修行をしているリースであった

Side End

7日目

くなのは修行 Sideく

「レイジングハートこれで決めるよ！」

《イエス、マスター》

「シュート！」

なのはが魔力弾を放ち次々とターゲットを撃墜していった、時には誘爆を使い一度に大量の魔力弾を消滅させている。

実は紅那岐はわざとそれが出来るように魔力弾を張っていたのである。それになのはが気づいたのは4日目であるその後それを使いクリアを目指していたが、流石の紅那岐でそれだけでは出来ないようにしていたのである

「はあはあ・・・紅那岐君のおかげでシューターの使い方ってのが分かったね」

《はい、一発に込める量により相手への牽制や撃墜の違いを持たせる方法と言うのがあったとは》

そう、紅那岐が教えたかったのは相手を倒すのに大きいのはつか撃つ必要はなく同じ一発でも誘導弾と言うことで油断する人もいるのでそれを使えば有利に進められると言うことであった

また、シューターの作り方も変わり唯打ち出すだけでなく硬くしたり、逆に爆発するといったものも作れるようになった

「ラストー！」

そして今なのはは目標をクリアしたのであった

パチパチパチ

どこからともなく拍手が聞こえ振り向いてみると其処には紅那岐が立っていた

「紅那岐君！」

「お疲れ様なのは。どうやら意味が分かったようだね」

いたわりの言葉と共に紅那岐がなのはに聞いた

「うん！砲撃だけが攻撃じゃないって分かったの」

「合格だ！次の試験は3日後に行うから今は休め！」

「え？そんなに休む必要はないの」

そう言っつて修行をしたいとキラキラした目で紅那岐を見るなのは

「だあほ！今のうちから体を酷使したら壊れるに決まっとうろつが！  
いいか3日は絶対魔法を・・・お前に言ってもやりそうだからこれ  
をつけとこつ」

そう言っつてなのはの手首にブレスレットをつけた紅那岐

「えつとこれは？」

「さすがが作つた奴で魔力を使つたり心拍数が一定値以上高くなつた瞬間気絶するほどの電流が流れる奴だ・・・因みにこの鍵がなければ外せんからな？」

そうしてなのはは無理やり3日間休みといえる本来なら喜べるはずの休みを取らざる得なくなつた

Side End

くフェイト修行 Sideく

其処には空中で静止し目を瞑っていたフェイトがいた

「来る……」

ポツリと呟いた瞬間フェイトが今までいたところに極大の雷が落ちるがフェイトは無駄な動作なくそれを難なくと避けた

ついで落ちてくる雷にはバルディッシュを避雷針代わりにし雷を落としバルディッシュに纏わせるのも成功していた（プラズマガンバーなどは自身の魔力で作った擬似雷の為被害はないが、この雷は紅那岐の魔法の為本来ならフェイトでもダメージは受けてしまうものである）

「ふう……上手く言ったね」

《完成したといって問題ありませんサー》

パチパチパチ

其処に拍手が聞こえ振り返れば紅那岐が立っていた

「ナギ！」

「どうやら雷を味方につけられたみたいだなフェイト」

「うん、でももうヤダかな」

苦笑い気味に答えるフェイトに対して頭を撫でてあげる紅那岐

「あう・・・／＼／」

顔を真っ赤にしながらうつむくフェイトをニヤニヤ見ながら紅那岐が言う

「んじゃ、取り合えず3日間は安静にしとけ。疲れっるのは目に見えて分かりづらいからな」

小さく返事をし休みに入ったフェイトであった

Side End

）はやて修行 Side）

「行け！石化の槍よ」

それだけ言うとはやての魔法のミストルティンは完成しなにも無い空間に向かって飛んでいった

「ふう・・・何とかできるよつになったわ」

安堵の溜め息をしながらはやては装着された腕輪を見る

「危うく危ない性癖に目覚めそうになってしまいそうになってしま  
うところやった」

パチパチパチ

と其処に拍手が聞こえてきたので振り返ると

「・・・誰も居らん？」

「プツ」

小さく笑う声が聞こえ振り返ると其処には笑っていた紅那岐がいた

「お前の性癖ってすごいなw」

「うっさいわあああ！」スパーン

お約束の漫才が終わり、紅那岐は改めてはやてに言った

「どうやら始動キーを作れたみたいだな」

「始動キー？」

「ああ、さっき見たく魔法を撃つのに対して詠唱ではなくある語句に意味を載せて放つことが出来るのが今回の目標だったんだ」

「え？じゃあマルチタスク云々っていうのは？」

「アレはお前の全体に魔法の意味を根付かせる為の修行だな」

「なるほど〜」

「んじゃ、これより3日間の休養を申し付ける」

「わーったわ・・・これ外しくれへん？」

「え？目覚めたんならいいだろう」

「んなわけあるかあああああ！」スパーン

お約束をしながらもはやても休養に入ったのであった

Side End

くヴォルケンス修行 Side

「もつと鋭く、もつと強く……」

「ただ一点に、他の部分に持っていないように」

「がんばって二人とも！」

「援護する」

『どうやら次で決めるらしいな』

『ああ、なら我らはそれを見届けてやるっ』

2体の龍はそれだけ言うとな唯其処にたたずむだけであった

「紫電……一閃！」

「ギガントシユラアアク！」

「縛れ鋼の軛……でいいいやあああ！」

そして爆発が起こり煙が晴れると……



「通ってないのか？」

「くそ……」

悪態をつく2人であったが

『いや通っておるぞ』

『ああ、よくやった』

そういうと2体はお互い傷ついた部分を示した……ぶっちゃけほんとにちよつとなので大きい体の為遠目から分からないだけであつた

パチパチパチ

と其処に拍手が聞こえ振り向くと

「赤羽！」「兄ちゃん！」「紅那岐君」「赤羽か」

『主』

と各々呼んだのを確認した紅那岐が近づくと

「まさか本当にこいつらに傷をつけられるとはなあ……ぶっちゃけこいつらの実力お前らの最低10倍以上はあるんだがな」

それだけ言うと紅那岐は結果を言った

「見ていたがシグナムもヴィータも攻撃の無駄が無くなっていたな」

「ああ、お前が言っていた技術と言っつのが分かった気がするよ」

「兄ちゃんそれよりあいつらの態度なんかならねーか？えらそう  
でムカつくんだけど」

「そういうな、てか傷つけた程度じゃ認めてくれんよ最低限ダメ  
ジを与えなきゃな」

「あの一紅那岐君はどうやってあの方達を？」

「物理的にぶん殴ってだが？」

何言っつてんの？的な態度で答える紅那岐に息を呑む一同

『我は拳で最終的に意識を絶たれたな』

『我は足だったはずだ』

それを聞いた一同は・・・

「「「この規格外が！」」「」」

「そんなに褒めるなよ」

とお約束をやりながら休養に入ったのであった

Side End

（リース修行 Side）

「え〜い」

「甘い！」

飛鳥の魔法に対し一拍遅れてだが相殺に成功するリースにそこに  
パチパチパチ

「主！」

「兄様〜〜〜！」

「飛鳥あああああ！」抱き

現れた紅那岐に走りながら抱きつく飛鳥を尻目に紅那岐はリースに  
言葉を送る

「よくここまで成長したな」

「ありがとうございます」

「兄様、姉ちゃんすごいんだよ！私の魔法を相殺するんだから楽し  
くって！今度本気出していい？」

「ダメ、お前の本気はあたり一面なくなるから」

「なっ！？アレで手加減なんですか？」

「こいつの魔力量は無限だからな、威力は上げようとすれば何処までもだ」

その言葉を聞いたリースはビックリしていた

「そうか、手加減されていたのか・・・」

「気を落とすな、本来こいつと打ち合えるだけでもありえないからな」

そうしてねぎらいながらリースにも休養を命じた紅那岐は自分も休む為に寝室に向かっていったのである

A E P 3 三人娘修行3 (後書き)

レティ「やっべ、超長くなる」

トール「計画なしに書くからよ」

レティ「反省してる・・・次からは別々に書きます」

トール「私もある意味出たいからよろしくね」

レティ「感想ありがとうございました」

トール「では次回で〜」

#### A E P 4 三人娘修行 なのは編（前書き）

ここを出てくるカウント君の説明を

周辺魔力を吸い登録されている魔力弾の生成が可能である

また自身に搭載されている魔石からも魔力が漏れ足りない部分は其処から補えるのである

名前はなのは用に作った為カウント君であり実際は何でもできるのである

## AEP 4 三人娘修行 なのは編

### 修行内容2 1日目

「さて、しっかりと休めたみたいだな」

「ひどいの！本当に電流が流れて動けなかったの！」

「お前本当にやろうとしたのか・・・」

なのはの台詞に思わず溜め息をついた紅那岐

「まあいいが、んで次の修行なんだけど」

「うん」

「お前さ、空間認識力・空間把握力って言葉は分かるか？」

「ふえ？」

「うん、期待してなかったから良いけど簡単に説明すると物体の位置・方向・姿勢・大きさ・形状・間隔など、物体が三次元空間に占めている状態や関係を、すばやく正確に把握、認識する能力のことだ」

「わからないの！てかひどいの！」

「要するにだな周りの状況を常に把握できる能力ってことかな？後ろを見て無くてもある程度の事が分かるとも言っ。」

「前に紅那岐君が私がデバイス構えてたのがわかったみたいに？」

「そうだ。イーグルアイとも言っな」

「それで修行に関係あるの？」

「これからそれを身につけてもらっんだ」

「ふええええ！？無理だよ！」

「無理でもやれ！大丈夫だそんな事いえない状況になるから」

「すつつつつごくムカつくの！」

「さてさて、始めるか」「ドン×？」

紅那岐は前と同じように無数の魔力弾を打ち出し放った

「前と同じなの」

「うんにゃ、次はお前に向かって飛んでくるぞ？」

「え・・・アレって私のバスター並に威力あるよね？」

「今回は威力減らしてお前のシューター程度にしたから」

申し訳なさそうにつつむく紅那岐だがなのは顔は絶望に彩られていた



「もし一斉に被弾したら・・・」

「撃墜するんじゃない？」

軽く言う紅那岐だが冗談じゃないと言う感じになのはは講義する

「簡単に言わないで欲しいの！アレをどうやって回避すれば」

「回避じゃない！打ち落とせ！」

「無理なの！」

「やれ！」

子供の喧嘩のようにやれ！無理！の繰り返しで時間を食ったのは言うまでもない

「とにかくガンバレ、カウント君がある程度お前にダメージが通った場合は止まるように設定してあるから」

「うう・・・人事だと思って」

涙目になりながら講義するのだが

「・・・俺なんて逃げ場すらないし、いつせいに襲い掛かってきたんだぞ」ボソツ

紅那岐が過去にあったことを呟いていたがなのはには聞こえていなかった

「ああ、それと最初は2個次が4個とだんだんと増えていくから早々被弾はしないと思うぞ?」

「それを先に言っただけだったの!」

紅那岐も忘れていたので言い返すことはせずスルーする方向で話を進めた

「まあ、ガンバレできるようになったら次のステップだ」

それだけ言つと紅那岐は転移してしまつたのだ

「うう・・・後で絶対O H A N A S H I I!するの」

このとき紅那岐は何故か悪寒がしたとかしないとか

《マスター・・・ファイト!》

「にゃ!? レイジングハート性格が」

《スイマセン。私も流石にここまで酷な修行と思わず壊れ気味です》

「それじゃあメンテに行かないとね!」

なのはは流石の修行内容に逃げ出せる口実を見つけ思わず楽しげに言つただけだ

《いえ、3日間の中にメンテは完璧です!》

「レイジングハートのばかあああああ!」

涙交じりのなのはの絶叫に耐えながらも修行は開始された

『ハジメルヨ！ハジメルヨ！』

気の抜けた声が聞こえたと思ったらカウント君が始める宣言をしていたのであった

《マスター！2時と8時方向から来ます！》

「ああもう！アクセルシューター・・・シューウツト！」

なのはは取り合えず防御も考え10個のシューターを出し最初の二つを迎撃した時に念話が来たのだ

『ああ、レイジングハートよなのははに教えるなよ？これはなのはの自力を上げるものだからな。お前がやるとするなら誘導弾の補助くらいまでだな』

と難易度を極端に上げる紅那岐・・・どっかで見てるかのように告げるのであった

《と云うわけなので私をあまり期待しないでくださいマスター》

「ふええええん」

7日目

「そこ！行って」

なのはは漸くある程度まで裁けるようになってきたが、それでも一度に20個の魔力弾が全く違う場所から来る時は流石に裁ききれずに被弾してしまい度々撃墜されてしまっていたのである

「づう・・・きついよお」

ボロボロになりながらも何とか裁いてはいたが、20個の壁がなかなか越えられないでいたのである

「事前に壊そうとすれば元に戻っちゃうしどうすればいいのぉ」

ダメージと精神疲労によりボロボロのなのは自分がどういった存在に修行を受けていたのかを痛感したのであった

「紅那岐君は絶対DSなの！」

《マスター！9歳の女の子がそんな事言うもんじゃありません！》

レイジングハートの必死の説得？によることで何とか言わないようになったがそれでもやはり精神的にくるものは来るのである

『なのはにヒント！ヒント！』

と今まで黙っていた？カウント君がヒントと言つ言葉を出した為になのはは一旦修行を中断し駆け寄つた

『再生する再生する』

それだけ言つとカウント君から録音された紅那岐の声が聞こえた

『さて、このヒントを聞いている時には俺はもうこの世にはいないだろっ……』

「え？」

あまりの無いように一瞬なのはは思考が停止してしまい真っ白になる

『って事はないから安心しろ、お約束だ』

ガッン！

紅那岐のあまりの態度にムカついたなのは思わずカウント君を殴ったのだが・・・

「・・・っ」

あまりの硬さに自分の手を握りながらもだえていた

『冗談はこれくらいにしてヒントだがな、水面の中央にいるのを思い浮かべろ。そしてその周りの水面は今は風の状態・・・唯ひたすらに周りの水は静かに其処にたたずむだけだ』

そしてなのは目を閉じながら想像する、水面の中央に立つ自分を

『そして其処に何かが来れば波紋は広がる・・・俺が言えるのはここまで俺の感覚だからなお前が分かりやすいものがあればそれにしろ以上だ』

そうして録音されていたものは切れ後は残すのはなのは達である

「何となく意味は分かったけど出来るかな？」

《マスターならできます》

愛機の励ましの元なのは再び修行に打ち込んでいった

1ヶ月目

なのはに向かってくるのは50個以上の魔力弾だったが

「そこ！おねがいレイジングハート！」

《イエス、マスター》

なのはの合図にレイジングハートは答えなのはに襲い掛かるのが早い順に打ち落としていく

「次はもつと速くしなきゃ」

《来ます！》

「行って！シューウウツト！」

そしてなのは次々と来る魔力団を打ち落としていった

50個目になるとそれ以上は増えなかったがその代わりに速度が上がったりフェイントがかかるようになっていったのであった

「やば！？フェイントだったの」

《私が！》

なのはのミスも直ぐにレイジングハートは対応しお互いを助け合っておりこの修行も終わりを迎えた

「どうやら取得できたようだな」

そう言って現れた紅那岐

「何でボロボロなの？」

「聞かないでくれ」

短くそういうと紅那岐はなのはの死角であろう場所に魔力弾を飛ばすが

「シユートー!」

なのはは難なく撃墜するのであった

「どつやら、話しながらでも出来たようだな・・・合格だ!」

「やったああああ!」

なのははよほど嬉しかったのか両手を挙げピョンピョン跳ねながら喜んでいた

「おっし、今度も3日間休養だ」

「今回は素直に聞くの・・・流石にもう無理」

そう言ってなのはは意識を手放し倒れたのであった

「お疲れ様なのは」

そう言って優しく言う紅那岐

「レイジングハートもよくやったな、これで二人で力を合わせれば何処に敵がいようが気づけるだろう」

《一つよろしいでしょうか?》

「なんだい？」

《貴方はどれくらいできるんですか？》

「ついでだしやっとくか・・・録画しといて休んでいるのはに見せてやりな」

そう言ってなのはやっていた修行を紅那岐は同じようにこなしたのであった

後日見たなのは・・・

「もう逆らうのバカらしいの」

と言うほどの凄さだったとかなんとか

End

修行内容3 1日目

「さて、次の修行だが・・・お待ちかねの砲撃の修行だ」

「やっとなの！」

「ちょっと時間も押してきたしステップをある程度含んでやるぞ？」

そう言って説明を始めるがなのはの目はキラキラしていた

「まず砲撃の一番の弱点だがそれはタメだ、其処は理解しているな？」



コクリと頷くなのを見て再び説明を開始した

「んで、今回の修行はある程度バスターの連射を可能にしたの最大威力の増加が課題だ」

すると何処から現れたのか分からない機械が沢山現れた

「最初の修行はこいつらを打ち落とすという簡単な修行だ、ただしこいつらは一定時間其処にとどまると転移してしまうからな？」

因みに転移するまでの時間はなのはがカートリッジをロードしても少し足りないくらいともものすごい意地悪な仕組みである（さすが・アリシア製作）

「分かったの！」

「んで、そいつらが完全に打ち落とされた後に出てくるボスのこいつを撃墜できるようになったらクリアだ」

まるでゲーム感覚に言う紅那岐

「因みに最後のこいつは動かないからSLB撃つても問題ないぞ？唯硬さが現状お前じゃ撃墜できないくらい硬くしたから」

「どれくらい？」

「・・・わかんね」

「ふえ！？」

「プレシアに製作任せたんだが、魔改造したと言うことしか知らないんだよ……しかも製作したのあわせて3機だけだから試してない」

それだけ言うと紅那岐は早々に立ち去ったのであった

「……がんばろっか」

《そうですね》

どこか疲れた顔をしたなのはは修行を開始して言ったのであった

「どのくらい早いか試してみよつと。デイベイイイン……バスタアアア！」

なのはの得意の第2の魔王砲が放たれるが、放たれた時には其処にターゲットはいなかった

「ええ？いなくなるの早くない!？」

《打ち出された瞬間に移動していました》

レイジングハートの報告と共になのはは難しさを知ったのであった

「つまり、今まで以上に速く打たないといけないって事だよね？」

《はい、恐らくですが威力を落としたり撃墜しきれないでしょう》

そう言ってレイジングハートの報告を聞いたなのはは修行に打ち込んだ

## 2 週間目

「デイバイイイイン・・・バスタアア！」

なのはの掛け声と共にバスターは放たれターゲットは撃破できた、ようやく最後のボスが現れたのであった

「行くよレイジングハート！」

《スターライトブレイカー》

「全力全開・・・スタアアライト・・・ブレイカアアアアア！」

なのはは今までの経験により最初から出し惜しみしてれば痛い目にあうのが分かったので最初から全力全開で自身の最大魔法スターライトブレイカーを放ったのだが・・・

「ウソ!? 傷一つついてないよ」

《着弾した瞬間此方の魔力を拡散させたようです・・・壊すにはそれを超えるしかありません》

レイジングハートの解析結果を聞いたなのはは流石プレシアさんと思えなかったそうだ

「うう・・・今ので魔力切れちゃったよ」

《少し休憩しましょう、あの方も無理しすぎたら物理的に休めるといってましたし》

その言葉を聞いてなのはも青い顔をし休むことに頷いた

「紅那岐君ならやりかねないの」

《と言うかあの方は必ずやりますね》

「だよ、そういえばどうしよつかあれ」

そう言っ指を指したのは先ほどの攻撃で傷ついていないターゲット

《そうですね、今のままでは恐らくカートリッジでも意味は無いと思います》

「そっか・・・チャージタイム伸ばしててみたらどうなる？」

そうしてなのは休みながらレイジングハートとターゲットをどう壊すかを決めていたのであった

1ヶ月目

「これで決めようレイジングハート！」

《イエス、マイマスター》

すると今までのなのはとは違いひどく落ち着いた様子で魔力を高めていった

「集え星の光よ・・・」

今までと違いなのは詠唱していた。レイジングハートと出した結論それは詠唱魔法とスターライトブレイカーの融合であった

元来なのは魔法には詠唱を必要とするものは存在はしなかったがレイジングハートが闇の書事件の時にはやてのデータを取っていたのである

その時に感じたのは詠唱中に魔力が高まりそれにより魔法も威力が上がったと言うものであった

「不屈の心は明日に向かい」

なのはは謳うように魔力を高める、一切の雑念を捨てただ自身の心を現すかのように

「星よ光よ打ち抜いて・・・」

そして今詠唱が終わり其処にはなのはの新しい魔法が完成した・・・その名は

「レイジングスタアアアアブレイカアアアツ！」

見た目は今までのスターライトブレイカーと同じだが、実際の威力はその3倍以上当然ターゲットは粉々に砕かれたのであった

「はあはあ・・・」

最大砲撃が終わり自分への反動により空から落ちてしまうのはだったが・・・

「おつかれさん、まさか新魔法を作るとは思わなかったぞ？」

「えへへ・・・でも疲れちゃった」

「だろうな。今は軽く見積もってSS+の威力だ下手したらSSS行かかもな」

紅那岐の言葉に驚きを隠せない表情で聞いているなのは

「だけど、当分は使っちなよ？やらせといてなんだが、体がもたんぞ」

その言葉を聞きながらなのは泥のように眠ったのであった

End

### 修行内容最終工程

アレから3日間休み今は元気いっぱいなのは最後の仕上げの修行の説明を受けていた

「最後の修行はひどく簡単だ」

「そうやって油断させるんじゃないの？」

「ひどいな・・・まあいい最後のは単純に模擬戦だ」

それを聞いたなのは今までの修行の鬼畜度から言って簡単すぎる内容に驚いていた

「ふえ？そんなのでいいの？」

「そうだぞ？」

なんともいえない安堵の溜め息をついたのはだったが

「相手を紹介する・・・恋」

「・・・来た」

「相手って恋ちゃんなの!？」

「……ん」コクリ

頷く恋を尻目に説明を続ける紅那岐

「ただし今回恋には手加減のしろと言っていないからな。因みに強さだがお前より全然強いぞ？」

「そうなの!？」

「ああ、しかもさすがが開発してくれた空中を普通に歩けるブーツを装備してるから空戦のアドバンテージもないしな。更にいや遠距離の不利を防ぐ為に俺の鬼菩薩を参考に作ったシールドを周りに浮かせてるから下手な遠距離防ぐぞ」

ブレイズザクのシールドを思い浮かべてください。それが肩の周りを浮かんでいる感じですよ

「……よろしく」

「よろしくなの……」

ものすごい不安顔で挨拶するのは

「んで、今回は別に目標はない。今から10日間模擬戦をして3日休んだ後俺と模擬戦だ」

それだけ言うと紅那岐はまた同じように転移していった

「……逝く」

「字が違うの！」

そうしてなのはは恋相手に模擬戦を続けた後紅那岐との戦いに向かうのであった



A E P 4 三人娘修行 なのは編（後書き）

レティ「やべ、魔改造しすぎたかも」

トール「これ実力絶対に天元突破するんじゃない？」

レティ「最初はS+程度にする予定だったのに書いてある間に何故かこうなったし」

トール「どう見てもS+じゃないわよね？」

レティ「私の設定上ではSSSにします」

トール「無理がありそうな気がするわよ？」

レティ「いいのー！」

トール「てかこの時点での紅那岐の実力がありえなくなってるない？」

レティ「稽古つけといてよく言うよ」

トール「一応かなり強くはなったわよ？黄金王の真名開放の攻撃食らってもダメージちょっと受けるかな？程度だし」

レティ「それは強さとしてどうなんだろうな？黄金王自体チート相手には其処までじゃないんじゃないの？」

トール「武器的には最強よ？」

レティ「その談義はまたと言つことぞで・・・感想ありがとつじぢねい  
ました！」

トール「次回はフェイト編よ」

A E P 5 三人娘修行 フェイト編(前書き)

ライナー君

あらゆるものを飛ばすことが出来る  
ボール・ナイフ・魔力弾など

A E P 5 三人娘修行 フェイト編

修行内容2 1日目

「ゆっくり休めたようだな？」

「うん」

「はぁ・・・」

紅那岐が溜め息をついた事に疑問を感じたフェイトは素直に聞いた

「どうしたの？溜め息なんてついて」

「ああ、なのはもお前みたく素直に休んでくれたらなって・・・」

「なのはっいたら・・・」

その一言に納得してしまったフェイトは同じく溜め息をついた

「そんな事はさておき、お前の次の修行なんだがな」

「何やればいいの？」

「考えた末これにすることにした」

すると何処からか機械が現れた

「これは一体？」

「これはなライナー君って言ってプレシア・アリシアがお前のために作ったものだ」

「母さん・アリシア」

感動してるフェイトをよそに説明を続けた

「今度の修行はなこの機械から飛んでくるものを掴むか叩き落とすかだ」

「それなら簡単だね」

「ただし、速さの最大が光速より早くなるかなら」

その一言に感動が一気に吹っ飛び固まる

「しかも、数が最大で10個くらいになるってよ」

「母さん達はそんな物騒なもの作ったの!？」

「嬉々として作っていたらしいぞ?」

「母さん・姉さん・・・」

ドヨンとしてるフェイトを無視しつつ紅那岐はさらに説明を続ける

「この修行はな光速で移動するとき目標をしっかりと見るためのものだ」

「どっぴいっこと?」

「お前ソニックムーブ使ってる時に景色がぶれて見えてないか?」

「それは、速く動けばそうだよな?」

「だな、ただ高速戦闘においてはそれだと敵に確かなダメージを与えられなくて必然的に甘い攻撃になるんだ」

「いまいち容量を得ないフェイトに紅那岐は仕方ないと呟いて少し距離をとり念話で話しかける」

『今から其処からソニックムーブ使って俺に攻撃して来い、ただし俺も多少動くからな?』

「それだけ言うと紅那岐はあたりを動き出したのでフェイトも素直に従い言われたことをやった」

「ほい、そのままだ」

「それだけ言うと紅那岐はフェイトを攻撃した姿勢のまま止める」

「ほれ、攻撃する部分はずれてるだろ?」

「本当だ」

「今度の訓練でお前の目を強化するのが目標だ、ガンバレよ」

「そう言うと紅那岐は転移していった」

「がんばろうバルディッシュ」  
《イエス、サー》

そうしてフェイトの修行は始まった

7日目

「はあはあ・・・」

この修行は前のに比べて簡単だろうと思っていたフェイトだが、それは勘違いだったなぜなら・・・

「はあ！・・・また止まった！？きゃあ！」

飛んでくるものが途中で止まったり緩急を使われている為早さにあわせて攻撃しても意味が無かったりするのだ

「く・・・母さん達はなんて物作ってるんだろう」

製作者のプレシア達に愚痴をこぼしながらもフェイトは修行を続けるが、中々思うように修行は進まなかった

「それに、掴むのも出来ないよ」

そう、打ち落とすのは出来るのだがまだ掴むことが出来てなかったのである

『ヒント上ゲル！ヒント上ゲル！』

ライナー君から音声が発せられ飛びつくフェイト。そして再生が始

まった

『フェイトこれを聞いてるか？だったら教えてやるうその方法を』  
息を呑み真剣に聞くフェイト

『さて、これの攻略方法だがな・・・知らね』ガツン！

その言葉を聞いたフェイトは思わず機械を叩きつけて手を抱えても  
だえていた

「痛い・・・」

『冗談はここまでにして、ぶつちや俺は逆から始めたからヒント  
になるか微妙だが・・・一回全部を掴む方でやってみ？しかも目の  
前まで引き付けてな』

再生されたのは其処までで修行は再び行われた

「取り合えずやってみよう」

そうして再び修行が始まったのである

1ヶ月目

「次！」

フェイトは次々と飛んでくる物を左手で掴み、掴むのが難しいも  
のはバルディッシュを使い落としていた



「お、出来たようだな」

「あ、ナギ」

紅那岐が現れフェイトは修行を中止し紅那岐に向かっていった

「おつかれ、どうやら最終まで出来たようだな？」

「うん・・・でももうやりたくないかな？」

「ははは、それはその時しだいだな」

笑いながら答える紅那岐にフェイトは溜め息をついた

「さてと・・・シッ」

するとフェイトに向かって光速のパンチを放つが・・・

「危ないよ・・・」

フェイトは難なく掴んでいたのであった

「合格だな」

「よかった」

「実はこの修行って目以外に鍛えてたんだよ」

「うそ！？なんなの？」

「それはな、最適な動きを一瞬で選択できるようにするのがそれに対応することだ」

つまりはだ、幾ら見えていても体がついていかなければ意味が無いと考えていた紅那岐は前回の修行からフェイトの動きを鍛えていたのである

「そうだったんだ・・・なんで言わなかったの？」

「言ったら涙目で無理って言うのが分かってたから」

「あう・・・」

紅那岐に一杯食わされたフェイトはなんとも言えなかった

「んじゃ、お疲れさん」

「うん、お疲れ様」

それだけ言うとフェイトも疲労のせいか倒れるように眠ってしまったのであった

《一つよろしいですか？》

「どしたんバルちゃん」

《その呼び名はお止めください》

あまりに不名誉な呼び名で話が脱線しかけたのを無理やり戻しながら紅那岐に聞いた

《貴方はどれくらいできるんですか？》

「そうだなやってみるか、ちょっと待ってな？設定設定っ」と

そして紅那岐がやったのを後日見たフェイトは

「人間？」

と疑問を持ったらしい

修行内容3 1日目

「さて、最後の修行だが今度は完全にお前のデバイスを使っての強化だ」

「がんばろうねバルディッシュ」

《イエス、サー》

「んで、修行内容はスマツシャーの強化・ハーケンの強化・ザンバーの強化を一気に行くぞ」

「あれ？ザンバーは私に向いてないって」

「外すわけにも行かないから修行するぞ」

「分かった」

そうすると再び紅那岐はライナー君を取り出した

「また飛んでくる物を切るの？」

「機械は同じでも中身が違う、今回はターゲットを出してくれるだけだ」

詳しい説明を始める前に紅那岐は例だという<sup>ダ・カボ・セカンド</sup>と再現する世界を使いバルディッシュを出すとザンバーで構える

「見ている、大剣の一例だ・・・」

するとライナー君からこれでもかと言う大きさ（5mくらい）の大きな岩が出てくると距離をとり構えた

「行くぞ・・・届け雲耀の速さまで、でいいいいやああ！」

すると紅那岐には似合わない叫びをしながら飛び上がり高速で接近し大剣を振るう

「チェストオオオオオツ！・・・我が斬艦刀に！断てぬ物無しっ！」

見事ターゲットを真つ二つにした。それを見たフェイトは紅那岐に質問した

「私もそんな風にやったほうがいいの？」

「うんにゃ、やりたかっただけ」

それを聞いたフェイトは思わずそこでこけてしまった

「なんでやったの!」

「いやあ、これ見るときからいつかやりたいと・・・」

「意味はわからないけど、何となく分かった」

なにやら電波を受信しながらフェイトは納得をしてくれていた

「んで修行内容だがなぶつちやけ簡単だ、最初はスマツシャーかハーケンだターゲットに点かラインが入ってるからそれに沿って点ならスマツシャー、ラインならハーケンで切り落とせ」

「わかった」

「最後にザンバーだがどうしようか悩んだ末」

「悩んだ末？」

「威力の一点強化にしてみた、スマツシャーとかの修行が一定レベル超えるたらさっきの岩より大きいのが出てくるからそれをザンバーで斬れ」

「分かった」

「ただ、凄く硬い。どれだけ硬いかと言うとオリハルコン並に硬い」

「え？オリハルコンって伝説上決して砕けない鉱石だよな？」

「まあ、それだけ硬いってだけだ」

そう言って再び転移していったのでフェイトは修行を開始した

7日目

「思っていた以上にきついな・・・」

フェイトの最初の修行は出てくるターゲットを落とすのだが、そのターゲットは最初の段階こそ正面に出てきたのだが今では場所さえランダムになってしまっている

しかも一定時間攻撃が行われなければ爆発してしまい修行が振り出しに戻ってしまうのである

「ナギに追いつく為にもがんばらなきゃ」

そうしてフェイトは修行を開始していった

2週間目

出てくるターゲットを次々と壊して言っているフェイトはついに最終関門のターゲットが出てきたのである

「全力で行くよバルディッシュ」

《イエス、サー　ロードカートリッジ》

バルディッシュはカートリッジをロードするとザンバーフォームになり更にカートリッジをロードした

「雷光一閃プラズマザンバー・・・ブレイカアアア！」

現在のフェイトの持ちえる最大の攻撃のブレイカーを放つが・・・

ガキンツ

と弾かれてしまったのである

「いったあ……」

はじかれて手が痺れてしまったフェイトは一旦修行を中止してしま  
った

《サーどうやら最後はリセットされずこれに専念できるようです  
で一旦休みましょう》

バルディッシュの提案に頷き完全に休みに入るフェイト

「私も紅那岐みたいに一気に近づいて斬ればいいのかな？」

《恐らく不可能化と……サーとあの方はウエイトが違うので、そ  
もそもあの方は貴方は基本的に手数で敵を倒すのが戦いだと言って  
おられましたし、恐らく魔力を使い攻撃するのが最上かと》

「そっか……だったら」

愛機と相談を始めるフェイトだった

1ヶ月目

「一気に行くよバルディッシュ」

《イエス、サー》

そしてフェイトはバルディッシュに魔力を貯めていく

「はああ・・・」

今まで以上に鋭くしかしどこか力強く力を貯めるフェイト

「轟雷・・・一閃！」

するとフェイトの周りには雷が轟きだした

「ザンレイグリーブ・・・」

雷がフェイトの大剣に落ちると剣の形が崩れ何処までも伸びだした

「ザンバアアアア！」

そしてフェイトは横薙ぎでターゲットを薙いだのであった

「はあはあ・・・」

そして全力で魔法を放った反動でフェイトも倒れそうだったが其処には紅那岐がおりフェイトを支えた

「凄いなフェイト、アレを実際に斬れるとは思ってなかったからな」

勞いの言葉を聞いて嬉しそうに笑うフェイト

「お前もなのはもどうしようにも無く成長するな」

そして、フェイトはその言葉を聞きながら眠ったのであった



（それにしても今のはどう見たって星薙の太刀だったな・・・雲耀の太刀使ったからかな？）

そんな事考えながらフェイトを休ませる為に寝室に運ぶ紅那岐であった

### 修行内容最終工程

そして、最後の修行と聞いていたフェイトは何をやるのかびくびくしながらも紅那岐が何を言うか待っていた

「さて、今までの修行の集大成の最後だが・・・」

「ゴクリ」

「簡単だ！模擬戦をやってもらおう」

それを聞いたフェイトは思わず頬を綻ばしてしまう

「っと対戦相手が来たぞ」

「やつほくお兄ちゃん」

「相手は七星？」

「そうだ、つっても七星は今魔法切れの心配が無いからかなり手ごわいぞ？しかもお前が苦手な遠距離を得意としているし」

「でも、高速で近づけば・・・」

「速さもお前以上だけど？」

「ええ!？」

今度こそフェイトは修行の難しさを知ったのであった

「まあ、今回はルールは無いからガンバレ! そうだ七星  
く(ー、)ホレ」

\*

と七星に何かを渡す紅那岐

「っとこれは？」

「ルーネは危険すぎるからそれを使え、パルチザンランチャーが使えるアームドデバイスだ」

「ありがとうお兄ちゃん愛してる!」

「はいはい、それじゃガンバレよ」

そう言って転移していった紅那岐であったが

「さあって、殺ろうかフェイト」

「フフフ・・・そうだね殺ろうか七星」

「やば、何か地雷踏んだ私!？」

そうしてフェイトも模擬戦を終え3日間休んだ後紅那岐との模擬戦に向かうのであった

A E P 5 三人娘修行 フェイト編（後書き）

レティ「フェイト魔改造終了」

トール「速さの一点強化だったわね」

レティ「あの子は早さがとりえだしね」

トール「手数云々は？」

トール「それって模擬戦くらいしか出来ないし、まだライオット作ってないからあまり意味無いんだよね」

トール「すずかとかに頼めば良いんじゃないの？」

トール「紅那岐も基本的な流れ覚えてるけど、細かいところ忘れだし、たし何より紅那岐自身が原作沿いに近い進め方が望ましいと思うてるからね」

トール「そっか、あの子の今の能力はSSS - くらいかしら？」

レティ「そのくらいです！では感想ありがとうございました」

トール「次はタヌ・・・はやて編よー！」

レティ「タヌキって言おうとしたよこの神」

## AEP 6 三人娘修行 はやて編

### 修行内容2 1日目

「始めるぞはやて」

「今日はタヌキ言わないんやね」

「言って欲しいのか？タヌキ」

「だからっていうなあぁ！」スパーン

もはやお約束となった漫才を行いながらはやての修行を説明しだす  
紅那岐

「さてはやて、お前は自分のスタイルは分かったがポジションは分かるか？」

紅那岐の質問に対してはやては首をひねる、正直に言えば紅那岐の言わんとすることがよく分からずにいた

「まあ分からんかそうだな・・・もしなのは・フェイト・はやてがパーティーを組んでダンジョンにもぐるとしたらお前はどどういう役割だと思う？」

紅那岐の話聞きはやては自分が何をやるかを考え出した

「因みにダンジョンだから道は狭いぞ？」

「すると私の魔法は広範囲だから使えないってことやる？だったら私に出来るのは・・・指揮や！」

「正解。」

はやての出した答えに満足して頷いた後紅那岐は機械を出しはやてに修行の説明を شدした

「さて、お前のスタイルが大雑把な広範囲だから普段の戦闘だと下手したら使えない可能性がある・・・そこでお前がさっき言ったように指揮する能力が高ければお前自身の能力は上がると思ってなこんな修行を思いついた」

そして其処に出てきたのは魔力で作られた人型や獣型の物体だった

「詰め将棋は知っているな？それと同じようにこれはお前がリアルでやる詰め将棋でな、戦況を考え先を読み最善の手をする修行だ」

「なるほど、私がやるには十分やということやね？」

「そつだ、実際駒としてヴォルケنزをお前が使える設定になっている」

すると、其処にはヴォルケنزの面々と思わしき物体が現れた

「お前がする修行はな、こいつらに指示をだしなおかつお前が倒すべき敵を倒すというものだ」

リアル詰め将棋の説明を受けながら頷くはやて

「因みに最初の段階では時間設定は無いが、レベルが上がれば当然あるし上級に行けば敵が普通に攻撃してくるからな？」

それだけ言うと紅那岐は転移していった

「やったるで！」

気合を入れてはやても修行を開始した

7日目

今はやては中級の本当に中盤の問題で苦戦していた、しかも紅那岐が用意したこれは一回間違えたら二度と同じのは出ないという鬼畜仕様である

『ブー不正解です』

「またかいな！」

先ほどから頭を使い集中している様子が見て取れるが逆に周りが見えてないというのが第三者がいたら答えるだろう状況である

「ちよーここら辺になるとシャレにならん位難しいやないか！」

難しさにオーバーヒート気味の頭を振り気持ちを落ち着けようとした時機械から音声 flowed

『ヒントだよん！ヒントだよん』

なんとも気の抜けそうな言い方だが詰まっていたはやてはすぐさま

飛びついた

『えへはやてへ、この音声が流れる頃俺はきつとあの子に告白して  
ると思うんだ!』

「それめっちゃアウトなフラグや!」ビシッ!

とベタなフラグ発言にはやてはツッコミを思わず機械に放ったが

「いったああああ」

機械なので当然硬いのだが思いつきり叩いたはやては手の甲をさす  
りながらも続きを聞いた

『マジメな話お前一発クリア狙ってね?指揮するものとして当然正  
確な解答が必要なのは当たり前だが、経験無いお前がどうして狙え  
るんだ?ぶっちゃけドンドン間違えろそして経験詰め。そして周り  
を見るよ?お前が動かすのは駒ではなく人だ、お前だけで戦うんじ  
やないからな?』

そこで録音は終わったがはやての顔はすっかりしていた

「そか、いつの間にか私は周りをみてなかったんやね」

そして自分の頬をはたくと再び修行を開始した

## 1ヶ月目

「シグナムは右に展開!ヴィータは逆や、ザフィーラ正面の敵の攻  
撃を防御でシヤマルはヴィータの援護や!後は私がまとめて!」

そしてはやては最後の問題に向かっていった

『正解・正解』

そしてソナナ音声が流れた後ははやては大きく息をついた

「はあああああ・・・」

「お疲れ、どうやら終わったようだな？」

「くーくん！」

現れた紅那岐に対しはやては行き成り魔法をぶち込んだ

「あぶねえな、行き成り何するんだよ」

「それくらいするわ！なんやねん上級行っただと思っただら失敗したら罰ゲームって」

「必要だろ？そうすればお前も必死こくし」

クスクスと笑いながら紅那岐はしれつと答えた

「むかつくわ！」

納得できないはやては紅那岐に食って掛かるがやがてへたり込んでしまった

「あれ私？」



「おつかれさん」

その言葉を聞いたとたんはやての意識は闇へと落ちたのである

### 修行内容3 1日目

「さて、次の修行だがな・・・」

今までのことを振り返りはやてはどきどきしていたのだが

「ぶっちゃけ考えつかなかった」

「ちょー！？それはないやろ！」

力の限りツツコミを入れるはやてに紅那岐は申し訳なさそうに答えた

「いやな、なのは達は前からスタイル分かっていたからある程度考  
えていたんだがお前は最近なったばかりだろ？戦っても無いから  
どうしようか悩んだんだよ」

「それなら私と模擬戦するんか？」

「いや、それは最後の日ってか俺も修行の合間に来ただけだし」

それを聞いたはやては直ぐに反応した

「ちよっ！？まだつようなるつもりなんか！」

「あ？俺はまだまだ弱いぞ？」

何言つてのと言つ感じで返す紅那岐にはやては何も言えなくなつてしまつた

「まあそれはおいといて考えた結果」

「うん」

「新魔法作れお前」

「へ？」

「だ・か・ら！新魔法作れ、ターゲットは前に作った幻想君を置いていくから好きな形を作れ、そこでそれをターゲットにしろ」

はやてに説明しながらいう紅那岐は修行と言つことである程度条件は出した

「ただし作る魔法は何でも良いが最低でも、火・水・金・木・土の魔法にそれについてラグナロクより威力高い奴作れ後は好きな作る」といい

「チヨイ待ち！火や水、土は分かるけど木や金ってなんやねん！」

誰もがツツコミを入れそうな事をはやてはツツコム

「ん、五行しらんのか？」

「それは知つとるが、ゲームやないんやで？どうやればいいんや！」

「ゲーム知ってるなら分かるんじゃないのか？まあいいか簡単に言えば木は風・金は雷の属性を持つと言われている」

「何でそっちで言わんねん！」

「俺としてはこっちの言い方が好きだからだ！ああそれと氷とかは普通に風と水の融合な？」

それだけ言い終わると紅那岐は轉移し消えていった

「もう、いいわ・・・」

どこか疲れた顔をしながらはやては修行を開始した

## 2週間目

「灰ほのしろ白き雪の王、銀の翼も以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来こよ、氷結の息吹・・・アーテム・デス・アイセス！」

はやての魔法が発動し、当たり一面を白銀の世界へと染めたのである

「はあはあ・・・応用も何とかなったわ」

この2週間ではやては五行・そして応用魔法を習得した

「次は、ブレイカーを超える魔法か・・・」

はやての使うラグナロクは本来は着弾時の威力拡散による広域攻撃能力を持つているが、用途に応じて拡散を押さえた貫通破壊型砲撃とすることもできる（wikiより）のだが、はやて自身の資

質自体はやはり範囲殲滅型なので難しいのだ

「どないしょ……」

はやてのデバイスはあくまでストレージ、しかも管制人格は無いので一人で考えるしかなかったのだ

「ぐす……」

ついには泣き出したがここには一人だった

「う、うわあああああああ」

大声をあげ泣くはやて

「もう一人はいやや、一人は嫌なんやあつああ」

はやての叫びがあたりに木霊する、それに導かれたように一人の姿が現れた

「はやて様」

それは本来はやてを主と呼ぶもの、しかし今は紅那岐を主と仰ぐ銀髪姿の女性だった

「ぐす、りーす……」

「はやて様、私の修行は終わりましたので馳せ参じました」

どこか畏まった姿でりーすははやての前に傳く

「なんでリリースがくるんや？」

涙目ながらも一応は泣きやんだはやてはリリースに聞いた

「確かに私の主は紅那岐様ですが、はやて様も同じく私にとってはかけがえの無い存在、故に私は主紅那岐より主がいない時ははやて様を主とするようお願いさせていただきました」

其処まで説明を受けるとはやては今度はリリースに抱きつきながら泣いたのであった

（数分後）

「みつともない姿見せてゴメンな？」

「いえ、それより主は何を悩んでいたのですか？」

「実はな・・・」

そこではやては今行き詰まっていることを正直に話し、二人で相談したのであった

1ヶ月目

「鳴り響け、終焉を告げる笛よ、ラグナロクを起す災厄の笛」

終焉を告げる角笛それは神々の黄昏を告げたとされる笛の名それは

・  
・

「今総てを飲み込み無へと帰せ・・・ギャラルホルン！」

そして放たれるは閃光に包まれる白き魔法だった

「はあはあ・・・できたでやっ」と

そういい近くにいるリースに向き直ると其処には何故かいちゃついているように見える（実際リースの膝に寝転んでいる・・・膝枕状態）紅那岐がいた

「今出来た最大級魔法で終わらせたろうか・・・」

「お待ちください！主が横になったのははやて様が此方を向く一瞬前です！」

必死に言い訳しているリースだが顔が満更じゃなかったが・・・

「からかうのはこの位にして出来たじゃないか、しかもギャラルホルンとはね・・・」

どこか自嘲気味に笑う紅那岐であるがはやてはそれどころじゃない

「ちょー、いい加減私からかうのやめてくれへんかな？私もそろそろ怒るわ」

「だが断る！」

「もういいわ・・・」

諦めた顔で溜め息を吐くはやてであった、そしてその後直ぐに倒れ

るように眠った

### 修行内容最終工程

「さて、最後の修行は今までの復習と思わせといて実は違う」

「なにやらせるきや」

「模擬戦させるだけなのになんでみんなこっぴど警戒するかねえ？」

「胸に手を当てて考えてえな」

「??？」

分かってない紅那岐にツツコミを入れる元気が無いはやて

「さて模擬戦の相手だが・・・」

「紅くん来たよ」

「おう、よろしくな」

「相手つてすずかちゃんか！」

「そうだぞ？因みにオールラウンダーだが殲滅戦とすれば俺より恐ろしいのを持つてるからな」

それを聞いたはやては驚いた

「ちょ！？くーくんより恐ろしいってなんや！」

「はやてちゃんも見たよね？私が闇の書の時に使った月光砲ルナ」

「ああ、アレかそれがどないしたんや？」

「うん、バージョンアップしていたらちよつと人には使えない位凶悪になっちゃった・・・」

「因みに最大出力で俺全力でなんとか耐えられたけど、正直アレはきつい」

「なんでやの？威力高いつてのは分かったけど」

質問するはやてに紅那岐とすずかはお互い顔を見合わせた後苦笑い気味に話した

「あれな、すずかの魔力を一切使わないんだよ・・・言っている意味分かるな？」

それを聞いたはやてはますます青い顔をした

「でだ、それを使うのはすずかの意思のまま簡単に使えるんだよ」

「ちょ！？それってロストロギアじゃ・・・」

「因みにすずか以外使えない・・・ってか使わせられないってのが正しいのかな？因みに作ろうと思っても無駄だぞ？すずかと解析したけど管理局どもに作れるだけの奴いないだろうし」

「ね、私も解析がんばってるけど分からない部分がちよつとある



し」

「お前、その年で・・・」

と話が脱線したのを気づいた紅那岐は無理やり戻した

「んでだ、すずかの模擬戦ではあまりに隙が多すぎる時のみ使うことを許してるからガンバレよ？」

「ちょーあたつたら死んでしまつやる！」

「忘れてたこれつけとけ」

そう言つて渡されたのは一つの腕輪だった

「これは？」

「それは魔力を拡散させてくれる腕輪だ・・・因みにチャージなしのルナの砲撃は耐えられるけどチャージ有りはわからんから」

それだけ言つと紅那岐は行つてしまった

「・・・はやてちゃんよろしくね？」

「手加減よろしゅう・・・」

そうしてはやては10日間死ぬ思い出修行に明け暮れその後休み最後の模擬戦へと向かった

A E P 6 三人娘修行 はやて編（後書き）

レティ「はやて編終了」

トール「お疲れ様。因みに氷の魔法は出たけど他のは？」

レティ「ぶつちゃけ出すか分かんない、因みに五行の属性については私なりの解釈なので違うってのもあるかもですが」

トール「何故作れと言ったか1時間くらい聞いただしいわね・・・  
拷問付きで」

レティ「こえーよ！まあ使うとしたらその内ってことで」

トール「はいはい」

レティ「では感想ありがとうございます！」

トール「次はその他の皆さんと紅那岐よ」

A E P 7 三人娘修行 その他の方々編（前書き）

F a t e / Z E R O 始まりましたね

私はさっき2話見ましたがちっこいイリアを見て思わず悶えてしまいました

なにあのカワイイ子？膝に乗っけて愛でたい

A E P 7 三人娘修行 その他の方々編

（ヴォルケンズ修行）

ヴォルケンズの修行はとてもシンプルであった、紅那岐が召還した龍2体とひたすら戦い続けるということであった

『どうした剣の騎士よ先ほどから構えてるだけで』

『小さき騎士もだ、睨むだけなど子供でも出来るぞ？』

2体の龍が言い放つがヴォルケンズは動けるだけの体力が残っていなかった、はや1ヶ月過ぎた現在最初の頃よりも自身の技術が上がったのは分かってはいるが、逆に2体の龍の力も感じてしまっている

1週間で傷をつけるということが出来たので最初の頃は樂觀していたがそれがどれほど甘いものだったのかを痛感した。

なぜなら最初の頃は2体は全く動いてなかったからだ、その後は2体はゆっくり動いて戦いだした、その後は惨敗と言う結果だったのだ

2体は体が大きい為（10m以上）人の動きについていこうとするのは困難に思われるが実際はそんな事は無くシグルトバルムが翼をはためかせばそれは突風となりシグナム達を襲い吹き飛ばし、サヴァンティルが吼えるだけで縮みあがってしまうしだいである

「まさか、これほどの存在だったとは・・・」

「赤羽こやつ等を相手に勝ったというのか？」

「彼って一体……」

「兄ちゃんどうやって……」

各々紅那岐と龍達に対して思ってることを言っていた

『主も最初の頃我らと戦った頃は貴様らのようにボロボロになっていたが、その内……戦っている間と言ったほうが適切か、まあ戦っている間に成長し見事我らを倒したのだ』

『主の成長率はすさまじく早い……恐らく格上と戦えば戦うほどその実力の上がり方は高いだろう、貴様たちに主であるようには求めぬがこれは修行であろう？ならば恐れることなく掛ってくるがよい』

すると2体は力を再び解放し始めた

「ふ……そうだったな。これは修行だ恐れているだけが何が修行だ」

そう言っつて剣を構え目の前の龍、シグルトバオムに向かっつていった

「私は盾の守護獣……主を、仲間を守つてみせる！」

ザフィーラは前線二人の防御役を司り、時には鋼の軛などを使い注意を逸らしていた

「たとえ援護だけでもやれることはあるわ！」

シャマルは結界魔法を応用しだし、局地結界を作つたり遠距離から

の回復を行っていた

「兄ちゃんが言っていたな、ハンマーは打ち砕くものだって……  
だったら！」

ヴィータもまた再び己の槌を構えサヴァンテイルに向かっていった

終了間際

『さあ、今お前達が撃てる最大の攻撃を放って見せよ！剣よ鉄槌よ  
！』

『鋼と湖も己が役割を果たして見せよ！』

2体が言つとそれぞれ力を貯めていく、また2体もヴォルケンス  
を認めたがため自身の最大の技を放つ準備をした

「黒龍……」

「白龍、轟撃！」

「我は鋼、何人足りとも傷はつけられん」

「癒して！心を！体を！」

『さあ行くぞ！』クロスファイア 黒炎十字弾！！』

シグルトバルムが放った黒炎は着弾点より十字にわかれあたり一面  
をなぎ払う

『とくと見よ！』滅びの業火！！』

サヴァンテイルが放つ炎は名に違わぬ総てを滅びへと導くがごとくの灼熱である

それを迎え撃つは2人の技と2人の防御であつた

「・・・一閃！！」

「エグゼキューション・・・シユラアアアクツ！」

シグナムが放つ斬撃は一見唯の横薙ぎに見えるが、実際はそれは総てを断つが如く威力を持つ一撃であり、またシグナムは修行中ずつとシグルトバルムと戦っていた為かその炎はシグルトバルムと同じように黒炎であつた

ヴィータの放つ一撃も傍目にはギガントシユラークに見えるがしかしその威力はその3倍はあろうか威力である、修行中サヴァンテイルに散々力が分散していると言われていたがここに来てハンマーの打撃ポイントに力を集中することが出来たのである

2人と2体の技が炸裂し辺り一面には煙が立ち込めるが晴れると其処にはボロボロの姿のヴォルケンス（ザファイラ除く）と明らかにダメージを受けている2体の龍であつた

『ふ・・・見事であつたぞシグナム！シャマルよ！！』

『そなたらもだ、ヴィータ！ザファイラ！』

ついに2体は認め始めて名前を呼ばれてたヴォルケンスはキョトンとしていた

「何呆けてるんだお前ら？こいつらが認めてくれたのがそんなに以外か？」

今までいなかった声が聞こえ振り向くと其処には

「「赤羽！」」「紅那岐君！」」「兄ちゃん！」」「主！」」

修行の提案者紅那岐がいたのであった

「凄いなお前ら、こいつらにダメージ与えるなんて」

そう言つて2体を見て何か頷く紅那岐

「「ご褒美だ！良いものを見せてやる」

すると2体を召還した宝石を出す紅那岐、何をやるのかを静かに見守るヴォルケンスであった

「無双一神・・・コール！」

龍

「！！」

最初の言葉以外は聞き取れなかったが2体の龍が光り輝き当たり一面を照らし、ヴォルケンスはあまりの眩しさに目を閉じ、やがて光が収まり目を開くと其処には・・・

「な、何だこいつは！？」

「すげえ・・・」

「これが・・・」



「・・・」

あまりの事に理解が追いつかないヴォルケンズに紅那岐は変わる様子なく告げる

「誰にも言うなよ？こいつが俺の本当に契約したやつだ」

それだけ言つと紅那岐は召還したものを元に戻しそのままヴォルケンズに最終日まで休養を告げて後にした

End

↳リースの修行↳

「だから姉ちゃん違うって！こつ、どばーってやってがーん！って撃つつ！」

「だから、ここはこつであの部分はああすれば・・・」

感覚派の飛鳥の説明に対し理論派のリースが魔法を覚えていく姿が最近増えてきたのである。リースの能力は実は飛鳥の能力を劣化コピーしたものであり見ただけ覚えられるがそれだと威力が出ないためリースが理詰め改良してるのであった

以下エンドレス

「流石だね姉様！これで終わりだよ？」

「そうか・・・では私ははやく様の元に行こうと思うがヒトリはど

「つする?」

「僕?ん、僕は兄ちゃんに貰ったゲームやってる」

「そうかではな」

そうしてリースははやての元へと向かったのであった

End

、紅那岐 修行、

「トール修行の前に話しがある」

「何かしら?」

紅那岐は話し始めた、闇の書に取り込まれとき自分の母に会ったことを、そしてその母から何かしらの力を貰ったことを

「そう・・・でもわからないわごめんなさいね?」

「いや、それなら構わないさなら殺るぞ!」

「調子に乗らないことね」

そうして紅那岐の修行が始まった

.....

「はあっ！」

「甘い甘い」

紅那岐が攻撃する攻撃をことごとく後出しにも関わらず相殺しているトール

トールの修行はぶっちゃけ模擬戦と言う名のガチバトルである、トール曰く「私魔法ってあまり好きじゃないの・・・ルーンは使うけどヤツパ肉弾戦よね」といって戦い方を教えるわけでなく只管戦うだけである

「桜花連脚！」

紅那岐が後ろ回し蹴りを放つも紙一重で交わしカウンターを入れようとするが

「まだまだ！櫻舞閃脚！」

回し蹴りの起動を途中から踵落としに変えて追撃するも

「甘いわよ」

「な！？」

本来なら無理な体勢だったはずなのにトールは踵落としを片手で掴んで止めていた

「発想は悪くないけどウエイトが足りない貴方じゃ私は聞かないわよ！桜花連脚！」

「ぐはっ」

そのまま足を離されると紅那岐と同じ技をその何倍の威力を持って放たれた

「ふう私はね能力面・・・貴方で言えば復元ダ・カーボする世界みたいなスキルね？そういった能力は低いのもそれを補っても足りないくらい肉体面は最強のつもりなのよ」

それだけ言つと紅那岐を見る、そこには立ち上がった姿の紅那岐がいた

「うれしいね、家族の中で最弱だった俺がお前のおかげで戦ってる間にも成長できる事が感じられるなんて」

トール話を聞いてたのか聞いてなかったのかは定かではないが紅那岐の目はギラついていた

「貴方は本当に凄いわねそれでこそよ！」

何を言つたか聞こえなかったが再び修行が再開されていった

.....

ところどころではのは達の修行の続きを教えに帰っていた紅那岐だが今全員が最後の修行（模擬戦前・・・修行内容3）入りがんばっている頃紅那岐はと言つと

「流石にやりすぎたわね・・・後は休みなさい貴方は十分強いから」

ポロポロになって倒れている紅那岐にそれだけ言っただけ言っただけ立ち去ろうとしたトールであったが

「まだ・・・まだだ・・・」

ポロポロの姿で起き上がる紅那岐、既にその体に力が残ってるとは思えないような姿だが目だけは死んでいなかった

「貴方の意気込みは買っけどその状態で修行を行ってもそれは力にならないわ」

きちんとした理由を言い終わらせようとする、普段はそれだけ言えれば大人しく従う紅那岐だが今回は何故か引かなかった

「未だだっと言ってるだろおおおおおっ!!」

紅那岐が咆哮する、すると紅那岐の周りに魔力の奔流が現れ紅那岐を包み込んでいく

「あの力は・・・まさか!?!」

紅那岐を見ると其処には黒い瞳が紅く輝いている姿があった

「うおおおおお 『トールハンマー総てを射抜く雷光!!』」

紅那岐が総てを射抜く雷光を放つとそのまま気絶してしまった

「お疲れ様、私」

そう言って入ってくるのは今まで修行していたはずのトールであった

「ええ、それにしても最後の一撃は凄かったわまさか唯の総てトールを射抜く雷光でここまでなるなんて」

そう言って話す二人のトールのうち紅那岐と修行していたほうは半身が吹っ飛んでいた、今の紅那岐の一撃で消し飛んだのである

「取り合えず、戻るわね」

「ええ、ご苦労様」

もう一度労いの言葉を送ると半身が無いトールは後から来たトールに取り込まれる形で消えたのである。今は分身体であり、トール本人だと今は未だ紅那岐と修行をやるうものなら瞬殺してしまいかねないので分身体にやらせているのであった

「これも因果かしらねこの子が持っているなんて・・・ねえ？速く強くなつて私を満たしてね」

どこか嬉しそうだが寂しそうな表情でそれだけ言うトールは紅那岐を別荘の部屋に転送させ寝かしたのであった

翌日起きた紅那岐は自分が最後何かしらをしたことは覚えていた  
何があったのかは覚えていなかったのである  
そして紅那岐もまたなのは達の修行の確認の模擬戦までは大人しく  
休養を取ったのであった

End

くおまけく

「ふんふ、ふんふ、ふん」

楽しげに鼻歌を歌っているのはプレシアである、リンディなどとは違い正式な管理局員ではないプレシアは修行が始まる時を同じくして紅那岐に呼び出されていたのであった

「まさかこんな施設があるとは思わなかったわ」

プレシアがいるのは研究開発室である

「ママ、こんな感じでどう？」

其処に現れたのはフェイトそっくりの子でフェイトの姉たる存在のアリシア

「ん〜いいと思うわ、でもこんなのはどおかしら？」

そう言ってアリシアの持ってきたデータを改良してディスプレイに写す

「あ、いいかも！流石ママ！」

そう言って上機嫌に抱きつくアリシア

「いいのよ？親子なんだから当然じゃない」

そう言って鼻から愛を噴出しながら答えるプレシア、もちろんここにフェイトがいればこの程度ではすまないのだが現在は残念なが

ら修行中である

「それにしても紅那岐君も無茶な要求するわね」

そう言っつて一つのデータを見る其処には

「彼が管理局に入る時に使うデバイスを作れつて・・・確かに彼が持ってるの使うと下手しなくてもロストログアになってしまっわね」

そう、プレシアを呼んだ本当の目的は紅那岐が管理局入りした時使うデバイス作成の為であり怪しい機械を作る為ではなかった

「まあいいわ！こんな素敵な施設を貸して貰えるなら要望くらいこたえてあげるわ！」

「なっちゃんのためにがんばるよ私！」

そして親子は再び研究を進めるのであった

End

「七星達は何をしていたか？」

「はあああつ！」

「ええい！」

「・・・たあ！」

なのは達の模擬戦に呼ばれるまで3棘みの状態で模擬戦を行って



いた

各々苦手な部分の克服である、恋は近接は強いがその分遠距離・対魔力の向上に、すずかはルナと言う切り札を持つがその反面切り札が無い状態の時に対応できる為の訓練を、七星はなのはと同じように遠距離特化であるがタメの近接戦闘者の対応の訓練を行っていたのであった

A E P 7 三人娘修行 その他の方々編（後書き）

レティ「漸く修行編が終わる・・・）；、（チカレタヨ・・・」

ルーネ「ご苦労様です」

レティ「ツールは？」

ルーネ「流石に修行で疲れたそうですね、紅那岐さんの相手は分身体ですが作るのは疲れるそうですね、更に言えば修行中に溜まったツール様がやらなきゃいけない書類仕事してます」

レティ「遊んでるだけと思った」

ルーネ「言いつけますよ？」

レティ「そりゃ勘弁！」

ルーネ「でわゝ感想ありがとうございます」

レティ「次回は修行編ラスト！」

A E P 8 修行編最終話 模擬戦（前書き）

修行編がやっと終了・・・長かったよ）、）、（ママン…

フェイトの技名ちょっと変更  
ブレイカー ザンバーに

「全員揃ったようだな」

紅那岐があたりを見回すと修行した面々がいた

「それより何でリンディさん達がいるの？」

修行に関係ない人たち、リンディ・クロノ・ユーノ・アルフ・レティ（通信で特別に許可を貰ってる為見てるだけ）・エイミィ・マリー・プレシア・アリシア、見学組みに七星・すずか・恋・リースそして・・・アリサ

「それはな、俺達って管理局はいるだろ？ついでに魔導師ランクを見てもらおうとね」

「それよりアリサちゃんなんているの！？」

「ばれただろ？だから教えてやるって言ったんだ、魔法は決してフアンタジーじゃないって」

「で、でも幾らなんでも・・・」

「俺はきちんと聞いたぞ？覚悟はあるのかってな」

「やけど・・・」

「気にしなくて良いわよ、私が決めたんだから」

紅那岐達が話し合っていると其処にアリサが割り込んできた

「紅那岐に言われたわよ半端はダメだって、関わるなら覚悟を持って最後まで関わって」

「アリサちゃん・・・」

「其処までだ、アリサの覚悟にミズをさすなら俺は許さん」

それだけ言つと紅那岐は静かになのは達を威圧するが

「分かったよ、アリサが決めたなら私達は何も言わない」

「やね、何か困ったことがあつたらゆつてな？友達なんやから」

「そうだね、言わないとわからないこともあるから」

修行の成果か紅那岐の威圧にも怖気る様子無く話す3人娘

「さて、話は終わったな？最後にお前達に言うことがある」

そう言つて修行をしていた一同以外にも管理局含む全員に言うように言った

「これからお前達は色々な奴と出会うだろう、それは善人かもしれないしあるいは悪人かもしれない、仮に戦うことがあるなら相手の本質を見極める。唯がむしゃらに突っ込めば痛い目を見るのは自分だ、そして何より友人に迷惑をかけるというのも覚えておけ」

つまりとところ相手の力量を見極めたうえで戦えと言っているのである

「さて、始めようか」

それだけ言うと自分の愛機たちを構えるなのは達をみて紅那岐も己の愛刀輝紅を取り出して語りかける

「慢心することなく油断せず・・・いや、これは俺に言えることかなら言うことは一つだけだ、全力でかかって来い！」

紅那岐の一言で戦いは始まった

まずフェイト・シグナムの2人が高速で近づき紅那岐に斬りに掛るが紅那岐は輝紅を抜くと左手には銃をだし刀と銃で二人の斬撃を止めると

「デイバインシューター・・・シュウウト！」

「いけえ！ブリューナク！」

するとなのはとはやてが防御できない状態を確認した瞬間魔力弾を打ち込んだ、フェイト達は当たる瞬間離脱した  
そして煙が晴れると其処には無傷の紅那岐がいた

「驚いたまさかここまで強くなっているとはね」

それだけ言うと、今度は此方の番と言わんばかりに攻勢に出た

「はあっ！」

刀を振ると其処には一つの斬撃が全員を襲おうとしたが

「ふん！」

一人の筋骨隆々しい男が割って入り煙があたりを覆うが晴れると無傷の男が現れた

「ザフィーラ、今の攻撃AAAはあったんだが何故に無傷？」

「修行していたら、傷がつかなくなった。衝撃は受けるが傷はつかん」

「アーマーかよ……」

なにやらザフィーラが特殊能力を手に入れていた……

「しょうがねえ……なら！」

紅那岐はそうすると刀をしまい双銃を構え問答無用で打ち出した

「任せて！」

「私も！」

するとなのははシューターでシャマルは結界防御を使い襲い掛かるものを防いでいた

「がら空きだぞ！」「食らえ！」「はあっ！」

魔力弾を撃っている為懐が開きシグナム達フロント組みが近づくが

「その程度の事分かってないと思ってるか？」

すると急に紅那岐の体がぶれ視認がしづらくなった

「ほらほら後ろがから空きだぞ！」

急に後ろに現れた紅那岐は双銃で魔力弾を連射するが、間一髪でそれは防がれた

「私は攻撃能力無いけどこういうこともできるわ」

シヤマルが転送魔法を使いシグナム達を一旦自分の場所へと召還し難を逃れた

「助かった」「ありがとうございます」「サンキュー」

「それにしても今のは」

距離が開いたので誰かが聞いた

「今のは俺の移動術で閃舞だ。言っとくがデバイスや機器で見たらそこにいるからな？」

言い終わると同時に紅那岐は再び乱射しだす

「無駄なの！行って」

なのはは修行の再現といわんばかりにシューターで打ち落としていく

「ちいっ！させといてなんだが厄介だな」



舌打ちしながらも手を止めずとにかく撃ちまくる紅那岐にこのとき誰も意図を知らずにいた

「みんなどきい！闇に沈め！ディアボリック・エミッション！」

すると紅那岐を包むようにはやての範囲攻撃が行われ回避不可能なほどの大威力攻撃が行われ、更に炸裂した瞬間紅那岐の状態を確認せず怒涛攻撃が行われる

「翔ける、隼！」

「ギガント・シユラアアアク！」

「エクセリオオオン・バスタアアア！」

「縛れ、鋼の軛、でいいいやああああ！」

「撃ちぬけ雷刃！」

5人の攻撃が追加攻撃として撃たれ煙は更に舞い上がった

「これなら、ダメージは」

「油断はしちゃだめだよ」

「せや、これで倒せたら苦労せんわ」

そう言ってるとき巨大な光が見えたと同時に全員は散開すると其処には一条の光が通り過ぎた

「はずしたか」

煙から現れたのは先ほどとは違い髪を金色に染め、その眼は翡翠に輝く紅那岐の姿であった

「やるな、まさかはやての攻撃の後間髪入れずに追撃をするとは。前のお前達なら間違いなく油断して食らっていたのにな」

そういうと紅那岐は何も持っておらず唯腕を前に突き出す形で喋りかけていた

トルハンマー 総てを射抜く雷光、紅那岐が得意とする魔法である、その威力は現在なのはのスターライトブレイカーと同等であるが速さは高速の速さで駆け抜けるものである

「殲滅には殲滅だ」

そういうと紅那岐は手を上に上げた、他のみんなも上を見ると其処には黒と白の弾丸があった

「これくらい防げよ？ 正邪必滅の流星群！」  
シュトルム・クロイツ

紅那岐が名を発した瞬間無数の弾丸はなのは達に襲い掛かる  
各々打ち落したり、はじいたり、避けたりしている中避けている  
面々はあせりだした

「なっ！？ 追ってくる」

驚いている中に紅那岐が説明を شدした

「俺のスキルが一つ、福音の弾丸ヴァイス・シユバルツって言って音を認識しターゲットを何処までも追っていく、紙一重で避けても無駄だ」

それだけ言うと紅那岐は一瞬でフェイトまで近づくと殴り飛ばす

「きゃあ！」

「フェイトちゃん！？こんのー！」

フェイトが吹き飛ばされなのはバスターを放つが

「頭に血を上らせて照準がずれてるぞ？」

一瞬の隙を逃さず紅那岐は今度はなのはに近づき攻撃しようとするが

「2度も同じ手をさせるか」「食らえ！」

シグナム・ヴィータが攻撃をしてきたのを

「なに！？」「ウソだろ！？」

紅那岐はそれぞれ白羽取りとボールを掴む感覚で二人の攻撃を受け止めた

「着眼点は良いが、攻撃が荒かったぞ？」

すると両腕がふさがっている為か足に魔力をためて

「フェンリスヴォルフ神討つ蹴狼の蒼槍！」

足を振るうと同時に二人を飲み込むくらいの攻撃を放った

「ぐは!」「がっ」

二人が吹き飛ばされたのを確認せずに今度は後衛の要のシャマルに襲い掛かるが

ガキン!

金属にぶつかったような音が聞こえてみるとザフィーラが体を張って守っていた

「盾の守護獣、守る対象は何人足りとも攻撃させん」

それだけ言うつとよると崩れ落ちる、アーマーがあるのが無防備に食らった状態で衝撃は和らげられなかった為にモロにダメージを食らった

「今度は守る奴はいないぞ?」

「私らを忘れんといてな!」

すると後ろから殺気を感じ振り返ると其処には大威力砲撃の準備を完了させていたはやてとなのはの姿があった

「響け終焉の笛!」

「全力全開!スターライト」

紅那岐は迎撃の為自身に使っていた雷光のエネルギー総てを右腕

に集めた、シヤマルはこの時既に転移し危機を脱していた

「ラグナロク！」

「ブレイカアアア！」

「トルハンマー総てを射抜く雷光！」

そしてラグナロクとスターライトブレイカーVSトルハンマー総てを射抜く雷光は拮抗しやがて途中で大爆発を起した  
それを見ていた一同は

「なんて規格外な！」

「凄いわね」

「アレを相殺できるのか！」

など紅那岐の異常性とそれとは別に

「なのはちゃん達強くなったね」

「だね、前だつたら何も出来ずに倒されるのに」

「・・・強い」

「これが魔法・・・」

などなのは達を賞賛する声とアリサはこの世界の魔法を見て驚いていた

「はあはあ・・・なんちゆう奴やねん」

「我らはあるな奴と戦っていたのか」

「あの龍達よりすげーぞ」

「強いね、あの強さにあこがれたんだ」

などダメージを負った一同もシャルマルに回復して貰い紅那岐を見る

「さて、俺はまだ大丈夫だがお前らは限界だろう？撃つて来いお前らが今持ちえる最強を！」

それを聞いた一同は一瞬驚いた顔をしたが事実だった為お互いの顔を見て頷きあった後距離をとり最後の技を放つ準備を開始した

「集え星の光よ、不屈の心は明日へ向かい、星よ光よ打ち抜いて・・・全力全開！」

なのはの周りに特大の魔力が集まりだした

「轟雷・・・一閃！」

フェイトの構えると轟音が鳴り響きフェイトに落ちるとザンバーは眩い光とともに刀身を伸ばした

「鳴り響け、終焉を告げる笛よ、ラグナロクを起す災厄の笛、今総てを飲み込み無へと帰せ！」

何処からともなく聞こえる笛の音が鳴り響きはやては相手を見据える

「気高き黒龍王よ、一瞬でもいい私に力を・・・」

シグナムが構えると刀身に黒き炎が纏われた

「あたしの一撃は全てを砕く！白龍、爆砕！」

ヴィータがギガントフォルムのアイゼンを構えるとハンマーの部分に白き光がともる

「俺も相応に答えよう・・・解放レィギャルンされし九つの世界、4thキー解放！」

紅那岐が呟くと莫大な魔力が当たり一面が覆われ、攻撃しようとしていたものを止めたが

「ひるむな！貴様らはこの程度なのか！」

紅那岐に言われ我に返ったなのは達は再び最後の攻撃を放った

「レイジングスタアアアアブレイカアアア！」

「ザンレイクリーブ・・・ザンバアアアア！」

「ギャラルホルン！」

「黒龍・・・一閃！！！」

「エグゼキューション・・・シユラアアアクツ！」

5人の全力を超えた全力の攻撃が紅那岐に直撃した、流石のなのは達の紅那岐の反撃に警戒はしているが既に満身創痕のため警戒しているだけで何も出来ずにいた

煙が晴れると其処には服をボロボロにした紅那岐がいた

「見事だ！お前達は確かに今俺にダメージを与えた！」

それを聞いた一同は驚いた、あの紅那岐にダメージを与えたことを。特になのはとフェイトはだ

なのはとフェイトは最初に戦った頃に比べデバイスも強化され強くなった事を実感していたが、紅那岐はそれ以上であった。最初に戦った頃に比べ紅那岐の強さは異常とも取れるくらい変わりなのは達の仲間のガンダムを余裕を持って相手にしていたからだ

「ご褒美だ、お前達に俺が持っている最強のうちの一つを見せてやる。避ける受けるは自由だ」

すると紅那岐は右腕を前に突き出し左で支え力をためだす、なのは達は避けてもいいと言われたが紅那岐が受けた為自分たちも協力し防御を選択していた

「フ・・・受けるかならば得と味わえ！全てをまとめたこの一撃を！」

紅那岐の前に極大な魔力が集まり溜まりだした、そして放たれるは極光の一撃その名も

「『オーバーロード・偉大なる穢れなき極光レヴァテインの世界！！！！』」



それは紅那岐の魔導砲の中でも最強の一つ、迷い無き光闇の剣で  
もなく一多重式屈折次元収束魔導砲でも無く全てを光へとかえる一撃  
なのは達は今できる最大の防御を張るが、極光の前に飲み込まれ  
ていった

「ふう・・・」

紅那岐が一息つく頃には霧が晴れ其処にはボロボロ姿なのは達が  
倒れていた

「終わりだ・・・よくやったなみんな」

そう言つて最後の戦いは終わり全員眠つたのであつた

後日行われた、すずか・七星・恋・リース達による模擬戦も同じ  
ように驚愕されたことをここに記録した

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
魔導師ランク測定結果

高町なのは

ポジション：センターガード

魔力量：SSSS+

戦闘技能：SSS

魔導師ランク：SSS+

フェイト・テストロツサ

ポジション：ウイングガード  
魔力量：SSS  
戦闘技能：SSS+  
魔導師ランク：SSS+

八神はやて

ポジション：センターガード  
魔力量：SSS+  
戦闘技能：SSS+  
魔導師ランク：SSS+  
レアスキル：蒐集行使

シグナム

ポジション：フロントアタッカー  
魔力量：SS+  
戦闘技能：SSS  
魔導師ランク：SSS-

ヴィータ

ポジション：フロントアタッカー  
魔力量：SS  
戦闘技能：SSS+  
魔導師ランク：SSS+

ザフィーラ

魔力量：S

戦闘技能：SS

リアスキル：鋼軀執行ハイパーアイマー《あらゆる攻撃を受けても体に傷は付かないが衝撃や斬られたた感触などは無効に出来ない》

シヤマル

魔力量：AAA+

戦闘技能：AAA

魔導師ランク：AAA+

シヤマルは戦闘時の戦力としては回復などに特化し局の衛生兵の10人以上の能力を発揮

赤羽七星

ポジション：センターガード

魔力量：自身の魔力量はS 紅那岐の供給により最大でSSS+

戦闘技能：SSS+

魔導師ランク：SSS+

月村すずか

ポジション：オールラウンダー（フロントアタッカー並びにウイングガードが主）

魔力量：SSS

戦闘技能：SSS+

魔導師ランク：SSS+

呂奉恋

ポジション：フロントアタッカー

魔力量：SS

戦闘技能：測定不可

魔導師ランク：SSS+

リース（リインフォース）

ポジション：センターガード・フルバック・ウイングガード

魔力量：自身はAAA+ 紅那岐による供給でSSまで上がる

戦闘技能：SS

魔導師ランク：SS

レアスキル：理論行使（蒐集行使と似て異なるもので、見た魔法を自身の理論に置き換えて使用可能）

赤羽紅那岐

ポジション：全種（主はフロントアタッカーだが前面でセンターガ

ードの役割なども担うことも可能）

魔力量：測定不可

戦闘技能：測定不可

魔導師ランク：EX（存在しない為便宜上追加）

A E P 8 修行編最終話 模擬戦（後書き）

レティ「おわったー！」

トール「お疲れ、ってかアレは使わないの？あの子アレ使ったかな  
きゃ持つてる意味無いわよ？」

レティ「次回以降使わせようと思う」

トール「そう、それにしてもみんな強いわね」

レティ「そりゃ、そうでしょwあの修行に耐えてこのくらいじゃない  
いってえ？ってなるよ」

トール「そう、それにしても紅那岐は4th使ってあんなものなの  
ね」

レティ「ん〜、4thは紅那岐の半分の実力だけどその全力は使  
ってないって感じかな？」

トール「そう・・・んじゃ私はあの子の修行に行ってきたわ、どう  
やらあの子の力解放されかけてるってあの子自身が言っていたから」

レティ「よろしく〜、では感想ありがとうございました！」

ルーネ「次回はマテリアル戦です」

A E P 9 マテリアル戦 前編(前書き)

時系列? 気にしちやいけないよ?

A E P 9 マテリアル戦 前編

今日は大晦日、紅那岐は家になのはやフェイト一家、はやてを招いていた

「よつと」

紅那岐は何をやっているかと言つと

「もう直ぐできるからなー、はやてつゆは？」

「安心しい！出汁からとつてばうちりや！」

年越しそばの準備をしていたが、其処に凶報が

『すまない、実は魔力反n・・・』ブチ

其処になにやら通信ウィンドが開いたようだが一瞬で斬り捨てる面々

『お前なんで行き成り消すんだ！』

「うるせえ！いいか？まだ俺達は管理局じゃないんだ、しかも今は大晦日で俺はそばを打つのに忙しいんだ！後にしろ」

『君はそばと事件どっちが大事なんだ！』

「そば！」×その場の全員

紅那岐の料理の腕を知っている面々+噂を聞いた人はそばを食べ

るほうが重要と取ったなぜなら・・・

「そばは任せろ！俺の好物であり、打つのも得意だ！粉から集めるか・・・」

と紅那岐が得意げに言ったので紅那岐と一緒に暮らしてる面々はもちろんの事他の人たちも期待して待っていたのであった

「お前管理局だろ？動員して何とかならんのかよ」

『いや、実はSランク近いのが3つ、SSSが1つ、それ以上が1つあるんだ、だから局の人員で対処が難しいんだ頼む』

通信ウインドの前で頭を下げるクロノに対し

「頼み方ちがくね？」

『おねがいします、協力していただけませんか？』

「最初から偉そうに頼まないでそうやって頼みな、俺は自分が偉いって思ってる奴が嫌いなんだよ。局に入ればそれ相応の対応をするけど、今は未だ違うんだよ。だから頼み方は・・・もういいや、めんどくせ」

それだけ言うと紅那岐は支度しだすと全員同じように支度しだした



- - - 移動したんだよ? - - -

「で、やって来たは良いけど其処まで強い魔力反のは無いぞ?」

紅那岐は機器異常の魔力探知能力を持つてるので現場へ来たは魔力探知には引つかかかっていなかった

「あいつがウソをつくとは思えんしなあ?」

あたりを見回すが気配はついてきた三人娘×2（紅那岐側の七星・すずか・恋になのは・フェイト・はやて）にリリースだけであった

「うっん帰るか?」

そう言つて後ろを向くと紅那岐は信じられないものを見た

「なのは、いつの間に髪を切ったんだ?それになんか理知的だし」

え?と言葉とともに後ろを向いた七星達

「え?フェイトいつの間に髪染めたの?それにアホっぽいし」

「逆にはやてちゃんはいつの間にユニゾンを?それに尊大な態度っぽいけど?」

「・・・イメチェン？」

其処にはいつものバリアジャケットとは異なる三人娘がいた

「いや、確かに似合うけどさ態度とか色々込みで・・・ってかそっちのほうがいいんじゃない？」

紅那岐が感想を言うと突如として声が響く

「にゃ！？私はこつちだよ！と言うか酷いの！」

「そ、そうだよ！それに私をアホっぽくしたって似合わないよ！」

「せや！それになんか納得してるのが気になるわ！」

旧三人娘の声が聞こえたので振り向くと其処には旧三人娘がいたのである

「あれ？じゃあこいつらは？」

紅那岐が疑問に思い首をかしげていると

「私は【理】を司るマテリアルシュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者と申します」

スカートの両端を持ちお嬢様が自己紹介する様のようにし

「僕はね【力】を司るマテリアルレウイ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者っていうんだよろしくね！」

普段のフェイトとは逆の感じ（アリシアっぽい）で挨拶をし

「我は【王】を司るマテリアル閻統べる王と言つ、覚えるのを許可しよう!」  
ロード・ディアーチェ

名前に恥じぬ態度で挨拶をする

「うん、やっぱりこっちのほうが様になってね?」

「うん」×旧三人娘以外

「」「」「ひどいの!(よ!)(わ!」「」

なにやら漫才風になって来た時にリースが参加する

「主、どうやらこいつらは閻の書の残滓で出来ているようです」

リースの言葉に驚く一同だったが

「ふーん」

紅那岐にいたっては気にしてなかった

「お前らの目的は?」

軽い感じで聞く紅那岐に答えたのはシュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者と名乗った黒なのはだった

「我らの目的は一つ、閻の書の復活のみ。我らはそのために作り出されました」

「やっぱ、なのはより落ち着きあるし話してることもしつかりしてるな・・・色的にもあってるし」

なにやら余計なことを言い出した紅那岐に問答無用でレイジングハートを構えたなのは

「オーケー、取り合えずおふざけやめるから下ろせ、俺でも流石に今のお前に攻撃されると何かと痛い」

なのはを落ち着けた後紅那岐はマテリアルっ娘に語りかける

「とりあえずだ、闇の書の復活無理だけど？」

「其処にいるのは管制人格です、それに我らの力を加えれば」

「うん、取り込まれていらぬの捨てられてお仕舞い。俺の紅天の書は一種のロストログイアクラスだからお前らごときの力が加わっても無駄の一言で終わるが？」

そう言っつて紅那岐は結論を説明する、紅天の書に関していえば違つが説明が面倒の一言になり言わなかつた

「んで、どうする？お前ら時間ねーべ？」

紅那岐はマテリアルっ娘の状態に気づき問いかけると

「ではせめて最後はオリジナルと」

そう言っつてそれぞれ似たような武器を構えた

「うんいいよ、私なんだよね？戦おう」

「私もいいよ」

「私もや！」

なのは達が答えたので紅那岐達は下がる

Side End

なのはVSシュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者 Side

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン行きます！」

「シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者とルシフェリオン参ります」

お互い再び自身と愛機を名乗るとお互い駆け出した

「パイロシューター、シュート！」

同じようなデバイスに同じような魔法を打ち出した

「無駄なの！シューウウツト！」

10発ほどはなつたシュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者に対しなのはは1発だけを打ち出し全て打ち落としたのだ

「そんな！？」

驚きを隠せないめんといのちいね星光に対しなのはは言った

「ちょっと前までなら苦戦したけど、今は違つの!」

「っ!?!それなら!」

そついうと星光はなのはのエクセリオンモードと同じ状態にルシフ  
エリオンを移行した

「アレは!・・・つてなら私も!」

なのはは一瞬何かを見つけ恍惚とした表情をしたが直ぐに振り向  
き負けじと同じようにエクセリオンモードに移行する

「ディザスターヒート!」

星光からエクセリオンバスター級の砲撃が3連射されたが

「エクセリオンバスター・ミーティア!」

なのはも負けじと同じように3連射し相殺する

「オリジナルがここまでとは・・・なら!」

星光は杖を構え詠唱をします

「集え、明星」

なのはは次が最後になることを察し同じように詠唱を開始した

「集え星の光よ」

そして二人は同じように最後の時を迎えるために謳った

「全てを焼き消す焰となれ！」

「不屈の心は明日に向かい、星よ光よ打ち抜いて！」

「ルシフェリオン・ブレイカー！」

「レイジングスター・ブレイカー！」

同時に放たれた収束砲は中間で一瞬で均衡した後なのはRSBに打ち抜かれ星光は光へと消えていった

「きっと私もおなじだったんだよね」

なのはの寂しそうな呟きは空に飲まれていった

Side End

フェイトVSレヴィ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者 Side

「負けないからね！」

「うん私も」

そうして駆け出すが、既にこの時点で優劣は決まっていた

「たあっ！」

雷刃が勢いよくデバイスのバルニフィカスを振るうがフェイトは紙一重で避け追撃する

「はぁ！」

「え！？きゃぁ！」

吹き飛ばされ驚いてる間に既にフェイトは雷刃に接近し攻撃をしていく

「ふっ！」

一息で一気に決めようとしたが雷刃の姿が一瞬で消えた

「あ、あぶないな！もう本気だからね！」

すると雷刃はフェイトのソニックフォームと同じ格好になり更にザンバーと同じ状態だった

「なら私も！」

フェイトも負け時にソニックになり、更にザンバーを起動した時

「！！！？？」

何か猛獣にロックオンされた気分になりあたりを伺うが何も無かった

「ねえ今……」

「うん、でも……」



二人は何も無かったように再び駆け出したが、条件が同じである異常雷刃に勝機は無かった

「くっそー！これでどうだあぁ！」

そうしてバルニフィカスを肩に担ぐように構える。最後の攻撃であろうことはフェイトも感じ同じように構える

「碎け散れ！」

「轟雷・一闪！」

そしてあたりに雷が木霊し二人に落ちる

「雷神滅殺！きよっこーざん！」

「ザンレイクリーブ・ザンバー！」

雷神が上から斬りかかるのに対しフェイトは下から振り上げる形で斬りにかかる

結果は分かるようにフェイトのザンレイが雷刃の攻撃を切り裂きそのまま消し去ったのである

「貴女の元気少し貰っていくね」

そうしてフェイトは顔を挙げみなの下へ向かったのである

Side End

はやてVS闇統べる王 Side

ロード・ディアーチェ

「むかつくわ！とつと消ええ！」

「黙れ！王に背くとは愚民が！」

ここは水と油の如く決して交わらない二人が喧嘩のごとき魔法を打ち合っていた

「沈みい！ミストルティン！」

「ちい！ならドウムプリンガー！」

そしてはやてが魔法を放てば王が相殺するといつ見ていればワンサイドゲームに見えなくも無い展開が其処にはあった

「塵芥の分際で王に逆らうな！」

「うっさい黙り！私は絶対にそんな性格やない！」

完全に子供の喧嘩状態なのだが撃っている魔法はどれも大きく巻き込まれれば一発KOもありえるのであるが

「こつなつたらこれで終わりだ！」

一瞬で距離をとると魔力を貯めだす王

「私だつて負けへん！」

はやても負けじと魔力を貯めた

「絶望にあがけ塵芥」

「総てを無へと歸せ」

「散れッ！エクスカリバーッ！！」

「ギャラルホルン！」

そして打ち出される極大魔法にあたり一面は碎け散りそして

「終わりや！」

「・・・ここまでか」

そうして闇の王は消え新たな夜天の王が残ったのであった

「あんたは認めたくないけど、誰にも揺るがせ無い信念だけは見習おうと思つわ」

静かに呟きはやてもまたみんなの下へ歸って行った

A E P 9 マテリアル戦 前編（後書き）

レティ「うん、マテ戦思った以上に長くなったしなのは達の態度が微妙に癪にさわる」

トール「なおしなさいな」

レティ「だが断る！」

トール「あっそ、てか何故に前編？」

レティ「書いたっしょ？SSSS以上がいるって」

トール「そういえばそうね」

レティ「では感想ありがとうございました」

トール「次回でね」

レティ「次回に久々あいつ登場！」

「さて、後は2人か？しかしいないな」

なのは達が戻ってきたので最初の報告に合った残り2人を探しているが見つかる気配が無い

「このまま帰っちゃダメだよな？」

めんどくさいから帰りたい意思表示をしたが

「ダメ！」×紅那岐以外

とやはりダメだしを食らい仕方なしにそこらへんを見てみると声が聞こえてきた

「おーっほっほっほ」

どこかのバカっぽいお嬢様のごとくの笑い声が聞こえたのでそちらを向いてみると

「おーっほっほっほ 漸く気づきましたわね」

うん、金髪ドリルじゃないけど何故か白っぽい銀の長髪女がいて笑っていた

「・・・誰？」

「あら？分かってるんじゃないですかオリジナル」

なんか言われたので周りを見たが全員首を振るんで自分に指を向けて俺？ってやると

「当然ですわ！ここまでの力を其処の小娘が持つてるわけありませんわ！」

って言ってるんだが、お前今全員を敵に回したぞ・・・てか俺と同じくらいの身長で小娘呼ばわりはどうかと思うぞ？

「あー取り合えずリース」

「は、はいなんでしょうか主」

きよっどってんなよ、俺のほうがりたいわ

「俺って蒐集受ける前にあいつらボコったよな？」

「はい、主は蒐集されていませんね」

「何故に俺のマテリアルがいる？そして何故女なんだ？」

疑問に思ってるのを素直にぶつけるとマテリアルが教えてくれた

「私が特別に教えてあげますわ！確かに貴方は蒐集を受けてませんが闇の書に取り込まれたとき貴方の力の一部を解析しそして私が生み出されましたよ」

親切に教えてくれたのは構わないが、取り込まれたぐらいであんなくらいになるか？少なくとものは以上なんだが

「取り合えず名前教えてくれ、そして消えてくんね？」

「なんですかその言い方は気に入りませんわ！しかし名前は教えて差し上げますわ私は・・・」

なんかタメに入ってるんだが、めんどくせえ・・・てかマテリアルって可能性つばい感じがしたんだが違うんか？

「私は【全】を司るマテリアル、名を終焉の抹消者ディマイズ・イレイザーと言いますわお見知りおきを」

スカートの両端を持ちお嬢様然として挨拶してくる

「あー紅那岐だ、知ってるだろうがな」

お互い挨拶をしているとマテリアルが話しかけてきた

「さて、私も時間がありませんわ。貴方に勝負を挑まさせていただきますわ」ビシッ！

効果音が聞こえてきそうなくらいに指を指してきた

「ええ〜」

「何でそこで不満そうな声を上げますの！貴方が戦闘狂バトルマニアってことは聞いていますわ！」

誰だそんな事を言ったやつは！俺は決してシグナムみたいな戦闘狂バトルマニアじゃない！

「七星変わってくんね？」

「だが断る！」

「すず「紅くん？なにかな？」なんでもないです、んじゃ恋」・・・  
「寝てるし」

周りに味方がいないよ、やりたくないよこんな奴とてか認めたくない

「良いからやりますわよ！」タイビュランス疾風迅雷！！」

「え！？」×紅那岐以外

わーお、流石俺のマテリアル俺の技使えるんだ

「何を驚いてますの？私がこれを使えるのも其処にいるオリジナルヴァイス・シユバルツを読み取った結果ですわ！まあ、せいぜいこれと後は福音の弾丸くらいしか読み取れませんでした」

更にわーお、厄介な能力ないよこいつ

「紅那岐君がんばって」「ナギ、ファイトだよ」「くーくん、きばってな？」

三人娘の応援が軽くイラつときたがやらなきゃダメなんだよね

「しゃーない、ほら掛って来い」

そうやって手で挑発すると掛ってきた



「行きますわ！はっ！」

「っつ」

喋り方はバカみたいだが実力は本物だな

「はいはいはいいいいー！」

「よっ、はっ、てあー」

連続攻撃を避けてるんだが相手が不満な声を漏らしてきた

「貴方マジメにやる気ありますか？先ほどから・・・それに私が疾風迅雷使っても貴方は使いませんし」  
疾風迅雷

「やる気無いのにどうやって？てか俺は既に疾風迅雷使っても使わなくても速度は変わらなくなったからな、使う必要なくなったし」

アレを使うときは単純に身体能力上げるだけだしな、後は放電を応用して俺自身が対応できない速度で来た相手への対処くらいか？  
殺気と音とアレでかなりの予測が立つようになったしな

「なっ！？あなた何処までチートになれば気が済むのですか」

「つつても全部修行による結果だし、何より疾風迅雷使う利点は単純に総てを射抜く雷光を使うときに腕に負担かからないってだけだし」  
トルハンマー

相手も丁寧に説明してくれてんで俺もしてるんだが様子かな

「気に入りませんわ!」ノットウング「九つの世界!!」

「おいおいおい!お前それ使えんのかよ!」

聞いてねーぞ、アレ使われちゃ俺でも最低でもダメージだ

「切り札は取っておくものですわ!さあ行きますわよ」

「ちっ!」タービュランス「疾風迅雷・九つの世界!!」

俺は平気だが後ろの連中が食らったら最悪死ぬ、相殺するっきゃねえ。

そして俺達が打ち出す瞬間、何かの光が走った

Side End

三人称 Side

紅那岐達が戦いを行っているころなのは達は観戦していたのだが

「あれ?弱いのかな?」

なのはが首をかしげながら呟く、傍から見ればそれは紅那岐が凄く余裕があるように見えるからだ

「・・・違っ」

さっきまで寝ていた筈の恋が声を上げる

「え？でもナギかなり余裕そうだよ？」

フェイトもまたなのはと同じ意見なのか疑問に思い尋ねる

「ん〜、お兄ちゃんが前に言ったこともう忘れちゃったの？」

七星がヒントの如く答えを教える前に3人に尋ねる

「えっと、相手の力量を測れやっただかな？」

はやてが一番はまりそうな答えを言った

「そうだよ、もしもなのはちゃん達が戦ったらあれ避けれる？私は恐らくガードが限界・・・倒す方法はあるけどね」

すずかが答えを言うとなのは達は再び戦いを見て置き換えてシユミレーションをしてみると

「勝てないの・・・」「私の最速と同じだ」「私も一発でのされてしまっ」

と結論にいたったのである

「あと今のはお兄ちゃんに聞かれてなくてよかったね、聞かれてたら怒っていたよ？相手を嘗める行為をしていいのは相手がどうしようもない人だけって決めてるから」

説明を受けていた三人娘は軽く息を飲む、確かに紅那岐は戦いにネタを持つてくるが戦い方自体はマジメなのである

「あれは!？」

さすがが何かに気づいてそれを見ると前の戦いで闇の書のプログラムを消し去った紅那岐の必殺技の一つが見えた

「ちよっ!？あいつあんなの使えるの!？」

七星が驚いていると同じように紅那岐が構えていた

「・・・相殺するつもりだ」

恋が言うように紅那岐も同じように準備を始めていた、そしてお互いが打ち出す姿勢になった

「総てを超越せ・・・」

二人が打ち出す瞬間光が走り二人はそれに飲み込まれた

「え?」×そのばの全員

その場にいるものは一瞬何が起きたのかが分からなく止まってしまったが恋がいち早く元に戻り光の出所を見つけた

「・・・あそこ」

指を指す方向を見れば其処には剣をまるで銃のように構えた姿の装甲をつけた男がいた

「セツナ!？」「セツナ君!」

なのはとフェイトがその装甲の男のなを呼ぶとそいつは可笑しそうに笑う

「ふ、はぁーはっはっは！どれだけ強かろうと無防備な状態でこれだけの攻撃うけりゃどんな奴でもひとたまりもねえだろ！」

倫理観など無視し笑い続ける男に対し

「セツナ今の殺傷設定だよね！なんでそんな事を」

「フェイトお前は何を言ってるんだ？敵を前にしてなんでそんな事言う・・・あぁきつと操られてるんだな、ちよつと待っている？直ぐに其処にいる奴ら皆殺しにしてキラの敵も討ってやるから」

どこか狂ってる言い方をしながらセツナは再び準備をしていたが

「！！？」ゾクッ

その場にいる全員が凍った、それは殺気である今までこれほどの殺気を受けたことも無いものは息をすることすら許されないほどの殺気である

「辞世の句はそれでお終いか？」

煙がはれると其処には血を流しながら鋭く睨む紅那岐がいた

「ゲホツゴホツ、な、何故ですの？あなたは私の協力者のはずなのに・・・」

マテリアルは既に消えかかっていた、そしてマテリアルの言葉を

聞いた紅那岐は更に殺気が溢れ出した

「なるほど、味方の命を餌に俺を殺そうと？」

静かに、本当に静かに紅那岐は言う。

「だからどうした！マテリアルなんて所詮はプログラム、それがどうなるうと知ったこっちゃねえ！」

セツナは再び突っかかるが

「そうか、それが辞世の句か・・・アイ・スペース発動」

紅那岐・セツナ・マテリアルを包み込むように結界が展開される、外にいるものは中の様子が見えない代わりに殺気の恐怖が無くなり漸く緊張から解かれた

「い、今のは！？」

「ナギは！？」

「それにマテリアルも！」

三人娘が今起こったことを確認すると七星から説明を受けた

「恐らくお兄ちゃんはみんなに負担をかけないよう隔絶結界で勝負をつけるんだと思う、だから待つてよ？」

そうしてその場にいる全員は結界があるほうを見るのであった

- - - - -

「な、なんだここは!？」

「ここは転生者同士が戦う為の結果、お前に逃げ場は無い」

紅那岐はそういうとマテリアルの方へ向かう

「1分だ、1分だけまてるか?消える前に少しだけ話をしたい」

「か、構いませんわ貴方が最期に何を言うか興味がありますから」

マテリアルの言葉を聞いた紅那岐はセツナへと向かうその手には黒い外殻の剣を持ち

「て、テメエも転生者か!だったらいいキラを何処にやった!」

「誰かは知らんが誰も覚えてないのならそれは既にこの世界にはいない・・・お前ももう気づいてるはずだろ」

目を瞑ってその場に佇む紅那岐に押されながらもセツナは罵声を飛ばす

「ふざけるな!なんだって言うんだお前は!」

「俺は、誰だろうな?ただいえることは一つ」

そこで紅那岐は目を開け言い放つ

「誰よりもこのゲームの内容を把握してるっただけだ」

そう言っつて睨む紅那岐の瞳をみて驚くセツナ

「な、なんだよそれ！それにその目は」

今紅那岐の瞳を見るならば赤かった。味方が見ればそれはとても綺麗と言っってくれるだろう、しかし敵が見ればそれは鬼や悪魔・否、鬼や悪魔すら逃げ出すその瞳である

「何を言ってるか知らんがお前は俺の前で唯一つの間違えを起した」

紅那岐が持つ剣がひび割れていきながらも紅那岐は続きを言う

「お前は仲間の命を囿に攻撃をした、それがお前の死ぬ理由だ」

紅那岐は戦いにおいて罨や闇討ち、1対多果ては毒ですら戦いにおいて許容するそれらは全て気をつければ良いだけだからだ、ただし仲間の命を囿にすることだけは許さない。これは紅那岐自身が昔より命を奪ってきた故の拘りである。

ゆえに紅那岐は仲間と連携して戦うことよりも一人で戦う理由が自身の攻撃に巻き込まれてしまう可能性がある故にだ

「さあ終わらせるぞ」

そして紅那岐が持つ剣が砕けたように見えたがその中からは黄金に輝く一本の剣が現れたのである

「な、何だそれは！」



相変わらず混乱しているセツナが聞いてきたので紅那岐は答える

「これは魔剣にして聖剣、かつてスウアフルラーメが携えた剣」

そして構える紅那岐

「そしてこの名は・・・」

剣が輝きを増しセツナはあせりながらも自分も攻撃しなきゃと思い攻撃をした

「う、うわああああトランザム！」

そしてセツナから先ほどと同じように全てを飲み込まれるような攻撃を放った

「『ティルヴィング黄金色の約束!!』」

紅那岐は一瞬の間にその聖剣の真名を解放し剣を振ったその結果は

「終わったな」

何も無かった・・・否、ティルヴィング黄金色の約束による攻撃によりその存在ごと斬られたのである  
そして結界が砕けた

.....

結界の中から出てきた紅那岐になのは達の認識はマテリアルとの

戦いでの勝利である

アイ・スペースによる戦いでは中で倒され消えたものはもともと存在せず、記録にも残らないものである。ただしその存在を知る物はその限りではない

「さて、マテリアル先ほどの約束だが」

そう言って倒れているマテリアルに近づく紅那岐

「ええ、私の最期になにを言ってくれるのかしら？」

紅那岐の戦いを見て満足していたマテリアルは紅那岐に聞く

「なに、お前を助けるのは無理だがお前の存在を消すのは惜しくなつてな。お前の力を吸収したくてな」

「出来るわけありませんわ」

どこか自嘲気味に笑うマテリアルに対し紅那岐は

「なに、元は俺の力の一部だろう？ならできさ」

そうして手を伸ばす紅那岐にマテリアルは迷うことなく手を重ねる

「じゃあな、本当はきちんと決着をつけたかったが」

「さよなら私、そんな態度は最初から見せて欲しかったですわ」

光になって消えていくマテリアルは紅那岐にかぶさるように消えていった

「終わったぞ……ってどうしたお前ら？」

紅那岐がことが終わり振り向くとなのは達は固まっていた

「紅那岐君だよね？」

「当たり前だろ？何言ってるんだ」

分らず紅那岐になのは達は微妙な表情をしている

「えっとナギこれ」

そう言つてフェイトが鏡を渡すと其処には

「……誰？」

黒い髪が長くのび、鋭かった目つきは若干垂れている姿が映っていた

「なんだか女の子っぽいね」

すずかの一言に紅那岐は慌てて自身の股を叩いて確認する

「マジか！？……無い！」

「そんな確認すなああ！」スパーン！

紅那岐の確認の仕方がアレなのですかさずツッコミを入れたはやて

「え、ええ！？お兄ちゃんがお姉ちゃん！？」

あたりが混乱する中七星が一番混乱していた

「くっそ、復元する世界使っても戻れねえ……」

その場に手を着きor zポーズで固まる紅那岐に

「これで一緒にお風呂は入れるね」

「……うん」

場にそぐわない声が若干聞こえていた、その後時間も時間だったので帰ったのであった

翌日起きた紅那岐は

「直ったぁー！ーっ！」

と喜ぶのであった、更に確認してみたところ女体化が自由に出来る能力を手に入れた

「うん、変身魔法使えなかったから丁度いいや」

となにやら得した気分であったとか

A E P 1 0 マテリアル戦 後編（後書き）

レティ「マテ戦終了！紅那岐の女体化！」

トール「あの子も難儀な」

レティ「まあ、いいじゃんw後は紅那岐の最後の武器を漸く出せたので説明を」

黄金色の約束：かつてオーディンの血縁者のスウアフルラーメが作ティルウインゲらさせた狙った敵を決して逃さず斬れないものは無いといわれる剣である

それを振るえば全てを切り裂き勝利をもたらすといことで聖剣としての能力を持つが3度振るえばその身に破滅をもたらすと言うことで聖剣でもあり魔剣である

また、剣自身に意思があるように思われ主と認めなければその切れ味が也を潜め外郭による鞘を纏い能力は発揮できない

能力は距離や大きさ、概念を全て無視し狙ったものを斬り伏せるものである

トール「扱いは宝具って感じかしらね」

レティ「だね、真名解放しなきゃ使えないし」

トール「因みにあの子があの状態ならマイナス要素はでないわ」

レティ「まあ紅那岐が使う魔法自体宝具みたいなもんだしね」

トール「読者に説明すると紅那岐の使う魔法は本来あるであろう宝

具を擬似的に魔法に応用してるわけよ」

レティ「レーヴァテイン迷い無き光闇の剣は災厄の杖って呼ばれるように世界を破壊させるもの故にアレを本気で打てば世界とは行かないまでも町消し飛ばせる威力はでるよ」

トール「トールハンマー総てを射抜く雷光なんて私が持つ雷槌然りだしね」

レティ「というわけです、では感想ありがとうございます」

トール「次回は日常編よ」

A E P 1 1 〽海だ！水着だ！罰ゲーム〽（前書き）

因みに独自設定が入っています

色々な騒動があつたが無事管理局した俺達だが実際はまだ小学生、ぶつちやけ其処まで忙しくは無いんだが何故かなのはが異常に働いてる気がする。

んで、それを危惧したフェイトやはやてはなのはの息抜きにと遊びに行くことを誘つた

「どつかええ遊ぶ場所ないかな？」

と俺に聞いてきたがぶつちやけ俺はこの町にきてまだ2年ちよいしたつて無いから正直分からん

「と言うわけでバーニングスお前の家つて別荘もつてない？」

「あんた聞く態度間違つてるって気づいてるわよね？去年の大晦日に説教垂れた奴が言うことじゃないでしょ！」

燃える拳をひらひら交わしながらからかつて疲れたのを待つと

「はぁ・・・はぁ・・・まあ良いわ、別荘なら南の島にあるからみんなで行きましょう」

流石金持ちつてか？マジで別荘持っていたそれも南の島とは

----- 移動中 -----

「着いたあああつ！海だあああつ！」



取り合えず叫んでおくお約束は必要だね

・・・すまん、若干テンション上がって変な風になった

「さてと、女性人が来る前に設置は終わらせようぜ？」

そう言っつて男性人、土郎さん・恭也さん・ユ一ノ・クロノに声をかけ設置し終わる頃には女性人がぼつぼつと現れた

「お待たせ、紅くん」

最初に現れたのはさすがであり水着は紫を基調としたワンピースタイプにパレオをつけていた

「どっ・・・かな？」

うっすらと頬を染めて聞いてくるすずかに対し俺は

「似合ってるよ」

そう言っつて褒めていると今度は恋が来た

「・・・来た」

恋には珍しく白のビキニ下はパンツタイプの水着でやってきた、肌とのギャップでこれはこれで・・・

「似合ってるぞ恋」

と褒めると頭のアホ毛をピコピコと動かして嬉しそうにしていた

「お兄ちゃん私の水着でいちころだよ！」

「その言い方古くないか？」

ツツコミを入れながら振り向くと其処には胸に「ななせ」と書いた旧スクを着た七星がいた

「七星よく分かっているな！お約束は大事だ」

「でしょ！」

無い胸を張って誇らしげの七星だが

「だが俺には旧スク属性は無い！以上！」

「なん・・・だと・・・」

その場でorzで鬱っている七星を放っておくと

「あ、主・・・ど、どうでしょうか？／＼／」

顔赤く染め、水着もまた顔と同じで赤いビキニを着たりースがやってきた

「お前は黒を選ぶと思ったが似合ってるな」

「あ、ありがとうございます／＼／」

テレながらも嬉しそうなリースである。

「後、4年もしたら私だって」

「そ、そうだよ！私達はまだ成長するもんね！

「・・・？」

リースの胸を恨みがましそうな視線で見つめるすすかと七星・・・  
七星よ前にも言ったがそれはフラグだぞ

「兄ちゃん！早く海に入ろうよ！」

アスカは運動が得意じゃないから今日は珍しくヒトリが出ている  
が無邪気がかわいいなっておいフェイト！遠くでハアハア言うな！  
危なすぎるぞ！

紆余曲折ありながらもその他の皆さんも似合っていたよ？

「ちよつと待て！」xその他の皆さん

「なんだよ、褒めただろ？」

「なんで、はしよるの！？」

「時間。以上！」

メタっぽい発言は許してくれ  
そして、海と来ればすいか割りにカキ氷、美味しくないはずなのに  
美味しい焼きそば

「なんか凄く偏ってない？」

「気にするな」

ある程度やった後はチームごとのビーチバレーになった

「チーム分けは完全にランダムです！」

「私達は、見てるわね」

参加しなかったのは桃子さん・プレシア・リンディのおり「ヒュンッ！」お姉さまがた！

「恭也同じチームになれるといいね？」

「あら、恭也は私と同じになりますからフィアッセさんはあまり者でござぞ？」

フフフと黒いオーラを出しながら笑いあう二人に俺達は距離を取らざるえなかった

「恭也お前はいつの間にかそんなたらしに……」

「恭ちゃん……」

士郎さんと美由紀さんが嘆いてるな

「つか、完全にくじだろ？同じに……いやあるかもな」

「紅那岐ぶっそうなことを言っていないで助ける！」

「ギャグ補正に挑めと？断る！」

またメタっぽい発言を許してくれ、んでチーム分けはこうなった

Aチーム：なのは・ユイノ

Bチーム：フェイト・アリシア

Cチーム：クロノ・はやて

Dチーム：美由紀・忍

Eチーム：ファイアツセ・すずか

Fチーム：恋・七星

Gチーム：アリサ・恭也

Hチーム：紅那岐・士郎

他の皆さんは見学となった

「ちょっと待て！」×A～Gチーム

「なんだよ？」

「明らかにHチームはオーバースペックだよ！」

「くじで決まったんだから文句言っな！」

いや、マジで俺もオーバースペックだとは思っただが、くじなら仕方ないだろ？

「文句なら作者に言え！」

因みにマジで乱数使ってこうなりましたw BY作者

「よろしくね紅那岐君」

「よろしくお願いします土郎さん」

文句を言う奴らを見無視し試合が始まった

Side End

三人称 Side

第一試合：A V S B

「なのはごめんね？勝負だから手加減は出来ないよ」

そうしてフェイトは鋭いサーブを打つが

「させないよ！」

流石は補佐なら1位2位を争うユーノが拾いあげるが

「へび」

流石の運動音痴、顔面で受けると言うギャグをやったのけた

「なのは・・・」

「さすがなのはちゃんだね」

相手チームの同情の視線を最後まで受けながらAチームは最後までポイントを取れず敗北した

第二試合：C V S D

Cチームのはやてだが未だに足が不自由であるので特別にセットアップし足の補佐のみの魔法のみ許された

「いくでクロノ君！」

「ああ！」

「なんで恭也と同じじゃないのよ・・・」

「まあまあ忍さん楽しみましようよ」

やる気十分のことは裏腹にDは忍のテンションが駄々下がりであった

「イクで！」ポス

はやてがかっこよくサーブを放とうとしたが此方も見事にからぶったのである

「あ、あれー？お、おかしいな」

冷や汗を流しながら言い訳をするはやて、実際今までは足が不自由だった為スポーツにとことん縁がなくなのはとは違った意味での運動音痴であった

「なにやってんだか」

結局美由紀と忍の運動神経抜群Dチームが難なく勝利した

第三試合：E V S F

始まった第三試合だったがここで予想外の事が起きた

「「「うっ！」「」「」

始まったのは良いが其処にいる一人の女性がある意味災厄を振りまいていた、その名はフィアッセである

何故彼女が災厄かと言うと

「恭也？」

「クロノ君？」

「士郎さん？」

「ユーノ君サイテーなの」

さて、このくだりで分かった方は多いだろうが説明しよう、彼女フィアッセの最大の武器それは・・・胸である。彼女に似合う白いビキニでビーチバレーをやっているものなのでその武器が遺憾なく発揮され縦横無尽に揺れるのである

それを見た男性陣は当然その胸に釘付けとなってしまうっておりあるものは前かがみに、あるものは鼻から赤い液体を出していたのである

「・・・」

因みに紅那岐はと言うと賢者モードに入り何とか事なきを得てい



たが未だ背に凄いプレッシャーを受けている為下手な反応は出来ないのである

「・・・ふっ！」

恋が強烈なスパイクを放つもフィアッセの真正面だった為レシーブをするが

「うそ!？」

その胸に着けていた薄い布地・・・要は水着がはだけてしまう

「見るなああああ!」×女性陣

「ぐはあああつ!」×男性陣

一斉に攻撃を食らい吹っ飛ぶ男性陣をよそに試合はフィアッセが胸を両手で隠したためにFチームの勝利で終わった

第四試合：G VS H

「さつきはよくも俺に集中攻撃をしてくれたな？」

「恭也、大人気ないが八つ当たりさせてもらっぞ?」

「ちょ、ちょっと待ってくれ!俺だって被害受けたのに」

「し、知らないわよそんなこと!アンタが悪いんでしょ!」

そうして始まった試合はハンデ（Hチームは最初から相手に5ポ

イントある状態（9ポイントで勝ち）があるにも関わらず圧勝で幕を閉じた

第五試合：B VS D

この試合はある意味で順当に勝ち上がってきたためいい勝負に見えたが実際は年長者の美由紀・忍には届かずDチームの勝利で終わった

「ちよつとはしよりすぎじゃない!？」

「作者が途中でダレたらしい」

第六試合：F VS H

この試合もまた紅那岐・士郎対恋という形で試合が成り立ち、最終的に力尽きた恋が対応できずHチームの勝利で終わった

因みに七星はトスを何とか上げるので一杯一杯で恋に負担をかけるだけであった

「ひどいよ!」

「ひどくない!恋にどれだけ負担かけてんだお前は!」

最終決戦：D VS H

ある意味順当に勝ち上がったモノ同士の戦いは熾烈を極めた、美由紀も幼い頃より御神の技を継ぐべき鍛錬を行っている為一般人とは一線を期した動きを見せ忍もまた夜の一族の恩恵か一般人を遙に上回る動きを見せていた

しかし、だがしかし相手は御神の現継承者の士郎とチートな存在の紅那岐である。美由紀・忍がどれだけ一般人と離れた存在でも、公式チートと転生チートの二人には遠く及ばず

「ほい終わり」「ズバン！・・・ドゴン！

なんかありえない効果音を出しながらも結局は当初の予定通りHチームの優勝が決まった

「さつてと、罰ゲームは何にするかな」

「え？」×負けた方々

驚いてる面々をよそに紅那岐は楽しそうに考え込むのである

「紅那岐君、あんまり無茶なこと言っちゃダメだよ？」

大人の貫禄か士郎が紅那岐を注意し回りはうんうんと首を縦に振るが

「ダメですよ士郎さん、こういうのはある程度ひどい罰じゃないとやり返そうと躍起になるのが目に見えますから」

さすがは紅那岐、悪ノリときは容赦が全く無かった

「そ、そうかい？」

「まあ、これも修行ってことで」

最後の言葉を聞いた士郎もそうだねと納得し罰ゲームが決まる

「じゃあ、女子は定番のコスプレで！あ、因みにどんなのになるかはクジで決めるよ？」

女性陣はある程度納得しホッと息を吐いたが男性陣の対応は未だ発表されてなかった

「そうだね・・・そうだ昔若かった時にこんなことが」

そして士郎から語られる昔覗きをやった時、食らった罰ゲームは

「首だけ出して隣にスイカを置いたスイカ割りだね」

「そうか、それで誰かの頭をカチ割ったら良いのか・・・」

悲しそうな顔をしながらも口はにやけっぱなしの紅那岐が死刑宣告をしたが

「士郎さん？」

士郎にも地獄への招待状が出たような感じで南の島のバカンスが終わったのであった

「あれ？最初はなのはの慰安じゃなかったっけ？」

「……忘れてた！」

どづにもしまらない面子だったのであった

A E P 11 〽海だ！水着だ！罰ゲーム〽（後書き）

レティ「あつるえ〜？最初な短くして短編集のはずが長くなった」

トール「いいんじゃない？紅那岐も久々にのんびり出来たんだし」

レティ「そうやね、感想ありがとうございました」

トール「次回からはS t sの空白期をやっていくわ」

レティ「ある程度紅那岐が成長（身長や年齢）したら別世界へ行き  
ます」

トール「まったね〜 私も海いってこようかしら？」

S t s への軌跡 E p 1 紅那岐初めての敗北（前書き）

F a t e / Z E R O の 3 話を見ましたが・・・

なにあのアイリの無邪気な表情は！可愛くて綺麗じゃないか！私を  
萌え死にさせる気か！？

でも私にはイリヤが・・・

## S t s への軌跡 E p 1 紅那岐初めての敗北

さて、時空管理局入りした面々が何処に配属ないし所属したかを語ろうと思う……

まずは・フェイト・はやてはそれぞれ原作と同じようなのはは教導隊、フェイトは執務官の為アースラに、はやてもまた捜査官としてレティ提督の元それぞれ所属した

では原作には存在しない紅那岐達一行はどうなったかと言うと、まずずかば武装隊員の資格を持ちつつも開発室所属にまたプレシア・アリシアも同時に同じ部署へ、恋は地上部隊108へと一応への所属となる、七星はシグナムと同じように航空武装隊に配属となった、リースは古代ベルカにまつわるものとして聖王協会に身を寄せていた

では紅那岐はというと……

「はぁ……俺に何でこんなに誘いを出すんだこいつらは？」

「君くらいの実力者がふわふわいろんな隊を行ったり来たりしてるって言うなら誰だって自分の手元に欲しいわよ」

「そうね、それに何で空を飛べるのに陸にいるのかも分からないし」

紅那岐は何でもこなせる故に色々な隊に配属され足りない部分を補わされる渡り鳥のような状態であったが基本は今いる場所に配属されているのである

そしてボヤキに紫の髪を後ろで結んでいる女性とストレートに下ろしている女性が紅那岐のボヤキにツツコミを入れる



「君の実力は、ってぶつちやけ欲しいなら素直に來いって命令すればいいじゃんか」

再び深い溜め息をつくと同時に勧誘勧告を捨てたのである

「君の若さでSS+の実力を持つてるなら誰だって欲しいわよ」

「いや、クイントさんお願ですから言わないで、ってか公式記録俺AAくらいなんですが？」

ポニーテールの女性、クイント・ナカジマに恨みがましそうな視線を送りながら溜め息をつく

「あら？結構局じゃ有名よ、めつちや手加減をしてパスした人だつて」

「メガーヌさんそれマジで？」

ストレートの女性、メガーヌ・アルビーノに驚いた表情でたずねる紅那岐はメガーヌの肯定の言葉を受けると手と膝を突いて嘆いた

「手加減していたのは認めるが、それは実力者から見えてぐらいだったのに・・・」

「その時にうちの隊長が丁度見てたらしくてね。アレは相手が弱すぎてぎこちない故の動きだつて」

クイントの一言によって更に打ちひしがれる紅那岐であった

「戻ったぞ・・・どうしたんだ紅那岐？」

其処に現れるは壮年の男・・・実際は若いが周りからはあまりの老け顔にあわなすぎると弄られてる人である

「うるさいこのオッサンが！何俺が手加減してるの見破ってるんだ！」

「貴様上司に向かってオッサンとは何だ！それに俺は未だ　歳だ！」

「『なん・・・だど・・・』」

其処にいた三人は年齢を聞いて固まった

「貴様ら後で覚えとけよ・・・さて我々が追っているものである施設が見つかった」

固まっていた三人と他の隊員に緊張が走る

「今回はかなり黒だろう、心して掛れ！」

「了解！」

「あいあい」

そうして彼らは向かった・・・戦闘機人のプラントへ

.....移動したんだよ.....

「ここが機人プラントか、みな心して掛れこれから先は命の危険が  
ついて回る」

「了解！」

「あいあい」

マジメに敬礼している二人に対し紅那岐はなんとも緊張感が無かった

「お前は何故いつも緊張感がないんだ」

呆れ顔で聞くゼスト

「気は張ってますよ？ただそれを表に出さずか出さないかの違いです  
ね」

そう言っている程度問答した後紅那岐達は施設の中に入って行った  
のである

「なるほど、まさかここまでとは」

施設が既にもぬけの殻である大体のデータは消されていたが何故か施設の設備は残っており其処からデータはある程度取り出せたのである

「収穫は十分か、撤退する・・・ぬっ!？」

何処からかナイフが飛んできた為弾くゼスト、それに呼応し臨戦態勢に入る隊員達

「ここを知られたからには生かしては置けぬ」

現れた3人の女性たち、姿形は違えど身に纏っているボディーツは同じであり、そしてその中でももっとも小さい女の子がナイフを持っていた

一方で紅那岐達は

「ほへ、戦闘機人ね・・・何故に男がない？いやいたらいたでイヤだけど」

「お願いだから、こんな状況でものん気でいないで！」

クイントの叫びに慌てることなく周りを見渡す紅那岐

「ええ・・・」

「何でそこでいやそうな顔をするのかな？」

メガーヌの言葉にもあるように紅那岐はますます不満顔をしていた

「だって、戦闘の為にうみだされたんしょ？なら俺が終わらせてやるうと思ったら何？機械が出迎えるって」

因みに紅那岐達の今の状況はというと、紅那岐・クイント・メガーヌの三人は機会軍団に囲まれている状況である  
数が10程度であるならば其処まで危惧することは無いかもだが、実際は100以上あるためあせっていたのである  
そんな時に通信が入った

「スイマセン！隊長が自分たちを庇って怪我を！」

隊員からの通信に流石の紅那岐も焦りが表れる、いつも老け顔と言っていたからかつてはいるが実力は本物、その隊長が怪我をする事態が起きたのである

「マズいな・・・」

紅那岐がポツリともらす言葉に息を呑む二人、二人もまた隊長の実力を知りまた紅那岐の実力を知ってるが故紅那岐の一言がどれだけ重要かと言うことも悟った

「二人は隊長の下へ！道は切り開く！」

「何言ってるの！子供をこんなところに・・・」

クイントが反論しようとした瞬間に紅那岐からは轟音が鳴り響く、すると紅那岐は普段の黒髪ではなく金髪碧眼になっていた

「その姿は・・・」

紅那岐は管理局に入るときには自身の能力の大半を晒さず入っており、魔力が高く身体能力も抜群としてしか入っていなかった為初めて見る姿とそのあふれる力に驚く二人である

「いいから！隊長の位置に直進で進めるよう切り開く！」トール総てを射抜く雷光ハンマー！！！！」

紅那岐が放つ雷光の槍により其処に存在するもの全てを穿ち道が出来た

「行って下さい！」

その言葉に我に返った二人は紅那岐に声をかけ去っていった

「さて、機械風情が俺に勝てると思うなよ？」

そして紅那岐は瞬く間に機械軍団を殲滅すると隊長の下へと二人を送る為に作った道を同じように駆けた

「なっ!?!」

そこで紅那岐が見たものは血濡れで倒れる三人の姿であった、三人の実力を知る紅那岐は驚くしかなかった。ゼストやクイント、メガー又はそれぞれスタイルは違えど実力は本物、それを倒す存在がいることに驚いていた

そして三人に近づこうとしたときに殺気を感じそちらを振り向くと

「未だいたか・・・それに未だ子供ではないか」

右目から血を垂らしながらも語りかけてくる銀髪幼女

「お前に言われたくは無いがね・・・隊長達をやったのはお前を含めてそつちの背の高い奴か」

紅那岐が言うと同時に現れる後二人の姿

「ほう、驚いたな我々を見つけられるとは」

「はっ!姿は消せても気配は消せてないからな」

紅那岐は既に来た時点で隊の三人以外の気配を察知していた

「悪いが形跡を残すわけにはいかん、死んでもらう！」

そして高速で接近してくる相手だったが

「嘗めるなよ？」

紅那岐が放つさつきに止まってしまった

「ああ、俺が実力を隠さず最初から本気でやればよかったんだな・・・」

悲壮な顔をしながら紅那岐は三人を見つめるが

「か、かはっ！」

聞こえた声に思わず振り向いてしまった

「今だ！」

銀髪幼女から投げられた無数のナイフを簡単に避けるが

「イスランブルデトネイター！」

ナイフが刺さった場所から突如として爆発が起こり紅那岐を巻き込む

「やったか？」



「わからん、油断をするな」

「お姉さま〜チンクちゃん〜、どうやら無事のようですわ」

髪を三つ編みにした女性から報告を受ける二人に煙が晴れると其処には無傷の紅那岐がいた

「驚いたな、爆発が起こるなんて」

対して驚いた表情をしてない顔でいうものなので相手側のほうが焦りの表情が浮かぶが・・・

「く、紅那岐・・・」

突如として聞こえた隊長の声に反応した紅那岐

「隊長！」

「く、クイントをつれて引けあいつが一番軽症だ」

隊長の報告を聞いても引く気が無い紅那岐は断ろうとしたが

「俺ならこいつらを・・・」

「引け！命令だ！」

怒声で怒鳴られる紅那岐、紅那岐ならばそれくらいへっちらだ  
があまりの隊長の雰囲気思わず飲まれかけてしまったのである

「・・・了解」

返事をするクイントを抱える紅那岐

「申し訳ないクイントさん、旦那さんいるっていうのに」

いわゆるお姫様抱っこで抱える紅那岐に三人の戦闘機人は逃がすわけには行かず襲い掛かるうとしたが

「・・・動いたら殺す」

あまりに静かな声で言われた三人は固まるしかなかった、先ほどのような殺気は出てもないのに何故か動けなかった

「お前らは運がいい・・・これが俺の初めての敗北だ」

それだけ言うと紅那岐は一言呟いて魔法陣が展開され消えたのであった

「頼むぞ紅那岐・・・」

それを見守ったゼストは息を引き取ったのであった

「クイントさんある程度は復元したけど、精神的にはダメージは直ってないからここにいてください」

クイントを復元する世界で戻し怪我自体は無くなったが意識は未だ戻ってないクイントを安全な場所に寝かせた

「俺はケジメはつけてもらおうと思うのでちょっと行って来ます」

そして紅那岐は先ほどの施設の前に来ていた

「さて、八つ当たりになるが全てを消させて貰うぞ・・・たとえばここにあの二人がいようが関係ない」

涙こそ流れては無いがその顔を見れば親しい間柄のものならば泣いていると思うような顔をしていた

「隊長もうちよつとマジメに対応してやればよかったですね、メガー又さんスイマセンでした娘さんに会って約束が守れなくて」

そして紅那岐に溢れんばかりの魔力が生まれる

「手向けだ受け取れ！『オーバーロード偉大なる穢れなき極光の世界！！』」

そして紅那岐から放たれる極光により施設はもとより近く似合ったものは無に返したのである

クイントを病院へと運んだ後に紅那岐に更なる凶報が訪れたのであった

「な、ナギ！な、なのはが・・・」

この少し後に『特殊戦技教導隊』と言うものを作りエース又はストライカーを作ることを目的とした一人で戦局を変える人材育成を開始した『特殊任務実行部隊・イレイザー』と言うものを担い表と裏であらゆる状況にも介入できる部隊を作った

因果なことに表と裏でマテリアルと同じ名の「終焉の抹消者」と呼ばれた

この後の紅那岐はと言うとこの事はきちんと記憶はしているが気にせずいつものように仕事をこなしていったのである

Stsへの軌跡 Ep1 紅那岐初めての敗北（後書き）

レティ「紅那岐の弱点露見！」

トール「強すぎるが故の弱点ね」

レティ「だねえ、あの状況がたった一人でやったらならば被害を受  
けずに帰還もできたのにな」

トール「そうすると紅那岐の課題はチームワークかしら？ だったら  
私は教えられないわね」

レティ「いいんでね？ 個人が強ければいいんだから」

トール「ま、そこは紅那岐が考える課題としましょ」

レティ「んじゃちょっと部隊説明を」

『特殊任務実行部隊』

隊員は紅那岐を隊長とし隊員は恋・七星・すずか・リースの合計  
5人で形成され隊員が少ない代わりに全員リミッターは存在せず自  
由に動ける

また紅那岐は特佐という役割になり佐官・尉官以下の全員に命令  
権が存在し誰にも囚われなくなっている

レジアス・三提督などの信頼も得ているので地上・本局ともに強  
力な後ろ盾も存在する為結構我まま放題で仕事をしている

『特殊戦技教導隊』

特務隊としての仕事が無い時に紅那岐が思いついたもので、あの

時もう少し実力があればと憂いた結果考えた結論である

エース・ストライカーなどはどの隊にも存在するわけではないのでこれに大しては大いに反響を呼んだが、あまりの訓練内容につぶれるものも出るとか出ないとか

因みに、教導隊と違うところは一度に受け入れるのは最大で2人までしか受け入れない

レティ「こんな感じかな？レジアス・三提督などの信頼はご都合主義と言っことで」

トール「んじゃ、感想ありがとね」

レティ「最後に、文法がぐちゃってるのは自覚してるのでツッコミは無しでお願いしますでは次回は話最後に出てきた凶報の話ですでは」

S t s への軌跡 E p 2 不屈の心のエースと神の力を持つもの(前書き)

3人娘 七星・恋・すずか

三人娘 なのは・フェイト・はやて

S t s への軌跡 E p 2 不屈の心のエースと神の力を持つもの

不幸は続くと言っけれど、ここまで続くとかかしらのものが働きかけてるんじゃないかと疑いたくなる

あの施設の事があり、クイントさんは今だ目覚めず入院しておりレジアス中將に任務の報告と同時に隊長が死亡した報告をした後あのことは闇に葬られるとのことを何となく理解した

別に正義だ悪だというつもりは毛頭ないがここまでのことをやらかし何も罰が無いというのも不気味だった

「ふう・・・」

所属していた隊は解散され俺は現在ミッドの病院へと向かおうとしたときにフェイトから通信が入った



『な、ナギ！な、なのはが、なのはが・・・』

フェイトの顔が青を通り越して白くなっていたの何事かと聞いて俺は病院へ急いで向かった

「何でなのははこんな状態になってるんだ？」

「説明するわ」

シヤマルがことの経緯を教えてくれた

なのははとある任務で管理世界に向かいロストログアを回収し帰還しようとしたら突然アンノウンが現れ反応できずに撃墜されたとのことだ

「それだけか？」

「ナギなにを言いたいの？」

フェイトが怪訝な表情で聞いてくる

「シヤマル他に報告してないことは？」

それ以降俺は黙ってシヤマルが話すまで待った、他の奴らはなのはを心配しつつ俺の意図が分からないといった表情をしていた

「こんな言い方はしたくないんだけど・・・実は体を刺されただけだったらなら問題なかったの、問題なのはそれがリンカーコアが修復不可能の傷を負ったことだわ」

そう言つて悲痛な表情をするシャル、他の奴らも聞いてなかったのか驚いて固まっていた

「他には？」

その報告を聞いても俺は未だ納得が出来なくシャルに聞く

「え？他つて」

シャルもわからないようだな

「刺された事は十二分に分かったがお前は未だ原因を話してないだろ？」

「そ、それはあたしがなのは守れなかったから」

ヴィータが庇うように言ってくるが

「ヴィータ勘違いするなよ？なのははの中で俺に告ぐ空間認識力を持っていて、それはな突然敵が現れても反応は出来るんだよ。言つてる意味分かるか？」

そこで一度言葉を切りまわりを見回すと3人娘とフェイト・はやては分かったようだな

「だからこそありえないんだよ、なのはがここまで重態になる理由

が

そこで漸く気づいたシャマルが説明してくれた

「恐らくだけどなのはちゃん自体に疲労が積み重なって本当なら気づけたはずなのに気づけなかったんだと思うわ」

それを聞いて俺は納得するいや、既に気づいてたことを言わせる辺り俺も最低だな

「なるほどな、じゃあ後はなのはの回復を信じて待つか」

そう言っただ俺はクイントさんの見舞いに行こうとしたらフェイトに呼び止められた

「待つてよ！ナギならなのはを直せるでしょ！」

希望を持つ眼差しで俺をみるフェイトに対し俺は・・・

「断る」

ただ無常となる一言で切り捨てた、その一言はここにいるほとんどの奴が予想外と言わんばかりに驚いていた

「な、何だよ！ナギの復元ダ・カーボする世界ならなのはを直せるのに何で直してくれないの！」

呪われそうな勢いぐらいで睨むフェイトだが

「・・・はあ」

唯深い溜め息をついた。3人娘とリースは理由が分かるのかどうかよそよそしい態度であえて首を突っ込まないように黙っていた

「なんでそんな溜め息つけるの！友達でしょ私達！」

フェイトにしては珍しい声を張り上げ叫んでいた

「友達って都合がいいんだな？」

何処までも冷静に俺は言う

「ふざけないでよ！」

なおも食い下がるフェイト

「聞くが俺は管理局にてそんな能力を持つてると知ってるのか？」

「知ってるよ！だって今まで何度も見てるから！」

食い違う会話にすずかが何かを言おうとしてるが目で制した

「ほう・・・いつ俺のスキルに復元ダ・カーボする世界の事が記載されたんだ？まだ見てないからその資料見せてくれないか？」

其処まで言つとフェイトも俺の言うことを理解したのかはっとしたがそれでも食い下がった

「で、でも友達を助けられない理由じゃないでしょ！」

「・・・」

俺は何も言わない、確かに友達は大切だと思う。転生してから4年経ったが初めて出来た友達というものの大切さは十分に理解が出来るがでもなフェイト

「確かに理由にはならないな・・・だが俺は能力を隠すことによつて無用な争いを避けたんだ、意味は分かるな？」

「わ、わかんないよ。分かりたくないよ！」

そこで初めてフェイトに涙が流れる、恐らく理解と気持ちのバランスが取れてないんだろうな

「実は言う俺はなついこの前任務に失敗したんだよ」

俺の言葉に全員驚く。まあ俺が能力を使わずとも強いと知ってるこいつらにしてみれば俺の失敗が予想できなかったんだろうな

「でだ、その原因の大半が俺が能力を隠したことにより救えたはずのものを救えなかったってわけだ」

そこで全員理解したのだろう・・・誰かが死んだと

「更に言えば俺の持っている能力はな誰にとっても脅威以外何者でもないんだ」

「どづいつこと？」

涙を拭きながらもたずねるフェイトに対し

「いいか？九つの世界はあらゆる可能性を引き寄せる能力、言ってみれば確立が100%になるって訳だ。復元する世界に至っちゃあらゆる破損すら直せるある意味医療すら超えた能力だし何よりその派生の能力だつてありえない。福音の弾丸はまあこれは逆に持つてる中では一番軽いなこれは使っても早々ばれないし脅威じゃないかもな」

一度言葉を切り俺は黒い外殻の剣を取り出す

「そして何よりこの剣、今は封印されているが解放した瞬間ロストアと認定され管理局が寄越せというのは絶対だ」

ティルヴィングをしまいながら俺は周りを見ると何人かは納得していた

「でだ、こんなでたらめな能力を今まで使っていなかった俺に対してお前は使えと頼むんだな？」

フェイトの眼を見据えながらたずねる俺に軽く怯むフェイト

「・・・」

何もいえなくなったのを確認し俺は扉に近づきながら全員に言う

「とりあえずはなのはが起きてからだ。俺はあいつがどういった態度で来るかを見てから治すか判断する」

俺は病室を出て今度こそクイントさんの見舞いに行く

数日後なのは意識を取り戻した連絡が入り再び病室へと赴いた

「さてなのは状況は理解しているか？」

病室に入ると既に全員おりなのはもまた寝ながらだが意識は覚醒しているようだった

「うん、みんなに聞いたよ」

「そうか、最初に言うと俺はお前を治す気は無い」

腕を組みながら俺は自分の考えをなのはに告げる

「理由を聞いていいかな？」

なのはは分かっているのか分かってないのか分からない態度で聞いてくる

「逆に聞くがお前の歳で何故そこまで疲労が溜まっている？」

「それは・・・」

「俺やフェイト、はやてが心配し忠告しているのにも関わらずお前は何故其処まで働いていた？」

「・・・」

黙りこくるなのはに対し俺も目を伏せなのはの答えを待つ

「怖かったの」

静かに語りだすなのはの心の闇、それにより仕事に打ち込み過ぎたんだと。まあ楽しかったと言っつのもあるんだろつが

「・・・」

「・・・」

再び沈黙が訪れる、フェイトが俺に何かを言おうと動こうとしていたがすずかによって止められたようだ

「で、俺にどうしろと？」

俺はまだなのはに治すかどうかの願いを聞いていない

「治してください」

なのはの一言に俺は静かに近づき



「<sup>ダ・カーボ</sup>復元する世界」

復元<sup>ダ・カーボ</sup>する世界を使いなのはの前に魔法陣を展開した

「傷が治ってない・・・」

そう、其処には傷は一切治ってないのがいた

「治したのはリンカーコアのみ、リンカーコアの状態は怪我をする前よりもいい状態だけにはした」

それだけ言うと俺は離れなのはに言う

「体の傷は自分で治せ、これからリハビリがあるだろう其処でどこまでがんばれるかによってお前が再び飛べるかどうかが決まる」

其処まで言うと今まで黙っているフェイトが吼える

「なんで治してくれないの！」

「黙れ！今は俺となのはの会話をしているんだ余計なことを言うならなら出て行ってる」

今まで静かだった俺が突然大声を張り上げるものだから全員身を竦める勢いで固まる

「さてなのは、お前は今一つの罪を背負ったその自覚はあるか？」

「うん・・・」

「そうか、お前がこれからどうするかは自由にすると良いが、もし罪とを感じるならがむしゃらに足掻き再び空に飛んで見せる」

「うん」

「お前が回りに心配をかけないように行動できないということは理解したからな、もし同じことが起きるなら俺は助けはしない」

「うん」

「だがな、俺はお前を友達と思うが故に空でお前を待っていたと思う」

「うん」

「だからなのはここで誓いを立ててくれないか？お前はこれからどうするかを」

そしてなのはに再び近づくと動かない体を無理やり動かしながら左手を拳に上げたので俺も同じように拳にしつける

「私の愛機はレイジングハート。不屈の心だよ、だから私にも不屈の心で絶対に追いついてみせるから待っていて」

「そのその誓い確かに我が魂に刻んだ、空で待っているぞ不屈の心を持つものよ」

どこか古めかしい言葉使いをしながらも俺は答える、なのは言った待っていてくれとならば待とうじゃないか信じると言ったこともまた友達というものだと思うから

そして半年後には現場に復帰を果たし再び空を自由に飛んだのはがいた管理局の人々は言った彼女は「不屈のエース」だと

また紅那岐は修復不可能と言われた傷を治したことにより力が露出し「神の力をもつもの」と呼ばれてしまい凄く嫌そうな顔をしていた

Stsへの軌跡 Ep2 不屈の心のエースと神の力を持つもの（後書き）

レティ「終了！アンチなのはじゃないけど書かなきゃダメと思い書かせて貰った」

トール「自分の我が侷でなったから紅那岐は治す気が無かったわね」

レティ「まあね、後はフェイトが都合がいいことを言ったのが気に入らなかつたからかな？」

トール「フェイトも嫌いじゃないのに・・・何処まで不器用なのかしら？」

レティ「さあね、では感想ありがとうございました」

トール「次はさすがについてね」

**S t s への軌跡 E p 3 短編集なのに長いつて W (前書き)**

すずかの事にしようとしたけど先に書きたかった部分を W

もうちよっと削れば短くなっただらうな

S t s への軌跡 E p 3 短編集なのに長いつてw

〈雷神VS雷光〉

なのはの件があつて以来フェイトが俺に対する態度が余所余所し  
くなくなった・・・まあ自業自得だがな

「はぁ・・・」

思わず溜め息が出る、なのははリハビリをガンバっておりシヤマ  
ルの話じゃ本来よりも速く回復してるそうだ

まあガンバリすぎていると言うのも問題だと相談されたんで「リ  
ハビリの意味をなくすなら俺が物理的に動けないようにしてやろう  
か？」とある意味で死刑宣告をしたら決まったこと意外はやらなく  
なったのでよしとしよう

「ナギ、話があるから訓練室にきて」

物思いに耽っていると急にフェイトが現れそんな事を言ってきた

「で？話があるのになんで俺はこんなところに呼び出された？」

「分かつてるでしょ？なのはをきちんと治さない理由だよ、聞いた  
ら同じ部隊の人は完全に治したのになんでなのはは？」

どこか病んでいる目で聞いてくるフェイトに俺は思った・・・「コ  
ワッ！」と

「クイントさんは俺の失態が故にだ、なのはは俺の責任じゃねー」

出来るだけ明るく言っているがフェイトの顔が一向にはれない

「そう・・・」

バルディッシュを構えながら呟くフェイト、何故そうなった!?

「じゃあ、管理局の敷地内で無理やり使わせてイヤでもばらしてやる!」

そして向かってくるフェイト・・・怖すぎる!

「ちょ、待てフェイト!お前私情に走りすぎだぞ!」

「うるさい!うるさい!うるさい!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

大声で叫びながら向かってくるあいつ、確かにあいつにとつちや始めての友達のなのがああなったのは精神的にきつすぎるんだろ  
うな

「うああああ!」

「ちっ!こつなったら少し頭冷やしてもらっぞ!」

Side End

そうしてぶつかり合う雷がこつ

「!」  
「!」  
「!」  
「!」

「黙れええ！」

バルディッシュを振り回しながら紅那岐に迫撃するフェイトであるが紅那岐は蒼麟を使いながら捌いていた

(強くなつたなあ、前なら捌く前に簡単に避けられたのに)

「どうしてどうしてどうして当たらないの！」

既にまともな思考で動いてないフェイトは本能の如く動いているため攻撃は単調を記していた、しかし紅那岐は紅那岐で単調な攻撃でも自身が課した修行の成果で攻撃が鋭く早い為下手に避けると追撃が分かる為にあえて捌くのであった

「バルディッシュ！」

《・・・イエス、サー　　ザンバーフォーム》

フェイトはバルディッシュをザンバーにすると腰だめに構えた

(けりをつけるつもりか、ならばここで下手に手加減は出来んな)  
「いいだろうフェイト、お前の思い受け止め砕いてやるっ！」

すると紅那岐は管理局内と言うことも構わず魔力を解放した

「轟雷、一閃！ザンレイ・・・」

「我は雷と共に」

あたりが轟音と共に雷が埋め尽くし、今のフェイトではどうやっ



ても制御できないほどの魔力を貯めて紅那岐に放った

「クリーブ・ザンバアアアツ！」

フェイトが放つ雷の大太刀が紅那岐に向かい放たれたと同時にフェイトは信じられないものを見た

「う、うそ!?!」

フェイトが見たものそれは紅那岐が避けずにフェイトの攻撃をまともに受けている姿だった

しかし其処で違和感があったそれは、紅那岐が攻撃を受けているにも関わらずダメージを負ってないことであつた

「な、何で!?!」

「さあ、頭を冷やせ・・・」  
『きょつこうらいじんけん極光雷神剣!?!』

フェイトの攻撃がやむころに紅那岐は自身の刀に全ての雷光エネルギーをためて放った

「ぎゃああつ!?!」

悲鳴を上げて吹き飛ばされたフェイトはそのまま気絶していた

「・・・ん、ここは?」

目を覚ましたフェイトは自分に何が起こったかが一瞬理解できなかったようである

「気がついたかフェイト？」

気がついたフェイトに声をかけたのは先ほどまで戦っていた紅那岐であった

「あ、私負けたんだ・・・」

そのことに気づき俯くフェイトに声をかける

「まあお前が言いたいのも理解できる、友達を無条件で治すつてのは間違っていない。むしろ俺の行動のほう可笑しいかもな」

どこか自嘲気味に笑みを向けて話すフェイト

「ただな、俺の友達の理念はあくまで信じることに有るんだ」

「信じる？」

「そうだ、確かにお前はなのには対しとんでもない百合っ子つてのは理解しているがな、四六時中なのは心配して構ってるだろ？」

「百合っ子つてどういう意味！私は普通だよ！つてそうじゃなくてそれがどうしたつて言うの！？」

紅那岐のカミングアウト気味な発言に突っ込みを入れながらも紅那岐の意図が分からず聞き返す

「落ち着けて、まあそれは別にいいんだけどな今のなのにはとつてそれはある意味負担になりかねないつて事だ。考えてみるもしか

したら飛べないって通告を受けた奴がまだ普通に飛んでる奴に心配されてるって思われても唯の同情ってしか思えないんだからな」

紅那岐に言われたことに漸く意味が分かったフェイトは顔を上げて紅那岐を見る

「別にお前の態度を改めるとは言わないがそれを他人に押し付けちゃダメだ」

「うん」

それだけ言っとフェイトの頭を撫でる紅那岐

「あつ、恥ずかしいよ」

頬を染めながら照れるフェイトに笑いながら紅那岐は更に言う

「お前の優しさは武器だ、その心をずっと持っていてくれ」

「分かった」

返事を聞いた紅那岐は終わったと思っていたらフェイトから質問が来た

「そつえば何で私のザンレイクリーブ効かなかったの？」

「あああれか」

思い出したという表情で答える

「タイビュランス実は疾風迅雷の上を思いついたから試したんだよ、その能力は雷系の能力なら吸収・無効・反射が理論的に出来るつてので差し詰めタイビュランス・バースト神雷招来つてところか？今までは雷光化だが今度は雷神化つてところか」

「つまり私の戦いで実験したと？」

「ああ、実際はまだ未完成だからまともに使えないけどな」

そいとうとフェイトの顔がまた陰りが出ていた

「あ、あれ？フェイトさん？」

「ふ、フフフ・・・そつか私つてそんな程度なんだあ」

「え？地雷踏んだの俺？」

そうして逃げ出した紅那岐をハイライトが無い瞳で追いかけていくフェイトを局内で見たとか見ないとか

End

「私、麻耶です」

朝起きると異変が起こっていた

「やっべ、ここ最近忙しくて女体化するの忘れてた」

深い溜め息を吐きながら現状を理解する紅那岐、紅那岐は自身のマテリアルを取り込んだことにより女体化する能力を手に入れたが

思わぬ弊害が出たそれは30日に1度完全に女体化をしていなければいけないということだった

「まあ今日は休みだしいいか」

それだけ呟くと着替えてリビングへと行くのであった

「おはよう」

リビングに入りながら挨拶する紅那岐に

「おはよう！おに・・・お姉ちゃん！」

「あ、今日は女の子なんだ」

「・・・おはよう」

すでに慣れた三人娘は驚くことなく返す

「ああ、ここ最近忙しくなってる暇無かったんでな」

「ダメだよお姉ちゃん、その姿の時にそんな口調」

ツッコミどころが違う七星の言葉にははいはいと返事しながら返す紅那岐

「今日はどつするの？」

「ん～服でも買いに行くかな」

といい自身を見る、女体化すると肩幅は小さくなり身長も少し下が  
るため普段の服がぶかぶかなのだ

「だったらみんなで行こうよ！私がコーディネートしてあげる！」

興奮気味に宣言する七星に対し他の二人も同意した

「了解、んじゃ久々にみんな揃ったし買い物でも行くか」

そしてみんなで買い物に行くのであった

Side End

「はぁ・・・」

ここで一人溜め息を吐いているのはバーニングスことアリサであ  
った。溜め息の理由は親友達が原因だったりする

誰も彼もが魔導師として別の世界で仕事をするものだから普段会  
えることが少なかったりするのであった

しかも最近で言えばなのはが怪我をしたのにも関わらず見舞いに  
もいけない始末で実のところかなり寂しいのである

「私ってなのは達にとってなんなんだろう？」

そうぼやいていると後ろから声がかかった

「あれアリサちゃん？」

後ろを振り向けば三人娘がいたのであった

「あんだ達今日休みだったの？」

疑問をぶつけ返事を貰うと今度は何をするのかを聞いていた

「それでこんな所までできてどうしたのよ？」

こんなところとはいわゆるデパートだった、アリサは親の都合により一時的にここにいてと言う願いで時間を潰している所だったのである

「あーそれはね？」

「すみません、待たせましたね」

さすがが答えようとした時に後ろから声をかけてくる人物がいた、その人物は背まで伸ばした髪にウェーブが架かっているのである。これが金髪とかなら一層栄えるであろうから勿体無い

「えっと、すずか知り合い？」

「えっと、この人はなんと言っていていいか……」

口を濁すすずか、紅那岐だつて言えば簡単なのだが当の紅那岐が教えるなど言わんばかりに唇に指を当てていた

「初めまして、私の名前は……白羽 麻耶まやって言います。」

そう言つて丁寧にお辞儀をする

「初めまして、私はアリサ・バニングスって言います」

返礼する形でお辞儀をするアリサだが、正直他の人は目の前の状況に笑いをこらえるのに必死だった

中身は紅那岐自身であり仕事口調で話すのに違和感が無くしかも女性と言ふことで逆にお淑やかな感じがするからだ

「実は最近従兄弟の紅那岐を尋ねてきたのですがいなくて、それで仕方なしに当分滞在予定と言ふことで服などを買いに来たんですよ」

すずかに説明を求めようとしたのを紅耶が答えてくれたので納得した

「なるほど、それにしてもあいつに従兄弟なんているなんて」

「ええ、紅那岐つてあまり自分の生家の事は触られたくないみたいな察してあげてください」

何処までも丁寧に話す麻耶に好感を持つアリサ

「そうだったんですか、よかつたら私も一緒に行つていいですか？  
当分暇なので」

アリサの提案に素直に頷く麻耶に三人娘は苦笑いしかなかった  
そして服も買い終わり（服は基本赤と黒を基調としたものオンリー）最後にアクセサリーを見ようとショップに来ていたのである

「あ、これカワイイかも」

アリサが手に取っているブレスレットをみて麻耶は

「今日のお礼にプレゼントさせてください」



そう言っつて買おうとしたのだが

「い、いえ！そんな高価なモノを買ってもらうなんて」

といつて拒否してる頃には全員分のアクセをレジに持って会計している麻耶だった

「早っ！？」

そしてアクセや目的の服も買い終わり、アリサの家の用事も終わりそのまま解散となった次の日

「よおアリサ、随分と気に入ってくれたみたいだなそれ」

と見に覚えが無いはずのアクセを指差しながらニヤニヤと笑う紅那岐が声をかけたのであった

「なんでアンタが知ってんのよ！」

「ま〜だ気づかないのか？・・・そそっかしいんですねアリサさん  
つて」

つい先日聞いた口調で喋りだす紅那岐に

「ま、まさか！？」

「その通り〜」

一瞬紅那岐が発光すると見覚えがある顔があった

「ふふ、実は私のスキルの一つに女体化つてのがあってその弊害で最低でも1日中この姿でいなきゃいけない日があるんですよ」

楽しそうに笑う麻耶にアリサは顔が真っ赤になった

「ふふ、アリサさんにあんな少女趣味があつたなんて驚きですよ」

「ムツキヤアアアア！」

奇妙な叫びを上げるアリサを笑いながら眺める姿が其処にあつた

End

く世界一下らない兄妹喧嘩く

「覚悟はいいだろうなあ？」

「そつちこそ！」

其処には睨みあっている兄妹の紅那岐と七星がいた

「今なら、謝れば許してやらないことも無いぞ？」

「謝るのはそつちでしょ！私悪くないもん！」

基本的に三人娘には甘い紅那岐だが今は完全に怒っているのがよく分かる状態だった。また七星も兄LOVEのはずなのにその面影は全く無かった

「ああそうかい！だったらぶつ飛ばしてでも謝らせてやる！」

「やってみなよ！今日こそ倒して押し倒してやるんだから！」

そう言っただけで戦いが始まったのであった

「行って！七つの大罪<sup>グリモワール</sup>」

七星から七つの七色の宝石が出されるとビットのごとき動きでそれぞれ異なる動きで紅那岐を襲う

「チイツ！当たるか！」

舌打ちしながらも閃舞を使い相手に位置を補足させずに近づくが

「そんなの分かってるんだよ！」

すると七星の後ろから一つの砲撃が放たれる

「しまった！？」

それを食らい飛び去る紅那岐であったが

「チツ！よりによって『avaritia』かよ<sup>アベリティア</sup>」

そういつとぶらつく紅那岐である

「ふふ、それならさつきみたいな高速移動は出来ないよね」

そう言っただけで再び自身の七つの大罪<sup>グリモワール</sup>を操り紅那岐を攻撃していく

紅那岐は避けようとするが体が上手く動かず何発かの攻撃が当たってしまいます、普段の紅那岐を知るものならば紅那岐が避けられないことを驚くだろうが

「触覚が奪われるところまで動けないとは」

そう言っただけで紅那岐

「ふふ、今の攻撃でさらに視覚と味覚はなくなっちゃったね？」

何処までもサディスティックな笑みを浮かべながらも未だに警戒をする七星

「ちつ、この状態じゃ復元ダ・カーポする世界が上手く発動しねえのを狙いやがったな」

「そうだよ？でもお兄ちゃんのことだからどうって事ないんでしょ」  
「！」

「ああ、もうなれた・・・よっ！」

そう言っただけで普通に駆ける紅那岐

「信じられないよー！」

そして踊り狂う悪魔まで出しナイフとビットで攻撃し間合いに入れないようにする七星

「嘗めるなあ！真空連破斬しんくうれんはざん！」

紅那岐はその場で刀を振り回し無数の真空刃を作り迎撃する

「ちよー！」

へんな叫びで驚く七星に今度こそ肉薄し蹴りをお見舞いする

「オラツ！蒼天脚！」

天へと向かうように蹴りを放ち七星を上空に吹き飛ばす

「止めだ！」

「冗談！」

吹き飛ばされながらも七つの大罪グリモワールを操り紅那岐に攻撃すること  
しかたなしに距離を取ったがその時に数発食らってしまった

「チツ！聴覚以外ダメか」

「なんで触覚や視覚が無いのに私の位置や攻撃がわかるのよ！」

「ああ？そんなの福音の弾丸ヴァイス・シユバルツの能力の一端使ってるに決まってるだ  
ろうが！」

そう、紅那岐が触覚や視覚が封じられたことによりまともに攻撃  
できないと感じどうするか一瞬悩んだ後に閃いたのが福音の弾丸ヴァイス・シユバルツ  
を使い相手の位置や攻撃に反応できるようにしたのである

「この規格外が！これで終わらせてやる！」

七星が七つの大罪を前に出し花卉のように構えると魔力を集めだした

「チツ、まともに食らうわけには行かないか・・・」  
『九つの世界』

そして紅那岐も紅那岐で下手な技は相殺できないのを感じ魔力を高める

「上がれ！上がれ！上がれえええ！」

「疾風迅雷・・・」

七星は未だに魔力を上げ、紅那岐も疾風迅雷を使い魔力を高めていった

「極光の」

「総てを消滅せし」

しかしここで変化が起きた、本来なら九つの雷光がそれぞれが一つに収束したのである、これは紅那岐が独自に開発した総てを射抜く雷光の最終形態である

「断罪者！！」

「極光の雷光！！」

そして放たれた極光の光どうしだったが、勝敗は紅那岐であった  
幾ら七つの大罪の能力で威力が上がるうが流石に紅那岐の方が上手であったのである

「もー！ありえないよ！普通できる？総てを超越せし九つの雷光超トールハンマー・フルアクセスえるような技を開発するなんて！」

「うるせえ！アレに対抗できるなんてどっちにしろオーバーロードクラスじゃなきゃ意味ねえだろうが！」

そして少し言い合いになったのだがふと七星が疑問を口にした

「あれ？どうして喧嘩なんてしてたんだっけ？」

である、色々と台無しだ

「ほう？未だにそんな事をいうのか」

「うっ、だって今までの戦いが激しすぎて覚えてないんだもん」

「だったら思い出させてやるよ・・・」

こめかみの辺りをひくつかさせながら答える

「お前が俺の取っついておいたプリンを食ったんだろっが！」

「そうだった！でもそんなに怒ること無いじゃん！」

そして再び下らない兄妹喧嘩が始まったのであった

Stsへの軌跡 Ep3 短編集なのに長いってw(後書き)

レティ「すずかの事を書く前に先にフェイトと仲直りさせたかった」

トール「理解してるんじゃない？」

レティ「いいの書きたかったし」

トール「今回は色々技や能力が出てきたわね」

レティ「詳しいことはその内設定で書くけど、ぶっちゃけ刀でやる技はネタ技だね次いつ使うかわかんないもん」

トール「それってどうなのよ？」

レティ「紅那岐自身の技はあくまで神話系魔法ということだ」

トール「設定知ってる人少ないと思うけどね」

レティ「ええの！んでカタカナで表記できる技はレギュラー化するよ？発展系の技だし」

トール「タイヒュランス・パースト神雷招来は私の特性に似たものね」

レティ「そうなん？」

トール「まあね、私の渾名に雷神があるように本気の私に雷系の技はおるか雷や電気は意味を成さないわよ？私は最終的には支配だから」



レティ「え？つまり相手の技にすら干渉できるよ。」

トール「そうよ」

レティ「ひでえもんがあつたもんだ」

トール「感想ありがとね」

レティ「次回こそ必ずか予定！」

S t s への軌跡 Ep4 すすかの業と紅那岐の覚悟(前書き)

最後までやるか悩んだがやってもうたw

賛否両論なのは認めるが後悔はない！

S t s への軌跡 E p 4 すずかの業と紅那岐の覚悟

すずか達も中学生に入り最近是比较的のんびり出来ていると思っ  
たときに帰ってきた時に姉さんの一言に思わず頭痛を覚えた

「ごめん姉さんもう一度言っ」

「だからすずかが攫われたって言ってるでしょ！」

頭を再び抱いてしまっ、すずかが攫われた？どうやってよ？あ  
いっ俺や恋ほどじゃないけどとても一般人に攫えるような身体能力  
じゃねえはずだけど？

「つかどうやって？」

「わからないわよ！私だって驚いてるんだから！」

激昂する姉さんを抑えながら考える、マジでどうやって？あいつ  
捕まえられるのって最低で恋なみの能力持ってなければ出来ない  
はずだけど

「ちよつと良いかしら？」

「ああ？こっちは今忙しいんだが」

色々頭を使っているときにツールから念話きた

「それについてよ、今こっちじゃアンタ色んな意味で有名人になっ  
ちやってるわよ」

なんてことを言ってきたが覚えなぞ

『色んな転生者ぶっ潰してるもんだから下級神があんたを恨んでるみたいね』

『なんつー逆らうみてきな』

溜め息が出る、確かにここ最近こっちに来る転生者が増えてるなって思ってたが

『で、アンタが倒しまくってるもんだから傀儡化したのをそっちに落としたみたいだから今回の犯人はそいつね』

『分かった』

それだけ言うと念話が終わり俺もまたずか搜索に向かった

時間だけが過ぎついには夜になる空には眩い輝きを持った満月がある  
「ちっ、これだけ探しても見つからないってどうしてだ？」

思わず舌打ちが出るがそんなことをしてる暇があったら探すしかないか

「!?!?」

探そうと思ったら莫大な気配を感じそっちへ向かう

「何だこの気配は!?俺以上だぞ」

あり得ないぞこんな力は、トールと修行をしてる俺ですらここまで出るかわかんねえのに

『トール!』

『なによ一体!』

『今すぐお前かルーネがこっちに来てくれ!なんかいやな予感がする』

『貴方がそこまで言うなんてね分かったわ、でも私はいけないからルーネに行かせるわ』

『分かった、急いでくれ!』

念話が終わり俺は現場へ急ぐ、俺の勘が急げと言って仕方ない

「ききましたよ」

急いでいる時にのん気な声で言ってくるルーネだがありがたい

「ルーネ現場へついたら結界を張ってくれ!恐らく俺はそんな余裕がない!」

「お任せを、それに確かにやばいですねこの気配は」

そして二人で現場へつくと其処には信じられない光景があった

「な!？」

現場へつくと其処には至るところに赤・赤・赤の水溜りがあった

「はははははっ! 漸く来たな抹消者!」

驚いてるところに笑っている男がいた

「抹消者だ? どういう意味だ」

「ほう、知らんようだな? 教えてやる、今お前は天界では抹消者と呼ばれあらゆる神に邪魔者として扱われてるんだよ」

酷く醜い顔で笑いながら説明をする男、どうやらこいつが犯人か

「で、俺になんの用だ? すずかを攫う意味が分からん」

「はっ! 貴様を倒すのに最高の化け物を用意するためにはあの動物が必要だったんだよ!」

あいつの言葉に切れそうになるがまだ我慢だ、今こいつを殺してしまつとすずかの居場所が分からない

「すずかは何処だ? 今吐けば楽に殺してやる」

「フハハハハッ！未だそちらにアドバンテージがあるか？まあいい、ほら気味の後ろにいるだろう？」

そう言われ後ろを向くと其処にはさすがが

「すすく、ガハッ！」

名前を読ぼうとしたら思いっきり吹き飛ばされた、何故だ！？さすがにこんな力はないはずだぞ

「ア、アアアアアアアアアッ！」

そしてすすかを見てしまった、そこには普段の優しい表情は無くハイライトの無い真紅の瞳を持ったすすかの姿があった

「なっ！お前はすすかに何をした！」

「ほらほら、君は余所見をされていていいのかな？」

すすかに視線を戻すと其処にはまるで血に植えている獣がいた・  
・血に？俺はすすかの攻撃をいなしながら電話を取り出しながら連絡をする

『・・・紅那岐！すすかは見つかったの！？』

「姉さん時間が無い此方の質問にだけ答えてくれ！」

それだけ言つと姉さんもこちらの状況を察したのか何も言わなくなつた

「夜の一族は血が必要なのはわかってるがそれは絶対か？」

『そうよ』

「なら次だ、血が必要なのはわかったが血をとらなすぎて暴走はするか？」

『うっん、其処は大丈夫よ。私自身も欲しいと求めたことはあるけど暴走とか意識無く動くってことは無かったから』

「最後だ・・・すずかは夜の一族の中でも特別か？」

『違うわ、確かにすずかの能力は高いほうだけど特別と言う訳ではないわ』

「そうか、分かった。後ですずかをつれて必ず帰る」

それだけ言つと俺は携帯を切りすずかを止めるべき攻撃をする

「ハッ！」

「!?」

声にならない声を上げながら吹き飛ばされるすずかだったが其処にどこからか現れた鎖が俺を縛る

「嘗めるな！」

鎖をぶち破り脱出すが驚きが隠せない。あの鎖は？



「最高だ！最高だよ！ここまでの化け物が出来るとは！知ってはいたがここまでとは」

笑いながら賞賛する男だが俺はそんな事を気にしてられない、目の前のすずかから今日を離せば確実にやられる

「悪いが少し眠っている  
レヴァティン 迷い無き光闇の剣！」

一条の光がすずかを包みこんだ

「さて、教えて貰うぞなぜすずかが  
！！？」

問いただそうとしようとしたら殺気を感じそちらを向くと其処には無傷のすずかがいた

「なんだと！？」

するとすずかはおもむろに手を挙げ、上に圧力を感じたのでみると

「月落としたと！？やはり空想具現化か！？」  
マーブルファンタズム

型月で有名な吸血姫の真祖アルクエイドが使うプルート・デイ・シュヴェスタアが其処に来ていた

「  
ティルヴィング つ！？黄金色の聖約！」

これを抑えるにはこれしかない、概念はより強い概念で潰すしかない

「  
ティルヴィング 黄金色の聖約！！！」

斬撃と月がぶつかり合い拮抗した後に両方とも消える

「チツ、相殺がやっとか」

月をつぶした後にすずかを見ると、月光砲ルナを構えていたすずかがいた

「あいつデバイスもってやがったのか！？ダ・カーポ・エンド反転する世界！」

直ぐに近づきすずかの構えていたルナを切り裂く、これでこの後砲撃は大丈夫だろう。ティルウィング黄金色の聖約も限界か、刀身に罅が入っている

「アアアアアアアアアアアッ！」

すると今度は魔法を取り込んだ、あれは・・・

「マキア・エレベア闇の魔法だと・・・」

「ハハハハッ！混乱してるから教えたやろう！彼女はあらゆる真祖の力を入れた！故に君に勝てる要素など無いんだよ！」

男からそんな事を言っているが確かに余裕がねえ

「ガアッ！」

一言吼えるとすずかが一瞬で肉薄し俺をあらゆる方法で攻撃してくる

「ガハッ！ゴハッ！グッ！」

ダ・カーポ復元する世界によって傷自体は塞がったがどうすればいい？今の

俺の状態じゃタービュランス・バースト神雷招来を使っても抑えるなんてことは出来ないぞ

「あ、あああ」

考えているとすずかの動きが急に止まる

「こ……ころ……殺して」

血の涙を流しながら俺に言ってくるすずか、そのとき俺の中の何か  
が覚醒した

「すずか……」

「お……ね……がい……私を……殺して」

頭の中に流れるこの力の意味、前々から何度か発言していたが意  
味が理解できなかつたが今は理解できる

「ああ、お前を助けてやるよ」

そして俺はティルヴィング黄金色の聖約を構える

「ハハハハッ！その剣でどうやって助けると？殺すの間違いだろ  
う！」

何か聞こえるが今の俺にとってちやどうでもいい、今はすずかを助け  
るのが先だ

「あ、あああああああああああああああ」

再び意識が闇に落ちたのか俺に向かつてくるすずかだが今度は見える

「少し待っていてくれ、ダ・カーボ・ゼロ復元する原初の世界」

俺の力の一端ですずかの闇の魔法を元に戻し普通の状態にする

「な、何をしたんだ!？」

「簡単だ、元に戻したただけだ。この力は復元、故に俺の力で何処までも戻し続けた結果の力。原初にて根源それが復元する世界の本質」ダ・カーボ

テイルヴィンゲ黄金色の聖約を構える。今の俺の力ならばこいつのマイナスは意味をなさない。それが目覚めた俺の力の本質。

生み出し終わらせる者それは、あらゆる武を用いあらゆる武の担い手となる力

「オーバーロード・テイルヴィンゲ未だ果てぬ黄金色の聖約!!!」

一条の光の斬撃がすずかに向かい倒れた

「ハッハハ、ハハハハッ! 結局は殺すか! 流石抹消者のなに恥じぬ能力だな!」

男の言葉を無視し俺は輝紅を出しルーンを刻み込んでいく、刀だったものはやがて赤黒い一本の西洋剣となった

「何だ貴様のその瞳は! まさか貴様も真祖に! ? それにその剣は! ?」

「別に真祖になっちゃいないさ、これは唯俺の力の覚醒したにすぎ

ん・・・

そしてこの剣は真作にて新作、かつて狡知の神が作りし全てを終わらせる炎の魔剣」

俺は男に近づき刺し貫き真名を解放する

「終わりだ」レイヴァーティン「災厄を招く炎の魔剣！！！」

解放と同時に男は炎に包まれ消えていく。俺はすずかに近づき抱き上げる

「う、紅くん・・・お願い今なら大丈夫だから殺して」

「バカをいうな、お前を助けると言ったんだそれを曲げることは無い」

そう言っただけ俺はすずかに抱きつく

「血を吸えずか、今のお前はただ血を求めてるだけだ。俺の血を吸えば元にももるさ」

「でも、そんなことをしたら紅くんが」

真祖の力の意味が分かるのかすずかが躊躇う

「安心しろすずか、俺は死徒にはならん。それ以上の各位になっちまったからな」

ダ・カーボ・セロ  
復元する原初の世界ですずかを戻せるか試してみたがダメだったが俺は死徒にはならんと言っただけは分かる

「たとえお前が人間を超えた力を持つのが人間として生きたいなら俺はお前を一生支えてやるう、無限に近い寿命をもつと言うなら俺も共に歩もう。だから遠慮するなお前は一人じゃないんだ」

「紅くん・・・ありがとう」

それだけ言つとすずかは俺の首筋に噛み付き血を吸つた後気絶したようだった。

俺はすずかを姉さんに預けるとトールの元へと訪れた

「トールなぜすずかを戻せない？テイルウィング黄金色の聖約で世界と斬り復ダ元する原初の世界で戻したはずなのに戻らなかつたのは何故だ？」

「恐らくだけど貴方が来る前に既に契約は終わり彼女が受け入れてしまったからね」

「クソッ！」

俺は近くの壁に拳を打ちつけるとトールは俺の気持ちを察してか言葉をかける

「取り合えずあの男を送つた神は私が消したわ、貴方が殺りたかつたかも知れないけれど流石に神を殺すまでの力はまだ貴方にはないわ」

そう言つて肩に手を乗せるトールに俺はもう一つの質問をした

「最後に俺の力をお前は知っていたな？それはお前が俺に与えたものか？」

ゆっくりと首を横に振り否定の意味を示してから答えを出す

「その力は貴方が持っていたものよ。貴方の両親の力と貴方が求めた力が合わさり出来た貴方のオリジナルの力でそれはかつて私の親友だったロキの力よ」

「それじゃ俺は神になったと言うのか？」

瞳は元にもどり今は普通に黒くなっている

「いいえそれも違うわ、ロキの力を持っているだけで貴方自身は人間よ。ただ寿命と言う概念は無くなりかけてるけどね」

「そうか」

知りたいことは知れたから帰ろうとしたらツールがまだあると声をかける

「取り合えずずかはまだ完全に真祖にはなってはいわね。恐らくだけど体が出来上がってないからね。完全に真祖となるのは20歳前後になると思うわ」

「分かった」

「力自体は使えるとは思うけどまだ人間の体だから使いすぎたら元もこつもないわよ貴方がきちんと見てあげなさい」

「それも分かっているさ、誓ったんだよ一緒にいるってな」

今度こそ俺はトールのもとを去った

トール Side

「ふう・・・力を覚醒させたのは良いけどこんなことになるなんてね」

思わず笑ってしまう自分が招いた結果に

「すずかにすら迷惑をかけてしまったし、神って言ってもどうにもならないものね」

どんなに力にあふれていても人一人助けられないなんて神と云う存在がどれだけ意味が無いか分かってしまう

「ねえロキ？私はどうしたら良いのかしら」

今はもう存在しない私の親友ロキを思いながら見上げる其処には何も無い白い空間しかないけれど

「あの子はたった一瞬で貴方が作った魔剣すら作ったわ、それに他の神にもあの子力が知れてしまったわ」

幾ら私達のゲームに巻き込んでしまったと言ってもあの子は唯生きたいだけの人間だったはずなのにいつの間にか此方側に来てしまったし

「せめてあの子が殺されない程度には育てないかね」



私は紅那岐の力を上げる為の修行の内容を考えるだけだった

S t s への軌跡 Ep4 すずかの業と紅那岐の覚悟（後書き）

レティ「後悔してないぞ！だがやりすぎた感はあるのは認める」

トール「まったくどうするのよっ」

レティ「どうにもならん、すずかの真祖化は最初のうちから想定してたから」

トール「あっそ、ほら謝ることあるでしょ」

レティ「秋代様すいません！貰ったものを壊してしまいましたm」

—— m 治しますのでその内また本編で使おうと思います」

トール「因みに魔剣のレーヴァテインはF a t e 風の何となくの当て字なので正しいのを知っている人がいたら教えてください」

レティ「この後もまだ出てきますがとりあえずはこれくらいで」

トール「では感想ありがとうございました」

レティ「では」

S t s への軌跡 E P S 二いつらの事すっかり忘れていた(前書き)

いや、実際忘れていたのは私なんですわ

だそうと考えていながらすっかり忘れていました

まあ時期的に問題なかったんでよかったんですが

研究所を消し去った後（文字通り其処に残ってるのは平地）俺はリースから連絡を受けていた

「犯罪者が逃亡ねえ？」

「はい、何でもエリートが追っているようですが唯追っているのが彼のみらしいです」

リースも事務仕事慣れたなあって思ってたら爆弾発言してくれやがった

「はあ！？犯罪者追うのに一人ってどういうことだよ」

「なんでも彼の上司が隊員全部を駒としか思ってないらしく、なんでも今回の件も別の隊が担当だったはずが無理やり取ってきて彼に任せようです」

つ、使えねえ。管理局自体どうかと思う部分が多いがレジアス中将ですらそんな馬鹿なことしないぞ？あの人は単純に地上の事を思ってるだけだし

「座標は？」

「そついうと思ったので既に準備が来ています」

流石は俺の従者だな、関心してる間にも転送魔法陣が展開されて俺を光が包む。特務隊でよかった普通なら横槍入るだけで大問題

だし

「現場に到着つと、アレか」

現場に到着すると其処にはオレンジ髪の追う者とどう見ても犯罪者です。って格好の追われる者がいた

「筋はいいがまだまだ荒削りだなありや、訓練校の後現場じゃアレが限度つちゃ限度か」

遠目から見たら実力的にA+くらいの実力で追っているが追っている奴の実力が最低でもAA+だし何より相手は犯罪者だから非殺傷なんて生易しいものなんて使わんだろ

「メンドイから助けるか」

相手の手柄にしてやるつもりだがメンドイから一発で終わらせよう。と近づこうとしたら相手から強力な魔力を感じた

「死ねえええつ！」

男がエリート君（名前分からんよ）を殺せるくらい巨大な斬撃を放つのを俺が割って入り無力化する

「「なつ!?!?」」

二人から驚きの声が聞こえるが無視する

「此方は特務隊の赤羽特佐だ支援する捕まえる！」

「・・・はっ！行きます」

一瞬呆けた後状況を理解できたのか犯罪者を追う、うん直ぐに行動できる位には応用力はあるな。将来期待だ（まだ年上とは知りませんw）

「公務執行妨害及び、数多の容疑で逮捕する！」

そうして捕らえられると俺の方によってきて敬礼をしたので俺も返す

「ありがとうございます！まさかあの特佐に援護して貰えるとは思ってませんでした」

「気にするな。それより噂ってどんなの流れてるんだ？」

「え、いや、その・・・」

「良いから、別に怒らんさ」

言いよどむのを無視し促すと

「えっと、何でも犯罪者と見れば拳の一発で沈黙させるとか、やれ違法研究所があつた場所には何にも残らないとか、あとはエース達の知り合いで虐めるのを趣味にしてるとか」

とんでもない回答が帰ってきた、最初の2つは間違っちゃいないが何故に最後の追加されている？

「しかし、どうやってあの男の斬撃を防いだんですか？デバイスも持っていないようですが？」

「手に魔力をためて振りぬいただけだが？」

なんで驚いてるんだ？デバイスが無いのは仕方ないだろ？ファフナーに災厄の剣とか覇煌刃とか入れていたらあいつ《マスター、非殺傷削除しちやいなYO 意味無いぜ》(b)とかほざいたしな、合ってはいるがいつからあいつソクナ性格になったよ？言われた瞬間フォーマットかけそうになっただぞ

「えつと・・・」

「まあ、気にするな俺が規格外なのは自覚してるからな」

戸惑っているエリート君に言っただけ俺は回収し終わった犯罪者をつれ引き渡した後こいつの上司に報告に付き合う。メンドイが仕事上ここら辺は折り合いはつけた

「貴様！あの程度の犯罪者を捕まえるのに特務隊の助けるを借りるとは何たる怠慢！死ぬ覚悟すらないのか貴様は！体を張ってでも一人ですべて見せる！」

なんだろうねこの自分が一番偉いつて思ってる人は？レジアス中将見習えよ、人を貶める言い方するが命に対してはめちやくちやあの人敏感だぞ

「そんな事すら出来ん奴は死んでわびろ！」

「ちよつと黙れやクソ野郎」

めっちゃ軽めに言う俺の発言だが室内は凍りつく

「そんな事を言うならお前がやりな」

「な、貴様！上司に対して！」

「は？特佐の俺はあらゆるものに縛られないぞ？てか階級をきちんとするなら一等空佐だが？」

知らなかったのか知ろうとしなかったのか兎に角上司であることを言いたいようだったが悪いが俺の権限は既に将官クラスじゃなきゃまともに取り合えないからな

まあ大恩ある三提督とかの命令は余程の事じゃなきゃ跳ねないけどね

「あ、あの」

「もう言い黙れお前は、お前の件に関して後日追って連絡が来るはずだ失礼する」

そう言い放ち俺は部屋を出るとエリート君が追って礼を言ってきた

「あ、ありがとうございます！私はティード・ランスター二等空尉になります」

わっほい！まさかここで原作ブレイクするとは思わなかったよ

「あ、あの特佐？」

「ああ、すまないなティード空尉またな」



「また？」

手を上げながら帰っていくとそんな言葉を残していた

数日後俺達の隊の部屋のドアがノックされる

「どうぞ〜」

「失礼します」

其処には管理局員には異質の赤色の制服に身を包んだティーダが入ってきた

「よく来たな特殊任務実行部隊ならびに特殊戦技教導隊に」

「はっ！ティーダ・ランスター二等空尉ただいま着任しました！」

敬礼してくるので全員返す

「さて、ここに来たということはある程度の覚悟はあってきたという事でいいのかな？」

「はっ！」

何も言わず唯一言ですます、ふむこれなら着いてこれるだろうな

「分かった！ではここに着任を確認した。君はこれより特尉となり尉官以下ならば命令権を持ちまた佐官以上にも発言権がある」

其処で一端切り静かに目を見ると確かな意思が見て取れる

「だがこの部隊の存在理由は失敗は在らずだ、もし貴様が失敗をすればすなわちそれはこの隊全てにおいての責任にあるそれを忘れるな」

「はい！」

「ここまできちんと説明をすればこの隊の意味が分かるだろう、それでもなおこの目をしてるなら大丈夫だな」

「さて、硬いのはココマデで後は好きにいいよ」

「今までの緊張感は何処へやらの態度で答えるとティータは目を丸くする」

「外での態度はしゃーないけど、中までは強制する気ささらっさら無いし」

「は、はあ」

「まあここまでのやり取りで俺がうるさいタイプと思ったのかな？俺はノリで生きてるような人間だぞ？」

「まあ慣れるまでは好きにすると良いが任務が無い時にここにいたらそんな態度でいたら胃に穴があくぞ？」

「そう言っただけ目を配らせ全員に挨拶させる」

「初めまして私は月村　　すずか技術主任並びにこの隊では特尉となります」

「呂奉 恋、よろしく「階級いつてないぞ」・・・特尉？」

「赤羽 七星だよよろしくね、階級は特尉だよん」

「リースと申します。階級はこの中では一番低い特曹となります」

「この隊の隊長赤羽 紅那岐といいます。階級は特佐となります、よろしくお願いしますティーダさん」

俺が急に丁寧な話すと急にあせりだす

「え？」

「すみませんでした、急にタメ口で年上と知らなかったもので」

「年上！？じゃあ特佐は一体何歳なんですか？」

「俺は今年で15ですよ」

「私達は13になります」

そしてティーダの驚きの声と共に幕は閉じこの後にタメ口でOKと  
言う感じになった

End

ティーダを向かえ俺の隊も少しは戦力が充実してきたなあ、ぶっちゃけ少数精鋭の代わりにリミッター存在せざるがいつの間にかやら正

式な部隊になってそんなものどっかに投げ飛ばした状態だったけど

「んで、今回はここか」

あいも変わらずやってきた研究所ここは何だかプロジェクトFについてやっているそうさ。リリースにしるすずかにしるあいも変わらずハッキングが上手いことでよろしい

「さてと、取り合えず人員を確保のちに転送したらデータとって潰すか」

そうして研究所を制圧しながら進んでいくと目の前に見慣れた人物がいた

「な、ナギ！」

「お〜フェイトじゃんどうしたんこんな所に？」

「えっと、違法研究所って事で私が担当になったんだよ」

「ああ、現場に執務官が来るって言っていたがお前か」

「え！？私ナギの事報告受けてないよ！」

「そりゃそうだろう、俺が受けたのさっきだし」

俺とフェイトが連携を取ってなかった理由がこれだな、俺の場合裏の部分で消して欲しいんだろが甘いぜ！プリンに砂糖を直接かけるよりな！データはきっちり回収させて貰って後で役に立たせてもらおうつもりだよ

「ナギもこの人たちを取り締まりに？」

「それはついで、一番の理由は潰すため」

「ええ！そんな事したら」

「安心しろ任務だ、あと一応今は仕事で俺は特佐だからその口調  
したいなら念話でよろしく」

驚いているフェイトを放置しつつ一緒に進む

『でも、人は確保して逃がしてあげるんだね』

『ああ、意味無く死人出しても無駄だしな』

『時々ナギが怖くなるよ』

念話でやり取りしながら俺の言に引くフェイトだが俺にとっては  
なあ・・・まあいいや目的に到着したし

「管理局です！非人道的事件並びに・・・」

とフェイトが研究者たちを捕まえている間に俺は其処に捕らえら  
れていた人物を見つけた

「来るな、来るな」

隅でおびえながらも此方を威嚇している赤毛の少年・・・少年？

「あー怯えるのも無理は無いが取り合えず助けてやる」

そう言つて近づくとなにやら雷撃があたりに飛び散る

「？」

俺が首をかしげると少年？は驚いていた

「な、なんで効かないんだ」

何言つてるんだこいつ？

「恐らくだけどナギに向かつて出した雷撃が効いてないことに驚いてるんだと思うよ？」

「え？雷撃食らつたの俺？」

分からず聞き返すと「うん」と短く頷くフエイト

「あーすまんな？俺にとつちやぶつちやけちよつとした雷撃程度なら栄養にしかならんから」

「栄養つて何！？」

「お前が驚くなよ！てかお前も食らつても大丈夫だろうが！」

「行き成りは無理だよ！」

「あの修行を思い出せよ！誰も雷撃しますよって言ってくれないぞ」

「戦闘中ならまだしもこんな子供が使つとは思わないもん！」

「常に対策している！死にてえのかよ」

そんなやり取りをしても少年？の態度は硬いままだった

「そう警戒するなっていうのも無理か？まあ俺はお前を救ってやるよ」

そう言つて近づくと雷を出して警戒するが気にせず・・・ぶつちやけ吸収しながら進むいい加減俺も化け物じみてきたな。雷神化したら格下なら電気だろつが雷だろつが発動した瞬間吸収ないし無効化できるがな

「ほれ、今までの奴らと違って俺なら大丈夫だ」

そう言つて抱きついてやる、こんな目をしてるのは大概人間不信に陥った奴だからぬくもりを教えてやればいいんだしな

「安心しろ、お前はこれから一人じゃないさ」

ゆっくりと優しく言つてやると緊張が解けたのか目を潤ませている

「ブハッ！」

フェイトが鼻から愛を噴出してるっポイが無視だ無視！

「もう大丈夫だからな？我慢するな」

それだけ言うと大声をあげて泣きついてきた、子供は素直に感情を表現するのが一番だ

事件も終わり（研究所もちゃんと消したよ？あの子が凄いものを見た顔をしてたけどwww）

「さてと、俺はこの子を引き取るうと思ってるんだが何故に邪魔するフェイト？」

「私が引き取るよ！ナギに預けたら何をするか分からないもん！」

微妙にハアハア言いながら言っているフェイトのほうに危ない気がするんだが？

「まあまあ、ここはこの子……ってそっぴや名前聞いてなかったが名前は？」

「僕は……エリオ・モンディアルのクローンです」

消え入りそうな声で言ってきた、プロジェクトFのことをくっつけて言っていたから予想してたがやっぱりか

「ああ、クローンどうのこうのは気にせんでいいぞ？其処のシヨタコン金パも同じ存在だし」

「ナギなにを人の性癖言ってるの！ってそっちじゃなくて何人の秘密ばらしてるの！」

否定しろよお前

「まあ、昔言ったことがあるんだがお前はお前だ。たとえクローン



でも考えてるのはおまえ自身だからな気にするなどは言わんが子供が卑屈になる必要はないさ」

頭を撫でながら言ってる、子供って丁度いい位置に頭があるから撫でやすいんだよね

「僕は僕？」

「そうだ、まあ後はお前が決める。俺と共に来るか、フェイトにくるか」

「僕はお兄ちゃんについて行きたい」

「分かったよ『エリオ』」

エリオって名前を強調して言ってる、話している間にオリジナルは死んでるし問題ないだろ？オリジナルの両親とは縁は切れてるし

「うん！」

「もう！私ならこの後もフォローできるのに！」

「そういうならエリオの眼を見つめながら言ってみ？」

「そんなの簡たn・・・ブフォツ！」

また愛を出して倒れかけるフェイト・・・筋金入りだと言いたいが、エリオってこんなに垂れ目だっけ？まあいいや、男の娘でも大切に育てて見せるさ

そうして俺はエリオを引き取り帰っていった



Stsへの軌跡 Eps いろいろの事すっかり忘れていた(後書き)

レティ「マジで忘れてたwエリオとティーダw」

トール「あんだ、エリオたち助けるのを思いついといて忘れてるって」

レティ「いやあ、ネタ帳存在しないし何より場の勢いで書いてるし」

トール「はぁ・・・」

レティ「溜め息つくなよお寂しくなるじゃん!」

トール「さてティーダとエリオを引き取ったってことは魔改造する気でしょうねあの子」

レティ「確実にね」

トール「何処まで強くなることやら」

レティ「さてねwでは感想ありがとございました」

トール「次回は時空の旅人様とのコラボ予定」

**S t s への軌跡 E p 6 やつと出来たけど試すのは異世界(前書き)**

今回は時空の旅人様とのコラボ

実はこれの為にお願いしました

S t s への軌跡 E p 6 やつと出来たけど試すのは異世界

最近思うことがある、俺ってトラブルメーカー？行くところなす事なんか色々なことが起きるんだが。そんな事を考えてるとプレシアから通信がきた

「そんな渋い顔してどうしたのかしら？」

「いや、なんでもない。それよりどうした珍しい」

本当に珍しい、すずかに通信はしてくる事が多いが俺に通信してくるなんて

「ええ、頼まれていたものが出来たから」

「ホントか！？すぐ行く！」

俺は隊舎を飛び出し技術局に向かった

「来たぞ！」

「「「はやつ！」「」」

プレシア・アリシア・すずかが其処におり俺が来たことに驚いていた

「連絡して一分足らずで来るってどれだけよ」

「これでやっとステゴロからおさらば出切るなら速くくるわ」

そう言つて一基のデバイスが其処にあつた

「例のシステムの為の先行試作型に当たるからできれば壊さないでね」

「安心しろ、手加減用で欲しいから頼んだだけでマジにやるときは使わんから」

そう言つて俺のデバイスであろうそれを見る

それは剣がクロスしたネックレスタイプのものがあつた

「苦労したわよ、貴方が言つたアレを試すためにどれだけ失敗したか」

「仕方ないだろう？アレをやるには俺は畑違いで理論組めないんだから」

「アレ？でも武器は作れるよね？」

「武器は作れても兵器は作れん」

「どう違うか分からないよなっちゃん」

とは言つたものも、詳しく説明もできないしなあ。簡単に言えば宝具は作れるけどデバイス作れないって事なんだけど。そうすると宝具の説明でロストログアになるから説明する訳にはいかないし

「まあいいや、ちょっと試してくるね」

そう言つて俺は技術室を後にして誰もいない広場で考える

「・・・誰を相手にすればいいんだ？」

「すずかには実力が僅差だから無理だし、なのは達もなあ実力高いからこれだときついだらうなあ」

《取り合えずマスター名前をください》

「すまんすまん。名前は・・・グリムゲルデだ。愛称はグリムで」  
《固体名称登録完了しました》

「さて、どうするかな？さっきも思ったが下手なことをすると此方の世界で被害が大きくなりそうだし・・・」

「あ！あいつの所にいくか。話を聞いたがあいつの妹って確か防御特化だったし」

「そう思い俺はツールに念話をつなげる」

『ちよつといいか？』

『どうしたの？また修行？』

『それはしたいが今回はパス。んで悪いが神威の所の女神さんにつないでくんね？』

『あの子に？ちよつと待ってね』

『・・・もしもし？どうしたの？』

『神威の所に行きたいんだけど送ってくれません？帰りは自分では何かするから』

『ちよつと待ってね？』

念話が切れるとやがて足元に魔法陣が出来て俺を転送した

Side End

「艦長！次元震が起きたって本当ですか！？」

「クロノ、ええ実はそうなのよ。ただ次元震は一瞬だったんだけど」

其処でリンディは言葉を切ったのでクロノは続きを促したので答えた

「実はSクラスの魔力反応もでていたの。もしかしたら犯罪者かもしれないから向かってもらえないかしら？」

「分かりました。場所は？」

「海鳴市よ」

「なっ！」

クロノは驚いたがそのまま向かうことになった

Side End



「……ん？魔力反応があったような？」

「神威君！余所見しちやイヤなの！」

「そつだよ？折角みんなで遊んでるのに」

なのは・優奈と一緒に遊んでいるんだが優奈が気づかなかつたと言  
うなら気のせいだろう

俺はこのときなんできちんと調べなかつたんだろうと後悔した

Side End

「さて着いたは良いけど、なんでこんなことになるのさ？」

今俺の周りには管理局員の武装隊の服を着た奴らが並んでるんだ  
が……懐かしいなw俺も1週間とは言え着ていたから

「黙れ！貴様の所属と目的は！」

いやいや、所属聞いといて目的ってwと考えると目の前に黒い  
服をきた奴が現れた……こいつの顔を見るのも久々だな。こつち  
では既に忘れ去られてる人物だし

おい！

なんか変な電波を拾ったような？

「さて、君がなんの目的でここに来たかを教えて貰おうか？」

うむ、クロノ自体を覚えてないからこんな言い方だったわけ？  
まあいいや目的言えば多少は納得するだろう

「神威おらん？合いに来たんだが」

「あいつの知り合いか！？」

「まあ友人だな」

そういうとクロノは神威に通信してるようだ

Side End

『と言うわけで君の友人が来てるんだが』

クロノからの通信で言われたんだが次元震起す友人なんて知らないぞ俺は

「・・・本当に友人か？」

「君の名前を知ってる時点で友人だろ？しかも僕達に向かって君の名前をだすならなお更」

言われて見ればそうだな

「分かった今から向かう・・・なのはちょっと」私も行くの！」は

あ・・・」

別にいいんだけどさ

「優奈はどうする？」

「うーん、私は「ああ、彼から優奈は是非だって」私を知ってる人いるの？」

本当に誰だ？まあ行ってみれば分かるか、こうして俺達はクロノの指定する場所まで向かったのであった

「・・・お前誰だ？」

「久々だな神威」

なんかお互い話が食い違っている気がするのは気のせいじゃないよな

「・・・俺はお前なんて知らないぞ」

「友人に対して酷いな、ここ数年会ってないからって」

数年？ここに来たときから考えてもこんな奴とあった記憶は無いぞ  
俺は

「まだ分かんないのかよ？紅那岐だ」

「お前紅那岐か！？」

驚いた、前にあったの数日前なのになんでここまで大きくなって

んだこいつは!?

『時間軸が違うようだな?俺の世界じゃ既に4年経っていて俺は既に15だ』

いや本当におどろいた。既に向こうで4年経っているなんて分からないわけだ

「・・・でお前は何の用でここに来たんだ?」

「ん〜」

紅那岐は考えながらも優奈に近づいていく

「な、なんですか?」

「お前が神威の妹?か、始めましてだな友人の紅那岐だ」

そう言っって手を差し出して握手していたらなのはも私もと言っって近づくけど・・・あいつの性格じゃからかつのがオチだな

「私は「魔王だろ」「魔王?」「違うのか?神威が言っっていたぞ?人の意識を刈り取る攻撃しか出来ないっって」・・・神威君?」

あいつ俺に振ってきやがった!ちょっと待てここは落ち着けないと

「O H A N A S H I!するの」

そう言っってなのはがこっちに来るけどそのとき念話が来た

『すまんすまん。こっちのなのはも同じように反応するか試したくてな。とめるなら取り合えず抱きついて頭でも撫でてやれ』

ケラケラ笑っているあいつに殺意を覚えたのは間違っていないと思う後退を許されない現状しかたない！

「にやつ！？かかかかかかか、神威君！？／／／」

「落ち着けなのは、あいつの言うことは90%悪ノリだ」

「残り10%はノリだけだな」

「真実無いですよねそれ？」

あいつが俺の発言に便乗して優奈が冷静にツツコミを入れてるが、なのはの頭を撫でてやっている俺にはツツコミを入れる暇が無かった

Side End

いやあ、まさかここまでなるとは思わなかったすまん神威

「・・・本当にお前は何をしに来たんだ」

睨む神威だが隣のなのはが腕を組んでいる時点で怖くともなんともないぞ

「ああ、目的はデバイス作ったんでな優奈にちよつと模擬戦を頼んでみたくてな」

「自分のところで試せばいいだろ・・・」

そうは言つがな神威よ

『オマエな、手加減用のデバイスで行き成りSSSと戦えと？しかも試運転すらしてないのにこっちで試せるか』

『は？SSS？』

『ああ、こっちなのは達実力全員SSSある』

『・・・なんでさ』

『俺が鍛えたらなった』

念話を繰り返すうちに神威が目に見えて暗くなっていた、将来ありえそうと心配したんかな？

「けど私攻撃できませんよ？」

「ああ、ちょうどいいじゃん。まあ・・・すまんだからデバイスしまつてくれ。なのはにクロノがいるんだろ？丁度いいさ」

そういうと何故か周りがいやな空気になっていたがなんでだ？

「君幾らなんでも嘗めすぎなんじゃないかな？僕となのはの実力を知っていればそんな事はいえないはずだが？」

よく知ってますが？いえないから言えないけど

「まあ、いいだろ？神威負かしたことあるし」

その一言に回りは驚いていたがありえないという声も上がる

「まあ試せばいいじゃん、本当かどうかを」

そついうと納得したのか準備を شدした

Side End

「んじゃ、試すかな？グリムゲルデ、セットアップ」  
《セットアップ》

紅那岐がセットアップが終わると其処には黒いズボン・赤いインナーに黒を基調とし赤いラインが入った陣羽織を纏い手には左右対称の剣が柄の所でくっ付いてる双刃剣を持っていた

「ふむ、悪くはないな」

剣と防護服を見ながら満足そつに頷く紅那岐に念話があった

「・・・お前デバイス何個もってるんだ」

「ああ、前に持っていたファフナーなアレ非殺傷とつぱらつまつた」

「はあ？」

「いやお前に貰った覇煌刃やそのたもろもろ意味が無い武器入れているから意味が無いってことで取っ払った」

『・・・意味が無いって』

『いや、俺が本気になると非殺傷でも殺せるからさ。だから手加減用のこいつを作ったんだよ・・・まあ後はあるシステム使うんだがここじゃ使えないけど』

『・・・なんでだ？』

『カートリッジ使っていていいなら使っけど？』

『すまん。分かった』

念話に没頭していた二人だったがクロノの一言で呼び戻される

「そろそろいいか？時間も無いので一気に終わらせてもらっぞ」

「私を魔王って言ったの後悔させてあげるの！」

「みんなほどほどにね？」

そう言っつて模擬戦は始まるが、ここにいる神威以外は（神威は模擬戦参加してません）驚くことになった

「ステインガースナイプ！」

「シュート！」

まずなのはとクロノが誘導弾を放ち紅那岐の動きを見ようと撃ったが紅那岐は動く様子は無かった



「よっ」と

紅那岐が軽く腕を振るうと迫り来る誘導弾を一閃の間に切り裂いた

「使いやすいな、さすがだ」

《そう言っていただければ作って貰ったかがあります》

「更に言えば俺の好みにあった事言ってくれるじゃん」

《光荣です》

そついうと紅那岐はなのは達を見据え軽く腕を振るうとゆっくりだが斬撃が飛ばされる

「こんなの!」

「なのはちゃんどいて!プロテクション!」

優奈が割って入り急遽全員が入るくらいの大きなプロテクションを張って守った

「へえ、よく分かったね」

「こつちのが驚きですよ。対して力こめてないようにしてるのにあの威力」

二人は分からずはてな顔だったが神威の一言によって驚愕することになった

「恐らくだが紅那岐が放ったの最低でもAA+くらいの威力だったぞ」

「正解だ！まあこれ以上の威力は現状今出せないがな」

あまりな回答に全員驚く、何せ手札を教えてるからである

「でもな？近接に威力は関係ないぞ？」

《フラッシュムーブ》

すると紅那岐がミッド固有の上位移動魔法を使いクロノに接近する

「ほい！」

掛け声とは裏腹に軽い感じで片手で振るつ剣をクロノはガードするが

「うん、神威と模擬戦でもしてるのか反応いいな？」

そついうが何処までの余裕の表情の紅那岐に

「忘れないで欲しいの！デイベイイイン」

なのはがクロノごと巻き込みそうな攻撃をしようとしたのを見て

「おいおい、味方ごと巻き込む気か？おおう、バインド食らった」

なのはに注意しようとしたら今度はクロノがバインドを掻け動きを止めながら離脱する

「バスタアアア！」

「よいしょ！グリム、スラッシャー！」

《イエス、グランスラッシャー》

そういつと剣を一闪した紅那岐

「うそ・・・」

「馬鹿な！」

「すごい！」

「おいおい・・・」

全員驚いた、なにせ紅那岐の斬撃によってバスターが斬られたからである

「あぶね」

「うそなの！」

「ああ」

あまりにもな態度に全員辟易する何せ紅那岐があまりにも不真面目だからである

「お前少しはマジメにやれよ」

鶴の一声のごとく神威にダメだしされる紅那岐は

「しょうがねえ・・・お前らちよつとは耐えてくれよ？」

そういうと紅那岐は一端目を閉じた。今だ模擬戦は続いているのでクロノは好機と思い攻撃をしようとしたら

「くっつ！！？」「」

紅那岐が目を開けた瞬間全員固まってしまっ、否固まってしまっ得なかった

「さっきの優しさは皆無だからな？」

紅那岐が出したのは殺気である、今まで紅那岐は一切殺気を出さず攻撃をしていた。上位になれば殺気を使い攻撃の手や逆にしまい奇襲に使うことなどできるが模擬戦でやる必要は無いので紅那岐にとってはこの位のレベルだとどうしてもあなってしまうのである

「強すぎるのも問題だな・・・逝くぞ」

それだけ言うと紅那岐は一瞬の間にクロノに近づき攻撃をする

「さっきと同じなら防げる」

クロノの言うとおりさっきと同じならば防げていただろうが、残念ながらさっきとは全く持って違っためクロノのこの台詞は死亡フラグ以外ない

「ハッ！」

すると紅那岐は下についている剣を離し取ると二刀になりもう一方をクロノに振るった

「ガハッ！」

クロノのわき腹にモロに直撃するが周囲は驚いていた。なぜならクロノは広域に防御を張ったのにも関わらず関係なく脇を打たれたのだ

「これぞ本当に脇が甘いつてか？」

クロノは落ち周りを見渡すと其処にはスターライトブレイカーの準備をしているなのはの姿があった

「受けてみてこれが私の全力全開・・・スターライト」

「二刀一刃」

すると紅那岐はまるで左右で抜刀術でもやるように構える

「ブレイカアアア！」

「クロススラッシュ！」

なのはのブレイカーと紅那岐のクロスした斬撃が一瞬だが拮抗するがその後飲み込まれ紅那岐に迫るが紅那岐にとって一瞬とは全部であり一瞬あれば・・・

「まだやるか？」

「・・・参りました」

後ろに回り首に剣が突きつけられていた

「さて残りは」

「私ですね」

「・・・攻撃手段持たないからな、一発勝負だ」

「防ぐか当たるかですか？」

「聡い子は好きだ」

それだけ言つと剣を戻し回し始める

「プロテクション全開！」

優奈も優奈で防御に自身が有るのか最大防御のプロテクションを展開した

「逝くぜ！全てを斬る！」

《リングスラッシャー》

円形の斬撃が優奈に向かい高速で接近した

「これ位なら！」

優奈は簡単に防げると思ったがプロテクションに当たった瞬間に驚愕することになった

「うそ！？」

プロテクションが斬られ優奈に向かっていくのであった

「おりゃー！」

いつの間に追いついていたやら紅那岐が割って入り斬撃を霧散した

「あのどうして？」

「すまん、威力は高くは無かったんだがアレ当たると恐らく鋭い切れ方しそうでな」

そう言っって頭を撫でる、何故か兄と妹と言った感じである

「さてと、クロノ回収してくるわ」

そう言っってクロノを回収した後少し談話していた

「あの、私のプロテクションってなのはちゃんのスターライトブレイカーでも罅入らないはずなんですが？」

「ああ、だろうね」

「だったら何故？」

「面と点・・・今回は線か、その違いだな。確かに広域で攻撃されるならアレはいいけど一点に集中してる攻撃なら密度の違いで割れるんだよ」

みんな？顔だがその後その後にその内物理で習うと行ってまとめた。クロノは若干分かってたっばいが

「さてと、神威世話になった礼にこれやるよ」

そう言つて宝石を投げ渡す

「・・・これは？」

「骸龍鬼アセドエンペルの魔石だ」

「名前が物騒すぎるが・・・」

「まあ見た目はドラゴンゾンビだしな」

「そんなの渡すなよ・・・」

「従えればかなり強いぞ？最低でも『お前の中にいる奴と同等かちよいくらい』お前の修行あいてにはなるさ」

『小僧気づいておつたか』

『はっ！？俺も神龍従えてるからな』

笑いながら念話を返しながら答える

「さてと、データも取れたしそろそろ帰るわ」

「ああ、またな紅那岐」

「じゃな〜」



そういうと転送法陣が現れ消えていった紅那岐である

「しまった奴の居場所が!？」

実際は転送は近くの人気の無い場所に移動しその後ダ・カーポ・エに反転する世界ンドで元の世界に帰ったのである

S t s への軌跡 E p 6 やつと出来たけど試すのは異世界（後書き）

レティ「神威すまん！イジル役に終わった！」

トール「最低ね」

レティ「言い訳はしない、だけど今回ってデバイスの調整で適任が存在しない・・・あコラボお願いして優奈のプロテクション相手に練習すればよくね？って結論になったんだよね」

トール「・・・時空の旅人様大変申し訳ありません。不満だらけでしょうがイヤなら教えてください。修正と言うか書き直しますので」

レティ「では感想ありがとうございました」

トール「次回は畏無様とのコラボよ」

Stsへの軌跡 EPR 修行と言ひまの庵め(前書き)

畏無様とのコラボ

S t s への軌跡 E p 7 修行と言つ名の虐め

椿が消えまた自身の力の象徴のペルゼインの力も消えてしまった霧夜は朝から刀の素振りをしていたが失ったものがあまりにも大きすぎる為今一修行に身が入っていなかった

「・・・ふう」

溜め息とも息抜きともいえない空気を吐きながら素振りを止め空を見上げると其処には・・・

「はあい」

満面の笑顔のアルテミスがいた

「・・・お前なんでこんな所にいるんだよ」

「霧夜の修行をしてあげようと思ってね」

霧夜は驚きながらも自身に起こったこと故に戸惑っている

「あ、拒否権ないから。向こうには連れてくって言っちゃったし」

霧夜は思わず溜め息をついた、アルテミスがやるといったらやることは十二分に熟知している故に

「ん？向こう？」

ふとアルテミスの言葉に疑問を持ち聞くが

「時間無いからとつと行くわよ」

霧夜の質問に答えず転送される

「さて、ここで修行するわよ」

修行場所と思われる天界の一角につき目の前の扉を開け放つと霧夜は驚いた

「なっ!?!」

そこには二人の男女がおり二人は互いに読書をしているだけなのだが空気が異質すぎる、殺気に満ち溢れるにも関わらず二人は気にもせず本を読んでいるからだ

「アルテミスやっときたわね」

赤髪の女がふと顔を上げてアルテミスに声をかける

「ええ。一体何をやってるのよ」

あきれながらも返事をするアルテミスに

「ああ、トール曰く殺気の中でも平常心でいられるような修行だつてさ」

今度は男のほづが答えてきた

「そう・・・意味あるの?」

「意味なんてないんじゃないかしら？」

なんか色々台無しな台詞に二人は溜め息をつく

「さてと、今日は珍しくもう一人加えるって言ったが霧夜が参加するのか」

そう言っつて霧夜に近づき見てくる男に霧夜は見覚えは無かった

「……誰だよ」

「この前の神威の時もそうだったが、たった数年会わないでそんなに変わるもんかね？」

霧夜の警戒とは無関係にのほほんと話す男がやっと自身の名前を言った

「紅那岐だよ。相変わらずカワイイ容姿してるな」

「……紅那岐か！あとカワイイなんて言っんじゃないさ」

そんなこんなで修行となっただが

「さてと、アルテミスは最初のうちは遠距離お願いね？私あまり得意じゃないから基本は近接しかやらないし」

「了解よ」

するとトールはファイティングポーズをとりアルテミスは弓を構える

「ん？霧夜ペルゼインはどうした？」

「……」

「私が説明するわ」

そして説明を受け、何故修行をするかを説明された

「そうか……ファフナー」

《（\*・・・）b OK!》

すると紅那岐はファフナーから鬼菩薩をだした

「色々と改造しちまってるが、基本は防御に役立つから遠距離防ぐのに使えばいいさ……近距離で使っなよ？ツール問答無用で壊すから」

「……ああ」

そして始まる修行

「ハッ！」「オラッ！」

「甘い甘い〜」

紅那岐と霧夜がツールに斬りかかるがツールは軽く避ける

「私を忘れないでね？トリリオン・ドライブ」

するとアルテミスが無数の矢を放ってきた

「ぐっ……」

霧夜は鬼菩薩を使い防御していたが紅那岐はと言つと

「ダラッ！」

「ちよつとはやるようになったわね」

未だにトールと格闘戦をしていた、紅那岐は自身に降り注ぐ矢の中で致命傷とならないものは気にせずまた避けなければいけないものは攻撃に転じ回避と攻撃を一緒にしていた

「霧夜あ！強くなりたいんだろ？ここで止まるな！」

「余所見とはいい趣味ね？」

「ガハッ」

霧夜に声をかけていると関係無しにトールは紅那岐の腹に穴を開けるが

「ちい！？お返しだ！」

「お断りよ」

「ならそつちにだあ！総トールハンマーてを射抜く雷光！！」

「甘いわよ？」



紅那岐が激戦で一人で戦っている間霧夜には傷を治す為にルーネが隣にいた

「・・・あいつはあそこまで強くなっていたのか」

「はい、ちょっと前に取り返しがつかない事が起こってしまいまして、それでどうしても強くならないといけないんですよ」

霧夜は驚いた、あまりにも自分に似たようなことが紅那岐に起こっていたことを

「・・・そうか」

一言呟くと霧夜は再び修行場へと駆け出した

「ほぐら、さっきのお返しよ千の雷」キラキブル・アストラペー

「ちよっ！？バカ！！」

先ほどの総てを射抜く雷光のお返しとばかりに今度はアルテミスが極大の雷を二人にお見舞いしようとするが

「ありがたい！タイヒュランス・バースト神雷招来！！」

紅那岐は雷神化し雷を吸収する

「なんで!?!」

「あの子は私と契約してるんだから雷なんて効くわけないでしょ！

「！」

「知らないわよ！そういうことは最初に言いなさいよ！」

きやいきやいと喧嘩してる二人に今度は紅那岐達が近づくと

「オラ！！」「ハア！」

二人して切りかかるが

「何処を狙ってるの？」「」

二人が消えあたりを見回そうとすると後ろから声をかけられ

「遊びは終わりでちょっとだけマジで行くわよ？」

「そうね」

「ガッ！！」

二人は吹き飛ばされると其処にはすさまじい存在感を持つ二人の神の姿があった

「紅那岐は自力を鍛えたいんでしょ？それを解きなさい」

「霧夜も少しは吹っ切れたみたいだけどほかの事を考える余裕は無いわよ？」

そして二人の攻撃が始まった、紅那岐も霧夜も防いだりしていたが裁ききれずにダメージを負っていく

そんな時にトール達の攻撃が一度止まる

「はあはあ・・・流石にきつい」

「・・・お前はなんであんな奴と修行できるんだよ」

紅那岐は自分より上位の2人の攻撃を裁くのがきつく、霧夜は遠距離は兎も角トールの近接においてのきつさに辟易していた

「だからこそ強くなれる」

「・・・そうか」

それだけ言うと紅那岐は今まで素手だったが一本の赤黒い剣を出す

「アレは！？なんであの子持ってるのよ！」

「そんな事はいいからぶつ飛ばすわよ？」

それだけ言うとトールは再び構え、アルテミスも弓を消し手には双剣を持っていた

「さあ、そろそろ決めるわよ？」

「魂が消滅しないくらいの攻撃をしてあげるから」

物騒なことを言う二人に対し紅那岐と霧夜も覚悟を決める

「霧夜いくぞ？」

「ああ・・・」

二人もまた構える

「「「「はあああああつ！」「」」」」

そしてぶつかり合う4つの閃光、そしてその後は

「うっ・・・」

「気づいたか」

気絶から回復した霧夜に声をかける紅那岐

「俺は・・・そうか」

一瞬なにをやっていたか曖昧な状態だったが直ぐに思い出し理解をした

「それにしても最後は？」

「ああ、アルテミスに俺達二人の攻撃を防がれてツールに吹っ飛ばされて終わり」

「見えていたのか？」

「ああ、気絶はしなかったからな」

「・・・そうか」

「俺だってこの4年間の修行が出来てなきゃ流石に無理だ」

そう言ってかなり辛そうではあるが答える紅那岐

「おまったせ」

そして入ってくるアルテミスと二人のトール

「・・・は？」

「ああ、驚くか。俺も最初はそうだったしな」

一人驚いている霧夜とは別にトールとアルテミスは話していた

「あまりに攻撃力低いから可笑しいと思ってたけどまさか分身体で2人を相手にしてるなんて」

「今の私単純な戦闘力じゃこっちで修行できないのよ、なんせ唯のパンチで体全部吹き飛ばすくらいの威力でちゃうし」

「手加減すればいいでしょ」

「手加減してそれだけど？」

「・・・もう何も言わないわ」

呆れているアルテミスを他所にトールは霧夜に声をかける

「取り合えず今回の修行で見切りと単純のスペックはかなり上がったわ。実感無いかもだけど適当に転生者狩って見れば分かると思うわ」

「霧夜さんお疲れ様です」

そこに現れるちっちゃい天使

「幼女か・・・」

「幼女じゃありません!」

「まあまあ、これでも食べて落ち着けて」

「私子供じゃないですよ!んぐっ!?!」

紅那岐が落ち着けようと出す一本の飴に最初は怒ったが無理やり口にねじ込まれた後大人しくなる

「うまいか?」

「ペロペロ・・・」(コクン)(

) (凄いい!手なずけた!)(

「ほれ、まだあるから持って行くといい」

「わーい、ありがとうございます!」

満面の笑みで帰っていく幼女（天使）に手を振りながら答える紅那岐

「相変わらずちっちゃい子には優しいわね」

「子供は好きだからな」

のほほんとしていながらも分かれのときはきた

「じゃあな霧夜、次にあうときは・・・コラボだな」

「「メメタア」」

そうして帰って行った霧夜に紅那岐はケラケラしていた

Stsへの軌跡 EP7 修行と言つ名の虐め(後書き)

レティ「終了！戦闘描写より修行のみってのが難しい」

トール「言われたこと半分も出来てないんじゃない？」

レティ「畏無様これでよかったですでしょうか？気に入らないところは教えてください」

トール「後は、紅那岐と霧夜の実力差があったから微妙に変な表現になってるかも？」

レティ「では感想ありがとうございました」

トール「次はゆうきさまのコラボです」



**S t s への軌跡 E p 8 気づいたら異世界(前書き)**

ゆづき様とのコラボ

ここでデバイスの真の性能を発揮

S t s への軌跡 E p 8 気づいたら異世界

「これで終了だね」

「お疲れ様ゆうき君」

本当にめずらしくなのはと一緒にのロストログアの回収任務があった

「なのはお疲れ様」

任務自体は簡単で一緒に仕事できて嬉しかったのも事実だったな

「大変です！近くにオーバースの魔導師を確認しました。」

「なんだって！？こちらに向かってくる様子は？」

「いえ、動いてはいませんが以前反応そのままです！」

「分かった！なのはと一緒に行ってくるから君達は撤収を急いで！」

みんなに指示を出して僕となのはは魔導師がいるところに急行した

「みて人が倒れてるよ！」



「ここは？」

「ここは管理外世界だよ」

僕は慎重に近づき彼に教える

「ん、あなたは？」

「僕は高町ゆっき」

「私は「知ってる魔王でしょ？」・・・」

何を言っているんだこいつは

「すまんすまん・・・（平行世界か、たくトールの所から帰るのに失敗するなんてな）」

彼がなにやら考えているようだけどちょっと気に入らないかな・・・  
・っと危ない危ない「俺」になりかけてる

「高町ゆっきねえ・・・兄妹？」

「違うよ、夫婦だよ」

「へー」

「興味ないのに聞いたのかい？」

「まあね、ああそつだ聞いたことあると思ったら神威のやつが言っていた人か」

「彼を知っているのかい？」

「友人だな」

「そうなんだ、じゃあ君も彼みたいな？」

「世界は違うがね、まあ俺の場合来ようとしたんじゃなくて失敗したんだけどね」

何を失敗したらこんな所に来るんだ？

「ああ名乗るの忘れていた俺は赤羽 紅那岐だ。名字で呼ばれるのは好きじゃないから下で呼んでくれると助かる」

「分かったよ紅那岐。それでどうするんだい？」

「ん〜このまま帰って良いけどそれじゃ面白くないから模擬戦でもしません？」

「・・・いいよ」

「じゃあ私は見ているね？」

こうして模擬戦をすることになった

Side End

三人称 Side

「さてと、グリム起きろ」  
《イエス、マスター》

「行くよシャイニングハート」  
《オーケイ、マスター》

「「セットアップ!」」

二人はそれぞれセットアップし距離を取る

「行くよ?」

「どっぞ」

そして始まる模擬戦、ゆうきが様子見といわんばかりにシューターを放つが

「ほっ」

紅那岐は剣で簡単に切り裂く

「んじゃこつちの番と言っことぞ」  
《スラッシュリッパー》

紅那岐が斬撃を3つ放つ

「そのくらいなら!」  
《プロテクション》

プロテクションを張り簡単に防ぐ

「おりよ？硬いな・・・（なのはがかなり大人だし結構未来の人が、なら遠慮は要らないかな？）」

「（マジメにやる気がないのか？まあいい）デイベインバスター！」

ゆうきは砲撃を放ちその間にシューターを用意する

「グリム！」

《グランスラッシャー》

紅那岐は防御することなく砲撃を切り裂いたがその瞬間シューターが襲い掛かる

「よつと」

しかし難なくかわす紅那岐

「やりますね」

「マジメにやる気あるのかい？」

賞賛する紅那岐に対しゆうきはしかめっ面である、模擬戦を申し込んだいてマジメな態度とは無縁の紅那岐に怒っているようだった

「さっきまでは無かったですですが気が分かりましたよ・・・グリム、アレを使うぞ！」

《イエス、マスター》

それだけ言うと雰囲気が変わる、お遊びの感覚から戦闘者へと

「グリムまずはFカートリッジ」

《オーケイ、ロードフレ임カートリッジ》

紅那岐のデバイスのリボルバー部分が回転し止まりカートリッジをロードすると剣に炎を纏わせる

「行くぞ・・・飛龍一閃！」

「それは!？くっ」

《プロテクション》

紅那岐は炎を纏った剣を振りぬくと炎の斬撃がゆうきを襲うがゆうきは一瞬驚いたあとすぐさまガードした

「未だだ!紫電一閃！」

「見え見えだよ！」

《フラッシュムーブ》

近づき斬ろうとしたが高速移動で避けられ一端仕切りなおしとなった

「驚いた、炎熱変換持つてるなんて」

「持ってないですよ？」

「え？」

ゆうきは驚いた、今のは間違いなくシグナムの技だったのに変換資質を持っていないなんて



「まだまだ！フレイドライブ！」

「・・・アロンドイト！」

ゆうきは射撃じゃ不利と感じたのか杖のデバイスから剣のデバイスに変え紅那岐の斬撃を受け止める

「へえ、剣も持ってるんですね」

「まあね・・・ハア！」

一瞬鏝迫り合いになるもゆうきに切り払われ距離を取り直す

「ふう・・・っと終わりか」

《まだまだ未完成ですね》

「帰ったら研究だなあ」

《初めてにしては上出来かと》

ぶつぶつと何かを言っている間にゆうきは近づき斬るうしろにする

「戦闘中に余所見はよくないよ」

「見えてますから問題ないですよ？」

切りかかるも紙一重で避けられる

「んじゃ次は・・・Wカートリッジで行くか」

《ロードウインドカートリッジ》

「（今度はなんだ！？）アクセルランサー！」

警戒しつつ攻撃をするゆうきに今度は紅那岐が

「烈空刃！」

紅那岐は前方にカマイタチを発生させゆうきの攻撃を打ち消した

「・・・風？」

「正解！疾風一閃！」

すると紅那岐が風で大きな魔力刃を作り斬りかかる

「ハアッ！」

「それはエクスのお！？」

ゆうきは驚きながらも何とか避ける

「はぁ・・・はぁ・・・しかしさっきから一体？」

「うーん・・・」

ゆうきは先ほどからの紅那岐の力に驚き、紅那岐は逆に悩んでる感じだった

「FにW、その後にデバイスがいうフレイム・ウィンド・・・そうか！カートリッジに変換能力を！」

「当たらずとも遠からずって所ですね。正確にはカートリッジに変換した魔力をつめて変換能力を持ってない人でも使えるようにしたシステムです」

これが紅那岐が考えたシステムである。

「ちょっと聞きたいんですがさっきから本気出してます？」

「君は何を言ってるんだ」

「神威から聞いた話だとかかなり強いらしいけどそんな感じがしないですし」

「そんな事はないよ」

そう言っただけならとなのは見たのを紅那岐は見逃さない

「ああ、なるほど」

すると紅那岐はゆづきから完全に視線を外しなのはを見据える

「ちょっと邪魔だから・・・ダ・カーポ・エンド反転する世界」

するととなのはの周りに魔法陣が展開されなのはの姿が消える

「なのは！」

「これで邪魔者はいないので本気になれますね」

ニツコリと笑ってゆうきを見るがゆうきの様子が変わった

「なのはを何処へやった！答える！」

「（さつきまでとは違う。巻き込みたく無いって感じだったはずなんだが？）さあね、知りたかったら本気で来ることです」

「ウイング、展開！」

するとゆうきは変わり背中に羽を出しビットまで出てきた、また瞳も虹色に輝く

「行け！」

無数のビット攻撃を放ち自身も紅那岐に肉薄する

「貴様を倒してなのはの居場所を吐いてもらうぞ！」

「上等！」

紅那岐もゆうきの本気が漸く見れると思いきや笑いながら対応してる

「ハッハー！最初から全力でくればいいものを！グリムアレを使うぞ！」

《イエス、システムドライブ》

「ロードH・T」

《ロードホーリー・サンダーカードリッジ、プリズムシステムドライブ》

今までのカートリッジとは異なり今度のカートリッジをロードすると刀身が煌く刃へと変わる

「ハアッ!」

二つの刃が重なり合うが近接戦闘において紅那岐は負ける気が無い、ゆうきはゆうきでなのは為に負けるわけにはいかなかった

「パラデイン3!」

「まだ上がるのか」

ゆうきの出力があがりそれに驚いていると紅那岐はいつの間にかバインドをかけられていた

「終わりだあ!シャイニグソードブレイカアアアアッ!」

巨大な剣の斬撃が紅那岐を襲うが

「未だだ!極光雷神剣」

《プリズムツールブレイカー》

紅那岐はバインドを一瞬で外し自身の技を放ち拮抗するが押し負け斬撃に飲み込まれる

「はあ・・・はあ・・・」

煙がもつもつと立ち込める中ゆうきは今だ剣を構え見据える

「くっ、ハアーハッハハハハ」

突如として聞こえる笑い声にゆうきは見えた、煙が晴れる其処にはバリアジャケットが多少ボロボロになっていても無傷の紅那岐が「いやはやただの魔導師と思って油断したよ。まさか劣化してるとはいえ極光が押し負けるなんて」

どこか楽しげに聞こえる紅那岐の声にゆうきは思わず息を呑む

「ああ、なのはは後でここに出してやるし戦いも俺の負けでいい」

「そうかなら「だが！」え？」

「だが、だからこそ知っておいて欲しいでしょうも無い力を、グリムリリース続いてファフナーよ蒼麟を」

《（> <）ゝ”イエツサ！！》

すると今まで使っていたデバイスを仕舞い一本の野太刀を取り出す

「逝くぞ？死んでも魂レベルで生きてるなら治せるからな」

そうして駆け出す紅那岐だったが今のゆうきは最速のフェイトを越えるスピードを持っている為簡単に追いつける

「シッ！」

「これ位なら」

紅那岐の一閃に簡単に対応するゆうきだが

「甘く見すぎだ」

「なっ!?!」

簡単に防げると思い受け止めたが簡単に押し出される

「言った筈だ、どうしようも無い力を見せると・・・疾風迅雷<sup>タイピュランス</sup>」

紅那岐は金髪碧眼と変わりそして今までついていけていたスピドについていけなくなるゆうき

「オラッ!」

「ガッ」

紅那岐の一閃が決まり斬られるゆうきだったが瞬間的に回復する

「へえ死徒なみの回復力だ」

「ゲホッゴホッ」

傷は回復しているようだが衝撃までは回復できていないようだった

「さて、きめようか・・・極光の雷よ」

紅那岐の刀に雷が集まりだす

「終わりだ・・・極光雷神剣!」

先ほどの斬撃が劣化と分かるような光がゆうきを襲い飲み込まれた

「うっ……僕は一体？」

「あ、ゆうき君起きた」

「おはよう、ゆうきさん気分はどうだい？」

「そっだ！なのはは！？」

「……自分の状態見てよく言えますね？」

「え？……あ、なのは」

よくよくみるとゆうきはなのはに膝枕されている状態だった

「いやあ、直ぐに回復すると思ったんだけど思った以上にダメージが入ったようでなかなか起きないようで心配しましたよ」

「本当だよ！見てるこっちが心配したんだよ」

「え？見てたの」

「実際はここから100mくらい離れた位置に遮断結界作ってその



中で見せてたんだよね」

ケラケラと笑う紅那岐に思わずムツとするゆうきだったが

「まあ最初からあの力を見せていたら俺もこんな事はしなかったけどね」

そんな事を言われてしまえばなんにも言い返せなくなるゆうきであった

「さてとそろそろ帰るかな」

「そうか、また会えるかな？」

「そうだね、呼べば来るよ」

「ありがとう」

「んじゃ、お詫びにこれ上げますよ」

そう言っただけ渡すカートリッジ

「これはさつき君が使っていた」

「そう、特殊カートリッジですよ。ついでにシステムもそっちのシヤイニングハートに送っておいたんで」

「最後に、あの剣は殺傷設定だったよね？」

「ああ、デバイスだとしても威力足りなくてねアレは基本的には俺の世界でしか使わないようにしてるんですよ。ぶっちゃけアレ

は手加減用です」

「そうか、君の本気を出せただけでも良しとすればいいのかな」

「さてと、長いし過ぎたので失礼します・・・では反転する世界」  
ダ・カーボ・エンド

そして紅那岐は帰って行った

Stsへの軌跡 Ep8 気づいたら異世界（後書き）

レテイ「終了！デバイスのシステムが出せてよかったよ」

トール「あの子は本当にトラブルメーカーね」

レテイ「ゆづき様これでよろしいでしょうか？気に入らない所があったら教えてください」

トール「では感想ありがとうございました」

レテイ「後2話くらいやったら新しい世界に飛びますでは」

紅那岐のデバイスの説明を

名前：グリムゲルデ

形状：双刃剣（ガンダム00のGNソード？を連結した状態）・カ

ートリッジシステムリボルバータイプ搭載

タイプ：アームドデバイス

性能：形体変化は連結してるのを外し二刀になるくらいでそれ以外の変化は存在しない

形体変化が無い代わりに魔法による妨害の影響を受けないようになっておりAMFはおるかプロテクションなども影響が無く相手に攻撃できるが、プロテクション無効化などはまだまだ上手くない

その他：紅那岐が考えプレシアやすすか達が作ったシステムのエレメントカートリッジシステムにより変換資質を持たなくても属性攻撃が可能

また、火と風などのコンボも可能であり色々とあるが現在紅那岐が仕えるのはホーリーとサンダーのコンボを使えるぐらい

また、コンボを使うことにより特殊なシステムが働き適正のあるものならば新たな付加効果を生む

紅那岐の場合はプリズムシステムとなり攻撃の残光に質量が存在し連撃が可能となる

効果時間はまだ短い

カートリッジは現在フレーム・ウインド・サンダー・アケエリアス・  
ホーリー・ダークのみで現在他のものも開発予定

今日は紅那岐の卒業式、卒業式のイベントと言えば告白!そして無縁そうな紅那岐が何故が卒業式が終わった後アリサを呼び出したのだ

「な、なによ!こんな所に呼び出して」

「アリサ、お前に話があつてな」

なにやら緊張感が漂う中扉からこっそりと除く影が

「な、何でアリサちゃんなの!？」

「ナギつてすずかのことを・・・」

「これは意外な複線やつたんか・・・」

3人娘がひそひそと話す中もう片方では

「フフフ・・・紅くんつたら」

「ちょ!?!すずか!すずか!目が目が!」

「赤い・・・」

壁をめきめきと壊しながらすずかが嫉妬に燃えていた

「話つて何よ!」

「ああ、俺も卒業ってことでここに帰ってくるペースは極端に少なくなるからなその前にちよつとな」

どこか言いづらそうに頬を掻きながら言葉を搜してる紅那岐にアリスは若干の期待をしていた

「あゝなんつうか・・・アリス！」

「は、はい！」

意を決したようにアリスの名前を呼んだ瞬間乱入者が現れた

「ちよつと待って！」

「「「すずか!?!」」」

驚く二人だったが紅那岐の慌て方が尋常ではなかった

「すずかちよつと落ち着け眼!眼！」

眼と叫んでいるがすずかは既に紅那岐の目の前にいる為他の人間には見えていなかった

「フフフ・・・紅くんこれはどういふことかな・・・」

「待て!いや待ってください!」

必死に落ち着けようとするが聞く耳を持たないすずかによって肉片に変えられる紅那岐

「ふう・・・アリサちゃん？」

「ひゃっ！ひゃい！」

既に眼は元に戻ってるがあまりの怖さに萎縮するしかないアリサ

「何を期待していたか知らないけどここは無かった事に」

「な、なんのことがしら？そ、それに私は別に・・・」

どもりながら何とか答える間に復活する紅那岐

「ま、待て何を言ってるかは分かるがち、違う・・・」

「何が違うのかな？」

眼が笑ってない笑顔でたずねるすずかに押されながらも答えをだす

「いや、本当に違うから。で、内容だが俺達全員中学卒業したら向こう行くだろ？」

「うん」

「でだ、アリサもよかったら向こう行かないか？って誘いなんだよ」

「やっぱり・・・」

「落ち着け！続きがあるんだよ、ちょっと俺店作りたんだけど副業禁止だろ？だからアリサがよかったら其処の経営兼店長やっても



「られないかってことなんだよ」

「……」

「そうだったんだ」x5

二人が無言だったのに対し扉から聞こえる5人の声に振り返るアリサ

「あ、あんた達覗いてたの!？」

「ああ、最初から覗いていたな……さすががこっちに来るのは反応できなかったが」

さらっと暴露する紅那岐に顔を真っ赤にして振るえるアリサ

「で、アンタは店を持つって言ったけど何をやるのよ」

「ああ、ほれ」

ぽいっとポケットに入っていたものを投げ渡す

「アクセサリー？」

「俺が作ったな」

「え!?!あんたこんな作れるの!?!」

「そ、んでそれを売りたいからお前やらないか?前に会った時に思ったがセンスいいから売り上げ取れるだろう」

「まあいいけど・・・」

「因みに俺が作るのが高いが他の職人（魔物だが）確保しているからな、普段でも営業できるぞ？」

「考えさせて」

「構わんよ」

そう言っつてこの日は解散となったが結局アリスは卒業したあとミッドにきて宝石店『ジュエルグレイス』の店長として切り盛りした

End

（魔改造計画？）

エリオ Side

今日こそ兄さんをお願いしよう！僕はそう思い起きているだろう兄さんの部屋に入った

「兄さん！ちよつと話が・・・え？」

兄さんの部屋に入ったら上半身裸の女性が・・・

「エリオですか、ちよつと待ってくださいね？」

そして何事も無いかのように着替えてる女性っつてそうじゃなくて！

「し、失礼しました！」

慌てて部屋を出る僕だったけどアレは一体誰なんだ？

「お待たせしました。」

「あの、お姉さんは誰ですか？」

「紅那岐ですけど？」

「ああ兄さんだったのか・・・へ！？」

兄さんが女性？アレでもお風呂入るときは男性だったからえ？

「面白いくらい混乱してますね」

クスクス笑っている兄さん？だけど一体何が

「そうか！魔法ではないですよ・・・」

だったら一体・・・

「ネタ晴らしすると女体化っていうスキルがあるのですが、それを使ってるだけですよ」

「魔法とは違うの？」

「違いますよ？魔力全く使わないですし」

説明を受けたけど、なにやら昔に自分を取り込んだらって言うってただけど自分？

「それでエリオはどんな用なんですか？」

「あ！そうだった！兄さん？僕に戦いを教えてください」

「まだ子供ですから必要ないでしょう？」

「そうだけど、ただ僕は生まれ方が特殊だからそれを狙うこともあ  
るって前に忍さんが」

「はあ姉さんにも困ったものです」

それでも確かにと呟いているけど

「分かりました此方にいらっしやいエリオ」

そう言っつて案内されるのは兄さん？の部屋にあるジオラマみたいな  
ところ

「この前に立ちなさい」

そして魔法陣が僕を包むと同時にどこか分からないところに転移し  
たようだ

「さてと、訓練エリアに行きますからついてきてください」

そう言っつて再び転移するととても広いエリアに着いた

「さて、まずはエリオの適正を見なければいけませんね・・・ファ  
フナー」

《出番だぜ(。。(ノ)》

兄さんのデバイスが光ると周りには沢山の武器が並ぶ

「まずは貴方がどれがあるかを試さないといけませんから好きなのを振ってください」

こうして僕の修行が始まった

End

麻耶 Side

女体化してる日にエリオに除かれるとは思いませんでしたね、将来いいタラシになりそうです

「ハッ！たあ！」

先ほどから振っているのは刀ですね、私が普段使っているからこれで選んだんでしょうが其処まで才能は無いですね。使えるけどサブがいいところですか

「えい！」

次に使うのは剣でして、その後は銃・格闘などほとんど私が使うのを真似てますが正直射撃はほとんど才能を感じませんでした。まあ、格闘は背が伸びればいい感じに使えそうですが現在の身長では無駄の一言ですね。・・・男の娘にしたいんで背が伸びないのを期待ですが

「はあ・・・はあ・・・」

疲れてきたのか肩で息をしながら次の武器を持つたら雰囲気が変わりましたね

「ハッ！」

一閃、ただそれを見ただけで鳥肌が立ちます、今はまだ私はおろか誰にも勝てないでしょうが将来この子が大人となるまで振り続けたとしたらそれはもう凄いことになりそうなくらい綺麗に振りました

「どうやらそれが貴方にはあっているようですね」

「うん、なんだか一番しっくりくるよ」

エリオも驚いてるのか手に持っているものをじっと眺めています

「では、私は一回すずかの所についてデバイス案を渡してきますので」

「はい！」

「それまでは・・・」飛鳥どこにいますか？』

飛鳥に連絡をとりここに来てもらう

「何姉様？」

「ちょっとヒトリと変わってもらえますか？」

「分かった！・・・何姉ちゃん？」

「ちょっとすずかの所に行ってくださいるのでそれまでエリオと一緒に体を温めてください」

「はい」

そう言っつて私はすずかの所に行きます

このとき麻耶は忘れていた、ヒトリの準備運動は麻耶達にとっては軽くても常人でも厳しいということ

「すずかいいですか？」

「あ、今日は麻耶ちゃんなんだ。でどうしたの？」

私はエリオのことを説明しデバイスを作って貰うようお願いしました

「分かったよ、デバイスの形状は？」

「ああ忘れていましたね、デバイスの形状は槍です」

「そっか、でも作るならシステムはアレにしたほうがいいよね？」

「ええ」

「そうすると今ある素材じゃ耐久力が心配だな」

「ああ、それならこれを元にしてください」

私はファフナーから白い槍を出す

「これは？ものすごい威圧感があるんだけど」

「これは私が作った大神宣言グングニルの劣化版です」

「ちょっと待って！今なんて」

「ですから大神宣言グングニルの劣化版で真名解放は出来ませんがそれでもなお強力な武器ですよ」

「なんでそんな物を・・・それじゃエリオは扱いきれないよ」

「最初はそうでしょうけど、3年も振れば物にするでしょうね」

「え？」

「才能と言う面では完璧です。そして槍だけなら私はおるか恋すら上回る可能性があります」

私の言葉に心底驚くすずかですが

「分かったそれを元に作ればいいんだね？」

「はい」

「はぁ・・・私達の周りつてまともな人がいないよね」

溜め息と共にそんな事を言うすずかですが私は聞き捨てなりません



「前にも言ったはずですが私達は人間です。そう願うものが人間と  
いうものです」

後ろ暗さは無くてもそこはずかしの為に引けません・・・まあ私  
はむしろそういう扱いの方が楽でいいんですが

「ごめんね？さて作るのはいいけど、宝具クラスをデバイスに直す  
には時間かかるから修行をして。どうせ最初は体つくりと動き方  
でしょ」

それだけ言うとすずかはラボにこもってしまったので私はエリオの  
元に行きました

エリオが大人になった時に死合いをするのもいいかもしれませんがね

戻ったときしにかけているエリオを見たのは気のせいです

S t s への軌跡 E p 9 疑わしきは罰せよ / 魔改造開始? (後書き)

レティ「次の話が終わったら次の世界に飛ぶよ!」

トール「長かったわね」

レティ「まね!では感想ありがとうございます」

トール「またね」

**S t s への軌跡 E p 1 0 同窓会と発見としばしの別れ(前書き)**

— 応ここれで A · S 編は終了

「そういえば今日は全員いなくなるのよね？」

アリスが登校中になのは達に話しかける

「うん、だから今日の午後からノートお願いね」

片手で謝りながらアリスにお願いするのは

「私達は学校が終わり次第に直ぐに急行するけど大丈夫でしょ？」

「だね、お兄ちゃんも現地で合流するって言ってたよ」

「うん」

すずか・七星・恋がそれぞれ言う

「そついや、あいつ最近めったに帰ってこなくなったわね」

「卒業してからは私達に学業やれって言って忙しくなったからね」

和やかに話しながら登校していくのは達であった  
そして今お昼休み

「レイジングハート」

《イエス、マイマスター》

「バルディッシュ」

《イエス、サー》

「リインフォース」

《はい、マイスターはやて》

三人娘達はそれぞれのデバイスを構え

《スタンバイレディ》

レイジングハートの掛け声と共に

「セッ アア アップ！」

セッ アップを行い今回の任務に向かった

「じゃあそういうわけだががんばってね。・・・ふう、最近みんな立場が固まっちゃって忙しいから今回の任務はいい同窓会になるかもね」

「ああ、そうだな」

アースラのブリッジで話す男女

「エイミィ、紅那岐はどうした？」

「紅那岐君ならなんか別件で今話してるよ?」

「あいつも色々あるからな」

男・・・クロノが渋い顔をしながらそんな事を言いながら今回の任務が無事終わることを祈っていた

「お待ちしておりました、本局管理補佐官グリフィス・ロウランです」

「シャリオ・フィニーノ通信士です」

基地に着いたなのは達に敬礼をしながら挨拶をしてくる二人、そしてお互いの自己紹介がすんだ頃に

「お、お前達の方が早かったか」

真紅の制服を纏った男が後ろから声をかけた

「」「紅那岐君! (ナギ!) (くーくん!)」「」

よっと軽い挨拶をする紅那岐である



「それにしてもお前らも今年でとうとう卒業か」

「そうだね、それにみんな別々に動くことになるから会いづらくなるしね」

「それに比べてナギは固まってるからいいよね」

「つつても、俺はほとんど任務で隊舎におらんし、すずかは開発局にいるほうが多いし、恋や七星も特技隊やってるからな」

「そうか、うちもミッドに引越すし」

和やかに話していると目的地が見えてきたが

「アレは!?!」

その目的地が煙が立ち上がっていた

「機械兵器らしき未確認物体が多数……って多すぎです!」

ラインの言葉に確認すると其処には多数と言つ言葉では言い表せられない程の機械があつた

「(ありや……)なのは!フェイト蹴散らせ!はやてお前は上空で指揮を執れ俺も従う!俺は救助に行く!久々にお前らの力を見せてみる!」

紅那岐が急行し現地の人を前に降り立った時に機械に攻撃をされるが



「グリム！」

《イエス、マスター》

グリムを構えた瞬間に剣を振るうと機械の攻撃を霧散させた

『広域スキャン終了！人間はあの二人だけです！』

リインからの報告を聞くとはやてと救助を変わり空に上がる紅那岐

「ん？フィールドエフェクト？」

《ですね、しかもアレは恐らく》

「なのは！」

「うん！」

紅那岐の掛け声と共に頷き一発放つとそれはフォールドによって霧散した

「無効化フィールド」

「アンチマジックリングフィールド AMF、AAAクラスの魔法を機械が？」

『ええ！？AMFって言ったら魔法が発動できなくなっちゃいます  
』！』

慌てているリインだったが他の面々は慌てることなく準備をしていた

「リインはまだまだ子供やね」

はやての一言に驚いたリインだったがそれをスルーするかのごとく  
「覚えとこごね、戦いで「これさえあれば無敵」ってことは無いっ  
てことを」

そしてなのはとフェイトはお互い魔法の準備をしているが紅那岐  
はいつもの表情とは変わり表情が全く出ていない状態だった

「魔法が通らないなら発生したものを通せばええんよ」

はやてがなのはとフェイトを見ると

「たとえば小石」

「スターダスト・・・」

「たとえば雷」

「サンダー・・・」

「「フォーールツ！」」

なのはとフェイトの魔法が機械軍団に炸裂し全てを飲み込むが倒せ  
たのは1/3程度だった

『はわわ！まだ一杯います！』

「安心しい、確かにああいった方法があるけどな、世の中にはフィ  
ールドがあるうが無かるうが関係ない人もおるんやよ」

そう言つて紅那岐を見るはやて、其処には機械軍の前に佇む紅那岐の姿

「さて、一瞬で終わらせるか」

それだけ言つと紅那岐は魔力を伴い突っ込んでいく、紅那岐が通過したところには既になにも無かつた

『・・・理不尽つてあるんですね』

「その内リインも慣れるよ」

そう言つて回収を終え帰つていく時に質問が来た

「そつえば、何であの時倒せたんですか？」

リインからの質問に丁寧に答えるのはの後に紅那岐にも質問がいった

「こうには何で大丈夫だつたんですか？」

「んあ？」

別のことを考えていたのかまったく話を聞いてなかつた紅那岐は改めて聞いた後答える

「俺だから」

「」「納得」「」

「ええ!？」

3人娘の納得とは裏腹にリインはわけも分からず明確な答えを求めた

「まあ、単純に密度の違いだな。フィールドってのは一見全体に纏つてて便利だが反面一点突破には弱いからな。今回俺が使ったのは錐型に魔力をまとつて穿つ一点に特に魔力を固めたからだ」

それ以上はなのにはと言って再び思考の海に沈む紅那岐であった

任務が終わりアースラに帰ってくるメンバー一同

「お疲れ様ですー」×帰還組み

「あれ?紅君は?」

出迎えたメンバーのうちすずかがいない紅那岐のことを聞いた

「なんか、少し連絡することがあるって言って後で行くって言ってましたよ?」

「なんか凄く真剣な顔してたよね？」

「なんだっ たんやろうな？」

そう言ってご飯を食べ始めるメンバーだった

「そう、そんな事が」

「ええ、俺も最初は違つかない？って思ったんですが機構が似すぎていたので恐らくは」

「そう・・・あなたが調べるのかしら？」

「いえ、俺も調べ進めるつもりですが恐らくは無理でしょうね」

「あの機械軍って事は隊長はやっぱり・・・」

「ええ、ただ俺が消し飛ばす時には誰もあの研究所にはいなかったはず。消し飛ばした後に確認しましたが、人間がいた気配が消えてましたし」

「分かったわ、じゃあね紅那岐君」

「ええ、その内またクイントさん」

そう言っつて紅那岐は通信を切り溜め息と共に天井を見る

「アレは恐らく・・・」

その後の言葉は飲み込みみんなに合流すべく後を追う紅那岐であった

Side End

紅那岐 Side

「こうにいに質問です！なのはさんに教導隊については聞いたんですが、じゃあこうにいの特殊戦技教導隊ってなんなんですか？」

集合場所に入ると行き成りリインが質問をぶつけられた

「ああ、戦時中にエース不足がーとか言ってたからエースの育成機関っつて思っつてくれ」

「なるほどですー」

納得したのかはやての元に戻るリイン

「あ、そつだエリオの写真見せてナギ！」

興奮気味に言ってくるフェイト・・・鼻息荒いぞ！

「ちょっと待てな・・・ほれ」

そう言つてグリムから写真を出しフェイトに渡す

「・・・なんでゴスロリ？」

「似合うだろ？」

「似合うけどさあ・・・」

「いいと思うよ！」

渋った意見を出していたなのに対し顔を赤くして力いっぱい叫ぶフェイトだったが・・・お前マジで真性だな

「えつとこの子つてどうしたんだ兄ちゃん？」

「ああ、ちょっと前に違法研究所を潰す任務があつてな其処で保護した」

へーと相槌を打つヴィータと違ってフェイトは今だ悔しがっていた

「それにしてもこの中じゃ一番の出世頭は紅那岐君だね」

エイミィが急にそんな事を言ってきた

「まあな、その代わり隊員少ないし何より基本的に赴くのは1人だから危険度は多いけど」

知らなかった奴らは驚いていたな

「そうやみんなGW大丈夫か！」

はやてがGWの予定の事を確認してきた

「大丈夫だよ」

「その日は休暇を取ったしね」

「そのことについてちょっといいか？」

「なんや？」

「いやな、その一週間前くらいに俺達ちょっと用事で出かけなきゃならなくなつたんだ」

「「「「「え!?!?!?!?!」」」」」

「「「「つて、なんでみんな驚いてるの!?!?!?!?!」」」」」

3人娘が三人娘に突っ込んでいた

「さつき決まったから知らないのも無理はない、行くのは俺・すずか・恋・七星の4人だから隊も回るしな」

『ちよつとどついつことお兄ちゃん?』



『トールからちょっと違う世界行けって言われたんだよ』

『そっか、それじゃしょうがないね』

『分かった』

『因みに何処に行くかはわかんないから』

『『『はい』』』

こうして同窓会は終了し来たる次の世界に向けて4人は緊張感をもちつつ日々を過ごしていった

Stsへの軌跡 Ep10 同窓会と発見としばしの別れ（後書き）

レティ「これでやっと次の世界に飛べるぜ！」

トール「さてと、次の世界はある意味あの子にとって利益だらけの世界になるわね」

レティ「そうなんかー」

トール「さて、感想ありがとうございました」

レティ「次はプロローグと設定です」

## プロローグ（前書き）

夕方から暇だったのに寝ちまったぜ

## プロローグ

「ほらお前らキリキリ勉強しろ！」

「ふえくん」

「ほら七星！そこ間違ってるぞ！」

「えっと、ここはっつと」

「すずかは理数はやらんでいい！文系をやっている！」

「・・・ZZZZ」

「恋寝るな！飯抜きにするぞ！」

何故三人娘が勉強してるかと言うとそれはこの世界に来る前まで遡る

## 回想

「来たわね、待っていたわよ」

「ああ、それで次の世界に行くのはいいが何処なんだ？」

紅那岐と三人娘はトールの元へやってきていた、それはつい最近にトールに呼び出されたからだ

「次に行ってもらおう世界はね・・・型月の世界よ」

トールに次の世界について教えて貰った瞬間の紅那岐の顔はそれはもう嫌そうな顔だった

「凄く嫌そうな顔ね」

「嫌そうじゃなくてぶっちゃけ言えばヤダ」

紅那岐が何故ここまで嫌そうな顔をしてるのが分からない三人娘は頭の上に？を浮かべていた

「何で其処まで嫌がるの？」

「そうだよ、今まで嫌そうな顔ってしてなかったのに」

「・・・面倒？」

三人娘の疑問に少しの間を置いてから答える

「・・・すずかの力の一端の空想具現化や恋の宝具のオリジナルの世界って言ったら分かりやすいか？」

悩んだ拳句力を例に上げて答えると若干苦笑いの三人娘

「でも、お兄ちゃんなら大丈夫でしょ？」

「いや、正直それくらいはいいんだが、嫌なのはな星がすずかに接触してきそうだな」

「それなら大丈夫よ。たかが一つの星が全ての世界に勝てるわけないでしょ？」

「そうだがな……てか行く必要があるのか？其処にも転生者なんて腐るほどいるだろ？」

「そうね、大半が死徒化してるけどいるわね」

「……はあ？」

トールの言葉に間抜けな表情で驚く紅那岐にトールは続ける

「馬鹿なのかどうかは知らないけど、大半は死徒にかまれて死徒化してるわね。後は送られたのはいいけどアリストテレスに襲われてお仕舞いとかね」

「……はあ」

それこそ深い溜め息をついている紅那岐であった

「まあ行ってもらおう最大の理由がその転生者なのよ」

「どつという意味だよ」

「転生者って特典貰うでしょ？そのほとんどが型月の力なのよ。あなたも倒してるから分かるでしょ？」

「型月ってかほとんどがFateじゃねえか・・・」

「まあね、でその転生者達なんだけど特典って実はねオリジナル還元されるみたいで使ってる連中が多いほどオリジナルも強くなるみたいだね」

「あゝ何となく言いたいこと分かった」

うんざりした表情で自体を飲み込む紅那岐である

「で、今のままだとギルガメッシュが独壇場なの・・・ゲートオブバビロン王の財宝  
って使い勝手いいから」

アンリミテッド・ブレイドワークス  
「UBWじゃなくてか？」

「ええ、現在の人気は王の財宝アーチャー>ULW>ULW(士郎)>直死  
>その他って感じかしら」

「どいつもこいつも、原作風にしか戦わないから正直還元されてる  
って言われても実感ないな」

「瞬殺してるの貴方だけだけだね」

「つつても本当に唯撃ってくるだけの奴らなんてな戦闘経験皆無  
だったし」

「宝の持ち腐れって言葉はぴったりね」

「ああ、そっぴや檻髪の力を使う奴は面白かったな」

「珍しく苦戦してたわね」

「恐らく相当修行したか色々な世界を回ってんだろ？力の使い方が上手くて中々倒せなかったし何より最初のうちは仲間になりたい位だったからな」

「ええ、残念だったわね」

「反転しなかったら、倒さずにすんだが反転して暴走してたならいらんし」

「流石に其処までお人よしじゃないみたいね」

「こいつら以外にはもう甘さはないさ」

「そう」

「それにしても惜しかったなアレは・・・」

「ええ惜しかったわねアレが・・・」

「男だったなんて・・・」

オチもついた頃には再び話を戻し始めた二人であった

「そういうわけでFateの時に行ってもらおうわね」

「了解」

そして送り出そうとした時に紅那岐が問いかける



「そついや時期は？」

「どつしましょ？」

「適当にまた送ろうとしたのか・・・！！」

なにやら名案が浮かんだとばかりに手を「ポン」とつつ紅那岐

「だったら原作始まる前の年度の12月あたりでよろしく」

「いいけど何するのかしら？」

「見てろって面白いから」

紅那岐がニツツと笑うと意図は分からずともツールも共感したのか  
同じ用に笑った

（ ）（ ）なんだろうつ何やら私達に不都合なことが起きる気がする（ ）（ ）

三人娘はなにやら悪寒がしたらしいが二人はそんな事を気にせずに  
転送の準備をした

回想 End

「おら！勝負は年あけたら直ぐだぞ！入試に落ちてみる俺が直々に  
お仕置きしてやるからな！」

そう、何故勉強してるかと言うと簡単に言えば士郎達がいる高校

に入れさせようとしてるのであった

「何でわざわざ高校に行かなきゃならないの!」

今まで勉強していた七星が急に立ち上がり講義する、他の二人も同意見なのか頷いている

「お前達もあつちじゃ高校いかんからな、今のうちに女子高生つてのを経験しとけ」

「じゃあお兄ちゃんは!」

「俺か?大卒の資格もってるが?」

「うそ!?いつの間に・・・」

「いいからとつととやれ!」

そして再び勉強を始める三人を見て紅那岐は

「・・・お前達がこれならなのは達も相当だな・・・帰ったらやるかな?」

ゾクッ！

「「「！！！」」」」

「どうしたのよあんだ達」

「なんか今私達に不都合な事が起こった気がする」

「うん、なんだか知らないけど」

「あかん、何故か勉強をマジメにやらんといかん気がするならへん」

元の世界の3人娘が急にやる気を出した姿に？を浮かべるアリサであつた

時は流れて2月末

「「受かったー！」「」

「おめでとさん、今日はパーティーだ」

そう言ってテーブルにご馳走を並べていた紅那岐であった

## プロローグ（後書き）

レティ「言うわけで次の世界は型月のFateです」

トール「あんた原作覚えてるの？」

レティ「この前PS2の中古を買ったwだからやりながら書くから短いか投降が間を置くかのどちらかになると思う」

トール「あっそ、では畏無様感想ありがとうございます」

レティ「設定などこの後上げます」

## 主人公設定

名前：赤羽 紅那岐

原作スタート時の年齢：18（リリなの世界に戻れば17）（正確にはこの世界では歳はとらない）

身長・体重：184cm・85kg

## スキル

ダ・カーボ 復元する世界：元に戻す力で基本的には肉体の復元や人物を目の前に召還する力である

ダ・カーボ・セカンド L再現する世界：記憶を復元する力で自分が見たことのある武器を再現し使えるようにする。投影と違うところは力の本質を知らなければ見ただけでは威力を出せない

ダ・カーボ・エント L反転する世界：復元する対象を自身や目の前でなく移動したことのある場所に戻す力で一種の転移魔法（紅那岐のオリジナル）

ダ・カーボ・ゼロ L復元する原初の世界：復元する力を追い求めた最終極地で根源に近い力であり、相手の力を発動前に戻すことが出来る（当然だが自分を超える力には作用されない）

ノートウンケ 九つの世界：変わらず

タイビュランス L疾風迅雷：自身を雷光化し身体能力を上げる、最近を使う機会が少なくなつた

タイビュランス・バースト L神雷招来：雷光化ではなく雷神化する力でありツールに限りなく近い力を出せるようになる。また身体能力も疾風迅雷タイビュランスに比べ5〜10倍の力を出せる

ヴァイス・シユバルツ  
福音の弾丸：変わらず

超<sup>す</sup>べてを越えし神<sup>もの</sup>《ロードオブブラッド》：紅那岐が覚醒した力であり発動は任意で行えるようになった、元々は名前などないが紅那岐が皮肉を込めて自身の父の力をもじって付けた

発動すると人間の枠を超える力を入れる、また宝具などあらゆる武器に分類されるものは担い手以上の力を出すことができ、頭に【オーバードロード】（型月のロアの力とは違います）とつけて発動ができる

発動すると眼が赤くなるが理由は不明（正直に言えばカツコよくない？って理由です）

ルーン魔術（EX）：ツールとルーネに教わり全てを叩き込まれたことにより完璧に使いこなすが戦いではめったに使わない

魔力放出（EX）：魔導師としてのシールドは相変わらずしょぼいので魔力を体表に覆い防御力を向上させている

## 宝具

ティルヴィング  
黄金色の聖約：A E p 1 0 の後書きを参考

レーヴァテイン  
災厄を招く炎の魔剣：紅那岐がルーンを重ねて輝紅を作り変えた、真名解放すればそれは全てを焼き尽くすまで消えない炎となる

うたまる・メルセデス：紅那岐が持つ双銃の名前でうたまるが白い銃でメルセデスが黒い銃。普段は魔力弾を出すだけだが切り払われたり打ち落とされない限りとどまる弾丸を作り出せる

## 武器

覇煌刃・崩嵐槍・破碎鎚はさいつゐ：神威から貰った武器でめったに使わないが能力は高い、最近は改造しようか考え中

鬼菩薩：霧夜から貰ったものでペルゼインみたく腕などは生えないが防御用としては宝具クラスであり埋め込んだ魔石に魔力を通せばフィールドなどを張れるほか更に改造し今では捕縛結界まで作れるようになった

蒼麟：紅那岐が打った一太刀であり輝紅を災厄の剣にしてしまったので元々は野太刀だったが打ち直して通常の刀としてる。刃は青空の如く透き通った蒼である

鳳桜ほうおう：紅那岐が新たに作った刀で長さは4尺（120cm）で野太刀とも太刀ともいえない長さだが紅那岐が使うには丁度いい長さである。真名解放は存在しないが能力は宝具でBクラス

打ち砕く戦槌劣化版ミヨルニル：紅那岐が作ったミヨルニルの劣化版で真作も作れるがあえて劣化させ鍛冶用のハンマーとして作った。これで叩けばどんなものも形を変えることが出来る為重宝している

その他多種多様な武器が多数

## 技

神討つ拳狼フェンリスヴォルフの蒼槍：手や足に魔力を集中し放つ技（蒼崎青子のプロウニング・スターマインなどと同じような感じ）

総てを射抜く雷光トールハンマー：魔力を雷光と変え槍の形として打ち抜く  
総てを超越せし九つの雷光フルアクセス：総てを射抜く雷光を九つの世界の



力を使い雷槍として九つ打ち出す

┌総てを消滅せし極光の雷槍：九つに分裂している雷槍を一つ  
トルハンマイ

ヴァイス・シユバルツ  
福音の魔弾：双銃により白と黒の弾丸を打ち出す

レイヴァアテイン  
迷い無き光闇の剣：紅那岐の魔力砲で威力はレイヴァ>トル>ヴァイス  
アイスIIフェンリスの順で一番高い

┌多重式屈折次元収束魔導砲：七発の迷い無き光闇の剣を放つ  
レイヴァアテイン

┌偉大なる穢れなき極光の世界：紅那岐の魔力砲で最大最大の威力である。これには総てを射抜く雷光の要素も入っており雷光と光と闇の力が加わり極光の力である

オバーロード・  
テイルウイング  
未だ果てぬ黄金色の聖約：紅那岐が覚醒した状態で放てる現状最強の力でそれは黄金色の聖約よりも確実で切れないものはない（すずかの世界との契約すら切った）

宝具の分類としては対界宝具でランクはEX

その他ネタ技：デバイスで使う技のほとんどやその場限りの技である、デバイスを使う時は好きなゲームの一つのティルス系の技が多い強敵との戦いでは宝具を使う機会が多いので使う場面がない

デバイス

グリムゲルデ：能力はStsの軌跡のEpgの前書き参照

ファフナー：Dデバイスディメンションと言う新ジャンル（ジャンルがないから勝手に名乗ってるだけ）で能力は完全に武器の保管のみの能力で殺傷設定をつけるかどうかの機能もあったが入れてる武器がどれをとっても危険なので意味がなく取っ払った

その他のスキル

宝具製造能力：力に覚醒したら気がついたら宝具を作れるようになったが創造能力とは違い元がないと作れない（ルーンを固めるなどで作るのは可能）

現在作るのは大神宣言・ドラウプニルなど北欧神話で有名なものがほとんど

宝具改造能力：上記の能力に加え製造途中で能力を改変し能力を元に別の能力を作れるようになった

アルティメットアーツ  
究極複合武術：紅那岐の戦闘スタイルで己の体を全て武器にし戦うスタイル

武器と体術を混ぜたスタイルであり武器を持っていても足技や拳で戦うこともある

また足で対象を斬ることも可能

ユグドラシルとの契約：すずか達の時に記載

説明？

言わずとも知れたこの小説の主人公、15の時にすずかを攫われ取り返しのつかない事になってしまったからは更に強さを求めるようになった

力が覚醒した影響かは分からないが本心を話すのは三人娘やリースなど近い身内がいる時がほとんどでそれ以外の人たちの前ではノリで喋る（マジメの時はマジメに話す）

容姿は髪型がスパロボのライの髪型だが色は黒で黒目である

復元する世界を使いすぎてる影響か体が損傷した場合オートで発

動するようになり、また魂が消滅しない限り復活できるなどかなり無敵になっている。ただし心臓や頭や全体が消滅した場合に復活すると体力の大半を失うのでこれを頼っての戦いはあまりしない。また損傷が直るといってもダメージは普通に受けるのであまり乱発すると普通に精神が擦り切れぶっ倒れる

称号

反逆の神：力が覚醒したことにより神の大部分にそう呼ばれる

抹消者：上記に加え転生者を狩りまくっていた為についた

主人公設定（後書き）

レティ「こんな感じかな？書くところかなりチートだな」

トール「次はすすずか達よ」

レティ「では」

## 主人公意外の設定

名前：月村 すすか

年齢：16（紅那岐と同じでこの世界の設定上の年齢）

身長：165cm

## スキル

真祖（仮）：愚かな神の介入により真祖として作り変えられたが現在は発現しきつてはいない。

能力はあらゆる真祖と呼ばれるものの能力を持つておりかなりチート（オリジナル真祖の能力は流石に持たせませんが）

L型月の空想具現化：現在は発現しきつてないと合わかりだせるのはせいぜい鎖など簡単なものしか出せない

Lネギま！のエヴァと同じ力全部：闇の魔法も使えるが体が出来上がつてないため現在では使用不可能ではないがどんな影響があるか分からない為使用を禁じられている

Lバスタードの身体能力：これについては影響が無い為ほぼ使える。満月になればそれこそ無敵といわんばかりの力（物理）を手にする

ユグドラシルとの契約：後に記述

## デバイス

ルナティック・ソル：能力変わらず、とある人物から貰った月光砲ルナは最大出力で戦艦を撃沈できる

## 説明

神によつて真祖として作り変えられてしまった少女であり紅那岐が命を投げ打つてでも守る対象である

真祖の影響か吸血衝動は存在するが紅那岐のを飲むことによつて事なきを得ている、また紅那岐がない時は献血パックなどで代用している

容姿は一級品であり特に胸は幼馴染の中でもフェイトと同率でかい

紅那岐には戦う必要は無いといわれているが守られるだけの存在を良しとしないため戦いはするが優しい少女ではある

十

十

十

名前：赤羽 七星

年齢：すずかと同じ

身長：165cm

スキル

アルカンシエル ケリモワース  
七人の断罪者：七つの大罪の宝玉の攻撃にそれぞれ付く能力で五感や魔力結合などを奪う能力をもつ

フリーシンガメン  
無に還つた少女：運動エネルギーの操作

エイレナイオス  
踊り狂う悪魔：あらゆる物体を魔力で自由自在に動かす能力

アイキスメイデン  
高潔なる処女：絶対守護を作り出せる能力である（自分の想定している以上の力は当然防げない）

## 技

ジャッジメント  
極光の断罪者：罪の数により威力が大きく変わるが罪が無くてもスターライトブレイカーよりは強力

ネロ・アポカリユプス  
黙示録に記されし皇帝：666のナイフを一本とし相手を貫く

## デバイス

ジークルーネ：基本的に紅那岐からのお下がりの武器と後はランチヤーが一本ある

## 説明

紅那岐の妹という立場であり本来は紅那岐が最初に貰ったデバイスの人格だったが気づいたら人間と変わらなくなった。理由はトールでも不明だが本人も気にしてない為良しとしている

容姿はスレンダーで美人となるのは間違いないし、髪がいつの間にかピンクに近い赤になってるが徐々になっていった為回りも気づいていない

胸が無乳である、微乳や貧乳ではなく無乳である。胸の話はこ法度でネタにされるとんでもなくキレる

十

十

十

名前：呂奉 恋

年齢：すずか達と同じ

身長：162cm

スキル

飛翔：最初の設定参照

騎乗：変わらず

直感（EX）：獣の勘と言つぐらいにすさまじさを持ち何かしらを察知できる

カリスマ（B）：人をひきつける食事風景など恋だからで許されることが多い

宝具

ゴッド・フォース  
軍神五兵（EX）：変わらず

武器

方天画戟：変わらず

真・豪竜胆・真・龍騎尖：紅那岐が持っていた槍を譲り受けた、方天画戟は保有魔力がすさまじい為普段はこつちを使ってもらっている

弓などその他も存在



## デバイス

ファゾルト：Dデバイス2号機で自身と同化できない豪竜胆などをしまっている。紅那岐のとは違い非殺傷設定は存在する

## 説明

恋姫せかいの呂布奉先こと恋であり紅那岐についてきた人物

デバイスのセットアップで服が変わるわけではなくFateのセイバーと同じように魔力によって作りかえる設定である（服装は原作と同じです）

原作とは異なり紅那岐達と一緒にいたため普通に喋ることになったが寡黙なのはかわらず要点だけというのは性格と言うのが発覚

能力は変わらないが英霊となんら変わらない力を持っている（受肉した英霊ではなく人間が英霊の力を手に入れた状態）

胸は上記に書いてある通り原作と同じで美乳である

+

+

+

名前：トール

身長：166cm

年齢：歳という概念が存在しない

スキル

紅那岐との契約：紅那岐を転生させるときに自身の力を明け渡した故に契約が結ばれているだけであり能力補正や主従関係などは存在しない

## 説明

紅那岐を転生させた神様で雷神や戦神の異名を持つ神

すずかの件以来紅那岐の修行を積極的に行うようになった

因みにこの小説最強の人物でガンバっても紅那岐は並ぶことは出来ても決して抜けることは無い

神々のゲームに参加するようになり紅那岐が色々な世界に介入したり転生者を狩ったりすると自身の力が上がる仕組みなのでドンドン強くなる

ミヨルニルを持っているが紅那岐に「ハンマーより拳よ！」の一言により腕輪に改造し力を自身に纏わせ使えるようにしてしまいうなど原作？を軽く崩壊させた

見た目は17歳くらいの女性で赤い髪を肩らへんで切りそろえている美人である。胸は丁度いい大きさ

十

十

十

### ユグドラシルとの契約

すずかが再び世界に縛られるのを恐れた紅那岐がツールに提案し実行した

これは単純に根源との契約に近く全ての世界からバックアップがもらえるというものである

そのため一つの世界に縛られることが無いためすずかは全ての世界の真祖とも言える

すずかとは別にツールと紅那岐はすずかのデメリットをなくす為に契約を行っている

すずかはデメリット無しでバックアップを貰い無限の魔力や情報すら貰える

紅那岐の場合はもし死んだ場合神の支柱として属する契約がなさ

れている。故に「超べてを越えし者」では無く「超べてを越えし神」と言うネーミングである。しかし紅那岐はすずかをあんな目にあわせたのが神であるため神になる気がさらさら無く神を（知り合い除く）毛嫌いしている

トールの場合は自身の各位を落とし中級神となり力を落とすことで終わったが紅那岐が転生者を狩りまくった事により元の上級神に戻り元の力以上を手に入れた

おまけ

強さ表

トール >>>>>>>>>>>>>

現状超えられない壁 >

ルーン >

すずか（真祖 + 満月） >

紅那岐（超越神 + 雷神化） >

すずか（真祖） >

紅那岐（超越神） >

紅那岐（雷神化） >

飛鳥（完全に戦い方が分かるなら） >

人間には超えられない壁 >

すずか（通常） >

紅那岐（通常） >

恋 >

七星 >

リース  
>  
なのは達

## 主人公意外の設定（後書き）

レティ「これで終了！書いてないこともあるけどそのへんは勘弁してください」

トール「ではまたね」

レティ「次回からは本編はあります」

## 第一夜 運命が始まる前

「お疲れ様でしたー」

夕方の学校で響き渡る生徒たちの声、夜の誘いが始まる前に聞こえるこの声は学校の部活が終わる声である。そんな中一人の少女が  
呟きを漏らす

「ふう……今日は先輩の家にお世話になるはずだったから」

薄紫の髪を肩らへんで整えている少女の名前は……

「さくら!」

フニヨン

「キヤアアアツ!」

突然呼びかけられた声と共にやわらかいものを掴んだ効果音が聞こえてくる

「ちよつ!そんなに驚かなくてもいいじゃん」

「な、なななな七星ちゃんお願いだから声をかけるたびに胸を揉まないで!」

悲鳴を上げた少女の名前は桜 間桐桜 である

「おー、あんた達またやってるのか」

「あ、美綴先輩こんにちわ〜」フニフニ

「もう、こんばんわの時間だけどね」

「挨拶しながら私の胸を揉まないでよ」

仲良く話しているが今だ七星は桜の胸を揉んでいる

「なんで、すずかや桜はこんなに・・・私にだってちょっとくらいは」

ぶつぶつと呪詛を振りまくが如く黒いオーラを纏っている七星をほって置いて後ろから声をかける

「桜ちゃんお疲れ様」

「あ、すずかさんお疲れ様です。ところで七星ちゃんなんとかできませんか?・・・アン」

「七星ちゃんそれ以上やっていると紅くんに報告だよ?」

ニツコリと死刑宣告をつけると渋々と胸から手を放す七星に後ろから声がかかった

「お待たせ」

「恋ちゃんお疲れ様」

「そつでもない」

楽しそうに話しながら七星がそうだったと思い出して桜に声をかける

「そういえば桜って今日は衛宮先輩の家に行くでしょ？ 私達も行くから」

「ええ！？」

急な提案に驚く桜だったがさすがに補足をする

「衛宮先輩にはきちんと許可は取ってあるから大丈夫だよ？」

そうして一同は衛宮先輩の家に向かうのであった

十

十

十

「うーん美味しい！さっすが先輩だね」

「はは、ありがとうな七星」

「ハグ、ムグ」

「ほら、恋ちゃんは急いで食べない。口が汚れてるよ？」

「それにしてもお前達が来るようになってもう半年か」

「だねえ、桜とは入学当初に友達になったけど衛宮先輩は噂しか聞いてなかったし」

「ね、まさか通い妻してるなんておもわなかったかな」



「……ん」

「か、通い妻ってなんですかさずかさん！」

話していると色々な単語が出てきて桜は顔を真っ赤にしながら問い詰める

「違うの？」

「違いますー！」

精一杯の声をしながら否定をしている桜を他所に

「まあ桜が俺に気があるなんて無いだろ？せいぜい兄貴くらいだよ」

と言つてのけるこの家の主衛宮 衛宮士郎 は言つのだがその瞬間にツツコミが入る

「……この朴念仁が……」

桜は顔を真っ赤にしながら俯いているが士郎は何故そついつ風に見えるのか分かってなかった

「……ダメだこいつ早く何とかしないと……」

「なんでさ」

総スカンを受けながら呟く士郎にその時侵入者は現れる

「たっだいまー！お腹減ったよ・・・って士郎が女を連れ込んでる  
ううううう！」

「藤村先生お帰りなさい」

「こんちゃ〜」

「こんばんは藤村先生」

「ハグ、ムグ」

帰ってきた人物藤村 藤村大河 は目の前の光景に絶叫していた

「そんなわけあるかよ藤姉、てかこれで何回目だよ」

溜め息を吐きながら士郎は一人ごちていた

「うつさい士郎！お姉ちゃんは士郎をそんな風に育てた覚えはあり  
ません！」

「育てられた覚えもねえよ！」

姉弟喧嘩をよそに他の4人は気にせず食事を取る

「そろそろお兄ちゃんの食事が恋しくなってきたなあ」

「そういえば為に出るお兄ちゃんとか紅くんってどんな人物なん  
ですか？」

「赤羽 紅那岐って言って私たちの保護者かな？」

紅那岐に今までであったことが無い桜は質問したら普通に答えが返ってきた

「そ、歳は私達の二つ上だよ」

「えっと、その方って今は何処に？」

「さあ？なんか私達が高校受かったと同時に「俺を呼ぶ声が聞こえる」とかなんとか言っていて出て行っちゃったんだよね」

「ええ!?!」

「でも、メールとか通じるから大丈夫だよ」

そんな説明を受けても今だ混乱している桜だが他の3人は気にしていなかったために桜も納得したようだった

+

+

+

「んじゃ、お休みなさい」

「ご馳走様でした衛宮先輩」

「おいしかった」

そして帰る時間がやってきたのでお見送りとなったのだが

「本当に大丈夫なのか？送っていくが」

「私達より桜を送ってあげなっ」

「それに私達の家までなら大丈夫ですから」

「分かったよ」

「じゃあ失礼します」

こうして三人娘は岐路につき士郎もまた桜を送っていくのであった

十

十

十

「ん〜この世界はある意味すごいよね」

「ね、なんか霊脈やらなんやら一杯あるし」

「また見つけた」

岐路についている三人娘のうち恋が見つけたものは何かしらの結果の基点である

「これなら・・・うん、壊しても大丈夫そうだね」

そう言って壊す七星

「でも本当に紅くんって何処にいるんだろ？」

「だね、もう直ぐ1年になるのに帰ってくる気配ないし」

「ちびっこ」

各々自分の気持ちを話しながら帰宅するのであった・・・運命の齒車  
はまだ回っておらず。

第一夜 運命が始まる前（後書き）

レティ「終了だけど、書いていて凄くつまんね」

トール「どういう意味よ」

レティ「いやね未だバトルは愚かセイバーすら出てきてないからね」

トール「あつそ、ところで紅那岐は何処にいつてるのかしら?」

レティ「秘密w」

トール「あつそ、では感想ありがとうございました」

レティ「では〜」

第二夜 運命は回りだす／すすか達の役割は？（前書き）

連続投降、珍しく暇だったんだよ

それにしても上手くかけないや

## 第二夜 運命は回りだす/すすか達の役割は？

そこはとあるビル郡の屋上そこに某アカイアk・・・ゲフン、赤い服身に纏った少女がいた

「・・・」

そしてそれを見上げるように見つめる少年がいた。少女は少年が自分を見てるような気がしていたが気のせいと思いついその場を後にする。少年もまたその場を後にし誰もいないと思われた別のビルの屋上には三人娘の姿があった

「気づいていたね士郎」

「だめだよ？先輩を呼び捨てにしちゃ」

七星が士郎を呼び捨てにしたことをやんわりと注意するすすか、恋はと言つと赤い少女が行った方向に眼を向けていた

「どうしたの恋ちゃん」

「他にも誰かいた」

「そっか、それが紅くんが言っていたサーヴァントってやつなのかな？」

「うん」

この世界にきた後に紅那岐によりこれから起こることを大まかに



聞いていた3人だったが実際はどんなことが起こるのか分からずいたので、取り合えず紅那岐から聞かされていた土郎・桜そして先ほどまで観察していた赤い少女　遠坂凜　を気づかれないように観察していたのであった

「とりあえず今日はなにも起きそうに無いかな？」

「・・・うん」

さすがが恋に聞くとしばらく虚空を見ていた恋は頷きこの日は全員帰って行った

十

十

十

そして時間は流れ夜の学校に響き渡る学校には相応しくない金属がぶつかり合う音

「すごいね、これが英霊と呼ばれるサーヴァントの戦いなんて」

「でも、すずかやお兄ちゃんならいけるでしょ？」

「・・・恋も大丈夫」

そして再び遠くからサーチャーを使い戦いを眺めている三人娘

「恋ちゃんは倒せるの？」

「殺す気なら」

「そっか」

「すずかは？」

「私は満月の時なら勝てるかな？今の状態じゃがんばっても五分が限界だよ」

「私の場合は遠距離で倒せば楽勝だけどこの世界で使つと後が怖いな」

「それ言っちゃ私のルナで終わりだと思つよ？」

なにやら話し込んでいる三人娘だったが突如恋が声を上げる

「誰がいる」

「「え？」」

二人もモニターに目をやると其処には

「衛宮先輩！？なんでここに！？」

「それより助けなきゃ！」

「行く」

そして全員が駆け土郎を探すと其処には胸に穴の開いた土郎がいたが

「あれ？服に穴が開いてるけど体の傷は塞がっている？」

「本当だ・・・それに魔力の残滓からしてあの遠坂つて人みたいだ

ね

「目覚める」

恋が言つと同時に三人は特殊迷彩を使い隠れると土郎は目覚め自身の状況が分からず血などを拭いた後ふらふらと帰って行った

「ふう、危なかった」

「だね、今はまだ前にたっちゃダメって言われてるし」

「不思議・・・」

恋がポツリとこぼすと二人も同意していた

「うん、胸の穴はどう見ても貫通していたはずだよ？何より血が証明してるから」

「と言うことはあの遠坂って人が土郎になにかしらをしたのかな？」

頭をひねりながらも答えはせず3人は土郎が帰るかを見届けてから帰ろうと結論付け後を追った

「どんだけ不幸体質なのあの衛宮先輩って」

すずかの台詞に思わず二人も納得する。土郎が家に帰り少し様子を見ていると突如気配を感じそちらに視線を送ると先ほど学校で戦っていたサーヴァントの一体が土郎の屋敷に侵入していったからだ

「見てるだけって歯がゆいんだけど・・・」

「でも紅くん曰く白い少女が出てくるまでは恐らく大丈夫だからそれまで待てだったよね？」

「うん・・・それに気配が少しおかしい」

一番サーヴァントに近い性質をもつ恋だからこそ気づけたのか土郎が土蔵に入った後に淡い光が満ち溢れる

そしてその後はまさに一瞬であった、すずか達が除いていると土蔵から青いサーヴァントが出てきたと思っただら次いで青い騎士甲冑を纏った少女が出てきた  
そして戦いあう二つの青、男のほうは槍を何かを叫びながら振るうと避けたとはずの少女の胸に近い位置に槍が刺さっていた

「うそ！？避けたよねアレ」

「そのはずだよ・・・恐らくアレは概念的に相手を刺す能力があるんじゃないかな？」

すずかが予想を口にしてしていると青い男はそれが終わりと言わんばかりに後退していったのを見てそこにいるものは終わったかに見えるたがセイバーは壁を越えていった

「あの人がきた」

「あの人って遠坂先輩？」

恋に確認すると頷くので恐らくあっているだろうと思えば三人は移動していくと其処にはセイバーに剣を向けられ呆けている凜の姿があった

その後士郎に止められているセイバーの姿があった

+

+

+

運命の歯車が今回りだした

第二夜 運命は回りだす／すすか達の役割は？（後書き）

レティ「うん、難しいな」

トール「それなら原作ぶち壊しなさいよ」

レティ「だが断る！」

トール「ネタに走るな！」

レティ「では次回で〜」

**第三夜 思わぬ影響による違い（前書き）**

これから独自設定が入ってきます

### 第三夜 思わぬ影響による違い

士郎達が協会に入った後、すずか達は今の状況を考えていた

「・・・今日一日だけでどれだけの事起こったんだろ？」

「考えたくないよ」

「・・・ZZZZ」

色々と思い浮かべてる中恋にいたっては既に眠っていた

「はぁ・・・恋はいいなあ」

「仕方ないよ恋ちゃんだし」

「お兄ちゃんも恋にはダダ甘なんだよね？羨ましい」

「ハハハ・・・それにしても衛宮先輩、アレは無いよ」

「無いね」

すずかと七星が言っているのは先ほど士郎が召還したサーヴァントの格好である

「幾らなんでもレインコートを被せるなんて」

「女の子だよ？格好も気にしてあげないと」



そう、先ほど召還したサーヴァントの格好は人目につかないようにとレインコートを被せていたのだ、幾らなんでも他に方法はあっただろう！無いなんて言わせない！

「あ、出てきた」

「本当だ、衛宮先輩が帰ったら私達も帰ろっつか」

「そうだね、それにしても眠い・・・」

既に12時を回り眠気も限界に近づいている面々だったがそうは問屋が卸さないのか新たな気配が近づいていた

Side End

士郎 Side

「こんばんわお兄ちゃん」

無邪気に挨拶してくる少女であったが俺は背筋が凍りついていて動くことは愚か口を動かすことすら出来ないでいる

「バーサーカー・・・」

遠坂が聞きなれない単語を口に出しているが俺は目の前の少女の直ぐ後ろにいる巨大な影に怯えている

「驚いた。あいつ戦闘能力ならセイバーを凌駕してるじゃない」

遠坂も怯えてはいるが直ぐに動いて後ろの影に指示を出していた

「衛宮君逃げるなら早くね」

遠坂が俺に言ってくる、普段なら逃げるといふ事はしないが今の状況じゃ素直に頷くしかないのか

「相談はすんだ？なら、始めちゃってもいい？」

軽やかな声と共に語りかけられる

「初めまして、リン。私はイリヤ  
ン・アインツベル」  
イリヤスフィール・フォ

スカート両端を持ち行儀よく挨拶をしてくる少女に遠坂はあてがあるようだった。少女・・・イリヤはそれを嬉しそうに確認すると

「じゃあ殺すね。やっちやえ『バーサーカー狂弩兵』」

それだけ言うとは後にいた巨兵は俺達に襲い掛かってきた。一瞬にして数十メートルはあるうか距離を一足飛びでくるバーサーカーと呼ばれる異形だったがその途中に無数の矢が降り注いだ

「うそ、効いてない・・・」

攻撃は意味を成さずそのまま来るバーサーカー

「シロウ、下がって！」

セイバーが前に出てぶつかり合う剣と剣、バーサーカーは矢を受

けながらもセイバーを押し殺さんとその手にもつ剣で攻撃し、またセイバーも見えない何かで迎撃していた

「ふっ……」

「—————っ!」

ぶつかり合う剣と剣、そしてその間を走る銀色俺はその光景を見とれていたのかも知れない、気づくとセイバーたちは別の場所に移動して行っていたそして気づいた俺はその後を追う

Side End

三人称 Side

そして場所は変わり墓での戦いになる、地形の利を生かしセイバーは素早く動いてバーサーカーを翻弄しながら戦っていた

しかし、敵はバーサーカー多少の傷は気にも留めずセイバーの攻撃を食らった瞬間の一瞬の硬直を見逃さずセイバーを掴み振り回す

「あああああ」

「—————っ!」

そしてバーサーカーがセイバーを放ると急に手に持っていた剣が弓へと形を変える

「うそ!? バーサーカーが宝具を!?!」

凜が驚いていると急にイリヤが面白そうに笑う

「あはは！教えてあげるわリン。私のバーサーカーはね何故か知らないけど狂っていないながらも弓兵の力も使えるの」

本当に嬉しそうに答えるイリヤに凜の顔は青ざめる

「うそでしょ・・・反則すぎるわ」

絶望に色を染めている凜にイリヤは指示を出す

「やっちゃえ！バーサーカー」

そしていざ宝具を放とうとした瞬間に一つの影が介入した

「・・・させない！」

ガキンッ！

高い金属音が鳴り響くと其処には2mの槍を持った一人の少女がバーサーカーの弓を弾いて攻撃を防いでいた

「誰！？」

イリヤは驚きのあまり止まり、凜は突然の乱入者を問いただす

「・・・ん」

「お前は恋！？」

士郎が驚いている間にもバーサーカーの攻撃は止まることなく攻

撃が始まったが恋はそれに応酬していた

「再びこんばんわ衛宮先輩」

そして士郎達に声をかけるもう一人の影

「おまえはすずか！？一体どうなってるんだ」

なぜこうなったかは少し時間が遡る

十

十

十

「え？なにあの大男・・・」

「すごい威圧感、かなり離れた位置にいるのに私達まで抑えるなんて・・・」

「・・・強い」

「あ！移動するよ！」

「追いかけなきゃ！」

そして追いかけていくと其処には剣を弓へと変えているバーサーカーの姿があったのだ

「ちょっと！助けないとやられちゃうよ！」

「うん、もう傍観者は出来ないね。恋ちゃん大変だろうけど抑えて貰える？」

「・・・がんばる」

「お願いね。七星ちゃんはおそこにいる赤い人と協力して少ししたら砲撃を撃って貰えるかな？」

「まっかせて！」

「じゃあ行くよ！」

「うん！」

十

十

十

そして現在に至りそしてあまりの自体に混乱している土郎だったが  
がすずかは気にせず今いえる事を伝える

「恋ちゃんが今は抑えているけれど、そのうちスタミナ切れちゃう  
から今から攻撃を行うから衝撃に備えてくださいね？」

すずかが警告した瞬間二つの光がバーサーカーに向かって降り注  
いだ、恋は一瞬の隙を突き離脱していた

すさまじい轟音と共に辺り一面火の海の如く燃え上がるが巨人は  
其処に佇んでいた

「今ので倒れないって・・・バーサーカーって名前は伊達じゃ無い  
みたいだね」

すずかがかなり焦った表情で呟いていた

「おっどろいたー、まさかサーヴァント以外で生身の人間がバーサーカーと打ち合えるなんて」

イリヤは驚き3割面白さ7割と言う表情で笑っていた

「今日はここまでにしとくわ、またねリンそれに誰かは知らないけどイレギュラーさん」

そしてイリヤは帰っていき其処にはさすが・恋・凜・セイバーそして・・・

「・・・」

今の攻撃を見てなにやら考えていた土郎であった

「さてつと、もう少ししたら人が来るかもしれないですから一旦離れましょ？」

さすがが提案するとその場で満場一致となり帰っていくその時

「マスター!?!」

セイバーの声に振り返ると其処には倒れていた土郎がいた

+

+

+

運命の齒車はまだ回り始めたばかり

### 第三夜 思わぬ影響による違い（後書き）

レティ「まさかイリヤ戦でここまでになるとは思わなかった!」

トール「そうね、それにしても独自設定はありなのかしら?」

レティ「いいんじゃない?それに転生者はFate系が好き オリジナル+Fate全体に影響ありって感じで書いてくし」

???「へー」

???「何でもありですね」

レティ「何故いるし、飛鳥とリース」

アスカ「だって兄様においてかれたんだもん」

リース「同じく」

レティ「いやまあ、そうなんだけどさ」

トール「いいじゃない、それにしてもすずかの説明不十分な部分あるでしょ」

レティ「不十分?」

リース「すずかはユグドラシルと契約したのになぜ情報がはいつてこないのですか?」



レティ「ああ、今のすずかの設定はあくまで無限の魔力だけで情報とかは真相になりきれないと降りてこないの」

アスカ「そうなんだー」

レティ「そうなんだよ?」

トール「それにしても弓兵+狂戦士ってかなりチートよね?すずか達が前の話で言っていたけど条件次第で勝てるの?」

レティ「ムリw前まではある意味で様子見だったっていう設定で全力じゃないから勝てないよ?恋は全力だして五分なのは一緒」

アスカ「じゃあ、兄様は?」

レティ「紅那岐は雷神化すれば勝てるかな?通常状態だとかなりきつい」

トール「まだまだね、それじゃあ感想ありがとうございました」

リース「引き続き神々のゲームと転生者をお楽しみに」

アスカ「バイバーイ!」

第四夜 目覚めの朝は緊張感に包まれて？（前書き）

友達とカラオケ行って来ました

最高得点をたたき出したのはいとうかなこさんのShadow in the darkとJam ProjectのVICTORYで91点でした

ちなみに今書いているFate系はTHIS ILLUSIONが80点でした

なにが言いたいです？

ノドが痛いよ、（、、（、）ノアウ・・・

#### 第四夜 目覚めの朝は緊張感に包まれて？

士郎 Side

「ん・・・」

「あ、起きたそれは何より」

目が覚めると其処にはドアップの遠坂の顔があった

「~~~~~っ！」

俺は一瞬で遠坂から離れて状況を分析する

「と、遠坂！？ここは一体私は・・・」

ぐるぐる回る思考で冷静に状況を判断できずあたふたしてしまっ

「たく、いいから一度深呼吸すれば？」

遠坂からそんなことを言われ取り合えず深呼吸すると幾分か落ち着きだんだんと状況が飲み込める

「そっか俺あの後倒れて・・・」

昨日俺があその後倒れて恐らく遠坂達が運んでくれたんだと言っことが分かる

「あれ？達？」

ふと自分が思ったことに疑問が浮かび思わず首を捻る

「いいから居間にきなさいな、そしたら状況も理解できるでしょ」

遠坂に言われ頷きながらついていくと居間に行く

「あ、衛宮先輩起きたんですね？おはようございます」

「おっはよ〜！因みに速く座りなよごはんさめちゃうよっ」

「お腹減った」

居間にいる三人娘をみて思い出した

「あああああ！そうだお前らなんであそこにいたんだよ！」

急速に昨日の記憶が掘り起こされ思わず大声をあげてしまう

「いいから黙りなさい」

遠坂からの一言で我に返り黙る

「そのことも含めこれから聞くんだから」

どこか忌々しげに見てる遠坂だったが取り合えず目の前にある食事を見て

「えっとこれは？」

「すみません。冷蔵庫を拝見させていただいて作らせていただきました」

そういったのはさすがだった

「それは構わないんだが・・・」

戸惑っているところに

「いいから食べましょう？折角作ってくれたんだし、それに彼女をみると我慢が限界のようだし」

遠坂が指を指す方向には今にもよだれが垂れ落ちそうな恋と金髪の少女・・・

「そっか、セイバー無事だったんだな」

「はい、マスターも無事でよかったです」

「それじゃあ、みなさん揃ったんで」

「「「「「いただきます！」「」「」「」

そう言って各々ご飯を食べだした

Side End

凜 Side

全員ご飯が食べ終わり漸く目の前の三人の事を確認できる・・・

「ご飯中はお互いが何かを言おうとしてもご飯中ってことで食べるのを優先しちゃったわね」

「さて、とりあえず貴女達のことを教えてくれるかしら？」

出来るだけ敵意を込めず、されど警戒は怠らないように注意しながら問う。もちろんアーチャーにも最大限警戒してもらい万事に備える

「えっと、最初に言っておくと私達は魔術師じゃありません」

「「「・・・は？」」「」」

「すずか？つてこが行き成り言った言葉に私はおるか衛宮君やセイバーも素っ頓狂な言葉を上げてしまった」

「ちょっと待ちなさいよ！魔術師じゃないのに行き成りあの場所に・・・ううん、その前に魔術師じゃないのに魔術師を知ってるというの！？」

ダメだ頭が混乱していて上手く質問が出来ていない

「えっと、遠坂先輩落ち着いて」

そんな事言っても落ち着けるわけ無いでしょうが！と叫びそうになるのを飲み込む

「えっと私達の正体は・・・と、通りすがりです」

明らかにムリですよね？って顔でアホなことを言ってくるこの子

「本当にそんな理由が通ると思ってるのかしら？」

「思っていないんですけど・・・えっとですね、私達の正体を教えるのは私達自身構わないんですけど、私達の保護者がですね『メンドイから俺が帰ったらついてに教えるよ』と言って今朝方メールが送られてきたんです」

そう言っつて携帯電話を差し出すと確かに同じような内容が書いてあった

「それで私達が納得して貴女達を帰すとしても？」

私は威嚇の意味も込めて殺気をぶつけるが

「脅したくは無いのですが、昨日のバーサーカーと打ち合った恋ちゃんとアーチャーさんと一緒に攻撃をした七星ちゃんが此方もいるんですけど？」

そう言っつてくるこの子だけ二人はのほほんとお茶を飲んでいた

「くっ・・・」

「遠坂落ち着けて、それですか？その保護者ってのはいつ帰ってくるんだ？」

「えっと『ピロン』あ、メール・・・メールには2・3日したら帰れると思っつて書いてあります」

「そうか、それじゃ取り合えずお前達の事は置いておくとして・・・

「お前達は俺達の敵なのか？」

衛宮君が急に割り込んできて核心部分に触れる、私が慎重に聞き出そうとしたのに行き成り出てきて核心突いてるのよ！

Side End

すずか Side

「お前達は俺達の敵なのか？」

衛宮先輩がまじめな顔をしながら聞いてきた、隣の遠坂先輩は何故か凄くあせった顔だったけど

「信じて貰えないかもしれませんが私達は敵じゃありませんよ」

「そうか分かった」

「ちよ！？衛宮君！」

私の言ったことを信じてくれた衛宮先輩に対して遠坂先輩は信じられないって顔をしている

「曲がりなりにも半年近く付き合っている俺から言わせて貰えばすずかはこんな時にウソなんてつかない」

そう言っただけで信頼してくれる衛宮先輩の言葉に恋ちゃんや七星ちゃんも嬉しそうに見ている・・・紅くんだったらこんなときでも茶化したかな？



「あつそ！私はこれで帰るわ！あとは・・・衛宮君生き残りたかつたら家で大人しくしてなさい？」

それだけ言うと遠坂先輩は帰って行ってしまった・・・確かに今の私達って信用ないからな」

「それじゃあ衛宮先輩、私達もこれで失礼します」

そう言っつて私達も帰って行く・・・今日は学校サボっても大丈夫だよな？」

十

十

十

「それにしてもセイバーさん最後まで私達に対して警戒してたね」

「てか士郎が無警戒なほうが可笑しいと思っつよ？」

「恋もそう思っつ」

私もそう思っつ・・・衛宮先輩ってどうしてああまでお人よしなんだろ？

「それにしてもサーヴァントか・・・正直甘くみてたよ」

「だね、満月になっても勝てるかどうか・・・」

「恋も死ぬつもりじゃなきゃ無理かも」

総合的な実力じゃあ私のほうが今は上だけど事1対1だと恋ちゃんの方が強いからその恋ちゃんが死ぬ気じゃなきゃムリと言っつと私

も真祖の力を解放して戦わないとダメだね

「あゝそれにしても速く帰って寝たい」

「ハハハ、それじゃいこつか」

「うん」

こうして私達は帰って行つた

翌日クラスの人物が言うには衛宮先輩に金髪の彼女が出来たとクラスの人が噂をしていた・・・先輩セイバーさんを連れてきたの？桜は苦笑いしてたけど正直噂になるって自覚ないのかな？

End

+

+

+

「まてえええええつ！」

「だが断る！」

一人の青年が走っているがその後ろには沢山の人間の姿がある

「2・3日で帰れるかな？」

そう言つて眩きながらも追っ手から逃げる青年であった

+

+

+

歯車はまだ回りだしてゆっくりと次へと向かう

第四夜 目覚めの朝は緊張感に包まれて？（後書き）

レティ「どうしょ、進まないよ？」

トール「ある程度は飛ばしなさいよ、今日やったことって正直バーサーカー戦の次の朝で終わりじゃない」

レティ「うん、はしよるつもりが全くはしょってなかった」

リース「ダメダメですね」

レティ「うっさいわ！」

????「宅配便です」

レティ「あ、ご苦労様です。送り主は・・・畏無様だ」

トール「中身は？」

レティ「ちよつちまつてね・・・ああ、前にあげたEカートリッジを改良したやつで名前はカオスマティック・エクスプロージョンCEだつて」

リース「すずかに渡せば喜びそうですね」

レティ「だね、畏無様は感想ともどもありがとうございます」

トール「今回はこころ入んで、バクイ」

第五夜 色々な思惑（前書き）

作中に出てくる

+

+

+

は単純に一旦話が切れますよってことです・・・すでに分かっている  
かw

## 第五夜 色々な思惑

「ちゃんと反省してください!」

夕方よりも暗い教室の一角に仁王立ちして説教をしているものとそれを正座しながら聞いている三人の姿があった

「どうしてこんなことに・・・」

「なんでぞ」

正座をして説教を食らっている者たちは自分達を怒っている人物に対して少なからずの疑問を口に出している

「ちゃんと聞いているんですか!」

「は、はい!」

何故説教を受けているかというところ

「遠坂先輩? 幾ら衛宮先輩が心配でかつアホな行動を取ったと言ってもやっつていいことと悪い事くらいは分かりますよね?」

「はい・・・」

「アホってすずか・・・」

何故こうまでこの二人が怒られているかと言うと、先ほどまで二人は追いかけてこをしていたからである、ここまでならある意味可

愛らしいのだが実際は凜はガンドを機関銃のように乱れうち、土郎も当たるわけには行かず必死に避けていたのである。

「私達が結界を張るのが遅れていたら確実に学校はめちゃくちゃになっただけですよ？」

「それよ！結界を張るのはいいけどなんで解いたら元に戻ってるのよー！」

リリなの式の結界により学校の被害はほとんど無かったのだがそれに伴い未知の結界に警戒をしている凜だったがさすがは反論を許さなかった

「誰が反論していいと？遠坂先輩自分がやらかしたことをまだ分かってないんですか？」

ニッコリとそう、ニッコリとではあるが怒っているのが目に見えて分かるすずかに対して口を出すのをやめた凜であった

「さてと・・・二人とも協力関係になったほうがいいんじゃないですか？私達も手伝っても構いませんが、この聖杯戦争って先輩達のものでしょうか？」

そう言っただけでずかが協力関係について話をしたとき

「ぎゃあああああつ！」

絹を裂くような悲鳴が上がった

「この声は？」

「向こうからだ！」

「あ、ちよつと衛宮君!？」

そう言つて走り出す士郎に二人は走つて追いかけると其処には倒れている女性がいた、調べるとどうやら血が抜かれていたらしく凜は倒れている女性を介抱する

「遠坂危ない！」

士郎が言つと其処には釘みたいな短剣が飛んできた、士郎は凜を庇おつと腕を出すかここにもう一人気づいている少女がいた

「衛宮先輩せめて受け止めるようにしないと怪我じゃすまなくなりますよ?」

「すずかお前一体……」

しかしそれだけ言つと士郎はそのまま外へ向かつていつてしまった

「ああもう!言つたそばから……」七星ちゃんよろしく!」

『すずかが其処まで激高するなんてね……任せてく危なくなつたら助けたくないから』

急に声が聞こえてきたと思つたらそのまますずかは気にせず士郎の後を追つたのである

「えつと……つてこの子を助けないと!」



後に残された凜は女性を介抱した後、後を追っていった

十

十

十

「……これ位なら私が出なくて十分かな？」

「どう七星ちゃん？」

遠くのエから土郎を觀察していた七星に後ろから声がかかる

「大丈夫だよ、それにしても衛宮先輩ってなんでこうも実力不足で前にでるのかな？」

「知らないよ、紅くんが見たらすぐに見捨てそうなのは確かだね」

そんな事を話していると戦いが終わり凜が土郎を治療していた

「あ、衛宮先輩顔が赤いね」

「アレは惚れてるね、お兄ちゃんがいたらいい獲物を見つけたって言うかな？」

そんなやり取りが終わり二人は帰っていく時に赤い弓兵が現れ二人に継げる

「マスターからの伝言で貴様達もこいと的事だ」

「だが断る！」

「ネタに走らないの、分かりました後ほどどうかがあります」

それだけ言うとアーチャーは二人の前から消え二人は凜達を追ったのであった

十

十

十

そして凜の屋敷で出た話はさすが提案した協力関係になるというもので当然すずか達もその話がふられたがすずか達は軽い手助けはしても前に出ることはしないといったが凜はこれを承知した。

凜が承知した一番の理由としてはこれは聖杯戦争であり7人のマスターによる戦争の為にレギュラーとなるすずか達はあまり大きく動くことは好ましくないという理由だった

十

十

十

翌日の夜、それは急に起こったことである。士郎は気づけば柳洞寺にいたのである

「つく、ここは」

「あら坊やも目覚めちゃったの？」

そして士郎の前に現れたフードをすっぽりとかぶった女である

「まあ、いいけどじゃあ坊やはここで死んで貰うわね？」

女が手を前に出し力を貯めるようなしぐさをしていると

ヒューン

なにか飛来するような音と共に多数の剣が降り注いだ

「なっ!?!」

驚いているフードをかぶっている女だが、そこに剣を出したであろう人物が現れる

「アー・・・チャー・・・」

士郎の前に立ち女と会話をしだすアーチャー、士郎はそこで自分がおびき出した人物がサーヴァントのキャスターと知る

また、キャスターがルールを犯し自分がマスターとなる事でアサシンを呼び出したことすら知る

「そう、もういいわ貴方達ここで消えなさい」

そういうとキャスターは空に舞い上がる、次に起こったことは・・・

「なっ!?!」

士郎が驚きの声を上げる、キャスターが空に上がるとロープが蝶の羽の様に開き其処には沢山の魔法陣が展開されそして手に持つ錫杖を振り下ろすと其処に無数の魔術による攻撃が降り注ぐ

「ちいっ!」

舌打ちしながら避けるアーチャーだがキャスターが狙うは二人其処には衛宮士郎が佇んでいた

「ばか者！とつと逃げんか！」

慌ててアーチャーは士郎を抱え逃げようとするがそれを許すキヤスターでもなかった

「終わりよ！」

そして再び攻撃が降り注ぎ終わりと思われたが

「あつまゝい」

そこに現れた一人の乱入者によって防がれた

「なんですつて！？」

「貴様は……」

「七星！？」

現れたのは七星であり、そして七星はプロテクションを張り攻撃を防いだのである

「あぶな……あとちよつとでも威力高ければ抜かれてたよ」

七星のプロテクションには罅が入っており本当にあと少しで抜かれていたのであった

「貴女何者？」

「私？私はこの聖杯戦争のイレギュラーだよ。本当は見てるだけの

つもりだったんだけど、つい動いちゃった」

笑顔でキャスターに告げる七星に対し他の者達は困惑していた

「さてと、お姉さんここは手打ちにしない？流石にこれ以上戦うとめんどくさそうだし」

「何を言ってるのかしらお嬢ちゃん、幾ら貴女でもこの量を連続では裁けないでしょ？」

そう言っただけで否定するキャスターに対し七星は

「そっか、それはいいけど避ければ？」

「何ですって？・・・きゃあつ！」

七星の言葉を確認しようとしたら急に飛来した武器にローブに裂かれ体制を崩すキャスター

其処に飛来したものはアーチャーが手に持っていた夫婦剣であった、そしてそれに驚いている士郎とキャスターに対してアーチャーは自分の手がばれていたのを面白くなさそうな顔をしながらも次の手に移っていた

「 I am the bone of my sword .  
 (我が骨子は捻じれ狂う。)

黒い弓に捻じれた剣を構えているアーチャーである

「 「  
「 カラドボルグ “ 偽・螺旋剣 ” 」

そして放たれた剣はキャスターの障壁を貫きキャスターの脇を通り抜けていった

地面に落ちたキャスターは生きてはいるが威力が威力だった為にうめき声を出しながら喘いでいた

「あれ？なんで当てなかったの？」

「貴様が言っただろう？手打ちにしないかと」

「そっか、それにしてもえげつない威力でてたねアレ」

「フン、貴様がバーサーカーに放った一撃も大概だろう、私に言わせて貰えば貴様の方が分からん分異様だ」

それだけ言うとかャスターと話し始めるアーチャーに七星はさほど興味は無いのか「あふ」と可愛くあくびをしながら士郎を帰ろうと誘った

「ああそれじゃ帰ろうか・・・っ!？」

士郎が殺気を感じ飛びのくが放たれた刃は士郎を切り裂いた

「外したか。殺気を抑え切れなかった私の落ち度か、それともお前の機転かどっちでもいいがな」

心底つまらなさうに告げながらアーチャーは再び攻撃をしようとしたが、士郎は一瞬で境内への階段に飛び込み転がり落ちていく

「なぜ止めなかった？」

「ん、何となくかな？アーチャーが士郎を見る目を見てると個人的にやることがありそうな感じだったからね。これが唯ついでに排除してだけならとめてたけど違うでしょ？」

「そうか、私はこのまま奴を追撃するが貴様は止めないのだろうか？」

「とめて欲しいの？私さっきのキャスターと同じタイプだけど速度は恐らくあのセイバーより多少劣る程度で飛べるからね？」

「どこまでも異様な奴だ」

それだけ言うとアーチャーは士郎を追撃していった。残された七星は空を飛び空中で一連の騒動を見た後そのまま帰って行った

+

+

+

「帰るのはもう少し遅れるからっ」と

携帯を弄りメールを送ったあとポケットにしまう青年に再び軍団が襲い掛かってきた

「いい加減しつけれ！」

そして再び逃げ出す少年だった

+

+

+

歯車はまだまだ回り運命をつむいでいく

第五夜 色々な思惑（後書き）

レティ「今回は結構進んだぞ」

トール「其処まで進んでないんじゃないかしら？」

リース「そうですね、それにしても主が一向にでてきませんね」

レティ「紅那岐は当分本当に出ないよ」

トール「本当に何やってるのかしら？」

リース「謎ですね」

レティ「その内出てきて語るまでまちな」

トール「あっそ、では感想ありがとね」

リース「では次回もお願いします」



## 第六夜 鮮血神殿とイレギュラー

「と言うわけで紅くんの帰りがもう少し遅れるそうです」

屋上で告げるすずかに凜と士郎は渋い顔をしていた

「つとに！帰ってくるって言ってもどうしようも無いじゃない！」

「落ち着けよ遠坂、すずかに言ったってしょうがないだろ」

激昂している凜を士郎がたしなめると言う図が出来ており既に凜の猫かぶりは意味を成してなかった

「まあ私達もなんで帰ってこれないか分からないんですね。基本的にこつちから送ったメールは見てるようですが返信ないんで」

苦笑いをしながら告げるすずかに凜も毒気が抜かれたのかそれ以上の追求は無かった、そしてこれからについて話そうとしたときに異変は起きた

「なっ！？」「」

凜と士郎が驚きの声を上げる、すずか達も驚いてはいたが声は上げずに現状の整理をしていた。

何が起きたかと言うと学校を覆うように赤い結界が発動したのである。本来ならば結界の基点は壊していたはずなのだが、どうやら壊しきれなくて発動した模様である

「」「」「」「」「」

屋上にいた5人は急いで屋上から降り近くの教室に入ると其処には倒れ付している生徒や教師がいたのである  
症状をみると無残な姿があったのである

「来い セイバー！」

士郎がセイバーを召還し敵サーヴァントを追う形となると

「先輩達は行ってください！私達は速やかに生徒の救出に向かいます」

「分かった！たのむぞすずか」

「はい！恋ちゃん、万が一が起ると怖いから先輩と一緒に」

「分かった。すずかも気をつけて」

こうして救護側と討伐側に分かれての作業となった

+

+

+

討伐 Side

ライダーを探している凜達だったが突然恋が喋りだす

「・・・基点、一階」

それだけ言うと恋は歩いていこうとするのを凜がとめる

「待ちなさい！一人で行くんじゃないわよ」

「……どうして？」

分からないといった表情で見ていると突然あたりから骨の傀儡が現れた

「これは!?!」

士郎が傀儡に驚いていると急に襲ってくるが

「邪魔」

恋がいつの間にか手に持っていた槍で傀儡を難なく屠ると再び歩みを進める

「セイバー頼むぞ」

「はい、士郎も気をつけて」

士郎達もセイバーに別れを告げてから恋の後を追った

+

+

+

救護 Side

「酷い……」

「くっ……流石に私もこれはきつい」

あまりの惨状に二人は顔をしかめているが、それでも人命は大事  
な為いそいで助けていたが急に目の前に傀儡が現れる

「ああもう!」

七星が苛立たしげに手には長銃を持ち出し傀儡をまとめて打ち抜く

「七星ちゃんあまりやりすぎちゃダメだよ、今回は私達の結界を張  
ってないんだから」

「忘れてた・・・しょうがないな!」

話している最中にも傀儡は沸いてくるので仕方なしに七つの大罪  
を出し細かく倒していくと其処に

「な、なんでここにリリなのすずかがいるんだよ!」

目の前に現れた少年が急にそんなことを叫んだ

「私を知っているってことは・・・転生者?」

「だね、悪いけど余裕が無いから消えてね?」

それだけ言うと七星は目の前の転生者と対峙しだした

十

十

十

基点 Side

教室に入るとワカメ・・・慎二が教室の端でガタガタ震えていた

「慎二、アンタ……！」

睨みつける凜の声に反応し飛び跳ねると急に言い訳を言い出した

「ち、違う違う違う違う……！僕じゃない、僕じゃない、僕じゃない、僕じゃない……！」

震えながらも声を出して言い訳をしていた

「言い訳なんて聞きたくないわよ！いいからこの結界を解きなさい！」

凜が慎二に詰め寄りながら言うが

「本当に僕じゃないんだ！急に現れた男が俺に任せるとか言っ行ってしまったんだよ！」

そういうと慎二は教室から飛び出して行ってしまった

十

十

十

救出 Side

「ふ、ふん！いくらお前らがいたって俺には勝てねえよ！」

それだけ言うと男は七星達に飛び掛ってくるが

「無駄だよ……高潔なる処女！」  
アイキスマイデン

七星が叫ぶと同時に鳥かごが現れ其処には守護領域が展開され男を弾き飛ばす

「くっそ、なんなんだよその能力は！」

激昂する男に対し七星は冷徹な笑みを浮かべながら

「教えるほどバカじゃないよ、それに何でこんな状況でアンタがいるのかこっちが聞きたいんだけど？」

そう言いながら七星は七つの大罪を男に向かって放つと七つの宝玉は男に向かい攻撃をしていく

「なっ・・・なっ!？」

男は攻撃された後無様に倒れ付す

「さて、今のあなたは聴覚と触覚意外残ってないからね、喋って貰うよ？なんで私達をおそつたのかを、そしてなんでこんな結界にいるのかを」

あくまで優しくたずねる七星だが男はガタガタと震えながら答えた

「ふん、ワカメが使えないから自分がやって完璧にしてやるからね・・・ふざけてんの？」

声は優しいが怒気がこもった声で告げる七星だったがさすがは溜め息を一つつくと七星に指示を出す

「はぁ・・・七星ちゃん、とりあえず転生者はそのまま消しちゃっ

て大丈夫だからついでにこの結界も壊しちゃって」

「了解……上がれ、上がれ、上がれ！」

指示を受けた七星は七つの大罪を花の花弁のように展開し魔力を貯め出した、その事実を受けた転生者は待ったをかけるが二人とも聞く耳をもたなかった

「終わりだよ！ジヤッジメント極光の断罪者！！」

七星から放たれた魔導砲により転生者もろとも結界は破壊された

「ふう……これで一安心だね」

「だね、あとは士郎達にまかせようっか」

それだけ言うと二人は一息つくのであった

+

+

+

「これは……」

士郎達が見てるのは血にぬれて倒れているライダーであった

「消えた」

恋がポツリと言ったのはライダーが急に消えたからである、その様子はまるで粒子になって消えた感じである

「慎二を捕まえたいところだが取り合えず、すずか達と合流を……」

「  
凜が合流しようとする提案しようとしたら急に莫大な魔力の反応があり声を止めてしまった

「なによこの魔力は!？」

「七星」

「この魔力って七星なのか!？」

「うん」

素直に頷く恋に戸惑いを隠せない二人だったが次の瞬間結界と共に魔力の反応が消えたので急いで合流したのであった  
そして色々と走り回った後全員は岐路に付いたのであった

十

十

十

「漸く追っ手から逃げられたな・・・さてと帰る準備しなきゃ」

青年がぶつぶつと独り言を言いながら帰り支度をしようとしてると

「なんじゃお主もう帰るのか」

そこに現れる老人が喋りかけた

「でたな元凶・・・」

うんざりとした表情でその老人を軽く睨む青年



「ひどいいいぐさじゃの」

「だまれ」

それだけ言つと関わりたくないのか老人を無視して支度をしていると

「あゝワシじゃが・・・うむ見つけた」

なにやら話し声を見ると其処にはいやらしく笑っている老人とその手に持つ携帯

「てめえいつか消すから覚えておけ！」

それだけ言つと青年はその場から一瞬で消えたのであつた

「本当に面白い小僧じゃ」

老人も笑つた後何処かへきえた

第六夜 鮮血神殿とイレギュラー（後書き）

レティ「Fateは場所によつては凄く濃いから一日に起こつた場所によつては全然進められないな」

トール「まあ、ここらへんは仕方ないでしょ？」

レティ「まあのお・・・」

リース「それにしても主はいつたい？あの老人も気になりますし」

レティ「気にするな。本当は紅那岐については書かなくてもいいんじゃないね？つてすら思つてるついでだし」

トール「では感想ありがとうございます」

レティ「次回もお願いします」

## 第六夜 実力を見誤る無かれ

鮮血神殿の騒動から二日後の夜、葛木宗一郎がマスターではないかと言う疑念により仕掛けるという話になったのである

「これで何かあっても凜のせいだからね？」

「ちよつと言つに事欠いて私のせいってどういふことよ！..」

「シツ！静かに先生がきましたよ」

七星の下らない一言に激高する凜だったがさすがの一言に窘められ黙り様子を伺う

「じゃあ、仕掛けるわよ？」

そして凜はお得意のガンドを葛木に向かい放つもそれは目の前に現れた布によって阻まれた、布は意思を持つかのように翻りそして人の形を成していく

「忠告したはずですよ、宗一郎」

現れた紫紺のローブをまとつ女性が葛木を注意している、凜たちは警戒しながら次の一手の為に思考していると向こうから出てこいと最速された、無論ここで出て行くバカは

「ちよつ・・・土郎！」

一人だけいた、出て行つた土郎は葛木にキャスターの行いを暴露

し葛木の対応を見ようとしたが、葛木はあろうことかそれを肯定した

「うっそ、葛木先生って堅物だからこういう行いを知らないってことで怒りそうだったんだけど」

「それもずれてない？」

士郎が葛木の返答に驚愕しているのと同時に七星達はずれた方向で話をしていた

「私は魔術師ではない。唯の朽ち果てた殺人鬼だよ」

葛木の暴露に驚く士郎を無視し葛木が下がりキャスターが前に出た

「そうか、なら貴方はここで死んでよろしいんですね」

そう言い放つと同時にセイバーは葛木に向かい疾走していた

「お待ちなさいセイバー！」

前にしたキャスターはセイバーに向かい魔術を行使し攻撃するが

ガキン キン

キャスターの放つ魔術を正面から当たるもその全てを向こうかないし弾いていた

「対魔力・・・私の魔術を無効化できる騎士など私は知らない！」

「うっわ、セイバーって凄いね」

「恋だつたらムリ」

「恋ちゃんあまり対魔力は高くないからね・・・でもアレくらいなら当たらないでしょ？」

「うん」

全員はセイバーの対魔力に驚いているが、セイバーは一人キャスターのマスター葛木に向かっていき必殺の一閃それで全員は終わったかに思えた

其処に佇む葛木宗一郎の姿を見るまでは

「ばか、な」

セイバーの驚く声が聞こえる、彼女も現状を理解できないでいたのである

「足と腕？」

そう、葛木は自身の膝と肘でセイバーの一閃を受け止めたのであった

「侮つたなセイバー」

「つつっ!!!!」

葛木の地の底から這い出てきそうな声と共に一瞬で気づいたセイバーは無理やり距離を開く

「がっ ……!?!」

突如として彼女の後頭部にありえない衝撃が当たる

「 ……??!」

セイバーは理解できずにいた、自身が食らう攻撃を衝撃をそれがたかが人が行っていると言うことを

「あ、あれは伝説のフリッカー!」

「違うよ七星ちゃん?というかこんな時にボケはいらないでしょ?」

「紅那岐に言っとく」

「やめてええええ!」

悲痛な叫びと共に辺りが静寂に包まれる、葛木は表情は変えずその場にとどまっていたが、どう考えてもこの空気を作った人物を全員睨んでいた

「あ、あははは…ど、どうぞ続きを」

「『『『『『『『『お前あんたが言うな!』』』』』』』」

そう言っつて、下がる七星だったが総スカンのツツコミが入り泣きべそをかきながら脇へと言ったのである

そして再び戦いあうセイバーと葛木、最初はセイバーが敵に翻弄されていたが自身が持つ直感と経験そしてその身に宿る能力で葛木を圧倒しだした

「其処だ　　！」

セイバーが好機とばかりに飛び込むが

「　　」

葛木が無常にも放ったその一撃はセイバーのノド下に直撃しセイバーを吹き飛ばした。そして葛木の対抗として凧が遠距離でとことになったが上手くいかず、また土郎も自信が持ってきた木刀が折られ無防備となり、無防備な土郎に葛木の拳が迫っていった

「　　トレース　　オン  
投影、開始」

ガキン

誰もが土郎が死ぬと思ったその時、土郎の手には今まで無かった武器が存在し土郎を守っていた

「え．．．」

凧が事態が予想だにしえない物だったのかあっけな声を漏らす

「アレって．．．」

「うん、アーチャーさんが持っていたものだよ」

「でも、壊れた」

三人娘も驚いていた、土郎がやった行為を誰よりも驚いていたの

は葛木であった。取るに足らない存在だったはずの土郎があるところとか自身の拳を防いだのである・・・投影した武器『干将・莫耶』を用いて

そして葛木とキャスターは引いて行き、残された土郎達もまたその日は帰って行った

また翌日から土郎と凧は同姓を始めたようであった、またその日にはセイバーと凧の両手に花状態でデートを行ったという目撃情報が七星より漏れ後日散々からかわれたのをここに記載しておく

十

十

十

デートから帰ってきたときに異変は起きたのである。あろうことかキャスターは土郎宅に乗り込み大河を人質に取りセイバーを取られてしまったとのことである

「セイバーをとられたあ!？」

「七星ちゃん落ち着いて、それでどうしてそうなったんですか？」

大声をあげて驚く七星をたしなめ事情を聞いた三人娘

「・・・これからどうするんですか？」

これ以上ないくらいに悲痛な面持ちを上げながら問うすずかに凧は質問した

「少し聞きたいんだけど、あなたたちの実力ってどれくらいなの？」

それを聞いた凧は後悔した



「えっと、取り合えずですが実力的に言えば七星ちゃんく恋ちゃん  
く私の順に実力はあります」

「そんで実力だけど・・・簡単に言えば私がアーチャーに少し劣る  
くらい、あ、これは総合的にね」

「恋はバーサーカーと同じ位」

「で私ですが・・・力を十二分に使うなら恐らくここでは誰にも負  
けません。ただ今は力を使わないんで恋ちゃんと同じ位とと思って  
ください」

それだけ聞くと凜と士郎は驚愕したのである、あろうことか全員  
サーヴァントクラスの実力を持っているものだから

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！それだけの実力をあんたたち隠し  
てたって言うの!？」

(馬鹿な!？元々私も知りえなかったこいつらだが、まさか私達と  
も対等だとも言うのか!？)

驚きすぎて上ずった声で叫ぶ凜と何かを思っているアーチャーに  
対し士郎はと言うと固まっていた

「ええ、でも私達ある程度は手を貸しますがやはりこの戦争は先輩  
達のもので私達を当てにするなら別のマスターに手を借りて  
ください」

暗に私達は手伝いませんと伝える三人娘に苦虫を噛み潰したよう  
な表情をし、売り言葉に買い言葉なのかそれを肯定した凜であった

そして翌日、セイバー奪還の為に協会の地下に向かう一同であった

十

十

十

「おっし、今度こそ本当に帰らんと終わりがねん・・・あ！<sup>ダ・カー</sup>反転する<sup>ボ・エン下</sup>世界使えばよかつたんだ」

その場でorzでへこむ青年がいたのは予断である

第六夜 実力を見誤る無かれ（後書き）

レティ「ふひい、中々進まないよ」

トール「ねえ、紅那岐って遠坂の呪いもってなかったわよね」

レティ「其処はそれってことで」

リース「主……」

レティ「まあ主人公ゆえのうっかりだね」

トール「はぁ……」

リース「では感想ありがとうございました」

アスカ「次回もお願いします！」

トール「飛鳥いつの間……」

## 第七夜 イレギュラーは何もすずか達だけではない

セイバー救出に向かう凧と士郎、それに動向した七星達。因みにすずかと恋は取り合えず自宅で待機となっている

そしてセイバーを助けようとしたら思わぬ誤算が生じたのである

「そんな・・・アーチャーあんた」

怒りが悲しみか分からないが震える凧。その理由が

「まつさかあんたが裏切るとわね」

軽いノリであるが纏っている雰囲気は鬼気迫っている七星の声

「あの時とは状況が変わったんでね、セイバーにキャスターがいる陣営が最強だろう？それにお前達は積極的に関われんそうだろう？」

皮肉屋なのは変わらずに事実のみを告げるアーチャー、そうあるうことがアーチャーは己が主を裏切りキャスター側についたのである

「うーん、それだけで・・・くっ!？」

七星が何かを言おうとしたその時今まで黙っていた葛木が攻撃を仕掛けてきた、近接戦闘に置いては七星の實力はキャスター以上アーチャー未満であるために防ぐことには成功しても誰かを守ることまでは不可能である

「あ」

凜が呆けた声を上げる、それに対し七星は守ろうとしたが距離が悪すぎる。一手で殺せる位置に言うことは一手で凜のそばにはいけても守ることが出来ないからである

「凜！」

七星の叫びと共に振るわれた拳は・・・土郎によって防がれた

「え？」

凜が呆けた声を上げるが葛木は突然の乱入者にも関わらず消そうと拳を繰り出す

「トレース 投影、オン 開始」

土郎が葛木の拳に対し双剣を持って対抗する、そして葛木の拳をある程度弾いていると戦いは一旦休息を迎えたかのように止む

「二人とも離脱するよ！準備して！」

突然の七星の声、それに気づいた全員は七星を見て驚愕した

「なのは直伝悪魔砲！デイベイイイン」

槍銃、そうあまりの長さに槍と見間違うほどの銃を空中で構え魔力を貯めていたのである。魔術師なら驚くだろうその異様な光景を銃、それは現代に生きるものならばある程度は見たことあるだろうが、七星の持つ銃は違った。それは兵器だがしかし機械の兵器である。

なぜそう思うかは不確かだが、だがしかし七星の持つものは機械

による攻撃と言つのを全員直感で気づいていた

そして、凜やキャスターは驚いたのはもう一つの理由であった。

それは桃色の魔力が溜まり今にも爆発しそうだからである

それだけなら取るに足らないかも知れないが、その魔力の濃さに二人は戦慄していたのである

「バスターアアアツ！」

七星の声と同時にそれは放たれ、そして七星は二人を抱え教会地下から脱出したのである

そして、何とか衛宮邸にたどり着いた凜たちは今後の予定を決めるのである。もちろんすずか達も今回は分が悪くなったら助けると約束するがいまだ聖杯戦争というくりの中の拘りを見せており、まずは別のマスターにお願いし、それが断られたらと言つことになつた

「そうするとやっぱり、バーサーカーのマスターのあの子にお願いするしかないか」

士郎がそう言うが、洪る凜。しかし後が無い者達のため仕方無しと言つことになり、翌日イリヤの元へ向かう一同であった

十

十

十

時は少し遡り、七星の砲撃を何とか防いだキャスター陣営

「無事かキャスター」

「ええ、それにしても彼女は一体・・・唯魔力を込めただけあの威力」

困惑しているキャスターに対し葛木はいつもの無表情である。またアーチャーも別の意味で困惑していた

(バーサーカーの時は確かありえない数のナイフをそして今度は近代兵器をより機械化した武器を・・・あいつらは一体なものなのだ?)

思案にふけるアーチャーだったがキャスターはそれには気づかなかった

十

十

十

そして現在は士郎達はイリヤに強力を求める為にアインツベルンの城に乗り込んでいたのである

「うきやーっーっ!」

森に入ろうとした凜が突如として悲鳴を上げる、ここは魔術師の縄張り当然とは言え結界はあるものである。

七星達や士郎が入ったときは少しビリっときた程度だったようだが、凜が入ると電流が思いっきり流れたようで悲鳴を上げたようだった

そして、ぎゃあぎゃああと文句を言いながらも目的についた士郎達である

「いくぞ」

士郎の掛け声と共に城に入ると其処には信じられない光景が映し出されていた

「ばか、な」

士郎の上げた一言に全員は恐らく同じことを思っただろう、なぜならば最強と言わしめんはずのバーサーカーが無残にも数多の宝具により貫かれ蹂躪され殺されつくしているのだから

「……………」

バーサーカーの雄たけびが聞こえる、そんな中バーサーカーはダメージ・・・否一回の死すらを許容し弓を構え、宝具を放とうとしていた

ナインライフズ

射殺す百頭：それはかつてヘラクレスがヒドラを殺したことにより得た究極の攻撃の一つ

それを放とうと構えていると

「天の鎖よ」

今までバーサーカーを蹂躪していた金髪の男が一言呟くとバーサーカーを雁字搦めにするように鎖が縛る

「……………」

バーサーカーは雄たけびを上げ鎖を引きちぎろうとするが叶わず、鎖により動きを完全に止められてしまう

そして、イリヤはバーサーカーを戻そうとしていたようだがそれも叶わなかった時金髪の男が事実のみを告げる

「この鎖に繋がればたとえ神であろうとも逃げることは叶わん。否、神聖が高ければ高いほど餌食となる。元より神を律するもの。」



令呪による帰還などこの我が許すはず無かるう」

そして男が腕を上げると同時に鎖に繋がれ身動きが取れない鉛色の巨人に無数の宝具が降り注ぐ

終わりである、幾ら十二の試練ゴッドハンドの宝具が優れていようと、それを超える無数の宝具の攻撃を受けたならば巨人に活路は存在しないそして、巨人は粒子となり消えていった。その事実を受け入れられないかのように愕然とするイリヤにギルガメッシュが近寄りイリヤに手を伸ばす

「やめろ      テメエツ！」

士郎が叫びを聞いた男が面白そうな獲物を見つけたといった表情を取った後、再びイリヤに手を伸ばしたが其処で異変が起きた

「      鎖よ」

高く透き通った声が聞こえたと同時に今度は男が先ほどのバーサーカーと同じように鎖に縛られたのである

「な、にーっ！」

男は驚きと憎しみがこもった声で叫ぶ

「やりすぎだよ、流石に見てられない」

誰もが声の発信源を見た、其処には紫色の髪をした大和撫子然とした少女が手を上げながら言っていた

「貴方は誰かを殺すのに戸惑いが無いんですね、それに・・・縛る

のが好きそうだったんで今度は貴方が縛られたらどうですか？」

真紅の瞳を輝かせながら告げるすずかに男が叫ぶ

「吼えるな雑種が！王を縛るその愚考、愚かさを知れ！」

すると男の背後に無数の宝具の群れがすずかに襲い掛かるが

「無駄です・・・偽りの壁よ全てを遮りなさい」

すずかが何かを言うとそれは突然、されど最初からあったかのごとく壁があり全ての宝具を遮っていた

「なんだ・・・アレは」

「すずか・・・あなたは？」

士郎と凜は目の前の起こっていることがわからずに固まっていた、七星と恋は知っているのか驚いてはいなかったがそれでも心配そうな顔をしている

「そうか、貴様らが奴が言っていたイレギュラーと言った奴か・・・ク。クフハハハハハ！」

そして男は突如として笑い出した、その理由が分からずすずかは尋ねる

「何が可笑的いんですか？」

「く、雑種風情に教えてやるのもまた王の務めか。いいだろう教え

てやる。何イレギュラーは貴様達だけではない」

男が継げた瞬間それは起こった

「「「「「なっ!?!」「」「」「」

そう、男が縛られイリヤの安全は保障されたかに見えたが、突如として現れた骸骨のような仮面を被ったものによってイリヤは無常にも心臓が引き取られてしまったのである

「なによあいつ!」

「許さない!」

激高した七星と恋は現れた骸骨の仮面の者に向かっていったが、一瞬で移動されそして刀を構えていた

「まさか!?!」

「!」

驚く七星と恋、そして突如として聞こえた骸骨の男からの一撃に防御の体制を取らざる得なかった二人

「げつが月牙てんしょう・・・天衝」

黒い斬撃に飲み込まれた七星と恋、そしてその余波で捕らえられた金髪の男も救い出され、二人は気づいたらいなくなっていた

「ゲホツゴホツ、恋大丈夫?」

「うん、それよりさすがが」

そう言っつて恋がすすかの方を見ると倒れそうになっていたので二人は急いで駆けつけすずかを支えた

「ごめんね？力使いすぎちゃったみたいで」

「いいよ、少し休みなつて。それにお兄ちゃんが知つたら心配じゃすまないから」

「恋達に任せて」

それだけ聞くとすずかは安心したのか意識を失つたのである

「士郎、凜！ここは危ないから一旦帰ろう！」

七星の提案を聞いた士郎達はやっと正気に返りそして帰って行った

十

十

十

「遅かつたか……」

青年の前には心臓を引き抜かれた少女がそのままだった

「……さごと」

そう言っつて青年は屈み少女の胸らへんに手を添える

「神の摂理に反する行いか……フツ、オレにぴったりだな」

どこか自嘲気味に笑いながら青年は魔法陣を展開しその場を少女の遺体と共に去ったのである

十

十

十

「フェッフェッフェッ」

どこか別の場所できやらしい笑い声が聞こえる

「まさか役に立つとも思ってなかった奴がこうまで役に立つとは、しかも今回は見送りかと思ったたらその他の者達もとんだ土産を用意してくれたわい」

どこか暗い場所にて笑いながら喜ぶ声を上げる

「さて、それじゃそろそろ行くかの」

「はい」

「よろしい、フェッフェッフェッ」

そして再びいやらしい笑いを上げながら消えていくのであった

第七夜 イレギュラーは何もすずか達だけではない（後書き）

レティ「ふひい、ちょっと難しいなシナリオどおりで変えるってのは」

トール「それにしても、神の摂理に反する行為ってアレしかないわよね？」

レティ「そだけど？」

トール「なんであんなことをやるの？」

レティ「それはね・・・その内語るよ」

リース「それよりも最後のほうが薄気味悪くて嫌ですね」

レティ「書いていて私もそう思った」

トール「では、感想ありがとうございました」

リース「次回は短め？にしてその次が内容濃く書く予定らしいので  
お願いします」

**第八夜 浮かび上がるそれぞれの思い 修正（前書き）**

宝具の説明などはWikiなどを主に見てください

若干尺を短くする為に省く部分は大いに省いてますので

詠唱を士郎との奴と間違えていました

第八夜 浮かび上がるそれぞれの思い 修正

「なんであんたがこんなところで飯くってるのよおおおお！」

凧の叫びが居間に木霊するなか平然とご飯を食べていた七星が説明する

「なんか、私達に協力してくれるんだって、よかったねあてが出て来て」

ころころ笑っている七星に対し凧は「どうして！」って顔をしているが、ぶつちやけた話七星は知らずに連れてきただけなので説明は「あんた」と呼ばれた青い奴が説明しだした

「あんたは取り合えず私達の味方でOKってことね・・・ランサー」

「おう、任せな嬢ちゃん」

にかつと笑いながら返事をするランサーに対し土郎はよく分からず「？」を頭に浮かべながら

「なんでぞ」

とよく分からない口癖を呟いていたとか  
そんなこんなで打倒キャスターに向かい土郎達は教会へと赴いていった

十

十

十



「そう、やっぱりあんたが立ちはだかるのね・・・アーチャー」

教会の前には腕を組んで立つ赤い弓兵、それを忌々しげにしかしどこか悲しそうな顔をした凜が問いかける

「存外キャスターも聡いようだな、信頼できんものは門番としておくことにしろしい」

不遜な態度を崩さずあつさり事情を説明するアーチャーに土郎は何故か苛立ち何かを言い放とうとしたが

「オラ、ボウズと嬢ちゃんはとつとセイバーの救出に向かえ、こいつは俺がしとめる」

そういうとランサーは赤い魔槍を構え目の前のアーチャーを睨む

「ほう、私がいなくなりランサーに助太刀を求めたのか」

何処までも不遜、そんな態度に苛立つ面々だったがランサーの言葉通り今はセイバー奪還のほうが一番優先の為言葉に従い教会へと向かっていった

十

十

十

「ほう、貴様も私の相手をするのか？」

「私？違つよ。みてゝるゝだゝけ」

緊張感にかける声の発信源は七星、されどその纏う雰囲気は戦闘者だったが、七星は見てるだけと言いつ切る

「別に速攻で片付けてもいい気がするけどねぇ、あんたの思惑が分からないから今回は見てるだけ」

「どづいうことだ嬢ちゃん？」

ランサーが分からないと言った様に聞くが七星は「なんでもないといい離れる。それを確認した二人にはもう言葉は要らずお互いの武器えものを用い駆けていった

「くっ

」

「つつ

」

苦悶の声が上がる、もう何合切り結んだかも分からずにいたがそれが止まったのである

そしてお互いは再びある程度距離が開いたら口を開きだした

「貴様、その力を持っているのに何故キャスターに付く？貴様と凜ならばキャスターなどたやすいだろ」

口を開けば疑問だった、そう最速のサーヴァントであるランサーの攻撃をしのげる技量を持ちながらも何故か裏切り寝返ったアーチャーの行動は解せなかった。

アーチャーはアーチャーでもはや定型文と化したように、あくまで勝率の話しかしない

それを聞いたランサーは

「貴様の剣には決定的に誇りが欠けている」

「もとよりこの身にはプライドなど無くてな、余分なプライドなど

そこいらの狗にでも食わせてしまえ」

アーチャーがランサーの言ったことに反論したかと思った瞬間ランサーからありえないほどの闘気があふれ出した

「狗と言ったな、アーチャー」

「事実だ、クー・フリーン。英雄の誇りなら今のうちに捨てておけ」

それだけだった、たった一言その言葉を言ったら其処はもう何も無いような静寂に包まれる。

あの七星ですら黙っているのであるのだから

「そうか、ならお前は先に逃げ」

そして大きく後退するランサーは四肢を地面につけアーチャーに問いかけその後50mほど駆けてから空に向かって舞い上がった

「<sup>ゲイ</sup>突き穿つ」

そしてあるうことが自身の魔槍を思いっきりアーチャーに向けて

「<sup>ホルク</sup>死翔の槍」

投げ放ったのである

「 I am the bone of my sword .  
(体は剣で出来ている) 」

アーチャーが何かを呟いた後手を上げ

「熾ロー・アイアス天覆う七つの円環！」

真名を開放されるとアーチャーの腕の先には七枚の花弁で出来た盾が展開され、あろうことが放てば必殺の槍は盾に阻まれアーチャーに届いてはいなかった

しかし、ランサーの槍も流石は名に轟くもの、投擲に対し絶対の防御を誇るはずのアイアスが一枚、また一枚と碎かれていったのである

「驚いたな、まさかアイアスを貫通しうる槍がこの世にあるとはな。君のそれはオリジナルの大神ケンゲニル宣言すら超えている」

満身創痍の状態で相手を賞賛するアーチャーだがランサーの顔は分からないといった状態だったが其処で思わぬ横槍が入った

「え〜？大神ケンゲニル宣言の威力もつと凄かったけど・・・ああアレはお兄ちゃんの魔力が会ったからこそその威力かな？だとしてもアーチャーあんた一体？東洋人っぽいのに何でアイアス持つてるの？」

ランサーが聞きたいことも含めて全て話す七星、その中に聞き捨てならない台詞もあったのだがこの際無視する方向でアーチャーは言う

「気づいているか？キャスターが存外苦戦しているようだな、此方に向けていた監視が無くなった」

「はっ！そうかよ、てめえは初めからそのつもりだったって事かよ」  
「気にくわねえ、それだけ言うたらランサーはこの場を去っていった」

「それにしても、マジであんた何者？」

七星がアーチャーに対して問いかけるが、アーチャーは小さく笑うだけで答えを出さず教会へと向かっていった

十

十

十

場所は変わり教会地下、その場では凜VSキャスター・士郎VS葛木が行われていた。完全に恋は蚊帳の外だったが、誰が眠れる獣をわざわざ起すような行いをやるものだろうか？そのためキャスター達は恋には一切攻撃をしていなかったのである

「がはっ

」

突如としてキャスターが苦悶の声を上げる、其処には凜に寸勁を打たれたキャスターがいた。そして凜は好機とばかりに追撃しようとしたがそれは葛木によって止められた。

士郎は何とかしようとしていたが、いかんせん戦闘能力の差が天と地ほどに離れていればさすがにいかなる方法を取ろうとも勝てる要素は無かったのである

吹き飛ばされる凜、そして葛木はセイバーを使おうとキャスターに指示を出す声が聞こえた

ああ、それがあと数秒早ければな

響き渡った声、異変にいち早く気づいたのはキャスターであった。其処にはイリヤと会おうとした時に見たときと似たような光景があったのだ。

キャスターは自身の主を守ろうと前に出たとき

トレース  
投影、開始

その言葉が響き渡った瞬間数多の剣がキャスター達を襲う。それを抗う術は存在せずキャスター達は数多の剣によって貫かれ絶命したのであった

「シロウ！」

急に現れたセイバーによって弾かれる土郎、そして土郎がいた位置にはアーチャーの剣が通っていた

「ちっ、外したか」

面白くなさそうに呟くアーチャーに凜はどういうつもりか問い詰めたが、アーチャーの態度に悪寒を感じたのか飛びのくがその位置に剣が頭上から降り注ぎまるで檻のようにして凜を封じこめた

「アーチャー、ヤツパあんた土郎を殺す気で」

「当然だ、そのためだけにキャスターについたのだからな。衛宮士郎を殺す、それだけが守護者と成り果てたオレとしての唯一つの願望」

「アーチャー貴方は・・・」

何かを悟ったセイバー、アーチャーと2・3の言葉を交わした頃には既に敵意は霧散していたが土郎を殺す。この行いを許せるはずが無いと力の入らない体で抵抗しようとするが無残にも地に伏せるアーチャーがセイバーを殺しそうになる一歩手前に土郎が割り込

み、それを止める

水と油、まさしくその通りで決して交わろうとしない二人は戦いが始まる。しかし、それはあくまでも一方的なものである

アーチャーは己が技術を昇華し今に至る英霊なれど士郎は違う、己が魔術行使に体はついていかず限界寸前であるのだから

「 告げる」

アーチャーが剣を振り上げ止めを誘うとしたその時、凜の声が響き渡りその手を止めてしまった

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

それはいかなる呪文なのか、この場にいるアーチャー意外は分からないものであった。

「ならば従え！ならばこの運命、汝が剣に預けよう・・・！」

凜を見ればセイバーに手を伸ばし呪文を唱えていた

「セイバーの名に賭けその誓いを受けよう！

貴女を我が主と認めよう、凜！」

するとセイバーから突風が巻き起こる、それは本来の彼女の力。士郎との契約により中途半端な力ではなく、主とサーヴァントが本当に力を発揮し会える主従となり今ここに降り立つ

セイバーはアーチャーに忠告するもそれを拒否しお互いの闘いが始まるが、今のセイバーは本来の力を取り戻した状態、故にアーチ

ヤーに負ける事などありえないのである

「クツ  
」

苦悶の声上げる、その隙を逃さんとばかりにセイバーは追撃をかけるがアーチャーはそれを何とかして防ぐ

お互いが近い位置で離していたが突如としてアーチャーはセイバーを蹴り離し自由の身になると

「セイバーいつか君を解き放つものが現れる、それは今回じゃないようだが」

体は剣で出来ている。

I a m b o n e o f m y s w o r d .

血潮は鉄で 心は硝子。

S t e e l i s m y b o d y , a n d f i r e i s m y b l o o d

幾たびの戦場を越えて不敗。

I h a v e c r e a t e d o v e r a t h o u s a n d b l a d e s .

ただ一度の敗走もなく

U n k n o w n t o D e a t h .

ただ一度の理解もされない。

N o r k n o w n t o L i f e .

彼の者は常に独り

剣の丘で勝利に酔う。



Have withstood pain to create  
many weapons .

故に、生涯に意味はなく。

Yet , those hands will never ho  
ld anything .

その体は、きっと剣で出来ていた。

So as I pray , unlimited blade  
works .

アーチャーが手を上げると同時に炎が走りその場は変わった。其  
処は武具の製鉄所、あらゆるものがあるがあらゆるものが無い場所  
そんな中に佇むのは一人の英霊

「 固有結界

術者の心象世界を具現化する、魔術の大禁忌」

凜の淡々とした声が響き渡る

「そう、オレは生前魔術師でな。宝具と言うならばこれがオレの宝  
具。あらゆる武器を見ただけで貯蔵する。それがオレが英霊として  
持つ能力だ」

息を呑む一同、そしてその世界に一番つらい顔をしているのはセイ  
バーであった

「これが、貴方の世界だといのですか・・・アーチャー」

「そうだ、試してみるか？貴様の聖剣、確実に複製して見せるぞ」

「この正体を知っているというのですか貴方は」

「ああ、そして何より劣化……なくして確実に複製して見せよう」

その言葉で本当の意味で全員息を呑む。今アーチャーはなんと言った？劣化なくしてと……つまりは同じものを複製できるということのだからだ

「なぜ、私の能力がここまで上がっているのかは分かんが、この好機逃がすわけにはいかん」

アーチャーの手が上がる、其処には名剣など聖剣までとは行かずともいずれ劣らぬ剣が浮かび上がる

「抵抗はするな、運が避ければ即死することは無い。後でマスターに癒して貰えばいいだろう」

そして放たれる剣郡、それに身構えるセイバーだったが、あるところか士郎は前に出、それを双剣をもって打ち落としていくが数と練度が違うのでたちまち双剣は砕け、それを再び現す士郎の図が出来上がり、その時ひときわ大きい剣が向かっていく

「ふ、ぎ、けんじゃ……ねええええ！」

士郎が叫びながら剣と拮抗した時、大爆発が起きると其処には凜を抱えていたアーチャーの姿があった

「郊外のあの城で待っていてやろう、そしてオレに殺されに来い」

そついうとアーチャーは凜を連れてその場を去っていった

「待て、テメエ！・・・ガッ！」

なおも追うとした士郎だったが、いつの間にやらいた恋が士郎の頭を槍で殴り気絶させていた

「まず、休憩」

槍を肩に担ぎながら必要なことだけを言つ恋に流石のセイバーも呆気にとられてしまった

「まあ、まずは士郎を家に連れて帰ってから考えようよ」

これこそ本当にいつの間にもやらいた七星が提案し、この日は士郎は引きずられながらも家に帰って行ったのである

+

+

+

「さて」と

青年が立ち上がる

「行くのか？」

「ああ、世話になったな」

「何かまわんさ、アレを見せてもらえただけでも私としては儲けモノだ」

「そうか・・・おい」

青年が彼女の名前を呼ぶと

「行くの?」

「ああ、体はどうだ?」

「うん、なんかすごぶる調子がいいかんじかな?」

「そうか、では行くとするか」

そうして青年と少女はある者達の元へと向かうのであった

第八夜 浮かび上がるそれぞれの思い 修正（後書き）

レティ「さて、短くならんかった」

トール「ムリでしょ。」

レティ「うん、だったら次はどれだけ長くなるか考えたくすらないな」

リース「いえ、それなら前後に切っても」

レティ「いやあ、あのシーンってかこのルートであそこの場面切るとかないわ」

アスカ「じゃあ、がんばってね」

レティ「あいあい」

トール「では感想ありがとうございました」

アスカ「ばいばい」

第九夜 正義の味方と遅い奴 (前書き)

映画とゲームをゴッちゃんにして書いてます

理由はこのシーン本当に長い

## 第九夜 正義の味方と遅い奴

「来たか。ずいぶん遅い到着だな、衛宮士郎」

アインツベルンの城の廃墟とした大広間に到着した士郎・セイバ  
ー・ランサー・恋・七星・すずか達6人に階段の上から冷たく冷え  
切った声が響き渡る

「やはり貴様達も来たのかイレギュラー」

「そだよ、まあ私だけ行かせてっってお願ひしたんだけど結局全員  
でね」

さめた目線で三人娘を睨むアーチャーに七星はいつもと変わらな  
い雰囲気で答える

「大丈夫だって、この前見たく邪魔はしないよ？」

「そうか・・・それは何よりだ」

そうして七星が退くと士郎は語りだす

「ようやく気づいた。あのペンダントが二つある筈が無い。アレは  
元々」

「そうだ。アレは命を救われたお前が生涯持ち続けた物。遠坂凜の  
父の形見だ」

士郎は自身が気づいた真実を紐解くように語りだすと、アーチャ

「も同じく語りだす

「英霊の召還には必ず触媒が必要になる。

お前がセイバーを召還したように、召還者と英霊には必ずつながりが必要となる」

アーチャーは真実を語っていく

「遠坂凜には、英霊を呼び出す為の触媒が無かった。

故に、彼女は呼び出したサーヴァントに何の縁もないと思いこんだ。

だが、偶然で呼び出されるサーヴァントなんていない。召還者と英霊には必ず物質的な縁が必要となる」

「」

士郎は何も語らない、それは自分の予想が当たっていることを意味している

「そう。召還者が持っていない場合それは英霊側が持っている場合のみだ」

「そうか、お前の真名は・・・英霊エミヤ!」

その言葉に何も返さずにいるアーチャー。それは当たりを意味していた

「アーチャー。遠坂はどうした」

「あの小娘なら城のどこかに放つてある。心配なら急ぐといい、お前が来るのが遅かったから間桐慎二にくれてやったところだ」



アーチャーが言った瞬間、士郎は頭に血が上ったように駆けだそうとしたが

「あー、焦るな坊主。あのお嬢ちゃんならオレが助け出してやる」

ランサーの突然の発言により士郎の熱が冷める

「マスターからの命令でな、俺の本当の目的はお嬢ちゃんを死なせない為に行動してただよ。まあ、思いのほか居心地がよくてな、自分でも驚いてるんだけどな」

そして、士郎はランサーに凜のことを頼むとランサーはあいよと軽い返事をして凜の救出に向かおうとしたとき

「セイバー何やってやがる、お前も行くんだろっが」

「・・・いえ、私はここに残ろうと思います」

「あ？お前の主は今ももうあの嬢ちゃんだろっが」

「それでも、私はこの戦いを見守らなければいけないと思うんです」

「　　そうかよ、好きにしな」

そして、ランサーは二回のテラスに飛び上がりそのまま向かっていく。アーチャーは攻撃をしない、もう凜には用がないという風にそして、士郎は前に踏み出していく。セイバーは動かさずその姿だけを見ているだけである

「手出しはせんか、それはありがたい。もし、セイバーが邪魔をすると言うならば、凜と契約を切った意味が無い」

セイバーの戸惑いの姿が現れる、それでもなお動かず告げた

「ええ、私は手出しをしません。何があるかと、貴方とシロウの戦いの邪魔をしません」

「それは結構。これで小僧を心置きなく殺せると言うものだ」

「はい。ですがアーチャー一つだけ答えて欲しい……なぜ貴方はシロウを殺そうというのですか」

「何故も何もないだろう。そいつがオレを認められないように、オレもそいつが認められないだけだ」

「そんな筈は無い……！貴方はシロウだ。エミヤシロウという人物の理想、英雄となった人物が貴方ではないのですか。なら、ならどうして自分殺しなんて真似を」

「なぜそう思う。未熟だった衛宮士郎と、エミヤと呼ばれ英雄となったオレとは別の存在だ。でなければ同時に存在が出来るわけがないだろう」

「それは貴方がサーヴァントになったからでしょう？時間軸にとらわれない守護者になったのなら、自身が生きていた時代に現れることもあると聞きます。」

貴方はシロウだ。シロウがずっと追い求めていた姿が貴方の姿のはずだ。なのに、どうして……」

その後のセイバーの声は声なき声となって消えていく。この場に  
いる全員はセイバーが何をいいたいのかは分かっている

それに答えず黙ってアーチャーは階段を降り始める。もしここで  
答えを出すものならば二人は争わずにいるだろう。

その姿を見て思わずセイバーは身を乗り出すが士郎が手で制す

「いいんだ、セイバー。いいから下がっていてくれ」

「ですが、シロウ・・・」

「気持ちは嬉しい。けど話しても無駄だ。初めからアイツは俺を殺  
すことだけが目的だったんだから」

セイバーは悔しげに唇を噛みながら下がる。

「何故、なぜなんです。守護者となった貴方がシロウを殺すなんて」

守護者、その言葉を聞いたアーチャーは止まり無表情のままセイバ  
ーを見て言った

「違うよ、セイバー。守護者は人間を守るものではない。アレはた  
だの掃除屋だ」

淡々と語るその言葉には憎悪と嘲笑が混ざっていた

「確かにオレは正義の味方とやらになった。だが、その果てに得た  
ものは後悔だけだった。残ったものは・・・死だけだったがな  
殺して、殺して、殺しつくして。己の理想を貫く為に多くの人間を  
殺して、その数千倍の人間を救ってきたがな」

まるで懺悔のように吐くその台詞にセイバーはもう何も言えなくなる

「一人の次は十人、十人の次は百人、百人の次は・・・そんなことを繰り返しているうちに悟ったよ、衛宮士郎じはんしんが描いていたのは理想郷だったのだと」

再び語る自身の人生、それはきっと誰よりも彼自身を追い詰めた結果の一つだったのだろう

「一を見捨て、九を救う、そんな男の成れの果てが英霊エミヤだ。そら、そんな男は今のうちに殺しておくべきだろう？」

アーチャーの言葉にセイバーは力ない言葉で再び反論した

「守ったはずの理想に裏切られ、道を見失っただけではないのですか。でなければ、こんな・・・自分殺しをして罪を償おうとはしないはずです」

その言葉にアーチャーは固まったかと思ったら突然

「ハ、ハハ、ハハハハハハ！」

大声を出して笑い出したのである。そして再び語る、アーチャーの守護者としての結末そして・・・

「これは唯の八つ当たりだ・・・ここで衛宮士郎を殺す。ただそれのためだけにいるだけだ」

そうして、アーチャーは広場へと降り立った。そして向き合っ、

士郎とシロウ

「お前、後悔しているのか？」

「当然だ、オレは・・・お前は守護者になるべきではなかった」

「そうか・・・なら俺達は別人だ！」

「なに？」

「俺は・・・俺は後悔などしない！」

だから俺はお前を認めない！」

お前が俺の理想だというのなら、俺がその間違った理想を俺自身の手で叩き潰す！」

そしてお互いが一撃を入れるに十分な距離となる

「分かっているようだな。俺と戦うと言うことは、俺と剣製を競い合うと言うことだと」

そしてアーチャーの手には双剣が現れる

「トレース、オン 投影、開始」

そして士郎の手にも同じ双剣が現れる

「オレの剣製に付いてくれるか。」

僅かでも制度を落とせば、それが貴様の死に際になるう。」

そしてその瞬間二人の戦いは始まったのである

十

十

十

「ぎゃあっ!」

場所を別にして凧がとらわれている所では、椅子に縛られている凧が慎二によって倒され、何かをされようとしてる所であった

「げぎゃっ!」

突然力エルが潰されたような声が聞こえたと思ったら、慎二がぶっ飛ばされそれを見た凧がいた

「ランサー!？」

「じっとしてな」

そうして、ランサーが凧を助けようとした時

「そこまでだ、ランサー」

そこに現れたのは、言峰綺礼である。そしてランサーや綺礼から語られる話に凧は驚愕していた

そして綺礼は凧を始末しろと命じるもこれを拒否するランサー、すると綺礼は令呪を使用し自害しろとつげるとランサーは自身の魔槍で心臓を穿ち力尽きたかと思われたが、凧に詰め寄っていた綺礼の心臓を貫いた

そして、今度こそ力尽きたのかランサーも完全に倒れたら慎二が狂ったように笑い出し、凧に詰め寄り頬を舐めるなど手を出せないことをいいことになにやらやるうとしていたが

「てめえが・・・触れていい女じゃねえ」

力尽きたと思われたランサーが再び起きだし慎二をぶちのめす。慎二は地面を這い蹲りながら逃げて行きランサーは凜を助けるとルーンを使い城に火を放ったのである

「さよならランサー・・・私貴方みたいな人好きよ」

それだけ言つと凜は振り返ることせず走り出していった  
ランサーは笑みを浮かべながら消えていった

十

十

十

場所を戻して士郎達の戦いはやはり士郎とシロウの差が如実に現れていた

「が・・・ぐっ」

士郎がアーチャーの攻撃を何とかかわしながらも戦っていた、しかし今の士郎は分からずシロウには分かっているソレのことを理解することは出来ないであろう

「くっそお」

士郎が双剣を繰り出し再び砕かれたその時、何故か士郎は床に手を突き一瞬止まってしまふ

体は剣で出来ている

ソレはきつと誰かの記憶

血潮は鉄で、心は硝子。

ソレがわかるのは恐らく士郎だけ

幾たびの戦場を越えて不敗。

ただ一度の敗走もなく、

ただ一度の理解もされない。

士郎は今アーチャーの記憶を見ていた

彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う。

そして、ソレを理解できるのは他ならぬ士郎自身

故に、生涯に意味はなく。

すると士郎はおもむろに起き上がりアーチャーが握っていた剣を  
投影しアーチャーに突撃をする

「貴様も見たか・・・ならばアレが何か分かるだろう？アレが衛宮  
士郎の末路だよ」

アーチャーは外套を翻し士郎を攻撃する、士郎の剣は無残にも壊  
れはてると次はこれだと言わんばかりに別の剣を出し攻撃する、そ  
して何度か同じことをした時士郎はついに倒れてしまった

「其処までだ・・・お前自身の理想のオレに勝てるわけがないだろ  
う」



アーチャーがソレを告げると士郎はふらふらと起き上がると手には双剣を・・・干将・莫耶を投影していた

そして再び激突が始まる中アーチャーの言葉がつむがれる

「お前は本当に、正義の味方になりたいと思っっているのか？」

「なりたいんじゃない！絶対になるんだ！」

「そうだろう・・・な！なぜならソレは衛宮士郎おまえにとって唯一の感情だからだ。」

「なにを」

「お前は憧れただけだ！お前を助けた衛宮切嗣あのおじいの顔があまりにも幸せそうだったから。だから自分もそうなりたいたと、そう思ったただけだ！」

お前の理想は・・・唯の借り物だ！」

二人は激しい剣戟で戦いながら己の生き方を問いあっていた

「違う！」

「これには、誰かの為にならなければならないと強迫観念に突き動かされてきた。それが破綻してるとも限らず、ただ走り続けた。

誰もが公覆であって欲しい願いなど御伽噺だ！

そんな夢を抱いてしか生きられないなら・・・理想を抱いたまま溺死しろ！」

アーチャーの攻撃を受け数歩下がり、今にも碎けそうな双剣を杖

に体を立てている土郎

「……体は」

その言葉はエミヤに許され、今の土郎は知らないはずの呪文

体は 剣で できている。

「I am the bone of my sword」

「貴様、まだ」

土郎は顔をあげ呪文を呟き、そして驚くアーチャー

「そうか……彼女の鞘」

なにを言っているのかその場で分かるのはアーチャー。土郎はそれには構わず

「お前には負けない。誰かに負けるのはいい。けど……自分には負けられない！」

すると土郎は双剣を抜き放ちアーチャーに突撃をする

先ほどまでとは打って変わり、まるで攻守が変わったように攻撃が繰り出される。アーチャーも受けに回れないと判断したのか土郎を確実に殺そうと首をねらう攻撃も弾き返される

「……」

忌々しげに呟くアーチャー

「・・・じゃない」

士郎はなにかを呟きながら攻撃をしている。既に意識が残ってるのかも怪しい状態だ。されど彼は攻撃をする手を止めない

「・・・なんか、じゃない！」

「・・・きれい」

ぼつりと今まで黙っていた恋が呟いた、彼女もまたかつては呂布奉先として戦場に立ち家族をそして仲間の為に戦ってきた英雄の一人セイバーともアーチャーとも違う人生だがまた彼女も英雄と呼ぶ為の人生を送ってきた。その彼女が士郎の戦いを見てきれいと言った。セイバーもまた分かるのか静かに頷く

「・・・なんか、じゃない！」

「チツ」

思わずアーチャーからの舌打ちが聞こえる、既に士郎は満身創痍であり剣を振っているのも可笑しい状態だ

しかし、その状態からはまるで己の生きること示しているようである 正義の味方になる と

「叶わぬと知って、なおも挑み続けるその愚かさ」

「・・・間違い、じゃない！」

そして繰り出される一撃に士郎の剣が重なり、アーチャーの剣が碎ける。アーチャーは双剣を再び投影し士郎とぶつかり合う

「ソレが、オレの過ちだったはず」

「・・・決して、間違いなんかじゃないんだよ！」

そして、士郎はアーチャーの剣を弾き飛ばし突進する。本来ならば士郎のその突進を避けられるか弾くことも出来たはずなのに、士郎の剣はアーチャーの胸を突き刺した

「  
」

アーチャーは何も言わず、そこに佇むだけ。そして士郎が口を開く

「・・・俺の勝ちだ、アーチャー」

「  
ああ。そして、私の敗北だ」

どこか、満足したように答えたアーチャーだった

「たとえこの先に何が待っていようとも、俺は後悔はしない！なにがあっても乗り越える！」

「ああ・・・そうだったな」

士郎が剣を抜くと二人の剣はまるで砂のようにさらさらと消えていった

そして戦いが終わり、士郎がへたり込むと此方へと走りよってくる音が聞こえた

「アーチャー！？あんたその怪我一体どうしたのよ!?!」

驚く凜の顔だがこの場にいる全員は気が抜けたような顔になった

「……全く、つくづく甘い。」

彼女がもう少しでも非常な人間ならば、私もかつての自分になど戻らなかったものを」

そうして、この戦いに終止符が打たれる。敗者は退場……その言葉通り、今のアーチャーはマスターがいない。傷を治す術を持ち合わせていないのである

すべてが終わると思ったその瞬間

「楽しませて貰ったぞ。贗作にせもの同士じつに下らない戦いだった」

その言葉が聞こえると同時に無数に降り注ぐ数多の剣や槍。アーチャーはいち早く察知したのか士郎を突き飛ばし前にでて庇おうとする

「な、おま」

士郎が何かを言う前に剣はすでに目と鼻の先に合ったときに、この誰でもない声が聞こえてきた

「そうか？俺としてはこれ以上の戦いは見たこと無いがな」

ギンギンギンギン

無数の剣を黄色の魔力で出来た槍みたいのが弾き飛ばす

「なっ!？」

驚きは誰のものか、誰しもが声が聞こえてきたであろうその場所を見るとそこには赤と黒の陣羽織を羽織った青年が黒い斧のようなものを隣に浮かせていたのである

「誰だ貴様は！王たる我の行いを邪魔する奴は」

「黙れや、慢心王。俺はお前には興味ないんだよ」

不遜と不遜、相成れない態度同士で言葉を交わす両者

「紅くん！」「お兄ちゃん！」「紅那岐」

三人娘から声上がる

「すまん、待たせちゃったようだ」

手を合わせてごめんと謝る青年

「貴様あ、我を無視するとはいい度胸だな」

するとギルガメツシュからの攻撃対象が士郎達から青年・・・紅那岐に変わり、数多の宝具が打ち出されるが

「はあ・・・トールスピア、ジエノサイドシフト」

それだけ言うと、隣にあった黒い斧のコアが光り紅那岐の後ろに莫大な魔力スフィアを作り出し打ち落としていく」

「なにいい！」

イラつきか、それとも驚きかギルガメツシユは声を荒げながら上げる  
「どうした慢心王？俺に届いてすらいないぞ？」

指を自分に向けて来いよと合図しながら挑発する

「貴様あああつ！」

ギルガメツシユは激昂してさらに怒涛に宝具を紅那岐に向けるが  
紅那岐はスフィアから発射される魔力槍でこれを打ち落とす

「はぁ・・・ん？」

つまらないとばかりに溜め息を吐いていた紅那岐が何かを悟ったらしく急に避け始めた

「フハハハハ！魔力が切れたか、ソレ踊れ！」

愉快そうに笑うギルガメツシユだったが紅那岐はそちらを全く見ておらず、アーチャーを見ていた

「・・・いい加減うぜえ！」

急に大声を出すとその迫力に全員（三人娘除く）が動きが止まると紅那岐は一瞬でアーチャーのそばに移動する

「おーおー。死に掛けてるな取り合えず復元ダ・カーボする世界つと」

「なっ！？」×三人娘意外

「取り合えず、傷は防いだから大人しくしとれ・・・オラア！」

アーチャーの傷を防いだあと一声かけた後、急に虚空に拳を放つと其処にはイリヤの心臓を抜き取った骸骨の仮面をつけた男がいた

「バカナ」

「・・・何故にブリーチ？」

心底わからんって顔で首をひねる紅那岐。紅那岐の目の前には虚化した黒崎一護見たいのがいた

「・・・ああ、真アサシンがハサンだけど、骸骨っぽい仮面ってことでそれ繋がりですか？」

「キサマモ転生者カ」

「あん？だつたらお前もか？何故にアサシンなんてクラスにいるんだ・・・もしかしてアレか？送られるのがランダムでそれで送られたら繋がりでそれになつたんだろ」

そう言つて笑い出した、仮面男はプルプルと震えながら紅那岐に襲い掛かってきたが

「なんかこの台詞言うの久々だが・・・遅いぞ」

襲ってきたはいいが、あまりの遅さで余裕を持ち後ろに回ると一本の剣を出して



「終わりだ」

一閃、それだけで仮面男を切り裂き男は消えて言った

「貴様あ、よくも我の駒を」

今まで黙っていたギルガメツシュが何かを言ってきたが、城の火がついにここまで回ってきてギルガメツシュは詰まらなさそうに舌打ちした後消えていった

「さて、色々話したいがこんな所にいたら死ぬのを待つだけだ。とりあえず帰ろうぜ?・・・ああ、アーチャーとりあえずお前も来い」

そうして紅那岐達は衛宮邸に帰っていったのである

第九夜 正義の味方と遅い奴 (後書き)

レティ「終了」

トール「やっとできてきたわねあの子」

リース「やっとですね」

アスカ「紅那岐兄様なんだかあの金髪の人と同じ感じがしたよ」

レティ「確かにwww」

トール「まあ、あの子ってああいう手合い嫌いだからわざと同じ感じに接したんでしょうね」

リース「主もまたアレですね」

アスカ「兄様、英雄になるの？」

レティ「ならんならんw」

トール「では、感想ありがとうございます」

リース「次回もお楽しみにしてください」

アスカ「ばいばい」

## 第十夜 説明会というなの

衛宮邸に到着した一同、土郎の傷も道中紅那岐が治し今は体が軽い状態である。そして紅那岐が挨拶を始めた

「改めて・・・俺の名前は赤羽 紅那岐。とりあえず、こいつらの保護者的な立場だ」

そう言つて今に座りながら隣にいるすずかや七星達を指しながら告げる

「で、なんであんたはあそこにいたのよ」

凜が代表して紅那岐に質問する。他の一同も凜に任せてるのか黙っている

「まあ、アレだヒーローは遅れて登場つてやつ？」

「ふざけてんのあんた！」

「ああ！」

きつぱりとふざけると言い切る紅那岐に凜はウガーと騒ぎ立てる。土郎達はそんな凜を窘めてるが紅那岐はケラケラと笑っていた

「何故だ？はやて並みにからかいやすいぞこいつ」

ぼそつと呟く紅那岐に突然天からの電波が

中の人つながりじゃね？ B Y作者

「なるほど！」

ポンと手を打つ紅那岐に誰もツツコミは無かった

「まあ凜をからかうのはこれくらいにして・・・なんだっけ？」

「あんたまだ！」

プルプルと震える凜、其処には万有引力を無視したように両髪のツインテール部分を逆立たせたアカイアクマがいた。その姿に引いている士郎達、紅那岐はケラケラと笑っているだけだったが・・・

「まあ、冗談はさておきな。帰ってきたのはいいけどそしたら魔力反応を感じたからな其処にいったらお前達が戦っていたってだけだ」

そう言つて茶をズズツとすする紅那岐

「はぁ・・・それで次に聞きたいんだけどあんたどうやってアーチャーや士郎の傷を治したのよ」

「ああ、俺はちよつち特殊な能力持っていてな自分含めて全ての人物を元に戻せる能力があるんだよ。」

だからアーチャーや士郎の元の状態に戻しただけだ。今回はたいした怪我じゃなかったからな、喜べ？俺が治してやるなんて稀だぞ」

そう言つて再び茶を啜る紅那岐に三人娘は苦笑いしかなかった

「あんたの力つて一体なによ！それにすずか達の力もあんたが来た

ら教えるって言ってたんだから教えなさいよ！」

凜は兎に角感情のままに紅那岐を問い詰めるが、紅那岐は何処吹く風で

「魔術師がなんでも知りたがるって問題じゃね？てか秘匿はどうしたよ」

どや顔で言う紅那岐にグヌヌと唸る凜に苦笑いする紅那岐

「そういえばお兄ちゃんなんで帰ってくるのがこんなに遅かったの？」

七星がそういえばって感じでたずねるとすすかと思もつんつんと頷く

「ああ最初の出来事は・・・こいつだ」

そして紅那岐は先ほどの仮面男を倒した一本の剣を出す

「うっ・・・」

「それは!？」

「その剣は・・・」

セイバーがその剣を見た瞬間引き攣り、アーチャーは驚き士郎はその剣をみて何かを感じるようであった

「セイバーは本能的にか、アーチャーは分かって士郎は・・・はあ、お前もきちんと解析してみろ」

「なによ！その剣がなんだっていうのよ！」

凜は分ならず、ぎゃあぎゃあ言いすずか達も同じ意見なのか頷いている

「分からのか凜、これは太陽剣グラムだ」

アーチャーが答えを言うと、凜が驚いた

「なっ！？グラムですって！何で神代の剣があんたが持つてるのよ」

太陽剣グラムそれはかつてシグルズが持ちし龍殺しの魔剣、セイバーが引き攣ったのはその身に宿る龍の血が拒否をしたのだろう

「まあ聞けって。実はなこの剣が俺を呼んでいたんだよ」

「そういえばお兄ちゃんって声が聞こえるって言って出て行ったんだっけ？」

「ああ、そんでな？まあ、その声に従って向かっていったら次元の歪みがあつてなそんで中に入っていったら巨大な木にこいつが刺さっていたんだよ」

そして紅那岐はグラムをしまう

「あれ？それだと紅くんって割りと速く帰ってこれたんじゃないの？」

「ああ、本当なら5月には帰ってこれただけだな？その後の事が

響くに響いて今に至るんだ」

やってらんねえって顔をしながら紅那岐は溜め息を吐く

「それで何があつたの？」

紅那岐のことなどお構いなしな恋の台詞に士郎達は驚くが、紅那岐達にとっては日常の為話し始める

Side End

紅那岐 Side

「この初めはあのクソ爺い・・・キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグが俺がグラムを見つけて通常空間に戻ったときに始まったんだよ」

「大師父!？」

凜が驚きの声を上げる、一同は何事かと怪訝な顔をするが俺は続ける

「そっぴゃ、遠坂の始祖に近い部分の奴があの爺の弟子なんかだつたな」

凜がどうしてしってるのよ!って言ってるが無視し

「まあ、それでな?でてきたら」お前面白いな、ワシとちよつと来い」って言つてきやがってさ」

「それでどうしたの?」

「それで、聖杯戦争が2月末ぐらいなのは分かっていたからな、ついでにいったらさなんか真祖が眠ってるんよ」

真祖という言葉にすずかが反応していたが頭を撫でながら続ける

「でだ、なんかこいつを襲ってきている連中いるから何とかしてくれって言われてさ」

「お兄ちゃんなら断るよねそれ？」

「ああ、だけどな？あろうことかその爺が宝石剣くれるって言うからやむなしに「宝石剣ですって！？」凜うっさい、質問は後で受けてやるから黙れ」

凜が再び割り込んできたので黙らせ続きを言う

「でだ、其処で殺人貴なんかともひと悶着ありながら守りきったら本当に爺がくれたんだよね」

殺人貴と言う言葉を聞いてアーチャーがピクリと反応するが無視し宝石剣を取り出す

「あ、お前ら解析するなよ？廃人街道まっしぐらになるから」

あいつ等がそんなことしたら本当に壊れるからな

「でだ、貰ったのをいいことに俺は気分がよくなって真祖を治しちまった」



ソレを聞いた一同は

「はあああああつ!？」×三人娘意外

と驚きの声を上げるが、うるせえ!と言いたいが、言わんとするのは分かるからな。てか俺も何故治してやったのか未だにわからんし

「治すってどうやって・・・」

さすがが質問してきたので答えるか

「復元ダ・カーボする世界使って、死ぬ前まで戻した」

「よく戻せたね」

呆れた顔で言う七星に

「使いすぎて、不可能が無くなったツポイ」

「いや、ぼいって」

「でだ、ソレを見た爺がさヒント寄越せって言ってきたのが遅くなつた原因だな」

「は?どういう意味よ」

凜がワケが分からんという顔をしているが

「最後まで聞けって、もちろん拒否したらあろう事かあんの爺が教

会には真祖が復活。協会には俺がグラムを手に入れて真名開放できるってことをリークして追われる羽目になった」

それだけ言うと一同は悟ったのか何も言わなくなった

「でだ、巻けることが多かったんだがあ爺が逃げた先に現れてそれぞれにリークしだしやがってな・・・」

思わず溜め息を吐いて残ってる茶を飲み続ける

「まあ、流石にすずか達のメールを見てそろそろやばいってことで帰ってきたのは実はイリヤが心臓を抜かれて無残にもその場に残された時なんだよ」

ソレを聞いた士郎達は顔を暗くした

「あれ？それならもっと早くに合流できたはずじゃ・・・」

すずかが気づいた事に、周りもそうだ！と顔を上げて見てくる

「まあ、そこで心臓を抜かれたイリヤをちよつとな・・・」

士郎達の後ろを見ると其処には悪戯顔のイリヤがいて俺の視線に気づいた一同はソレを追っていった

「イリヤ!?!」

「えっ、ウソ!?!」

「何で・・・」

など、みんな疑問をそれぞれに口に出していた

「お兄ちゃんまた会えたね」

イリヤが満面の笑みで士郎に抱きつく、まあ姉弟の再開だからねえ……知ってるのはイリヤと俺くらいだけど

「なんで……イリヤは確かにあいつに……」

思いつきり困惑している士郎にだが教えてやるか

「まあ、それでこのままじゃかわいそうだからとり合えず生き返らせられるかな？って試してみたんだよ」

「それで成功したっていうの!？」

凜が声を荒げながら言う

「うんにゃ、ぶっちゃけムリだった」

「じゃあどうやって……」

「まあ聞けって、そんでな？とり合えず魂があるか見てみたらまだあったからとり合えず苦しいだろうが死に掛ける体に固着したあとと死なないように固定して、後は人形師のところまでもって言って代わりの体を作ってから固定したのがそいつ」

そう言っ指を指す

「もう！ホント辛かったんだからね！ずっと死に掛けているんだよ！」

ブーと頬を膨らませながら文句を言うイリヤ

「怒るなよ、結果的には生き返ってかつ成長できるんだ。礼こそ言われて文句を受ける筋合いはねえ」

「それはそうだけど・・・」

「人形師ってまさか・・・」

凜が何か思い立ったのか尋ねてくる

「おう、あの封印指定の奴だ。まあその時にちよつちあつたがぶつちやけソレは爺のアレに比べればどうって事ないからな」

金と時間さえあれば可能だがムリだといわれたので仕方なしに宝石剣つかって次元切り裂いて別荘持ってきたんだよね・・・まあその後寄越せ言つたが提示した金額みて諦めてたが

「まあイリヤを治して貰ってそんで向かったらあの場面だったってわけだお分かり？」

そして一同を見ると

「・・・この規格外が！」「・・・」

と士郎達が声をそろえて言ったのである

「サンキュ、その言葉は何よりの褒め言葉だ」

俺に規格外は褒め言葉以外の何者でもないな

「少しよろしいですか？」

そんな時セイバーがたずねてきた

「あん？どうしたアルトリア」

その言葉にアルトリアってかセイバーは固まった、いけね思わず真名のほうで言っちゃまった

「貴方は・・・私の正体をしっているんですね」

「まあ、俺の魔剣と対をなすものを持つてるからなお前」

「そういえば、グラムは魔剣の代表格でしたね」

「ああ、で聞きたいことって？」

「そうでした。貴方は先ほど慢心王とアーチャー・・・前回のアーチャーの事を言っていました、彼の正体を知っているんですか？」

「あり？気づいてないのセイバーだけ？」

周りを見るとうんと頷くのであった

「まあいつか、あいつは英雄王・ギルガメッシュさ。だから数々の宝具の原点を持っているんだ」

それを聞いたセイバーは納得したのか大人しく引き下がった

「さてと、俺達の正体を明かしたいところだけどまずはやる事をやんなきゃいけないからな・・・イリヤくあいつが次にやりそうなことを教えてくれ」

「しょうがないわね・・・貴方には死んでも返しきれない貸しがあるからやるけど」

そう言つてイリヤは聖杯の説明をしてくれるんで、俺はそれに続き足した説明をした

「まさか聖杯がそんなものだったなんて・・・」

一番ショックを受けているのはセイバーであつた

「まあ、後はお前しだいだがな。さてと、凜！」

「な、なによ！」

急に呼ばれ驚く凜

「アーチャーを何とかしたいんだが、ぶっちゃけお前じゃムリだろ？二体も英霊したがるのは」

「うっ・・・」

そこで渋い顔をするってことはムリか

「しゃーねえなあ・・・アーチャー言い忘れてたんだが、最後の戦いは士郎とやってもらうぞ?」

「なっ!?! 一体どういうことだ!?!」

「ああ、あの慢心王の武器庫な色々と能力が高くてこのままじゃ士郎だけ、お前だけ戦っても負けるのは必須だから二人して勝て。俺がやっていいならやるが・・・お前から俺に最後のトリ奪われていいのか?」

にやりと笑って問いかけると二人はグツと声出した後渋々了承したんだが

「しかし私は・・・」

「んで、七星」

「な〜に〜」

渋ってるアーチャーを何とかしようとして七星に話しかけたんだが・・・こいつ、話に飽きやがって大福なんて食ってやがった

「とり合えずお前は後でお仕置きな? でだ、お前アーチャーと契約しろ」

「うっそ!?! てか、いいよ〜」

絶望した顔をした後あっさり了承したんでいいだろ

「ああ、答えは聞いてない! んじゃ、お前らはとり合えずあっち行

「とき」

「シッシと手を振って二人を今の外に追いやる。似てるからいける  
だろ？似てるって何がって？あいつらはどちらも意味でかりそ  
めって事。説明するのは後だ後」

「でだ凜」

「まだあるのかしら？」

「ああ、お前士郎とパスつないでくれ」

「なっ！？」／／／

「どうしたんだ遠坂？」

「士郎が分からず凜に聞く、凜は恥ずかしがってうっさいバカとか言  
ってるしおもしれえw」

「まあこれ後は明日に備えて寝るだけだ」

「そう言うてでようとした時思い出した」

「ああ、セイバーお前見学ね？」

「へっ？」

「お前が力を使うと自分と凜の魔力を使うだろ？正直あの慢心王昔  
よりはるかに強いからな、お前が無駄に魔力を使うと勝てるものも  
勝てなくなるからな・・・つまりはお荷物？」



「・・・」orz

「セ、セイバー!？」

「フ、フフフ今まで私が戦いで役立たずになったことすらなかったのに、まさか英霊になって役立たずになるなんて」

ぶつぶつというセイバーがなんか黒くなってきてるんだが・・・頭の触覚が微妙に消えかかっているし、え?まさかここに来てオルタ化?

そのあと、士郎ががんばって励ましてオルタ化を防いでいたけど・・・士郎よくやったお前は英雄だw

「んじゃ、改めてお休み〜」

そうして俺らは今を出てあてがわれた部屋で寝るのであった  
予断だが士郎と凜はきちんとヤツていたようだ。因みにセイバーは察知したらしく顔を赤らめていた

Side End

+

+

+

七星 Side

「それにしても、あんたがあのお士郎とはね〜変われば変わるものだね」

お兄ちゃんに追い出されて仕方なしで屋根の上で話す私とアーチャー

「私からすれば、あいつが戦えばことがすむのではないか？」

「さつきも言っていたけど、美味しいところとられて良いならやらないけど？」

事実だけを言うと、プライドなのかそれとも・・・まあやる気になったんで私はアーチャーと契約すると右手に令呪がでた

「まあ、とり合えずよろしくねシロウ」

そして私は右手を差し出す

「出来れば、アーチャーと呼んでくれ」

嫌そうな顔で言った後私の手を握ってくるアーチャー

Side End

十

十

十

時をさかのぼり紅那岐達が城から離れている頃

「くそ、くそ！誰も彼も僕を馬鹿にして！」

汚い言葉を吐きながら森を駆けている慎二

「ここにいたか」

そして其処に現れるギルガメッシュ

「き、貴様！何で呼んだのに来なかったんだよ！僕のサーヴァントだろ！」

そついう慎二だったがギルガメッシュは無視しイリヤの心臓を取り出す

「な、何する気なんだよ！」

慎二は後ずさつて聞くがギルガメッシュは

「聖杯が欲しいんだろ？ほらくれてやる！」

すると慎二に心臓を押し付けるとするとまるで肉が膨張していくように聖杯の泥が膨れ上がっていく

「ははははは！欲しかった聖杯だろう。しっかりとばなすんじゃないぞ！」

するとギルガメッシュは天の鎖で聖杯を拘束し柳洞寺に向かうのであった

第十夜 説明会というなの (後書き)

レティ「まさか、説明書くのにここまで尺が長くなるとは思わなかったw」

トール「てか、どうして真祖助けるとかイリヤを助けるなどやったの？」

レティ「え？私が好きだからw」

リース「まさか、それだけで主がでなかったなんて」

アスカ「人形師ってお人形つくってくれるの？私もほしー」

レティ「いや、あの人形師ってのはね・・・作ってくれれば良いね？」

トール「逃げたわね」

リース「逃げましたね」

レティ「其処黙れ！」

トール「蒼崎とはどこで知り合ったのよ」

レティ「あ、それは全部宝石翁繋がりで解決しね？」

トール「便利な言葉ねそれ」

リース「便利ですね」

アスカ「じゃあ感想ありがとうございます」

トール「まったね」

## 第十一夜 Unlimited Blade Works .

紅那岐 Side

「さて、全員作戦はりかいしたな？」

俺が、確認すると全員頷く

「まずは、士郎と凜と恋が危険かも知れないが階段からではなくて山道から進む。もしギルガメツシュに当たったら士郎はギルガメツシュに、凜と恋はワカメ救出してくれ」

士郎一人で慢心王と戦うのは危険すぎるが、固有結界を展開する上でまずは剣を貯めないと意味が無いからな、幾らアーチャーとやりあったからってまだまだたりんだろう

「俺達は普通に正面から行くから・・・では行くぞ！」

俺が掛け声をかけると全員返事をして俺達は向かう

十

十

十

「待っていたぞ、セイバー・・・又？他にもいるのか」

山門から階段を上ると其処には紫の衣を纏った奴がいた・・・

「アサシン！何故貴方がまだ限界しているんですか」

セイバーが驚きの声を上げるが

「そんなの簡単だろう？あいつはこの山門を依り代にして呼び出されたんだからな。まああと少いで消えそうだが」

いやあ、ミーミスフルン対兵器戦略思考って便利だよなあ。元々は敵の武器とか兵器を解析してどういう能力があるか調べられるってものだったんだけど、使い続けたら昇華して人間とかにも使えるようになったんだよね

「ほう、拙者のことを分かんとは面白い」

アサシンが言ってくるって

「おい、ポケ騎士王なに戦おうとしとるんじゃ」

「し、しかし私が指名されたんですよ」

「だ〜から、お前はお荷物になるから待つとれ言っただろうが」

お荷物って単語にorz状態になるやがる・・・メンドクセ

「さて、アサシン悪いがこの騎士王は戦うこと出来ないから代わりに俺が相手をしよう」

鳳桜を取り出して切っ先をアサシンに向ける

「ほう、現代に残された侍と言っわけか」

「そついうモノじゃないんだけど・・・」

それだけ言つと俺とアサシンは刃をぶつけ合う・・・一瞬で決めるか？

十

十

十

「また、その不出来な顔を見るとはな」

山道から到着した士郎達は目の前の聖杯に息を飲んでいると後ろから声がかかる

「チツ。まさかこつちから現れるなんて」

「まさか、山門には他の敵がいるのか!？」

驚いている士郎達だがギルガメッシュは気にも留めずに告げる

「案山子として徹するなら、特別に見逃してやるわ」

何処までも不遜、その態度に士郎達は当然拒否の意味も込めて

「遠坂、恋ここは任せて行ってくれ」

「分かったわ、今すぐあなたの聖杯を止めてやるわ!」

「行つて来る」

凜と恋が駆け出すとギルガメッシュは適当に2本の剣を二人に向けて放つ

「<sup>トレース</sup>投影、<sup>オン</sup>開始。はあっ!」



士郎が放たれた2本の剣を投影し打ち落とす

+

+

+

「くっ」

凜がガンドを打ちながら聖杯の繭を攻撃するが効果を出さないでいると

「・・・たあ」

恋のなんともいえない戟からの魔力波で聖杯に道を作る

「恋あんだ・・・それにそれ」

凜が驚いているが、恋は気にも留めずに穴の開いたところに向かう

「あ、ちよつと!」

凜が一生懸命追いかけてそして二人は慎二を救いに向かう

+

+

+

紅那岐 Side

「ハアッ!」

うっむ、アサシンの剣速はやいなあ・・・楽に裁けるけど

「秘剣・・・燕返し！」

アサシンが己が技術の結晶の燕返しを放ってきた  
なるほど、同時に3発の斬撃が確かにこれは必殺の攻撃かもしれ  
ないな・・・速度が視認できないならな

「オラッ！」

「「なっ!?!」」

アサシンとセイバーが驚いてるが何をしたって？3発放たれても  
狙われるのは俺一人だからな、交わる部分の斬撃の一点を弾いただ  
けだ

「ふむ、中々すごいぞ今のは？さてと・・・秘剣」

そして俺は先ほどやられた攻撃をそっくりそのまま真似るように  
構える、アサシンやセイバーが驚いてるがね

「燕返し！」

「・・・ふ、まさか自分の技で終わりになるうとはな」

「まあ、規格外に当たったんだ諦める」

「これも一興と言ったところか」

「じゃあな、アサシン・・・いや佐々木小次郎」

それだけ言つと俺達は再び階段を上り始めた

十

十

十

「ぐわ」

士郎はギルガメッシュからの攻撃を双剣で防いでいたが、遂には弾き飛ばされ転がる

「憑依経験、共感終了。ロールアウト 工程完了、バレットクリア 全投影待機！」

「ほう、目に見えるオレ私の宝具をすべて複製したか・・・では採点してやろう！」

ギルガメッシュが手を振ると同時に数多の宝具は士郎に向かって飛んでいく

「フリーズアウト 停止解凍・・・ソードバレルフルオープン 全投影連続層写！」

そしてぶつかり合う宝具と宝具だったが

「ぐあ」

士郎の宝具は次第に衰えていき遂には打ち負けてしまった

「これならばアーチャーが来たほうが良かったですぞ、奴も偽者だったがその理念だけは俗物ではなかった。

奴も言っていたな、お前の理念は借り物だと」

上から告げるギルガメッシュだが士郎はふっと笑うと

「そうか、そうだったな。夢の果てにあるのは偽者だと、けどあいつはその夢を貫き通したんだった」

顔をあげながら言う士郎

「そうだ、だからこそ私はその尊さに涙し憧れたのだ」

そこに現れるは紅那岐達一行。士郎とアーチャーは続ける

「それはいけない事なのか？借り物の理想でも最後まで貫き通せば」

声が重なる、己の夢の果てにあるものが譲れないから

「それは！」「」

「ふん、つまらん。消えろ！」「」

ギルガメッシュから数多の宝具が打ち出されが

「ほいほい、打ち落とすよ」

七星が急に槍銃を取り出し打ち落とす

「こんの愚昧！勝手にしゃしゃり出るな！」

「いったゝ・・・ぶったね！お＼いねえだろうが！しかも俺にしようちゆうちやられてるだろうが！」最後まで言わせてよ

何処までもシリアスブレイカーな七星に紅那岐は

「まったく、良いからお前は凜の援護に向かえ。こいつは士郎とシロウで十分だ」

「ぶー……」

ふくれっ面をしながらも凜達の援護に向かう七星である

「さて、後は頼んだぞ士郎、シロウ？」

二人を見ると静かに頷き、紅那岐とセイバーとすずかは下がった

「勘違いしていた……俺の剣製つてのは剣を作ることじゃなかったんだ」

「漸く理解したか」

アーチャーは隣で頷く

「ああ、俺の剣製つてのは自分の心を形にすることだったんだ！」

「では行くぞ！衛宮士郎」

そして二人は腕を前に突き出す

「I am the bone of my sword  
（体は剣で出来ている）」

「下らぬ」

そしてギルガメッシュから再び攻撃が繰り出されるが

「なに！？」

士郎とシロウの二人のアイアスの盾によって防がれる

「Steel is my body, and fire is my blood. (血潮は鉄で 心は硝子)」

無数の宝具が二人に向かっていくがアイアスがことごとく弾き返す

「I have created over a thousand blades. (幾たびの戦場を越えて不敗。)」

ここまでは同じだったが二人の有様が変わり、詠唱も異なってくる

「Unaware of loss. Nor aware of gain (ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし。)」  
「Unknown to Death. Nor known to Life. (ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない。)」

そう、二人が作るのは

「Withstood pain to create weapons. waiting for one's arrival (担い手はここに孤り。剣の丘で鉄を鍛つ)」

「Have withstood pain to create many weapons. (彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔つ。)」

無限に剣を内包する世界

「I have no regrets. This is the only path (ならば、我が生涯に意味は不要ず)」「  
Yet, those hands will never hold anything. (故に、生涯に意味はなく。)」

その名も

「My whole life was “unlimited blade works” (この体は、無限の剣で出来ていた)」「  
So as I pray, “unlimited blade works.” (その体は、きつと剣で出来ていた。)」

そして展開された固有結界、エミヤシロウがたどり着いた一つの答えと衛宮士郎がたどり着くであろうもう一つの答え。

その名もアンリミテッド・ブレイドワークス。その世界は特殊で歯車が浮いているかと思っただら今度は赤い荒野が広がるなどまるで二つが融合したようだけれど、この世界はたった一つの一度だけの奇跡の世界

「固有結界だとお」

「そう、ここにあるのは貴様がいう取るに足らない偽者だ」

「だがな、偽者が本物に敵わないと誰が決めた!」

士郎は近くにあった剣を抜き取り、アーチャーは周りの剣を空中に停止させる

「「いくぞ英雄王！武器の貯蔵は十分か！」」

「舐めるな雑種！」

そして士郎は走り出しギルガメツシュに突撃し、アーチャーは剣郡を打ち出す。ギルガメツシュもまた財宝から剣を抜き取り士郎を迎撃しながら打ち落とそうとする

十

十

十

場所は変わり聖杯の繭にて今凜と恋は慎二を助け出し出口付近まで来ていたが凜が辛そうである

「大丈夫？」

恋が慎二を脇に抱えながら尋ねる（もとより抱きかかえるやおんぶと言う選択肢はない）

「ええ、本当に魔力のほとんどを持って行くんだから」

辛くもどこか誇らしげに語る凜に恋は笑みを浮かべながら出口にたどり着いたが

「そんな、ここに来て」

先ほど開けた穴だったが繭が弾け泥があふれており通りぬけられないでいた

「恋？凜？ちと下がってね。吹き飛ばすよ」



上から声が聞こえたと思ったら七星が空を飛び七つの大罪を出し  
攻撃態勢をとっていたので二人は何とか下がると七星は入り口付近  
を吹き飛ばした

「セイバーは？」

凜が出口を抜けた後聞くと

「ああ、見学してるよ」

「それじゃ、どうやってこれを吹き飛ばすのよ！」

「大丈夫だって、恋？お兄ちゃんが本気出して良いって」

「分かった」ベチャ

本気を出していいと言われた恋はその場に慎二を落とすと徐に戟  
を取り出すと形体が変化する。七星も七つの大罪をしまい槍銃を取  
り出す

「恋の方天画戟みるの久々だね」

「一番しつくり来る」

恋は砲の形態（弓）にすると力を為だす

「私も負けないよ？ルーネCEカートリッジロード」  
《久々に登場！カオス・エクスプロージョンロード》

「方天画戟！？それに今の声は一体！？」

混乱している凜を放置し恋と七星は攻撃をする

「征く……軍神アーマー」

「これで終わりだよ！カオス」

そして解き放たれる一撃は繭を吹き飛ばす

「フォース  
五兵！」

「ブレイバー！」

そして其処には何も無くなった水面があるだけであった

「さ、お兄ちゃん達の所に行こう」

「うん」ひよい

「……あ、待って！」

そして恋は慎二を再び脇に抱え、七星はそれに続き凜は一瞬呆けていた後後を追った

十

十

十

「はあはあ……」

「くっ、いつまでもこのままではジリ貧か」

「そらそらどうした！」

ギルガメツシユに2対1という数的有利なはずだったが押されだしている2人。理由は単純に転生者特典の有名税だった

「くだらん、ん？繭が消えただと！」

急に慌てだすギルガメツシユに一同は何事かと思っていると紅那岐が突然喋りだす

「恋と七星から連絡があつた。今さっき繭を無事に消し飛ばしたよ  
うだ・・・士郎！シロウ！貴様らはいつまでだらけてるつもりだ！  
やらんなら俺が終わらせるぞ！」

事実を告げた後、紅那岐は士郎達を激するそれを聞いた二人は

「やらせるかよ！俺が終わらせるんだこんな下らない戦いは！」

「フ、私についてこれるか小僧？」

「テメエが俺について来い！」

すると士郎とシロウは先ほどまでの劣勢がウソのよつにぐんぐんとギルガメツシユを押し出した

「「「うおおおおおっ！」「」

「調子に乗るな、屑が！」



投影品に剣が砕かれたのが余程我慢ならないのか更に怒涛に攻撃するが士郎は互角の力でそれに対応する

そして何度かきりあつた時に互いの武器は碎け散る

「クソ！」

するとギルガメツシュは財宝の中から一本の剣を取り出そうとする

「「させるかあ！！」」

士郎とシロウはお互いの象徴となろう干将・莫耶を取り出し突撃しギルガメツシュの腕を切り払う

ギルガメツシュが後退しながら剣を取ろうと下がるがその時に異変が起きた

「なにい！？」

腕から穴が広がり世界もろともギルガメツシュは取り込まれていっつてしまった

「はあはあ・・・」

士郎は疲れたのかその場へたり込み息をつくと

「くっ！」

消えたと思つた穴がまだ消えておらず其処から鎖がでてきて士郎を捕らえる

「く、同じサーヴァントを核にしてもどうにも出来ないとわからぬか！」

何かを叫びながら言うギルガメッシュに引っ張られる士郎

「小僧、放すなよ。こうなったら貴様も取り込んで核にしてくれる」

そう言うて士郎を引っ張るギルガメッシュ

「くっそ、諦めてたまるかあ！」

「右に避ける」

聞こえた言葉にとっさに士郎が避けるとギルガメッシュの額に剣が突き刺さる

「貴様、まだ・・・」

それだけ言うと鎖の拘束は解けギルガメッシュは今度こそ消えていく

十

十

十

一同が無事終わりつかれたといった表情でいたときに、突然アーチヤーが消え始めた

「ウソ！？契約してるのになんで!？」

「実はね、シロウからの頼みなんだ・・・」

理由を説明するのは七星

「そんな、それじゃいつまで経っても貴方が・・・」

凜が悲しそうな顔で詰め寄る

「なあアーチャーもし世界との契約が切れるならお前は望むか？」

凜の後ろから紅那岐が尋ねる

「ムリだな、既に契約は完了しているのだ、今更それを望むのはおこがましい」

「いや、とりあえず答えろ、エミヤシロウ」

普段のちゃらけた様子とは変わり紅那岐が真剣に問う

「・・・いや、既に答えを得た。私はこのままでいい」

紅那岐の態度に改めて考えたアーチャーだったが答えは得た、それで十分と悟っており紅那岐に答えると紅那岐も「そうか」といつて下がった

「凜、私を頼んだよ。知つてのとおり頼りない奴だからな」

「アーチャー・・・うん、分かっている。私がんばるから、あいつが自分を好きになるように、頑張るから！・・・だから貴方も」

「ああ、答えは得た・・・大丈夫だよ遠坂、オレもこれから頑張っていくから」

そういうとアーチャーの顔は今の士郎を大人の顔にしたような顔で笑顔で消えていった

十

十

十

アーチャーが帰ってから少し経った後

「さて、次は私ですね」

そう言って立つセイバー

「まって！貴女はそれでいいの？」

先ほど別れを経験している凜が聞く

「仕方ないでしょう。私もサーヴァント、聖杯がない以上現界している必要はありません」

そう言って士郎の元に行こうとするセイバーだったが

「それなんだがどうやら未だ聖杯はあるようだ」

急に言い出す紅那岐に驚く一同

「それは一体・・・？」

当然何故だか理由が分からずに問うセイバーに

「俺より詳しい奴に聞くさ・・・なあ？ライダー」



紅那岐はそうして林の中の一点をみて問いかけた

第十一夜 Unlimited Blade Works・(後書き)

レティ「ふひい・・・ULBルートは終了！続いてはある意味原作  
だけオリジナルルートです」

リース「今回はあまりネタが無いのでこの辺で」

トール「では感想ありがとうございました」

アスカ「ばいばい」

## 閑話休題と言う名の繋ぎ

紅那岐「おい、作者」

レティ「はい？」

紅那岐「いや、はい？じゃ無くてなんでこんな中途半端に閑話休題なんて入れるんだ？」

レティ「……が……えた」

紅那岐「は？」

レティ「セーブデータが消えた」

紅那岐「どうして？」

レティ「わかんねえ、さっきPSS3(60GB)を起動したら何故か消えていた」

紅那岐「はあ」

レティ「んで、webで調べても原因わかんなかったから仕方なしにPC版の方をやるうと思ったら今度はソフトが無いからバックアップ探しても無くて友人に聞いたら貸してたって事だったから明日の仕事が終わり次第やるからそれまでのつなぎ」

紅那岐「ふむ」

レティ「本当はコラボが書き終わってるからそれをやるかと考えていたんだけど、それってお前が型月の世界から帰ってきてからの話になってるから掲載できないのよ」

紅那岐「んじゃ、なにするんだ？」

レティ「書くかどうか悩んでいた、hollowの話でも書くようになった」

紅那岐「それって、終わってからの話だけど大丈夫なのか？」

レティ「戦闘描写なんてほとんど書かなくてギャグ？パートのみだから」

紅那岐「というわけで、スイマセンが作者が原作をプレイし終わるまでは少しの間お待ちください」

レティ「ついでにセイバールートを少ししっかりやらなきゃならないのでどれくらい空くか不明ですのでご了承ください」

紅那岐「では、どうぞ〜」

レティ「あ、因みに順番はめちゃくちゃで思いついたのから書いていきます」

+

+

+

【どっして、ああなった!?!】

士郎 Side

家から出て歩いていると紅那岐と金髪の少年が話していた

「オラ、とつとと寄越せ」

「貴方、僕の事よくああいえますね」

なんか、言い争ってるみたいだから言ってみるか

「おい、紅那岐。なに子供を虐めてるんだよ」

「子供を虐める？ありえないぞ俺には」

そうなんだよな、こいつ子供には基本的に甘いんだよ。からかったりはするけど虐めるなんてありえないからこいつの行動が分からない

「あ、お兄さんこんにちは」

「あ、ああ。こんにちは」

金髪の少年がにぱつとした笑顔で挨拶してきたから、つられて挨拶をしてしまったけど誰だ？

「えっと、すまん。どこかであつた事・・・あるよな？」

「あれ、覚えてませんか？」

「いや、普通は分かんたろ？」

「でも、貴方は分かりましょね？」

紅那岐は分かるらしいが、本当に誰だ？

「お兄さん鈍そうですからね。それにあったときは服装違いましたし」

「こいつの鈍さを取ったら、後は何が残るんだ」

「紅那岐お前は本人を前にしてよく言えるな」

「陰口じゃないだけいいだろう？」

しれっと言うこいつだが、マジでこの子誰だろう？

「まあ、あの人の事は僕にとっては他人事なんですよね。同じけどそうじゃないって感じで」

同じけど違う？何かの問題なのか

「仕方ないですね、ヒントを上げます。僕お兄さんの一番嫌いな人ですよ」

お兄さんには少ないでしょ？って言うてくる金髪君。俺の嫌いな人は確かにいないな、苦手な人は多いけど・・・そんな事を考えていたらふつとある人物が浮かんできた

「あ、いやでも・・・あいつに弟とかいたのか？」

「僕には肉親はいませんか？伴侶とかは憧れますが・・・ああ、安

心してください。セイバーさんはまだ趣味じゃないですから・・・でも今負けたら案外ころっついていくかも知れないですけど」

そこで俺の思考は止まった

「漸く気づいたのか？」

ナニカキコエルケドワカラナイ

「それにしても貴方はなんで一発で分かるんですか？」

「あ？俺は内面まで見れるからなそれでだ。前にアサシンの状態とかも分かったのがそれだな」

「なるほど」

ア、アリエナイ。コンナジュンシムクナコガ、アンナニナルナ  
ンテ

「お兄さん分かりやすい表情をするなあ・・・まあ、他の人の反応を見ても同じだったんで仕方ないですけどね。どうしてみんなに嫌われることをするんだろっ」

だんだんと落ち着いてきた思考にとりあえず安堵しながら質問をしよう

「しかし、どうやってそんな子供に」

「ああ、今の状況が『見戯に等しい』とか言って若返りの薬を飲んでからですよ」

そう言って説明してくれる子ギル（命名紅那岐）

「それで、何で紅那岐に絡まれてるんだ」

「そうだった！聞いてくださいよお兄さん。この人よりもよってその薬を寄越せって言うてくるんですよ？」

「全部寄越せとは言うてなんだから別に良いだろうが？」

「いや、それでも僕の財宝を寄越せとかって……」

「紅那岐、幾らあいつが俺達に苦勞と心勞と苦痛とござったらさとかを蒙ったからって流石にダメだろ？」

「お兄さんも言いすぎじゃ？」

いけね、子ギルが落ち込んでいる

「半分くらい貰えば後はさすが複製できるからな、だから別にかまわんだろっ？」

「さすがってそんな事ができるのか？（コラボにより頭脳がチートどころじゃありません）」

「断固拒否します！」

子ギルがきつぱりと断る……根っこの部分はやつぱりあいつだな

「そうか……しょうがない最後の手段を使うか」



紅那岐が何かを言うと徐に携帯を取り出して電話をしだした

「あのお兄さん、僕凄く嫌な予感がしてるんですが何をしてるんですか？」

子ギルが滝のような汗を流しながら紅那岐に聞くと紅那岐は意地が悪いような笑みを浮かべて

「嫌なに、俺の友人でな毎日祈りを捧げている少女が・・・あいつ信仰心あったかな？まあいいや、その友人に連絡を取ろうと思ってな」

「待つてください！何で貴方はあの人の事を・・・それより！何で電話番号知ってるんですか！？」

子ギルが凄く慌ててるけど、祈りを捧げている少女？

「え？メル友兼友人だからだが？」

「貴方、めっちゃくちゃ黒いですね！」

「褒め言葉どうも。さてと・・・」

「スイマセン！渡しますので勘弁してください！」

子ギルが土下座をしてまで止めてる・・・ってあいつが土下座！？

「分かればよろしい」

そう言ってあいつが子ギルから薬を貰っていた

「そんなの何に使うんだ？」

「気にすんな」

「気になるけどいいや、それよりその友人って・・・」

「お兄さんは気にしなくて大丈夫です！てか、そろそろ行ったほうが良いんじゃないですか！？」

子ギルが言う通り時間が時間だから行くか

「あ、ああ。それじゃ」

そう言って俺は二人と別れた

End

【楽園は破滅へと】

ここまでの流れを説明する

「フハハハハ！フィーツシュ！」

これでおk？

では、本編をどうぞ

「雑種どもが我に楯突こうなど未来永劫愚かしいことだ！」

白いジャケットを羽織ったギルがランサー（アロハ）とアーチャ―（釣師）に喚いていた

「く、貴様よもや金にかまけてそんなものまで！」

それは　　まあ、ご都合主義で凄いやつとおもってください  
金を使い買ってきた竿やリールで圧倒していた時だった

「さすが慢心王だな」

「ぬ！貴様まで我に楯突くか！」

何処からか小船でやってきたのは紅那岐その手には白い銚（とい  
うなの槍）を持っていた

「はっ！慢心王風情が何を言っている？その程度で満足してるから  
お前は慢心王なんだよ！」

そう言ってくるくと手に持っている白い銚（槍）をいじくって  
いる

「なにい！？」

「お前達見ておけこれが男の（漁師）実力だ！」

そういうと紅那岐は唐突に手に持っている銚（槍）を逆手に持つ。  
（ランサーの死翔の持ち方）

「大神……宣言！」

そして海中に向かって投げる紅那岐

「……って！ちょっと待てやコラッ！！」「」「」

三人から同時にツッコミが入るが紅那岐は無視し唐突に紐を引っ張るような動作をすると

「すげー！ーっ！」「」

「かつこいいー！ーっ！！」「」

などの子供達からの歓声があがる

「ふっ……本マグロ獲ったどおおおおおっ！！」「」

キャラ崩壊など気にせず言う紅那岐に周りの子供達はギルを無視し紅那岐に駆け寄る

「スゲー！！兄ちゃんこんなところでマグロなんて取れるのか！！」「」

「おっきー！ー！」「」

などなど、兎に角紅那岐の近くに行こうとする子供達

「ふっ……規格外に不可能は無い」「」

決めている紅那岐に三人が詰め寄った

「貴様！よもや宝具を使うとは恥を知れ！」「」

「いや、お前も無駄に投影しとるうが」

アーチャーが言うことに正論で返す紅那岐

「てめえ！何でそんなものを持ってやがるんだよ！・・・はっ、そうか俺も使えば」

「いやいや、お前のは心臓貫いて戻ってくるだろ？」

結果だけを言う紅那岐

「雑種風情が、まさか神代の宝具をそんな瑣末なことで使うのを許されると思ってるのか！」

「お前が一番の正論言ってるだろうが、やっているのは同じようなもんだらうが」

黄金律をフルに使って高いものばかりを集めているギルに反論する

「お前ら喜べそれぞれ、トロ・中トロ・大トロ・骨の周りを上げるからそれを持って帰れ！」

「「「「わーい！」「」」」」

子供達が大はしゃぎの後もう一回見たいというから紅那岐は再び<sup>グングニル</sup>大神宣言を使い本マグロを獲り、その後お世話になった人にも送ろうと考え都合3匹ほど獲ってから帰ったのである



閑話休題と言う名の繋ぎ（後書き）

レティ「言うわけで当分の間h o o l o w番外編をお楽しみください」

トール「ちょっと待ちなさい」

レティ「何？」

トール「大神宣言があんな能力持つてるなんて知らないわよ!？」

レティ「ああ、あれって狙った相手に最後まで追尾して最後には手元に戻ってくるでしょ？」

トール「ええ」

レティ「だから上手く魔力を使って獲ったんだよ・・・まあ紅那岐が魔改造して刺したら抜けないようにしていたんだけどねww」

リース「無駄な努力を・・・」

レティ「あいつって、面白い事のためなら手間とは思わないからね  
www」

アスカ「さすが兄様！」

トール「ツツコムの疲れたわ・・・」

アスカ「・・・あ！因みにマグロは秋代様の貴史兄様に送るそうで

すー!!」

リース」では感想ありがとうございましたー!!」



閑話休題と言う名の繋ぎ2 (前書き)

先ほど漸くセイバールート終了。

PC版だから声がない分速く終わるw

明日あたりで普通に戻せると思います

## 閑話休題と言う名の繋ぎ2

【口は開けば死亡フラグ】

あらすじ・・・セイバーと士郎がデートにプールに来ており今は昼休憩を挟んでいる最中の時から始まります

「おろ？士郎もデートか」

「も？お前もか紅那岐」

突如として現れた紅那岐に普通に返す士郎

「まあな、七星がどうしても来たいと言って駄々をこねてね」

苦笑い気味に答える紅那岐

「そうか、それにしてもこんな所で会えるとはね」

「これもご都合主義だ気にするな・・・まあいいだろ？飯くらい一緒に食おうぜ。お前も作ってきたんだろ？」

そう言つて右手に見える弁当をみて士郎も頷く

「さてと、あいつらは・・・きたきた」

紅那岐が見た視線の先には紺色の水着を着た七星と白いセパレートの水着を着たセイバーであった

「クナギ達も来ていたんですね。それにしても七星の水着は独特ですね？」

セイバーが不思議そうに首をかしげながら七星に言う

「これこそ日本における伝統文化の旧スクだよ！」

無い胸を・・・ゲハッ！・・・胸を張りながら答える七星に一部の男共は親指を上げならサムズアップしていた

「・・・なあ紅那岐」

「言うな、俺もまさかこの歳になってまで着るとは思ってなかったんだ」

どこか諦めた溜め息を吐く紅那岐に士郎はそっと肩に手を置いた

「さて、立ち話もなんだから昼飯にするか」

そう言っつて紅那岐たちは弁当箱を広げた

「おお！シロウのお弁当も然ることながらクナギのも引けをとりませんね！」

暴食王<sup>セイバー</sup>は目をキラキラさせ弁当を見ていた

「好きなだけ食っていいぞ？てか、普通に作りすぎた」

「・・・どんだけ作るんだお前は？」

クナギの弁当は最初は小さいと思いきや広げるとそれは見事はお重であり、そこには多種多様なおかずにオニギリなどもあった・・・ぶっちゃけ魔術の応用で小さくしていたのである

「いつも弁当作る時は恋がいたからな、これくらい作らないと足りんてか、これでも足りんが」

「まあいつか・・・では！」

「」「」「頂きます！」「」「」

そうして食べ始める一行、それはセイバーのクラスが何故か暴食<sup>バーサー</sup>王になる勢いで弁当を平らげていた時にそれは起こった

「何奴だ！」

横から弁当を掻つ攫っていく輩が現れセイバーはイラつきながら追っていくと其処には

「ランサー！アーチャー！何故貴様らがいる！」

「いちゃ悪いかよ、さっきはナンパ野郎から助けてやったって言うの」

そうこうしてる時に

「「ランサー」「」

「なんだよ」

「其処にある太巻き（お稲荷さん）獲ったら叩き込みますよ？  
込むよ？」

「プールにか？」

「いえ（ううん）、エクスカリバー 約束された勝利の剣（ネロ・アポカリユプス 黙示録に記されし皇帝）  
を」

面白いでしょうと言う二人の目は完全に笑っていない、ランサーもそれを察知したのか食べるのをやめる

「それにしてもお前ら・・・」

ランサーがセイバーと七星を見る（七星はネタで旧スクを着ているだけで今はセイバーと色違いのセパレートの水着を着ている）

「そういう水着はもうちつと大人のか・・・」

続きを言おうとしたランサーだったが急に目の前から消え、プールには水柱が立っていた

「速いな」「ああ」

アーチャーとクナギには見えていたのかポツリと言っている

「シロウ（お兄ちゃん）、できれば残しておいて下さると嬉しいです（ね？）」「」

それだけ言うと二人はランサーをふつとばした方向にダッシュで向かう（七星は身体強化込み）

「・・・はっ！二人を止めないと！」

我に返った士郎はプールに視線を向けると其処には水上を走りランサーをぶっ飛ばしまくり、七星も魔法の秘匿は何処へやらの状態で空を翔けてながら吹っ飛ばされているランサーに追撃を入れていたその後士郎達はセイバー達を何とか静めて（クナギは大笑いしながら見ていただけ）アーチャー達と別れた後各々また遊び始めたさ・・・後に語るアーチャー曰く

「教会の花壇に埋めるというお願い・・・いや言い訳はせん、あの脅迫に頷くしか出来なかった」

と

End

【口は開けば死亡フラグ2】

あらすじ・・・プールへ行くこととなったイリヤとシロウ、しかしここでイリヤのメイドのセラがダメと言い張る

それならば保護者同伴と言うことになったのだがここで更なる問題が発動した。

それは何処からか聞きつけた、セイバー・凜・桜・ライダー・紅那岐・すずか・七星・恋まで一緒に行くということだった

そして全員の水着お披露目の時に話が始まります（上の話は無かった設定になっています）

「どうでしょうかシロウ？水着は初めてなのですが」

「どうお兄ちゃん？受け狙いをやめて今回は普通に攻めてみたよ？」

現れたセイバーと七星に士郎はセイバーの水着姿に見ほれており、紅那岐も今回は普通に褒めていてあげた

「桜たちはもう少し遅れる見たいです」

後ろから聞こえた声に振り返ると其処にはセイバーとは対極の黒の水着を着た妖艶な紫の髪を流したライダーがいた

「・・・」ゴクリ

「・・・」

「くっ・・・」

セイバーと士郎は何を思っているのかは分からないが七星は忌々しいものを見る目で見ており、紅那岐はというと・・・

「綺麗だな、ライダー」

「あまり私をからかうのはよくないですよ？セイバーや七星の方が可愛らしいです」

「はは！何を言ってるんだライダー？俺はお前を綺麗と言っただ、二人は確かにかわいいかも知れないが、綺麗という点ではライダー、お前に勝てるものはいない」

「あ、貴方は何を言ってるんですか！」

紅那岐に丁寧に説明され顔を赤くするライダー、周りから見れば完全に口説いていた

「それに言えばなライダー？お前がそういう風にコンプレックスを感じゴニョゴニョと惑っている姿のほうがよっぽど可愛いぞ？」

お前もう死ねよ！

「はぁ・・・身内で来ているのに何で口説いてるのよあんたは」

「・・・浮気？」

第三の声に振り返れば其処には派手な赤い水着を着けた二人の女性

「女にとって水着は戦闘服！カワイさ綺麗さ意外にもかっこよさが必要なお分かり？」

そう言って決めている凜に土郎は頷いていたが

「恋もかわいいなあ」

「ええ、羨ましいです」

「ありがとう」

凜を完全に無視し恋を愛でている、紅那岐とライダー

「ちょっとあんた達！少しは聞きなさないよ！」

ウガーと吼える凜に呆れる声が聞こえ振り返ると・・・



「……だれ？」

分からない、本当に分からないとその場の全員が？を浮かべていると、色々と毒を吐いてきたので予想つき聞いてみると其処にはセラがいたのである

「まあ、恥ずかしい気持ちも分かるし男の視線つても特殊だからね……まあそれぞれに魅力があるんだし別に優劣なんて……」

何かを言おうとした凜だったがそのまま凍りつく何が起こったかと言つと……

「は、はい！お待たせしました！」

そして現れたのは桜である、桜はその幼さ残る顔とは裏腹の魅力的な体をしており、この場にいる全員を……てか凜を凍りつかせるには十分であった

凜が、「水着の魅力は人それぞれ」そう言いたいであろうが言葉が出なかった……土郎曰く

「ライダーはこの際置いておく、仮にも女神だから規格外だろうが納得できるが桜は反則過ぎる」

とのことだった。凜は何とか攻撃しようにもライダーのフォロワーを食らい空振りで終わってしまうのである

「プールの方は戦場、故に戦闘力の無い者は逃げていくしかないんです！胸囲イコール戦闘力！」

桜らしくもなく元気に盛り上がる中セイバーと七星の仲裁？がはいる

「桜その発言は危うい！その発言が確かなら、更なる戦闘力を持つものが現れたらそれは空しく崩れ落ちる！」

今ならまだ間に合う！ヤケを起してあそこでリットルジューズをがぶ飲みしている凜に手を差し伸べるべきだ！」

「そつだよ桜？それにね・・・はあ」

七星が何かを言おうとした時にそれは起こった

「・・・セイバー知っていたのか？」

「ええ、着替えの時に戸惑っていたら教えてくれまして」

「七星も何故に知ってる？」

「私ははやてからスキル貰った」

「あんの馬鹿が何をとちくるってそんなスキル持ってやがるんだ」

「お兄ちゃんも出来るよね？」

「まあな・・・はあ」

紅那岐が深い溜め息を付くと士郎とセイバーも同時に溜め息をつく

「・・・残念ですね。短い天下でした、サクラ」

「え！？みんなしてどうしたんですか・・・うう、振り返るのが怖

い  
「

恐る恐る振り返る桜・・・そこには

「つて、ありえないですううううううう！」

ベル 薇よろしくな顔をしながら叫ぶ桜。そこには、桜を凌ぐ二人  
がいた

「セラ、何があつたの？」

「どうしたの紅くん？」

リズとすずか、その二人の戦闘力（胸囲）はすさまじさを持つて  
いた（この時点ですずかは既に桜より大きい設定ですw）

「・・・ち、力はより強い力に破れる・・・こ、こんなに骨身にし  
みた教訓ははじめてですう・・・」

姉と一緒にプールサイドで黄昏れる桜

「本当に何があつたの？」

「ああ、胸の話で桜が調子に乗って破れただけだ」

「桜ちゃん・・・」

呆れるようすずかの視線に更に小さくなる桜であった

End

「ちよつと！私は！？」

すまんよイリヤ、個人的には大好きなんだが上の話のための生贄なだけなんだ今回は

本当に End

## 閑話休題と言う名の繋ぎ2（後書き）

レティ「おっし！これが掲載されてる頃にはセイバールトは終わっている。前書きに書いてある通り、明日から本編再開できるかも？」

トール「それにしても、胸の話を書きたかっただなんて、最低ね」

レティ「単純にhollowでこの話を見たとき吹いたんだもんw」

リース「確かに面白いですね」

アスカ「私プールクライ！」

レティ「まあ、七星以下の運動能力のアスカじゃな」

トール「では、感想ありがとうございました」

レティ「あ、でアンケートみたいなモノなんですけどhollow編はマジでつなぎの要素なんで本編終わっても書く予定は無いのですが、もし読んでもいいかな？って思うなら書こうと思います。なので、よかったら感想なんかで教えていただければ書きたいと思います。また、この話を見たいなどの要望でもokです」

リース「長くなりましたが失礼します」

## 第十二夜 説明会というなの〜2 (前書き)

皆さんこんばんわ、PSPのゲームを買い廃プレイ中ですw

セブンスドラゴンを現在やっていますが、他にダンボール戦機・ヴァイスシュヴァルツなども買ってしまい、少し時間がないと思っていますw

更に言えば、来月発売のMH3Gも予約してしまった・・・ジンオウガ亜種とかかつこよすぎでしょ？アレを倒したいが為だけに3DSを買うとか・・・w

更新はやりたいと思いますが、もしかしたらゲーム優先になりそうですw

## 第十二夜 説明会という名の〜2

紅那岐 Side

「俺より詳しい奴に聞くさ・・・なあ？ライダー」

俺が林を見ながら言うと、周りは驚いていた・・・おい、誰も気づかなかったのかよ

「・・・いつから気づいていたのですか？」

「お前がそこに来たときから」

そうやって現れたのはボディコンのような姿に目を隠すアイマスクをつけた女だった

「ちょっと待って！聖杯がまだあるってどういいうことよー！」

「落ち着け、それを説明するから一旦家に帰るぞ？」

「悠長なことを言ってる場合では・・・」

「いや、確かに一気に終わらせられるけど・・・良いから帰るぞ？」

ゆっくりと「帰るぞ？」って部分を強調しながら言うと誰も逆らうことなく頷いてくれる・・・素直な子は好きだ

十

十

十

「さてと、ライダーが何であるの場所にいたかを聞きたいんだが？」  
居間に座りながら付いてきたライダーに聞く

「私は・・・桜に貴方達の元に言ってくれと言われましたので」

「あー・・・つまり大聖杯の器ってやつばあいつ？」

「はい」

俺が聞くと素直に頷いて答えるライダー、周りは驚いて固まっているな

「桜が聖杯の器ってどういうことよ!?!」

「説明するから落ち着け」

「とつとと教えなさいよ」

「落ち着けって言ってるだろうが!」

「!?!?」

凜が大声を出して聞いてくるから思わず俺も怒鳴っちまった

「まあ、今回の聖杯戦争ってのは実はな第3次からのつけが回りに  
回って起こったことなんだよ」

「どづいう事なんでしょうか？」



「・・・その前にお前達、小聖杯と大聖杯の違いってのは理解してるな？」

前にイリヤが説明していたのを全員覚えていたようで頷く

「うむ、ことの始まりは3次の時アインツベルンが召還した英霊が問題だったんだ」

「どっいうこと？クナギ」

イリヤは・・・知るわけ無いか

「落ち着け。で、第3次にアインツベルンが召還した英霊はクラスは『アベンジャー』で真名は『アンリマユ』と言っ」

「アンリマユですって！？神霊格を召還したって言うの！？」

「うんにゃ、聖杯には流石にそこまで格位を持つのは流石に召還できなくてな、召還されたのは唯の一般人の霊だ」

「だったらなんでアンリマユなんて真名に」

「ただ、召還されたその英霊は特殊でな？かつて生きていた時に『この世の全ての悪であれ』という願いの元殺された人間でな。まあ、それを召還したは良いがそんなのが生き残れるほど聖杯戦争は甘くなくて早々に脱落で聖杯に吸収されたんだよ」

「やべ、説明めんどくさくなってきた・・・作者キンクリをムリ チッ・・・」

「まあ、唯の人間が瞬殺されるのは問題なかったんだが、問題なかったのが吸収された後なんだよ。吸収された後に聖杯が『この世の全ての悪』という部分の願いをかなえてしまつてな、それで聖杯は汚染されそして聖杯は『破壊』による願いしかかなえられない願望器と成り果てたつてワケさ」

「凄いはしよつたな・・・まあいつか」

「でだ、そんな情報を残すと自身の失敗が明らかになると言う事なのか誰にも伝達されずにそのまま第4次が開催されたわけだな」

「アルトリアの顔を見ると暗かつたな、第4次の事をまだ話してないのかどうかの確認を取りたいんだが・・・まあいいや」

「んで、第4次ではその事実気づいたのは2人だった」

「2人？」

「1人は別としてもう一人は思いつくんじゃないのか？」

「まさか・・・綺礼？」

「正解。まあ、あいつも気づいたのは大分後と言つたか、卸した後と  
いつか」

「すまん、この辺は実は作者知らないんだよ」

「まあ、その後聖杯を壊したんだが・・・その後に問題が起きた」

「問題という部分で半分くらいは首をかしげているが、士郎は気づい

たようだな

「死者500人以上、東海100棟以上の大災害」

その言葉を聞いた凜は気づいたようだな

「でだ、第4次は願いをかなえる前に適当に聖杯を壊してしまったもんで第5次が早まったって訳だ」

我ながら端折りすぎだな、こんな説明だと・・・

「そこで何で桜が出てくるのよ！」

ですよー

「落ち着け。でだ、聖杯戦争するのはアインツベルンが用意するんだが今回はマキリが違反を犯したんだよ」

核心を離し始めたら落ち着いたからよしとしよう」

「本来ならば、マキリには魔術師はマキリ・ゾオルケンしか本来ならばいないのだが10年前それが変わった」

今度は凜が青い顔をしだしたな

「10年前、遠坂家から養子となった桜は長年に渡り、蟲による調整を受け続けてマキリの魔術師としての力を受ける。そして、蟲を体内に宿すことにより力を上げるといふものだ」

「桜が遠坂の妹!？」

士郎が驚いているな、まあ今は無視だがな

「そして、違反とは体内に宿した蟲に聖杯の欠片を持たせイリヤ以外の聖杯の器を作ったことによることだ」

説明するが分からないといった顔が多いな

「まあ、桜がイリヤと同じで聖杯の器つてことだけを理解しとけ」

そう言ってみんなが「なぐんだ」って顔をする、我ながら適當すぎたな

「さて、問題がここからだ。マキリが作り出した聖杯は誰かの願いを叶える願望器ではなく、既に汚染を前に出した破壊をするものだ。でだ、黒い聖杯はアンリマユそのものといって言い。桜の体には今そのアンリマユが下りており体を汚染されている。

また、アンリマユはある意味で初めて英霊として形を持つとしてるんだよ。恐らくはまだ降りてはいないだろうが、時間の問題だ」  
そこで切ってライダーを見る

「んで、お前は座に帰ったんじゃないのか？」

「確かに私は帰ったと思ったのですが、気づいたら桜の前にいました」

事実のみを告げるライダー

「そうか、お前今はもう桜と繋がらないな？」

軽くライダーを視てみるとライダーのつながりは誰とも無かった

「ええ、桜が最後の意識を持っていたときにラインを切りました・  
・「貴方は先輩の下にいつて私を殺してと伝えて」と

本来なら・・・確かラインを切らず絶えず送っていたような気がするが、ここは俺達がいるせいだな

「そうか「ふざけるな!」「」

納得しようとしたら士郎が怒鳴り散らす

「何が殺してだ!ふざけんじゃねえぞ」

「士郎、怒るのも分かるが、原因の半分はお前だからな?」

俺が言つと士郎は分かってないのか戸惑っていた

「簡単だ、桜はなお前と一緒にいる時だけが幸せだったんだよ。故に聖杯戦争が始まった後お前はどうしていた?」

そう聞くと士郎は「うっ」と呻いた

「さて、桜だが結論だけ言つと助けることは可能だ」

俺がそう言つと回りは全員驚く

「そのためには・・・士郎、お前キャスターの宝具はコピーできるか?」

俺の問いに士郎は頷く

「よし。話は簡単だ、桜と聖杯は今繋がつてしまっているのならばその繋がりを切つてしまえばいい。」

キャスターの宝具は英霊との契約も切れるんだ、聖杯とのつながりも切れるだろう」

それだけ言つと周りの連中はやる気に成つたようだ

「だが、事は単純じゃないぞ？なんたつて今の桜はアンリマユと繋がつており、その力を十二分に使えるんだからな。近づくだけでも一苦労だ」

喜びから一気に落胆へ、それだけでこいつらの顔が百面相だ

「まあ、今回こんなことになってしまったのは俺らが原因だからな、お前らは桜を助けることだけを考えている。後は俺達が道を切り開いてやるぞ」

「そうだった！あんたたちは一体何者なのよ！」

凜が気づいたように言ってくる、まあ今までやること多すぎて忘れてたんだらうな

「それは、最後に説明するよ。その前にまずは・・・セイバー」

「なんですか？」

「お前も忘れていたな？士郎が何で選定の剣を作れるかの説明だよ」

「そうでした！」

「選定の剣？」

士郎が首を捻るがまあ、あの時はそれ所じゃなかったからな

「お前がギルガメッシュと戦っていたときに一際煌びやかな剣を持つていたのを覚えてないか？」

「・・・そういえば、そんなのを持っていたような気がするが、あの時はそんな余裕が無かったからな」

「だろうな。さて、その話をする前に聞きたいのだが士郎？」

「なんだ？」

「聖杯をもし無色の願望器に戻せて願いが叶うとしたらお前は過去のやり直しを望むか？」

戻せるって単語に一同騒然ッて感じて驚いているが俺は知らん

「戻せるってそんな訳「可能性とかどうでもいいから答える」・・・俺はそんなもの要らない」

「何故だい？」

「死んだ奴は蘇らない。過去を否定することなんて間違っている。俺はそんな望みは抱けない」

「そうか、お前はそういう奴だったな。それゆえに正義の味方を指すのだからな」

「ああ、俺があんな悲劇を2度と起さない為にもだから正義の味方を指すんだ」

俺と士郎。二人で問答をしているとセイバーは驚いた顔をしていた

「さて、士郎が何であんな神造兵器を投影できたかだったな」

「ああ」

「それはまず第4次の話になる。」

第4次に零れ落ちた聖杯の中身、アンリマユが町を焼いたつてのは言ったな？そしてそこで唯一の生き残りがいた」

俺は士郎に視線を移すとみんなも士郎に視線を移しまさかって顔を  
する

「その日に助かった人物は一人とされている、それが・・・士郎だ」  
みんなが驚いているところ悪いがそれだけじゃないからな？

「さて、セイバー。お前は第4次に召還されたときに触媒が何かを知っているか？」

「・・・ええ！？」「・・・」

うん、みんな更に驚いたね



「はい、私の鞘です」

「そう、鞘だ。さてその鞘は何処にあるか分かるか？」

「いえ・・・まさか！」

セイバーは答えに至ったようだけど他は分からないようだ

「さて、あんな大災害で何で士郎だけが生き残れたと思う？」

俺が問うと回りはそういえばって感じになるな、だけど答えは出ないときたか

「簡単だ、士郎の中にはな？セイバーの宝具が埋め込まれているんだよ」

それだけ言うと更に驚く。うん、他人が驚く様は面白いね

「ちょっと待ちなさい！宝具って」

「セイバーの最後の宝具それは・・・」アヴァロン『全て遠き理想郷』。聖剣の鞘だ

衛宮切嗣がセイバーの召還に使った触媒の鞘をその身に宿し、そして最後まで戦った。しかし、聖杯戦争により起こった大災害の時に士郎をみつけた切嗣だったが、その命は風前の灯だった為に士郎に鞘を埋め込み存命させたんだ

だから士郎の驚異的な回復力はその鞘の恩恵だな」

うーむ、あまりのことに回りは固まっているな

「10年間その身に宿したことにより、土郎が知っている理由となる」

「そうだったのですか・・・シロウ貴方は私の鞘だったんですね」

セイバーはなにやら思つところがあつたようだが、説明により答えを得たようだな

「さて、最後になつたが俺達の説明だな」

「そつよ！とつと吐きなさい」

偉そうな・・・まあいつか

「お前ら平行世界は知っているな？」

全員が頷く。もしここで凜がそんなのゝとか言つたらはっ倒してたぞ

「俺らはその平行世界から来たんだ」

「そんなのできるわけ」「ゼルレッチの爺の趣味がそれだが？」  
くっ・・・

流石だなクソ爺、お前の名前出すだけで納得したぞ

「まあ、それ以上のことを言うから理解しとけよ？まずは俺達の世界にも『魔法』と言うものがある」

魔法と言う単語で魔術師たちは驚いているな

「まあ、俺達の魔法はどちらかと言つと『魔導』に分類されるのか？まあいいや、その世界では魔力と科学を融合した世界でな・・・グリム」

《久々ですマスター》

俺のペンダントが淡く光りながら声を出すと一同騒然

「さて、これが俺達の世界では一般的なデバイスと呼ばれるものでな。簡単に言つと兵器として扱われている、いわゆる魔法使いの杖だ」

説明しながら出す双刃剣をしげしげと見つめる一同

「どうだ士郎？解析できるか」

「あ、ああ。ただお前の言つとおり剣というより兵器だな」

「だろうな、俺もこいつは剣として扱うけど感覚的には兵器になるんだよ」

《マスターもうよろしいですか？》

グリムがパンダのような扱いがいやなのか戻りたがったので戻して話を続ける

「こんな感じで、俺達の世界の魔法使いは『魔導師』と呼ばれて戦いや仕事の一部になっている。秘匿意識は・・・知らん人には教えないけど、知っている人の前では使いますって感じだな」

おゝ凜とイリヤが特に驚いている

「さてと、更に俺達の能力紹介だな・・・七星お前から説明しろ」

「私？いいけど。さてと私の場合はあんまり面白く無くてね。お兄ちゃんと一緒に魔導師なんだけど、他にも特殊な『魔法』を持っていてね・・・それがこれ」

七星が出したのは宝石とナイフ

「宝石！」

いやいや、凜飛びつくなよ。確かに直径1mくらいの宝石を見れば分からなくも無いけど

「上げないよ？まあ、これなんだけど簡単に言えば宝具みたいなものでね、それを私は持つてるだけ」

うん、七星の場合これしかないんだよね

「宝具を・・・まさか『ゴッスホルダー伝承保菌者』ってこと！？」

あれ？それって誰かの通り名かなんかじゃないっけ？

「受け継がれたわけのものじゃないけど、似たようなものでね。バ―サーカー戦とかではこのナイフでやったんだよ？後は魔導師の武器としてこの銃を持つてるけどね」

そう言ってパルチザン持つてるが危ないからしまえよ

「さて、七星の説明はそんなもんで次は・・・恋かな？」

「・・・？」ムグムグ

ああ、頬を一杯にして饅頭食ってた

「ほら恋、口に食べかすが付いてるぞ」

「ん」フキフキ

口についてる食べかすを拭いてやってから説明させようとしたが分かってなかった

「恋、昔お前がいた世界にいたときに言っていた名前を言えば後は俺が保管するよ」

恋は頷いた後静かに告げる

「呂」

「呂？」×クナギたち意外

「奉先」

「呂奉先・・・呂布奉先!？」

答えに至った誰かが大声で驚く

「そう、恋の正体はあの三国志で有名な呂布奉先だ」

「え!?!でも史実でも男だって」

「ああ、恋はその三国志の世界での平行世界の呂布でな・・・其処はほとんどの武将が女だったw」

俺が思い出して笑っていると回りは呆気からんとしている

「まあ、そんな訳でな恋は簡単に言えば、現代に生きる英雄だ」

「ちょっと待ちなさい!?!?それならどうしてここにいるのよ」

「簡単だろ?一緒に来るって言っから一緒に来ただけだw」

まずい、さっきまでのシリアスの反動か本当に面白いw

「んで次は・・・俺のほうがいいか?」

「は?すすずかじゃなくて」

いや、俺より恐らくインパクトはすすずかだろ?

「まあ、落ち着けて。俺はな・・・簡単に言えば北欧神話の力を受け継いだものだ」

そう言っ俺は一本の黄金の剣を出す

「それは!?!?」

セイバーが何故知って・・・ああ、そっいや聖杯からのバックアップか

「これは神代の武器でなを・・・テイルヴェインゲ黄金色の聖約という」

回りが騒ぎ出したな

「まあ、この剣を持つ故にちよつとした特殊能力を持つてるんだよ。お前達もみただろう？アーチャーの怪我を治したのを」

そついうと回りは頷く

「実はな、あれって治したんじゃないかって『戻した』んだよ」

周りは分からず？を浮かべている

「この力はな、当事者がある時間まで戻すことが出来るんだ・・・簡単に言えば時間逆行だな」

確かこれって第4魔法かなんかじゃないっけ？

「うそでしょ!？」

「嘘じゃないぞ、だからこそ一瞬であんな怪我が回復したんだろ」

回復術かけても心臓を一瞬で治すなんて不可能に近いからな・・・まあ凜が士郎にやったのだって昔から伝わる寶石を使ったからだけど、俺からすればMP1で使ってるから全然違うし何よりあり方が違うんだが・・・説明面倒だからしない

「そんな訳で最後はすずかだな・・・すずかお前のスキルの説明だけでいいや」

そつうってすずかをみる

「私のはスキルはね？マーブル・ファンタズム空想具現化って言うみたいなんだ」

「はあああああつ！？」

凜とイリヤが驚いているな

「落ち着け、まあそんな訳だ・・・ああ、すずかの正体は聞かない  
ほづが身のためだぞ？聞いたら最後俺はお前達を殺すからな」

そう言っつてこの会話をめる

「さてと・・・土郎？セイバー？」

「なんだ？（なんですか？）」

「お前ら・・・ヤっちまえ」

「なっ！！／／／」

「セイバーとやれば切れていたパスが元に戻るだろうからそれをして、明日に備える。今はお前らの魔力が0だからどうにもできん」

顔真っ赤で俯く二人にニヤニヤと笑う俺

「さて、ライダーお前ちよっち来い」

「なんででしょうか？」

「いや、お前魔力きついだろ？俺の血を飲めばかなりってかオーバ



「気味に回復できるからな」

「私の正体を知っているんですね」

「言っただろ平行世界から来たって。その世界だとお前達の物語自体が本みたいにあるんだ」

その事実を言い忘れていたせいか回りが更に驚いた声を上げる

「あ、言うの忘れてたけど。桜が何で聖杯として起動したかって言うと、その平行世界から来た奴らを恐らく食ったんだろ文字通りな」

正確には転生者だろが。俺のよそだと最低でも・・・3人くらいは食ってるな。じゃなきゃあそこまで覚醒するなんて可笑しいし「さて、ではおはようの時間だがお休み。出かける時間は夕方が望ましいが起き次第だな」

そう言っただけ俺は今度こそ部屋を出る・・・俺らが原因なら俺らが取っ払ってやるんじゃないか。聖杯が何だろうとも壊して見せるさ・・・まあできそうなのを手に入れたしな

第十二夜 説明会というなの2 (後書き)

レティ「すいません！桜ルート実はやってなく適当に書きました」

トール「放置してこの完成度？」

レティ「返す言葉もございません」

リース「文章が凄く分かりづらい気がします？」

レティ「すいません」

アスカ「ばか」

レティ「お願い。唯の罵倒だけはやめて」

トール「では、感想ありがとうございました」

リース「では、次回もよろしければお願いします」

### 第十三夜 それぞれの敵 (前書き)

漸く桜ルート終了!!

しかし、スキップ等で若干飛ばし飛ばしやっているところとダメですね

セーブデータから目的の場所に戻ってやらないと詳細を忘れるとい  
うw

・・・まあ、PSPに夢中になってるのも悪いですが・・・

### 第十三夜 それぞれの敵

「さてと、みんな覚悟は良いな？」

紅那岐がギルガメッシュを倒しに行く時と同じように全員向き直り確認すると、全員頷く

「今回は正直俺達が原因だからお前達は桜を救うことだけを考えればいい」

そう言っつて紅那岐は柳洞寺の森を進んでいく。今回向かうのは大聖杯が置かれている場所であり、上にあるのは本来ならばマスター達が欲しがる聖杯の器だが、今回は大聖杯の破壊が目的の為上にあるのを無視し柳洞寺の裏手まで進むと

「ここか」

紅那岐が立ち止まり確認すると凜が前に出てくる

「そうね・・・けど、ふさがれてるじゃない」

そう、入り口らしきものが本来あるのだが、魔術的なものと物理的なもので入り口が完全に塞がれているのである

「仕方ないな・・・」

そう言っつと紅那岐は徐に白い輝きをもつ槍を取り出す

「下がっている、緊急時つてことで吹き飛ばす」

そういうと紅那岐の魔力は上がっていき、槍に魔力が溜まっていく  
「うそでしょ・・・こんな」

凜が驚愕の声を出す。紅那岐が放つ魔力は優に魔法使い達が持つ  
くらいのありえないほどの魔力であった。ぶつちやけ、其処までや  
る必要は無いのだが紅那岐は関係ないと言わんばかりに貯めそして

「グングニル  
大神宣言！！」

真名を開放し入り口を吹き飛ばすと人間が入れる大きさの穴があっ  
たのである

「グングニルですって!？」

凜が驚いているのを無視しながら槍を回収した紅那岐。そして空  
洞を進む紅那岐たちだったが、道中で紅那岐が徐に宝石剣を取り出  
した

「凜、万が一があるとイケないから貸してやる。いいか？貸すだけ  
だからな？」

貸すと言う単語を強調しながら紅那岐は凜に宝石剣を渡す

「今のお前じゃ扱うのは不相応だが、現状は仕方ない」

それだけ言うと紅那岐は先頭に立ち再び歩き出した

「・・・門番か」

広い空間に出ると紅那岐がポツリと呟く。其処には黒き鎧にフルフェイスの兜を被った一人の剣士が佇んでいた

「貴方は!？」

セイバーが驚いたような声を上げる

「セイバー知っているのか？」

士郎がセイバーに問いかけるとセイバーは頷き

「ええ、彼は第4次聖杯戦争で召還されたバーサーカーです」

完結に説明したセイバーに回りは頷くがそのままセイバーは繋げた

「そして真名は・・・サー・ランスロットです」

今度こそ本当の爆弾が投下され、一同は驚きの声を上げる

「湖の騎士!？」 「完璧な騎士って言われたあの!？」

など、兎に角目の前の相手がいかに強大かを物語っていた

「お久しぶりです・・・王よ」

すると、目の前の漆黒の騎士が突如として喋りだした

「なっ!?! 貴方は喋れるのですか!?!」

セイバーが驚きの声を上げる。当然だろう、彼女の知識として彼の騎士はバーサーカーであり死ぬ間際に話せるとい知識しかないのだから

「ランスロットよ二つ聞く」

「なんででしょう？偽りの人よ」

ランスロットに問いかけた紅那岐だったが、ランスロットの返しに納得できる答えがあり納得していた

ランスロットが言った偽りの人とはつまりは転生者のことを指す。つまりはだ、このランスロットも本来ならば転生者のサーヴァントとして現界させられた存在と言うのが理解できた

「いや、二つ目は今の返しで納得したからいい。二つ目だ、お前は桜に食われたな文字通りに、そして今門番として立たされていると思っただけじゃないか？」

「ええ、今の私は貴方の言うとおり門番の役割を担っています。そして、ここを通していいと言われているのはトオサカリンなる少女のみです」

「そう・・・桜は私に話があるのね。悪いけどみんな私は一人で行くわよ」

そう言ってランスロットの横を通り行こうとする凜だったが

「アホが、俺とセイバーを残して残りは先に向かえ」

突如として紅那岐が言う

「私がさせるとでも？」

ランスロットが腰にある剣の柄を握りながら警告する

「てか、俺が邪魔すれば十分だ」

それだけ言うと紅那岐はグラムを出し右手に持ちだらっとなしながら告げる

「お前らとっとなり行け。あんまりちまちましていると桜の心がアンリマユに食われるぞ」

それを聞いた一同は焦りだし、急いでランスロットの脇を抜けていこうとする。当然ランスロットもさせまいと攻撃をしようとしたが

ガキン

高い金属音と共に攻撃が阻まれたのである

「くっ、人の身で私の剣を止めるとは」

「グラム持っている時点で気づけ」

おおよその人では感知できないであろう攻撃も紅那岐の前では通じ、攻撃を防ぎ道を開けるのであった

「お兄ちゃん気をつけて！」「ムリしちゃダメだよ？」「行って来る」



三人娘が紅那岐に声をかけながら通り抜けその後

「セイバー頼むぞ」「後で追いつきなさいよ！」

士郎・凜が急いで通り過ぎる

「あん？ライダーどうした？桜を助けるんだろ？行きな」

「・・・御武運を」

ライダーは何かしらの感情を用いたのかは分からずとも紅那岐を一瞥した後みんなを追った

「よっ」と

紅那岐はランスロットを弾き飛ばすと同時に再び距離を取った

「な？できただろう」

「・・・」

ランスロットは何も語らない

十

十

十

紅那岐と分かれた一同は再び目的地を目指し進んでいった

「地下の割には広いね」

「恐らく魔術的に通常よりも広さが出来ているんだと思うよ？」

七星・すずかの順にこの地下道の広さを感じ喋っていると今度も再び広い場所に出たのである

「ここは・・・」

すずかが周りを見渡すと目の前に先ほどと同じように黒衣の中華風の鎧を纏った大男が立っていた

「

！！」

大男は叫びを上げながら一つの武器を出した

「ウソ！？あれって恋の！？」

七星が驚き声を上げる。男の手には恋と同じ武器『方天画戟』が握られておりそしてそれを手に襲い掛かってきた

「きゃっ！？」「くっ！？」「チッ！」

各々何とか避けるが目の前の男は誰が敵かを定めず、目に付くものを兎に角襲い殺そうと掛ってくる

「シッ！」ガキン

一つの金属音が鳴り響くとそこには男の手に持つ武器と同じ武器を持った恋の姿があった

「ここは恋がやる」

それだけ言つと男を押し出しスペースを作る

「みんな行くよ!!!」

七星がみんなに振り向きながら走り出した

「恋を置いてくのか!?!」

「このままじゃ桜だつて危ないんだよ!それに恋がやるつて言うのに邪魔しちゃう。信じるのも大事だよ!」

七星が叫ぶように言つとみんなも納得し恋が開けてくれたスペースを通りぬけていく

「ガンバレ!」「気をつけて!」「先に行つてるわよ!」「すまん!」

七星・すずか・凜・士郎が駆けて行くがライダーは

「私はここに残りましょう。わたしの力が少なからず彼女の勝率を上げるでしょう」

そう言つて、ライダーは一緒に行かなかつた。本来ならば桜を心配する一人であるはずなのに、何故行かないかと言つとそれは・・・

## 回想

「さて、ライダー男の血だが我慢してくれ」

「その前に一つ、何故私に血を?」

「明日は総戦力となるだろうからな、戦力が多いほうがいい。それに……」

「それに？」

「簡単に言つとお前に惚れたつてもあるがな」

「貴方は何を言っているのですか？私みたいな大女のどこが」

「バカを言つな。お前の何処がでかい？俺より下じゃないか。それにお前は綺麗で一途だ。桜を救いたい。その為に俺達の下に来たんだろ？かつて敵として立ったにも関わらず桜を救うためには一人の力ではどうしようもないと分かるからこそここまで来たんだろ？」

まるで見透かしたような視線にライダーは居たたまれなくなり視線を逸らす

「そんな訳で俺の血を飲めば当分……てか、宝具を5回くらい使つても余る分には供給できると思うぞ？」

「……規格外な」

「褒め言葉どうも。で、どうする？」

「頂きます」

こうしてライダーは紅那岐の血を飲み魔力を回復したのである

「ライダー、もしこの戦いが終わったら俺と共に来ないか？」

「私の主は桜だけですので」

「そうか、残念だな」

「しかし、血を分けて貰ったお礼として桜を助けるまで、貴方を主として貴方が守りたいものがあるならば私が守ります」

「そうか・・・だったらこいつらのうち一人がもし戦うことがあったら守って欲しい。それは見守ることなのか、手を貸すのか分からないけど兎に角頼むよ」

「分かりました」

こうして、義理とはいえ主従の誓いをしたのである

回想 終了

「誓った故に貴方に勝利を」

そうしてライダーはつけているアイマスクを外しながら敵を見据えようとした

十

十

十

「もうまたなの!？」

凜の叫びと共に眼前に広がる場所を見る一同。そう、またである。三度目の広間に一同はやるせないものがあつた

「今度はどいつよ!」

凜がイライラしながら周りを見ると其処には黒い鎧を身に纏ったセイバーと瓜二つの少女がいた

「え?セイバーがなんで・・・」

「誰だ貴様らは?私は知らん」

セイバーの顔でセイバーとはまた違う威圧感で全員を威圧する黒セイバー

「貴様らはこの場で消せと主に言われている。だから消えろ」

そして構えるのはセイバーの黄金の剣とは異なり漆黒の剣、されどその形は・・・

「エクスカリバー約束された勝利の剣!?やっぱりセイバー!?!」

驚きを隠せない一同、されど無慈悲にもその剣が振るわれようとされたが・・・

「フリーシンガメン無に還った少女」

「なに!?!」

驚きの声を上げるのは黒セイバー、その剣を振るおとしたが突如として起動が変わり振るえなかったのである

「危ないなあ・・・」

疲れたような声を出しながら聞こえる声の主は七星である、その手には場に似つかわしくないグローブをはめていた

「貴様なにを！」

黒セイバー（もうオルタでいいよね？）が怒りをあらわにしながら問い詰める

「教えるとでも？」

いつものお調子者の姿ではない七星の姿に士郎・凜は息を呑む

「士郎・凜は先に行って・・・ごめんすずか手伝って、私一人じゃきついわ」

「いいよ、私も手伝ってあげる」

そう言つとすずかは手を振るうとそこにはまるで爪に挟られたような三本の軌跡が残っていた

「貴様ら・・・!!」

オルタの怒りが爆発する前に士郎達は急いでその場を駆け抜けた

「さあ？終わりの時間だよ」

「転生者のせいで私達も散々だね」

士郎達が行った後に少し呟いてからこの戦いも始まった

十

十

十

そして、終に最奥までたどり着いた士郎と凜。その場に待っていたのは桜と間桐臓硯と思われたのだが真実は異なり

「「なんで……」」

士郎と凜の声が重なる

「なんでお前がここにいるんだ……」「なんであんたがここにいるのよ……」

「「言峰綺礼!」」

「さあ、最後のときは始まったぞ正義の味方よ」

綺礼は凜を見向きもせず士郎だけを見据えて言う

「クスクス……漸く来ましたね姉さん。待ちわびてしまいましたよ」

目のハイライト無く凜に語りかけるは黒衣に赤いラインが入った桜だった

「漸く……ああ、漸く姉さんをこの手で……殺せるんですね?」

その目はまるで子供のようだけど、何処までも残忍な目つきで凜を見つめていた



「ふざけないで！あんたを救うために私達は来たんだから！」

「ああそつだ！こんなことはもう終わらせてやる！」

凜に続き士郎も桜に声をかける

「先輩、酷いじゃないですか・・・そんなにその女がいいんですかあ？」

「桜何を言ってるんだ！俺は遠坂だけじゃない！お前だって大切なんだよ！」

「先輩かわいそうに・・・その女に誑かされて私は二の次だったんですね？直ぐに助けてあげますよ」

「そこまでだ衛宮士郎、これ以上器を惑わされてはたまらん」

こうして始まるそれぞれの戦いである

運命の齒車は今、最後の時を向かえ回りだした

第十三夜 それぞれの敵 (後書き)

レティ「最初に、感想ありがとうございます！」

トール「では、次回もお楽しみに！」

アスカ「ばいばい」

第十四夜 蒼銀・赤黒VS漆黒（前書き）

ランスロットステータス

筋力：EX -

魔力：A

耐久：A+++

幸運：A

敏捷：EX

宝具：A++

スキル

直感：A

心眼：A

神性：B（湖の精霊に育てられたという伝説の元のスキル）

この状態は無毀アロンドライトなる湖光を抜いている状態であり、使わなければ当然1ランク下がる

転生者が無茶苦茶な要求で基礎能力の底上げがされている

宝具自体の能力上昇は無い

## 第十四夜 蒼銀・赤黒VS漆黒

三人称 Side

其処ではとてつもない戦いが・・・されていなかった

「あいこで・・・」

「しょっ!」

そこでは戦いは戦いでもとてつもなく下らない戦いが展開されていた。それはなぜかと言うと

「アルトリアいいから譲れ!お前じゃ勝てん!」

「譲れません!今度こそ友とは決着をつけなければならぬのです  
!」

と永遠いたちごっこになり終にはじゃんけんを始めたのはいいが・

「しょつと・・・だー!いつまでもあいこじゃね意味がねえ!」

「くっ・・・いい加減」

因みにあいこになる理由は、セイバーは持ち前の直感Aと幸運A+による補正で負けるといふ形を回避し、紅那岐は対人戦<sup>ウルザブルン</sup>略予知視という相手の行動の先読みをするスキルを使っているのだが、どうしてもあいこになってしまっているのである

「もういい！俺が行く！」

「待ちなさい！ここは私が行くべきです！」

結局どうにもならず、紅那岐が我慢できず前に出ようとしても更に前にセイバーが出るといった形になりまた同じことを繰り返していた

相手のランスロットはと言うと、セイバーのあまりの俗世に浸かりっぷりにある意味歓心していた

「はぁ・・・じゃあいいや、最初はお前が戦って話して来い。ただし、5分立つたら交代な？」

「いいでしょう。その間に決着をつけて見せます」

そっぴいながらセイバーの手にはエクスカリバーが握られており、ランスロットに向き直っていた

「お待ちせしました。始めましょう」

「王よ、まさか二度目があるとは思いませんでした・・・しかも今度はこのように会話が出来るとは特に」

ランスロットも己が宝具無毀アロクタイトなる湖光を構えながらセイバーと対峙する

「さて、俺が開始の合図をしてやるよ・・・殺し合いに必要かどうかは別としてな」

「かまいません／承知」

セイバーとランス（フルで書くのがめんどくさくなった）が頷いたのを確認した後紅那岐は手を挙げ

「では・・・始め！」

手を下に下げながら言うと二人の騎士は疾走し己が刃を重ねあつた

「王よ一つ聞きたい、貴方は未だにあの愚かな幻想をお思いか？」

ランスの言葉はかつてセイバーが己が国を救う為に”やり直しを願っていたことを指す。なぜ知っているかといえば前回の求める姿、そして転生者の入れ知恵によるものである。かつてのセイバーならばここで同様ないし、何かしらのアクションを起していただろうが今のセイバーは違った

「くっ・・・貴方が私の願いを知っているのはこの際置いておきましよう。しかし、今の私はそんなものはいらない。

私は間違っていた。その事を教えてくれたのは私が剣としてその身に起こるであろう全ての悪意を切り払うと誓った唯一人だ」

激しい剣戟の中、押されながらもセイバーは自分の事を伝える。

ランスはその答えに驚きながらもどこか嬉しそうに口元を綻ばせながらも剣戟の手は緩めなかった

「ランス・・・私は愚かだった、王であろうとした故に人の心が分からずただ示された道しか進めなかった」

「いえ、故に王です。だから私が使えると誓った唯一人のお方」

裏切りの騎士と呼ばれど、彼の騎士王にもっとも忠義を貫き通したのはこの男だろう。皮肉にもかつて、騎士達が蔓延る時代には現代と違って話し合いではなく殺し合いで物事が解決することが多かったのである

「貴方がギネヴィアと添い遂げる事をあの時祝福できていれば、歴史が変わったのかも知れませんが、あの時の私ではその事すら思いつきませんでした」

「王よ、それは私に対する哀れみか？それとも、王妃にたいする贖罪か？」

語気に怒りが見えるランスの声にセイバーは怯むことなく続けて言う

「違う！私は本当にそう思っていた！この身にある秘密が何より彼女を幸せに出来ぬことはわかっていた！

だから貴方と添い遂げられるならば私はそれで構わないと本当に思っていたんだ！」

激しい剣戟の中でも互いの叫びを出し合いながら二人は戦っていく

「3：7でセイバーのが分が悪いヤツパ」

紅那岐が傍目から見た感想を言いながら二人を注視しながら見守る

「秘密とは一体なんですか！」

「くっ……」

ランスの一撃により吹き飛ばされるセイバーだが体制を建て直し無事に着地した後剣を下げ事実を告げる

「この身は男ではなく女であり、故に彼女の思いに答えることは出来なかった」

多少の自嘲があるのかセイバーは苦笑いをしながらランスに告げた

「女だと・・・」

ランスに衝撃が走る、紅那岐に言わせれば「何故分からん」のだが彼は彼女に使えたのではなく王に使えた。故に彼女が男か女かを確認するというのは無かったからである

「騙したというわけではないですね」

「ええ、あの時あの場所では私は王としてあつた。だから、私は男であり王でした」

そして再び剣を構え戦う姿勢を示したのだが紅那岐が割って入った

「ほい、そこまで」

「なっ！そこをどいてください！」

紅那岐が割って入ったのが不服であり抗議の声を上げるが

「いやいや、5分たったし」

そういつて時計（懐中時計）を掲げる紅那岐に悲痛の表情をする



セイバー

「くっ……騎士に一言はありません」

「あいよ」

「ですが！貴方も5分たったら交代ですよ！」

諦めが悪いといつかなんと云うか転んでも唯では起きなかったセイバーであった

「了解」

苦笑いしながら答えランスに向き直る紅那岐

「悪いが交代だ。まあ話もついたら？」

「ええ、後はどちらかが死ぬのみ。故にこれから先は言葉は要らず  
それだけ言つとランスは己が剣を構え紅那岐を見据える

「はは！悪いが俺はお前ら騎士見たいな高貴な魂は持ってないんだ  
がな……まあ戦闘者としてお前を帰してやる」

そついうと紅那岐は持っていた剣をしまい無手になる

「剣を使わないのですか貴方は！？」

セイバーが驚きの声を上げる

「俺の戦闘スタイルは確かに剣技だが・・・そろそろ上に行きたくてな、剣を使わずしてこいつ位を倒せなければいけないのでな」

言い終わると紅那岐はだらんと両手を下げながら多少前かがみになる。ランスも相手が戦闘態勢を取ったと感じ緊張感に場が包まれる

「・・・」

お互い語らずジトーとした視線をセイバーに送る

「な、なんですか一体!？」

そんな視線に晒されているセイバーは訳が分からず聞くと紅那岐が「はぁ・・・」と溜め息をついた後セイバーに言った

「開始の合図は？」

「はっ!？」

言われてそういえばと言った感じで気づいたセイバーは顔を赤らめながら手を挙げ

「そ、それでは・・・はじめ!」

手を振り下ろすと同時に二人は駆ける

「フッ!」

「シッ!」

ランスの袈裟切りを紅那岐は裏拳で弾き飛ばし殴りかかるが弾かれた勢いをそのまま回避に使い一回転した後紅那岐に切りかかるが紅那岐も分かっていたのかそれをしゃがみながら回避しそのまま足払いをし体制を崩そうとするも失敗しお互い弾かれたように距離を取った

「ちつ・・・分かっていたが流石だな完璧な騎士」

舌打ちした後褒める紅那岐だがランスは苦虫を噛み潰したような顔をしている

「・・・人間がしかも身体能力だけで私に対抗してるほうが可笑しいでしょう」

「なっ!?!」

そう、紅那岐は己の身体能力のみで戦っている。普段なら魔力で体を強化したりそれこそ神雷招来タービュランス・バーストでも使えばその能力は飛躍的に上がるのだが今の紅那岐は一切そんな事をしていない

「言っただろう?上に行く為だと・・・」

それだけ言うといつの間にかランスの横に現れランスを殴り飛ばす

「ぐ・・・が・・・」

苦痛で顔をゆがませているランスだったがそこに追撃の手が入る

「オラオラオラ!俺を上に乗れて行け!!お前の力はこんなものじゃないだろうが!」

紅那岐が叫びながらランスを攻撃していくが、流石はランスと言  
うべきか一瞬の攻撃の切れ目を見逃さず紅那岐の攻撃を防ぎ後ろへ  
飛んだ

「ちっ・・・まだまだ甘いか」

「はぁ・・・はぁ」

紅那岐は自分の攻撃の粗さに舌打ちし、ランスは今のうちにと呼  
吸を整える

「さて、時間をそうかけられないのでな次で終わらせてもらっぞ！」

「いいでしょう。私も至高の一撃を貴方に入れて見せます」

ともに高まりあい気と気がぶつかり合う。セイバーはその姿に見  
ほれている。そして一瞬にして全てであるように突如として二人は  
動いた

「はぁぁぁぁあっ！」

声を上げながら二人が交差する。二人は互いの拳と剣を出した格  
好で止まっていたが、突如としてランスが倒れる

「俺の勝ちだ」

「私の負けです」

こうして戦いは終わったが、あくまで戦いであって殺し合いは終

わっていない。なぜならば今のランスは桜に操られ意思とは無関係に戦わなければならないのである

「くっ……」

ランスが悲痛な顔をしながら命令に抗うようなそぶりを見せる

「今のうちに私を殺してください」

両手を広げながら動こうとしないランスにセイバーは歩み寄ろうとするが

「まあ、まちな。俺が終わらせるよ」

そういうと紅那岐はグラムを取り出す

「フッ……まさか敗れた後に剣を出されるとは」

「悪いな……覚悟はいいか？」

「ええ」

笑顔で頷くランス。既にやるべき事はないと物語った顔で実にかすがしい笑顔であった

「そうか……」

そして剣を構える紅那岐

「お別れだサー・ランスロット……」  
『ノットラック因果を切り裂く魔剣』

異なる真名を開放し切り裂くとそこには漆黑に身を染めたランスではなく、本来のあるべき姿であるうランスがいた

「これは・・・」

「俺からの選別だ、いつまでも落ちているのはいやだろう？だから斬ったのさお前もるとも因果をな」

「どういうことですか！？その剣は確かに『グラム』。なのに貴方は今『ノートウング』と」

訳がわからないといった顔で紅那岐に聞くセイバー

「確かにこいつの名はグラムだが、神話によってはこの名ではなく『バルムンク』とまた異なる神話では『ノートウング』と呼ばれていてな。

俺が使ったのはそのうちの一つでな、かつて大神が持っていた大神宣言を斬り、世界の因果を終わらせた名が『ノートウング』なんだよ」

そう言っつてグラムをしまうとランスに話しかける

「お前ももう英霊の座に帰る必要は無いだろう？アルトリアの声を聞き満足した答えを得たんだから」

「確かに私は既に答えを得ました・・・王よどうかお許してください。私と言う不義理の騎士が貴方に仕えたことを」

「何を言うんですか！貴方こそ、貴方こそ騎士の頂点にして完璧な

騎士。私の無二の友にして最高の騎士でした」

互いに涙は見せずお互いの言葉をしみこませていく

「ああ、ありがとうございます。まさか二度も王に死を見取られるとは・・・しかも最後に私の枷まで切ってくれる方がいるとは思いませんでした」

紅那岐に頭を下げながら礼を言うランス。既に足は無く上半身だけとなっていた

「気にするな、俺がやりたかっただけさ」

「しかしそれでは私の気がすみません・・・ああそうだ、貴方ならこれを使うのも十分でしょう」

そうして差し出すはランスの愛剣の無アロンダイトなる湖光であった。その剣ははまだ漆黒に染まっていたがそれでもその強力な剣を紅那岐に差し出す

「いいのか？」

「ええ、既に私はいないもの。ならば持ちえることが出来る貴方にこれを授けます」

「そうか、ならば頂こうランスロット。お前の騎士としての誇りは受け継げんが人として生きたその思いは分かるからな」

差し出された剣を受け取る紅那岐、すると剣は殻に罫が入るように全体にわたっていきやがて『パリン』とガラスが割れたような音

がするとそこにはセイバーのエクスカリバーと同じ輝きを持つ精霊  
が作りし剣の本当の無毀なる湖光アロンドライトが現れる

「どうやら、貴方が持つこともその剣は受け入れたようですね」

既に首から下まで消えていたランスはセイバーを見つめ別れを告げる

「次はありません。王よさらばです」

「ええ、さようならランスロット」

別れを告げた騎士は満足した顔をして消えていった

「さあ、セイバー泣いている暇はないぞ？あいつらに追いつかなければ」

「だ、誰が泣いているのですか！いいから行きますよ！」

顔を真っ赤にしながらセイバーは奥へと駆けていき紅那岐も苦笑いしながら後をおった



第十四夜 蒼銀・赤黒VS漆黒（後書き）

レティ「イエイ！紅那岐がまた宝具をゲット！ご都合主義だと言うなら言えばいいさ！元々紅那岐を残した理由が宝具の獲得だからね！」

トール「すごい、アンチを呼ぶような言い方ね」

リース「手に入れたはいいですが使うのですか？」

レティ「使わないよ？」

アスカ「なんで？」

レティ「まあ、この後の展開をお楽しみにとって感じで」

リース「慢心王じゃないのにコレクターって……」

レティ「いや、マジで意味があるから持ってるからね？てか、紅那岐の場合宝具としては黄金色のテイルウイング聖約持っていれば十分でしょうが」

トール「まあね……それにしても素手で戦うなんて」

レティ「まあいろいろ理由はあるんだけど、上に行く為には宝具に頼らず己の力を上げたいんだよ」

トール「気持ちは理解できるわね」

レティ「では、感想ありがとうございました」

アスカ「ばいばい」

## 第十五夜 飛翔VS飛將軍（前書き）

バーサーカーのステータス

筋力：E X

魔力：B

耐久：E X

幸運：C

敏捷：E X

宝具：A ++

スキル

狂化：A +（理性は無いが獣の直観力は存在する）

勇猛：A

騎乗：B

こんな感じでステータスは狂化による補正込みです

恋は基本的には筋力がA ++くらいで後は軒並みAです（幸運はE Xで不幸とは無縁の娘ですW W）

## 第十五夜 飛翔VS飛將軍

洞窟で打ち合う金属音その音を奏でる少女と大男がいた。二人が持つ獲物は全くの同一のものである。方や紅那岐とともに歩みたいと望み別の世界から一緒にやってきた呂布奉先こと恋である。

ではこの打ち合っている大男は誰であるかといえは真名だけいえば呂布奉先である。ならば何故二人の呂布がいるのかを問えば簡単である。

この呂布奉先こそこの型月の世界の呂布である。故に同じ武器を持つのも当然である

否、この武器だけに関すれば本来ならば型月の世界の呂布が持つものであり恋が持っているほうが可笑しいのである。

「くっ・・・」

数合打ち合っていたが、遂には恋が吹き飛ばされてしまい体勢を崩してしまっ

「

!!!」

声にならない獣の声を上げながら恋に近づく呂布だったが其処に割って入ったものがいた

「くっ、なんてパワーですか」

わって入ったのはライダーである。一瞬であるが時間が出来たことで恋は再び体勢を整え呂布に向かっていく

「フッ！」

「　　っ　　！！」

恋からの一閃により腕を切り裂かれた呂布は叫び声を上げるが、瞬く間に回復していった。そして回復した瞬間二人を弾き飛ばす

「くっ、めちゃくちゃですね。イリヤスフィールのバーサーカーもさることながら此方のバーサーカーも同じように回復するなんて」

真実としては、桜から常時大量の魔力が送られてくるゆえに回復できるのだがそれでも脅威以外の何者でもなかった

「　　！！」

呂布は急に弓を構えていた、一旦距離をと思って離れた瞬間に打たれた攻撃に恋とライダーは防御の姿勢をとるしかなかった

「くっ」

「かはっ・・・」

「　　！！」

ダメージを受けている二人を無視するかのように突進してくる呂布に二人は弾かれたように離れるとその場に来た呂布は狙いを恋に絞る

何故恋かと言えば簡単に言えばライダーはあくまで英霊、もしかしたら霊体化されれば逃げられ隙が出来てしまう。

されど、恋は人間。ならば狙うならば恋である。そんな事を本能的に感じたのか呂布は恋に襲い掛かる

「くっ、この場所では魔眼を使うわけにはいきませんか」

悔しそうに呟くライダー、既にある程度封印は解いているのだが使えなかった。なぜならば恋と呂布どちらも近接戦闘を行っている為に使うに使えなかったのである

「はっ！」

「

！！」

再び戦闘を開始した恋は戦っているがやはり自分が不利なのを悟っていた。また宝具が同じことにより彼の正体も直感的に感じており宝具の真名開放を迂闊に行えなかったのである

「

」

再び数合打ち合った後、弾かれてしまった恋を見た後急に呂布の隣に魔法陣が現れると其処からは通常と比べると二回りは大きいであろう赤い体表をした馬が現れたのである

「あれは・・・幻想種？いえ、幻獣のようですが内包してる力はまるで」

ライダーが驚愕している。それも当然だろう今呂布が乗っている馬こそ彼の三国志の中で絶世の名馬の赤兔馬である。

『陣中の呂布、馬中の赤兔』といわれるくらいに彼とかの馬は切っても切れない縁で結ばれている。

その馬を呂布は召還しまたがり再び槍を持って恋に突撃した

「くっ」

何とか避けるが恋の不利はより多くなった。彼女のセキトとは彼女の家族の一人の子犬であり馬ではない。また彼女も馬や乗れるものがあればそれに対応できるが今の彼女にはその手段が無かった。紅那岐でもいれば聖獣が一体麒麟を召還してくれるが今は彼もない、内心焦りが生まれるが顔には出さず何とかカウンターを取ろうとしていた

「恋どいてください！」

突如として呼ばれて振り向けばそこには白き体に翼を生やした天馬ことペガサスに跨ったライダーがいた

恋はとっさに飛びのきライダーの視界から外れる。それを感じ取ったライダーは己の封印を完全に解き目を開ける。すると、呂布の動きが少しだけ鈍くなる

「まさか、《石化の魔眼》キユベレイをここまでレジストするとは、バーサーカーなのはどうして？しかし、チャンスは今！」

そう呟くとペガサスに轡がつけられその手綱をライダーが握る。これこそ彼女の宝具であり名を・・・

「ベルレフオーン 騎英の手綱！！」

真名が開放されると同時にライダーが一条の光となって駆けるが呂布も同じように光となって駆けた

「なっ！？」

驚きはライダーの声、全く同じような宝具を使われ弾き飛ばされるライダー

本来ならもち得ないその宝具は転生者のサーヴァントとして新たに加えられた宝具で名を『ゴッド・レイジング軍神怒涛』といい、呂布版の騎英ベルレフォーインの手綱である

吹き飛ばされたライダーとペガサス。特にライダーの傷が深いのかライダーは地に伏したまま起き上がる気配が無かった。ペガサスは消えずに残ってはいた。すると突如恋がペガサスの元へと向かう。呂布は今の一撃にダメージを受けたのかその場でとどまっていた

「恋に力を貸して」

恋はペガサスを撫でながらお願いをする。するとペガサスもいいのか鼻を鳴らした後頭を下げた。

それを確認した恋はペガサスに跨る、またその手には今までの呂布の槍とは異なり別の方天画戟・・・恋姫の世界で己が使っていた方天画戟の形をとっていた

「征く」

左手で手綱を握りペガサスとともに駆け出す恋。呂布も回復が終わったのか恋に突撃をするが何故か今度は呂布が押し負けているのである

「恋は弱い。すずかを救えなくて・・・そして今度は桜を救えないかもしれない。でも！」

それは懺悔なのか、恋が呟く。

かつては自分の家族の為に戦い、またその時に手を伸ばしてくれ



た人がいた。その時に思った感情は最初は分からなかったが回りに聞けばそれは恋心だと言った。

最初はそれを理解できなかったが、紅那岐が笑い自分が笑えるその空間がとても幸せで楽しかった。

その他にもせずかがいて七星・リース・飛鳥が加わるその空間が何よりも好きであった。

しかし、その空間が突如として亀裂が入ったことがある。さすがに誘拐された時である。

その後紅那岐はとても荒れており、声をかけようにも何も声をかけられなかった。

その時恋は「ああ、無力だ」と言葉に出さずとも唯只管そう思った。

そして今度も短い時間だが確かに友達として一緒にいた桜が闇を抱えそして何かをされていると分かった時とても無力に感じてしまったのである

紅那岐はまだ間に合うと言っていた。ならば今度こそ救ってみせるそう思う恋の心が今の力を引き出している

「お前は強いさ、誰よりもな」

今までいなかった声が聞こえる。恋が恋をして、誰よりも好きな人物、赤羽紅那岐の声。その声を聞いた恋の力が急速に高まっていく。

ペガサスもそれを感じたのか一鳴きすると呂布に向かって駆け出す

「今度こそ終わらせる・・・」ゴッド・ウィング『軍神飛翔』

極光が薄暗い空間を支配する、その中に佇んでいたのは恋とペガサスであり呂布の姿は何処にも無かった

恋はそれを確認するとペガサスから降り鬣を撫でる。ペガサスも

気持ちいいのか「ブルル」と鼻を鳴らしていた

「まさか、その子が私以外になつくなんて」

驚いたように語りかけるは先ほどまで倒れていたライダーであった

「ん。この子のおかげで勝てた」

優しく微笑む恋にライダーも微笑みで返す

「恋、よくやったな」

「紅那岐・・・うん！」

今まで見たこと無い恋の笑顔、それは何者にも変え難い最高の笑顔だった。紅那岐も笑顔で返すとそこで恋は糸が切れた人形のように倒れそうになるが紅那岐が直ぐに抱えて抱き上げる

「さあ、時間がない。急ぐぞ！」

恋を抱えながらそう言うと紅那岐達は奥へと進んでいった

## 第十五夜 飛翔VS飛將軍（後書き）

レティ「ようやく、ようやく恋の新しい宝具を出せた」

トール「最初から考えていたの？」

レティ「うん。恋ってか呂布って絶対ランサーかライダーのほうが適正高いからね。だからかなり初めから考えていたんだけど、ただ恋が全力戦闘する場所と使う機会が無くて探していたら丁度いい感じにこの話になったから作れた」

リース「ランサーとライダーと言うことは槍の技も？」

レティ「そのうち出すよ」

アスカ「たのしみ！」

レティ「だね、では感想ありがとうございました」

リース「次回はついに登場！力を超越せし者！」

レティ「だけど、戦闘描写は恐ろしく短いです」

トール「力を超越せし者って何よ！？？」

アスカ「ばいばい」ノシ

トール「無視するな！！！」

第十六夜 やってきました理不尽(前書き)

セイバーオルタのステータス

筋力：EX -

魔力：EX -

耐久：EX -

幸運：C

敏捷：EX

宝具：A++

スキル

直感：A+

魔力放出：A+++

あつれ〜？なにこのチートサーヴァント

まあ、あの子なら意味が無いですがw

## 第十六夜 やってきました理不尽

「さあ死ね！」

オルタがその手にもつエクスカリバーを振るいすずか・七星に攻撃をしてくる

「冗談！」

「ふっ」

さりとしてこの二人はチートクラス（どちらも下位級）なのでそう簡単に攻撃が当たるものでもない

「ちっ、小ざかしい糸を使うとは」

因みに先ほどからセイバーの攻撃を防いでいるのは七星である。正確には防いでいるのではなく逸らしているが。

七星の武器の一つ無に還フリーシンガメンった少女といい、両腕につけるグローブの先端から目に見えないくらい細かいピアノ線を出し触れたものの運動エネルギーを変えると**いうものだ**（分かりやすく言うならばベクトル操作）

故にオルタが幾ら攻撃を仕掛けようと七星のテリトリーに入れば攻撃はそらされ体制を崩すのは簡単なのである

「はあっ！」

すずかによる爪による一閃で地が抉れながらオルタに見舞われるが身に纏う鎧の防御によりあたりはするもののダメージは入ってい

なかった

「硬いなあ」

「うーん、さすがの攻撃がダメなら私の七つの大罪で攻撃したほうがいいかな？」  
グリモワーズ

「防がれると思うよ？ 対魔力たかそうだからアレくらい防ぎそうだね」

「そっか、そうすると決め手に欠けるなあ」

「貴様ら喋ってる暇など無いぞ！」

のんびりと言った感じで相談している二人に切りかかるオルタだが如何せん先ほどから学んでないのか簡単に攻撃をそらされているので二人にあせり事態はなかった

「いつそのこと空想具現化使おうかな」

「やめなってお兄ちゃんが怒るよ？」

「そうなんだよね。使ったら使ったで倒れちゃうし・・・」

現在すずかは空想具現化を使えないのでは使わない。理由は世界を嘘で塗り替えるという行為は代償がないと思っていたが実際はあった

それを行うことで反動として体に負荷がかかるのである。通常ならば真祖の体は通常の間人ヤサーヴァントと比べても明らかにスペックが高いのだが今のすずかは中途半端な真祖ゆえにその反動を軽

減できる方法が無かったりするのである

「貴様らあああ！！<sup>エクス</sup>約束された・・・」

喋っていたのが余程不快だったのかついに切れたオルタがその魔剣の真名を開放しようとしていた

「ちよっ！？やば！すずか私の近くに」

「うん！」

「<sup>カリバー</sup>勝利の剣――！！！」

魔剣の真名を開放した瞬間の光景を見ていたオルタは諦めたかと思っただいたが、オルタが見たのは無傷のすずかと七星。

七星の前には鳥かごのようなものが浮いておりその鳥かごからは光があふれていた

「あつぶな・・・」

「貴様一体なにを」

驚いているオルタはとつさに聞いてしまったのだがそれを聞いた七星は意地が悪いような笑みを浮かべて

「敵に教えるほどバカじゃないよ」

と言ったもんだからオルタの怒りは最高潮になり爆発的に力が向上しすずか達に襲い掛かる

「あぶないって!」

「わっ」

反射的にはじけるように避ける二人だったが突如としてすずかが独り言を言っていた

「え?来るの?いいよ別に・・・うん、分かった」

「すずかどうしたの?」

「あの子が来るって」

「う・・・そ・・・」

すずかが今話していた内容を簡潔に七星に告げると七星の顔が青くなる

「こんな狭い場所であの子を使うの?」

「仕方ないでしょ、来るっていつて聞かないんだから」

そうして話していると突如として空間が割れるように一人の女性が現れた

「大丈夫かしらすずか?」

「うん、大丈夫だよ」

現れた女性は身を青いナース服と修道服を足したような格好をし



髪は金髪で少しSツ気が強そうな顔をしている女性であった

「誰だ貴様は！」

オルタが声を荒げて尋ねているが女性は完全に無視してすずかを気遣っていた

「全く。女性は常に優雅に立ち振る舞わないとダメよ？」

「大丈夫だよマーガレット」

すずかが彼女の名前を告げる

ここで彼女の説明をしたいと思う

エンプレス・マーガレット

秋代様とのコラボで神埼ジェイルとすずかが作った【力を超越せし者】である

モデルはペルソナ4のマーガレットだが強さはそれではない  
強さはと言うと秋代様の作品の南武貴史の娘、神武乱が全力でやっ  
と倒せる位の力を持つ

・・・ここではあえて出さないが単体以外の戦い方が存在する。  
私の作品で使う機会あるかは微妙です

「さてと、マスターことすずかをいたぶった子は誰かしら？」

因みに全くといっていいほど苦戦はしていないのだがそんなの関  
係なしといわんばかりにあたりを見渡すと其処には黒い甲冑姿のオ  
ルタがいた

此方に敵意を放っているのを見て取れたマーガレットは唐突に本

を出すそれが意思を持つかのように空中に躍り出てその中からカ  
ードらしきものが現れた。マーガレットもまたその場で浮く  
本の名前は【ペルソナ全書】といい。数多のコミュにより色々な  
ものが記録されているものである

「さてと、一発で終わらせようかしら・・・めぎど」「ダメー!!」  
なによ?」

マーガレットが何かを唱えようとしたら七星が止めに入った

「こんなところでそんな奴使ったらどうなるか考えてよ!洞窟が崩  
壊するよ!..!」

「七星ちゃん」

「すずかもとめてよ!」

「細かいこと気にしちゃダメだよ?」

「細かくないよ!!常識人のすずかが何で止めないの!?!」

普段ボケ役なはずの七星がツッコミ役になるという珍しい光景が  
繰り返らられているがオルタにしてみればバカにされている行為に  
他ならないので関係に無しに斬りにかかってくるが

「邪魔よ」

「なっ!?!?ガハっ」

マーガレットが手を前にかざすとカードがオルタを襲いすさまじ

いダメージを与える

「あら？弱いわね」

「マーガレットが異常なんだよ……」

七星がツッコミ疲れたのか力ない言葉でツッコム

「しょうがないわね……これでいいわ」

するとマーガレットは唐突に一枚のカードを手元に呼び寄せて手に持つと

「ペルソナ！！」

と叫びながら手のカードを握り締めると其処には方に音楽プレイヤーをかけ黒い制服を着た茶髪の少女が現れる

「……」

少女は何も言わず足についているホルダーから銃を抜くと何故か自分に向かい構えると

「ペルソナ！」

マーガレットと同じ言葉を吐きながら引き金を引いた

「な、なんだこいつは……」

オルタが驚きの声を上げる。そこに現れたのは豎琴を持った女性

ベースの人形みたいなものだった。

彼女の名は通称ハム子。ペルソナ3の女主人公である。また彼女が召還したペルソナの名はオルフェウスといい患者の最初のペルソナである。

本来ならばオルフェウスは外れであるのだが、この狭い空間、またオルタ程度ならばこれくらいしか手加減が出来ないのである

「アギ」

少女とペルソナがなにかを言うとオルタが火に包まれる。オルタはなすすべなくその炎に焼かれていったのである

因みに手加減されているが威力がとんでもないのか、焼かれている場所では岩が溶けていたりする

「あっけないわね」

マーガレットがつまらなそうに呟くが七星は洞窟が崩壊しないことに安堵していた。するとそこに紅那岐たちが合流した

「何故にマーガレットがここに？」

ついで早々紅那岐がマーガレットがここにいるのが分からず尋ねると

「すずかがいるところに私はいるわ」

「・・・お前試作の宝石剣つかってここまで来たな」

頭を抑えながら紅那岐が溜め息を吐く。マーガレットは今まで何処で過ごしているかといえば別荘の中である。

別荘は今衛宮宅においてあるので、ここに一瞬で来るには転移か

なんかをしなければいけないだったのであるのだが、そこで取った行動が紅那岐が試しに作った宝石剣である

紅那岐の宝石剣はいまだ平行世界の運用の理論が上手く組みずじまにいたが、場所の転移という形は出来るという仕様でそれを使ってここまで来たのである

「それにしても、私を楽しませてくれる子はいないかしら？」

「・・・作者に頼め」

もうどうでもいいと言った感じで疲れたように先を目指し進みだした紅那岐の背中は哀愁が漂っていたとか

十

十

十

「貴女は強いのですか？」

進んでいる最中にセイバーが尋ねると

「私の強さが分からない内はその質問は死亡フラグよ？」

「なっ!？」

激昂しそうになるセイバーを七星と恋が羽交い絞めにしてとめる

「お願いだから突つかからないで！マーガレットとめられるの現状  
すずかだけなんだから」

「戦ったら死ぬ」

それだけ言っても分からないセイバーは終始頭に？を浮かべていた

十

十

十

「マーガレットが洞窟崩さないで本当によかった」

「気にしすぎだよ紅くん」

「俺やお前らはいいけど士郎達が終わるだろうが」

「あ・・・」

「忘れてたのかよ」

「じめんね？」

「いいけどさ・・・はあ」

紅那岐の心労度が10上がった

第十六夜 やってきました理不尽（後書き）

レティ「やってきました理不尽ことマーガレットです」

トール「・・・あの超越者なみに強い子が全力で倒すのがやっど？」

レティ「うんw設定上成長するからどうなるか想像もつかないけどw」

リース「理不尽ですね」

レティ「だね。因みに今回使ったコミュは死神であり、死がペルソナ3主人公で悪魔が4の主人公だw」

アスカ「分ける意味あるの？」

レティ「いい質問だ、だがしかし意味があるから作った。簡単に言えば3主人公はミックスレイド専用で4主人公は物理専門、ハム子は魔法専門だよ？」

リース「でも、マーガレット単体でも魔法使えますよね？」

レティ「使えるけど気分の問題かな？まあいいじゃんw理不尽に常識など関係ないんだよww」

トール「こいつ、調子に乗って・・・」

レティ「では、感想ありがとうございました」

アスカ「ばいばい」  
「ノシ」



第十七夜 聖杯戦争の終わり（前書き）

長いようで短いFate編のクライマックス・・・しかし未だ終わりではないw

クリスマス？仕事ですがなにか？

てか、飲食店勤務の私は22日から修羅場です

学生だけど社会人の私は辛いww

ルビ振りの仕方を理解したけどめんどくせえw

## 第十七夜 聖杯戦争の終わり

「はあああつ！」

「ふっ」

士郎が手にもつ双剣で綺礼に切りかかるも綺礼は泥を投げ士郎を攻撃していた

「くっそ、厄介だなそれは」

「当然だろう？ 聖杯・・・この世の全ての悪の泥だ、貴様が食らえばそれこそ魂ごと食われるだろう」  
アンリ・マユ

聖杯から零れ落ちる泥それを使い攻撃する綺礼と双剣を使い戦う士郎ではどうしても距離的不利が存在する

当然士郎も投影を飛ばし攻撃をするがその場合はアンリ・マユの泥が実体化し影となり防いでいた。数を使えば倒せなくも無いが如何せん今の士郎の魔力量ではそれも不可能

凜の魔力を使えばそんな問題も解決はするのだが、今の凜は戦っている。宝石剣を使う凜なので実際は幾ら魔力を使おうが問題ないが、もし魔力を持っていかれたことにより凜が一瞬でも気がそれてしまおうものなら凜に待っているのは「死」である為、士郎も迂闊に魔力の無駄使いをすることが出来ないのである

「貴様はその程度なのか？あの切嗣男の息子と分かった時の私の歓喜は凄かったのだがな・・・失望したぞ正義の味方」

「てめえがそんな言葉を使ってんじゃねえ！！」

そして再び士郎は綺礼に攻撃をしていく

十

十

十

「Es last frei・Werkzung  
解放、斬撃  
」!

凜が呪文を唱えながらその手に持つ宝石剣を振るうと桜より呼び出されたアンリ・マユの影は無残にも消えていった

「なっ……!?!」

桜が驚きの声を上げる、当然だろうサーヴァントすら駆逐するそれを凜が手にもつ剣とは言いがたい剣が振るわれれば影が無残にも切り払われ消えていくのだから

「そんな筈

声は遠くに

Es erzahlt

Mein

私の足は

Schatten

緑

を覆う

mt Seite……!」

桜が再び影を呼び出し凜を攻撃しようとするれば、凜もまた手にもつ宝石剣を構え

「しっこい……!」

Gebuhr, zweihauder……

次、接続

……!」

宝石剣が無色だったのが七色の光を出し輝き、ありえないほどの魔力を迸る

「Es last frei・Eillesalve  
解放、一斉射撃  
」!

眩い光があたりを照らせば影は一瞬で消え凜を阻むものはいなくなる。そして凜は遂に桜の前に躍り出る

「うそ、そんなはず・・・」

桜の眩きと同時に再び数多の影が躍り出る

「まったく、凄いわね。こんな魔力量を人がもつなんて」

「それを、簡単に退ける姉さんはなんなんですか。私の今の魔力量は姉さんの数千から数万はあるはずなのに。なのにどおやって」

わなわなと震えながら桜は凜に回答を求める

「単純に力勝負してるだけよ？見て分からないのかしら」

「それがありません、姉さんが私相手に魔力量で勝つなんて。それにさっきから持つその剣見たいのから溢れるその光はまるで・・・」

声にならない声で言う桜。恐らくこれを知らず、またセイバーの宝具を知るとなれば言うだろう・・・『まるでエクスカリバーみたい』だと

「そうか、先輩の力で私限定で対抗できるものを作って」

「は？何言ってるのよ。これはコピーでもなんでもなくて、遠坂に伝わる宝石剣で名をゼルレッチって言うのよ」

「こいつ何言ってるんだ？的な顔をしながら影を駆逐しながら桜に答えを告げる

「ぜるれつち？」

「はあ・・・説明するのもあほらしいけど。

「あんたは今第三魔法のできそこないを使い魔力をほぼ無限に使えるのなら、私は平行世界を迷惑の一言で引つ掻き回す爺さんの第二魔法の泥棒猫コピーキャットつてところね」

そして、現れる影を宝石剣を振るい次々と倒していく凜

「それにしてもやっぱりオリジナルね、まさかここまで凄いつて・・・それを持っているあいつのほうが私は信じられないけど」

凜は宝石剣を振るいながら本来の持ち主を思い浮かべて苦い顔をしていた

「いい桜？そつしが無尽蔵ならば、私の場合は無制限で平行世界から魔力を集めて貴方に攻撃ができるの。いくなれば大空洞こくじゃない大空洞から永遠と魔力を集めて放てるのよ。更に言えばこれを使えば平行世界への壁も関係ないわ」

「そ、んな、でたらめな」

「そうね、デタラメね。でもね、これを作った人物はそれ所じゃないわよ」

数々の逸話を思い出した凜は苦笑いする

「私はね桜？自分が一度も恵まれているなんて思ったことなんてないわ」

桜が自分がどれだけの事をすごしてきた、姉凛と妹桜を比較している時突如として凛が言ったのであった

「今さら・・・恵まれていなかった、ですって・・・？」

桜の顔が見る見ると憎悪を交えた顔になる

「そんな言葉聞きたくない！そんな言い訳なんて聞かない！姉さんなんて・・・」

桜が何かを言おうとした時に突如として別の・・・桜が欲して止まなかった声が聞こえた

「桜！！」

「「士郎！？／先輩！？」」

突如として現れた士郎に二人は驚きの声を上げる

「士郎！？綺礼は！？」

最初に質問したのは凛であった

「どうやら俺達はかなりの時間かかっちゃまったみたいでな、あいつ等が到着して変わってもらったんだ」

そういう土郎であった

十

十

十

少し時間が戻り土郎と綺礼が戦っていた

「が・・・」

土郎が綺礼に向かっていこうとしたそのとき突如として土郎がこける、何度も立ち上がるうとするもその瞬間こけるのである。

何かと思い足元を見れば其処には泥が土郎の足を掴むように絡みついていたのである。とっさに干将で切ったが、そのことにより干将がまるで汚染されたように黒く染まってしまった為に破棄したが実際はそんな事よりも重大なことがあった

「（足が動かない！？）」

驚きは顔には出さなかったが、土郎が体を確認すると体には泥が付着しておりその部分は感覚が麻痺していたのである

「それに、あの男が道化切嗣と言つのが貴様を見て分かったのでな、もう終わらしてやろう」

「  
テ」

土郎が切れそうになり声を上げようとしたその時

「さらばだ、切嗣の贖作よ。ああ、漸く私は10年来の清算が出来る」





アーチャー

「士郎お前は何をなす為に来たんだ？」

紅那岐

「先輩、こんなところで寝たら風邪を引いてしまいますよ」

桜・・・そうだ！俺はこんな所で終わるわけには行かないんだ！しかし、一体どうすれば・・・

「士郎、貴方が私の鞘だったんですね」

セイバー・・・鞘？そうだ！この身に宿っていたものを思い出せ！10年、長い年月一緒にいたそれを作り出せないはずは無い！

「トレース  
投影、開始」

そして俺は作り出す彼女の最後の宝具を

Side End

三人称 Side

士郎が泥に飲み込まれた後、綺礼は苦戦している桜。ひいてはかつての弟子の凜に引導を渡そうと向かおうとした瞬間

「なにっ!？」

あたりを眩い閃光が照らすと同時に土郎が手を前に出し其処には黄金の鞘が鎮座していた

「貴様がなぜ・・・？」

驚愕に打ち震える綺礼をお構い無しに駆け抜けようとしたが体力がままならずその場で膝を突いてしまう土郎

「クツ・・・よもやアンリ・マユの泥を打ち払ったのは驚いたが其処までのようだな」

「く・・・そ・・・」

悔しそうに呟く土郎に救いは現れる

「よくやったな土郎、後は任せな」

雷、そう表現するしかない者が現れたのである

「貴様は・・・」

「よくやったな土郎。傷は治した、後もう一踏ん張りだ」

現れた金髪碧眼の紅那岐を見た土郎は、振り返ることなく走り出し一言

「任せた！」

そっぴい残し桜の元へと向かったのである

「貴様も転生者と言う奴か」

「そうだ、まあお前が知っている理由とかどうでもいい・・・辞世の句は読んだか？神への祈りは終わらせたか？さあ、終焉を迎えろ」  
そう言つて、紅那岐はただ綺礼を見据えるだけであつた

十

十

十

「そう、それなら後は桜を」

「ああ、連れ帰れば大団円だ！」

「先輩、先輩も私を否定するんですね」

桜がハイライトの無い瞳で士郎を見ながら呟く

「違う！桜、俺はお前を救いに来たんだ」

「もういい！全て消えて無くなれ！！」

癩癩を起したように桜が叫ぶと同時に数多の影が士郎達を襲つ

「くっ・・・あの子は」

凜がイラついた表情をしながら影を消している時何かを思いついたのか

「士郎！アーチャーの技つて使える？」

「遠坂いきなりなにをい」「いいから!」「あ、ああ基本的に理解は終わってるから」

「そう、……ってことで」

「なっ!? 危険すぎる!」

何かを相談していたようで凜からの提案に驚きと否定を交えた声を上げる土郎

「いいから!ここはやらせて」

「……分かった」

凜の眼を見た土郎は決して揺るがないそれを見て頷いた

「いいかしら土郎?」

「ああ」

「さっきから見せ付けないで!」

「今よ!」

「ソードパレルフルオープン  
全投影連続層写!」

桜が声を発した瞬間再び影が現れるとその瞬間に凜が指示を出す  
と土郎は投影による弾幕で影を貫いていく

「ブローケン・ファンタズム  
壊れた幻想」

再び士郎が何かを唱えると剣群が一斉に爆発しそこらかしこに閃光が広がり視界が閉ざされる

「！」

「ひっ」

視界が閉ざされた瞬間に凜は桜に向かって駆け出しており、桜もまた何か来ると怯え影を出していた

「……え？」

桜が間が抜けたような声を上げる。当然だろう、一瞬の隙を突いて自分を殺そうと思っていたのだが実際は体中に伝わるぬくもりが体をしめているのだから

「姉、さん……？」

「私はね、貴女が笑っていて、幸せならそれでよかったんだ」

桜が戸惑いの声を上げる、凜の体からはヌルツと生ぬるい赤い血が流れている

「ごめんね、勝手な姉で。

最後に、そのリボンずつつけていてくれて嬉しかったよ」

そういうと凜は力なくその場に倒れた

「い……や……いや……いやああああああ……！！！！！！」

桜の声が大空洞の中を木霊する。そこにいる士郎もまた悲痛な面持ちで立っていた

「先輩・・・わたし、私！」

「大丈夫だ桜、遠坂は死なない。死なせるもんか。だから帰ろう、桜」

懸命に桜に声をかける士郎。凜も心配だが士郎には今、味方がいるのだから

「ほれ、とつとと助ける。この場で先に凜を助けたら凜が空気読めなくて可愛そうだ」

後ろから聞こえる声に内心苦笑いしながら桜に近寄っていく士郎。桜は今その場で必死に影を拒絶していた

「桜！」

「ダメ！先輩来ないで！」

桜との意思とは無関係に影が士郎を襲おうとするが

「やらせんよ」

「はあっ！」

「はっ！」

「影ごときじゃ満足できないわね」

4人の声が聞こえたと思ったなら影が切り裂かれ、いかなる攻撃か掻き消えていく

「桜みるよ、遠坂や俺達だけじゃなくてこんなにも心配してくれる奴らがいるんだ・・・帰ろうぜ？」

士郎がゆつくりと近づいていく、士郎の手には今歪な短剣、まるで雷の形をしたようなそれを持ちながら桜に近づいていく

「大丈夫だ、痛くないからな俺を信じてくれ」

「先輩・・・はい」

確かな目で頷く桜を見て同じように頷いた後士郎は桜の前まで行くとその剣を開放した

「ルールブレイカー破戒すべき全ての符！！」

真名を開放した瞬間に桜は影から開放される

「桜！」「桜ちゃん！」「さくら」

三人娘が駆け寄る、今の桜は影の衣を纏っていたのを外したものであるから裸である

「さてと・・・ダ・カーポ復元する世界」

紅那岐が桜を他所に凜に近づき凜を回復する

「ゲホツ・・・ゴホツ！」

咽ながらも何とか意識を取り戻した凜を見た後紅那岐は大聖杯へと足を運ぶ。今の大聖杯は主無き状態にも関わらず、今まさに産み落とされようとしていた

「さて・・・あ！そうだった」

何かを思い出したかのように再び復元する世界を使うと魔法陣の先からはイリヤが現れる

「くっ・・・行き成り呼び出すなんてどういふ事よ！」

驚くイリヤだったが凜が回復して立っていたのを確認すると

「いやな、聖杯戦争は二度と起こらないように聖杯を完全にぶっ壊そうと思っただけど・・・御三家の意見も聞いとかなきゃなって」

白々しい態度ではあったが凜とイリヤは互いの顔を見た後頷いて

「いいわ、やってしまっただけ」

「こんなものに頼ったから悲劇は起きたから二度と起きないようにして頂戴」

凜とイリヤに賛同の意をとった後に紅那岐はサーヴァントに声をかける

「お前達もいいのか？二度と現界するチャンスが無くなるかも知れん



が

「はい、こんなものはあつてはなりません」

「桜に会えた、私はそれだけで十分でした」

その言葉に頷いた後士郎に向き問うた

「士郎、お前の始まりであるこれを壊すが構わないな？」

「ああ、俺が壊したいが今の俺じゃ無理だ・・・やってくれ」

士郎の返事に頷いた紅那岐は大聖杯に更に近づいていった

Side End

紅那岐 Side

さて、終わらせるか。二度とこんな下らないことが起きないように

「しかし、どうやって？私の剣でなぎ払うなら兎も角」

セイバーが質問してきた

「それじゃ、第4次と変わらない結果になるぞ」

ただ、破壊するだけじゃこいつはいつか復活してしまうかもしれない。まあ、これが元だから大丈夫そうって言えば大丈夫だが

「なに、世界と切り離れた後に完全に壊せばいいだけさ」

俺の答えが分からないように全員頭に？を浮かべていたがまあこいつを見れば分かるだろ

「起きろ乖離剣工ア」

俺が取り出したのは円錐状になった筒が3つ合わさったような剣

「なっ！？それは英雄王の」

「ちよっと！どついつことよー！」

驚く面子が聞いてくるが答えてやるか

「いやな、士郎達があいつの腕を切り飛ばしてこいつって地面に突き刺さったじゃん？」

頷く一同

「でだ、その後出来た孔が士郎達の固有結界ごと吸い込んだんだけどこいつだけ何故かその場に残っていたんだよね」

そう、あいつが吸い込まれたまでは良かったんだけどその後こいつ残っていたんだよ

「危ないから回収しようとしたらこいつから呼びかけてきやがった」

「・・・は？」xその場の全員

いやまあその気持ちは分からなくも無いんだけどね

「俺って何故か剣に愛されるのか剣の音が聞けるんだよ・・・まあ呼びかけないと分からないけど」

斬魄刀みたく確固たる意思では何だけど何となくね。グラムの時もそうだったし

「まあ、手に取ったら我オレを使うたる存在ゆえに許すとか言うて使えるようになった訳だ」

「ご都合主義万歳って感じだけどね。危なすぎて使いどころわからんけど

「規格外な」xその場の全員

「褒め言葉どうも・・・さて、あっちももう待てないようだから終わらせるか」

Side End

三人称 Side

ロードオブブラッド  
超べてを越えし神

紅那岐が何かを呟くと同時に紅那岐からは莫大な力が溢れてくる

「お前ら離れている・・・さて、エアよ初めて使うのがこんな場面だがまあ許せ。これもお前の力を誇示するものだと思えば安いものだろう？さて行くぞ・・・」

紅那岐がエアに語りかけ終わると同時にその剣に力を貯めていく、赤黒い魔力の奔流がエアを中心に巻き起こる

「この剣は天地創造をした原書の剣、ならば世界から切り離しかつ破壊するにうつってつけだろう」

上限が無いのかドンドンと力が溢れていく、エアもそれに呼応するかのようには高速回転をしている

「終わらせんぞ」

「綺礼!?!」

そこに現れたのは綺礼であった、その後紅那岐たちは綺礼に止めを刺そうとしたが間一髪で逃げられたのである

「はあ、泥に自ら飛び込んで自壊したと思ったがまさか桜の変わりに主になるとは・・・ゴキブリ並みに執念深いな」

「黙れ」

「まあいいや、お前もここで終われ。いい加減つまんねえ拘りにしがみついでいて疲れただろう?」

哀れみの視線で告げる紅那岐に綺礼は反論しようとしていたが紅那岐は無視し最後の攻撃を準備する

「さあ！終焉だ！世界を無<sup>オーバーロード</sup>に帰す・・・」

英雄王の開放とは違う最初の一小節それは天と地を話し新たな世

界を作るための一撃。故にこれは世界と別れ無にかえる技である

「エヌマ・エリシュ天地乖離す開闢の星!!!」

そして放たれたそれは聖杯と綺礼を破壊し全てを無に帰したのであったが・・・

「いつけね・・・次元に穴が開いちゃった」

「やりすぎだ!」xその場の全員

なんともしまらない終わり方だったが、宝石剣で穴を直した後洞窟を出て行ったのである

## 第十七夜 聖杯戦争の終わり（後書き）

レティ「綺礼はなんとなくセイバールートの士郎戦と全て遠き理想アヴァロ郷を出したいが為に出したただの引き立て役だったのである」

トール「ものすごくどうでもいいわね」

レティ「うっせうっせ！」

リース「やっと主が帰ってきますね」

レティ「恐らく次回でFate編終われると思うけど・・・」

アスカ「はぎれわるいね？」

レティ「私自身が無計画だからわかんないw」

トール「はぁ・・・」

レティ「では、感想ありがとうございました」

アスカ「ばいばい」ノシ

第十八夜 新たな運命が紡ぎだす（前書き）

さて、F a t e 編が完全に終了！

しかしながらこの後にh o l l o wの話を一っだけ書こうか悩み中

それ以外にも書く話が一っあるから帰ってからの話がまだ書けない

w  
w

## 第十八夜 新たな運命が紡ぎだす

洞窟から出てきた紅那岐達に唐突にセイバーが語りかけてきた

「紅那岐、よろしければ私と戦ってもらえませんか？」

「は？」

紅那岐の『何言ってるんだこいつ』といった表情で間抜けな顔をしている

「今回、私はまともに戦っていませんでしたので……」

「いや……まあ……けど、戦いにならんぞ？ランスですら素手で倒した俺にお前が勝てるわけ無いだろ？」

落ち込むような顔をしながら呟くセイバーに事実のみを告げる紅那岐だったが、その言葉にセイバーはorz状態で更に落ち込むのであった

「はぁ……一撃勝負だ」

その光景を見ながら溜め息を吐きながらそう告げるとセイバーは顔を煌かせ喜びの表情をする

「七星、すずか結界準備を。士郎達は離れている」

再びすずか達に指示を出すと二人はある程度距離を取りお互いの獲物を出す



「紅那岐のそれはテイルウィングの聖約ですか」

「ああ、お前の約束された勝利の剣にぴったりだろう？」

紅那岐が使う剣はセイバーのエクスカリバーと同じ輝きを持つ黄金の剣テイルウィングであった

「さて、セイバー遠慮はいらん、殺す気で来い」

剣を構えながら告げる紅那岐にセイバーは頷く

「ええ、貴方相手に遠慮はできない。なにより私の最後の一撃です全力を超えた一撃を貴方に……はああっ！」

そしてエクスカリバーに魔力を貯め出す

「さて、俺をそれに答えよう……テイルウィングの黄金色の聖約よ！」

セイバーの姿を見て頷いた後紅那岐もテイルウィングに魔力を貯めだした

「約束された……」

「黄金色の（テイル）……」

二つの黄金の光がその場を支配する。見ているものはその輝きに目を奪われていた

「勝利の剣……！」

「ヴィンゲ聖約！！」

そして世界は黄金に支配され全てのものの視界を占領した。光が収まり観客としていたものが視界を取り戻し場を見れば其処には剣を振るった状態のまま佇む二人がいた

「どっちが勝ったんだ？」

士郎がぼつりと呟くと二人が動いた

「私の負けですね」

「俺の勝ちだ」

二人とも剣を収め観客達の下へと向かう

「セイバーの負けって一体どういうことなんだ？」

向かってくる二人に士郎は質問する。他の面々も同じような疑問を持っていたので黙って聞いていた

「簡単です。私の攻撃はクナギの攻撃によつて完全に断たれてしまいました。クナギはそのまま私も攻撃できた筈なのにそうしなかった・・・これでお分かりいただけますか？」

満足そうな顔をしながらセイバーはことの顛末を話す。聞いていた者もそれ以上の説明を求めず唯頷くだけであった  
そして分かれの時がきた

「これで全てが終わりましたね」

「ああ」

「セイバー本当にいいの？」

「ええ、私はもう囚われない。アーチャーの言葉ではないですが答えを得て、それがどれだけ尊いものかも分かりました  
そして、友とも和解できた・・・これ以上を望むのは」

満足そうに、しかし多少の何かを残したような顔をするセイバー

「なあセイバー？お前は士郎と共に生を楽しみたくは無いか？」

突然士郎達の後ろから声をかける紅那岐。なんかアーチャーの時にも同じことを言っていたような・・・

「どつという意味ですか？」

「そのままさ。士郎と共に生き、士郎と同じように寿命で死ぬるならばお前はどうしたい？」

怪訝な顔をしながら問うと、まじめな顔で返す紅那岐

「しかしそんな「素直になれ」・・・もし、許されるのならば私は士郎と共に生きたい」

紅那岐の一言により自分の本当の気持ちを出すセイバーの答えに紅那岐は唯一言「そうか」と呟いて下がっていった

紅那岐の行動に訳が分からず首をかしげるセイバー・士郎・凜だ

つたが分からずじまいなので気にしないことにして再び向き直る

「最後に士郎……」

「ああ、なんだ？」

「……士郎、貴方を愛している」

それだけ言って消えて言ったセイバーに士郎は恥ずかしげに頬を掻きながらふと隣から何となく黒い何かを感じ見てみるとそこには……アカイアクマ がいた

「と、遠坂？」

冷や汗を流しながら凜に語りかける士郎に凜は

「ふん！もてていいわね！」

とふてくされていたのであった。何とかなだめつつ帰ろうと二人が振り返ると

「……は？」

間抜けな顔と声をだしてしまふ

「え……え？……ええええええつ！？」

驚きの声上がる。それはそうだろう、そこには今しがた分かれたはずのセイバーが顔を真っ赤にして俯いていたのだから

隣にいる紅那岐は悪戯が成功した子供のようニヤニヤしていたが

「ちよ、なんで!?!」

「え、あ、その、え、ええ!?!」

凜はその展開になんとかついて行き質問し、士郎は思考がまとまらず言葉になっっていなかった

「ハハハ! いやあ、ここまで混乱してくれるとは」

笑いながら答える紅那岐に凜が詰め寄り詳細を聞いた。因みにこの間セイバーと士郎の間には気まずそうな空気が流れる。当然だろう。何せ告白をして分かれたと思ったら振り返っただけの場にいるのだから

「はあっ!?! じゃあ何あんたは一度死んで甦ったって!?!」

凜が紅那岐から詳細を聞かされ素っ頓狂な声を上げる。紅那岐は基本的には転生者と言うことを隠さない。まあ、進んで話はしないが

「おう。アルトリアがいい証人だな。なにせ今のアルトリアは完全に人間だし何より神にあつたからな」

「本当なのセイバー!」

「え、ええ。私も本物に会いましたがあの神聖度は間違いなく」

ではここでセイバーがここに来たときの事を説明しよう

+

+

+

セイバーとの問答を終えた紅那岐はすずかに近づくと

「悪いがアルトリアの戸籍用意といてくれ」

「いいけど。まさか紅くんがここまでやるとは思わなかったよ」

苦笑いするすずかに紅那岐も苦笑いで答えるとすずか達の前から消える

「トール！」

「なによ」

突然現れる紅那岐に驚くことなく対応するトールに紅那岐は自分の目的を告げる

「あんだ本当にとんでもないこと考えるわね」

「かまわんだろ？あいつの公績を考えれば」

「いいけどね・・・じゃあ！行きなさい！」

トールが手を上げると同時に紅那岐の足元には転送魔法陣が現れ紅那岐は消えていった

+

+

+

「少し夢を見ていた」

「夢ですか・・・何者ですか！ゲペラ」

王と騎士の会話に突如誰かが割って入ってきて、騎士を殴り飛ばした

「貴方は・・・ああ、夢の続きですか」

「そうだ、今はただ眠れアーサー・・・いやアルトリア」

突如の乱入者に言われ再び永遠の眠りにつく少女を見届けた青年は騎士の下へと近づくと

「苦手だが言ってもらえん・・・記憶を少し弄らせて貰うぞ」

騎士に何かを施した後、青年は少女を抱え魔法陣を展開し消えていった

後に起きた騎士は王は天に召されたと王に使えていたもの全員に継げたのであった

+

+

+

「うっ・・・ここは」

気がついた少女アルトリアは自分が知らない場所にいるのを怪訝に思いふと何があったかを思い出していた

「そうだ私は・・・ここが死後の世界だとも言うのか？」

あたりを見渡すアルトリア、されどそこはただ白い空間であった

「起きたかアルトリア」

ふいに声をかけられ振り向くとそこには先ほどの夢に出てきていた青年がいた

「確か・・・クナギでしたね」

「ふむ、英霊の記憶と王の意識がごっちゃになって多少混乱って所か」

「英霊・・・そうだ私は！」

そこで全てを思い出したようにはっとするアルトリア

「思い出したか？」

「え、ええ。しかしここは一体？」

「お前が言っただろうが、死後の世界だと」

「それならば貴方は一体・・・」

分からず素直に聞くことにしたアルトリアは紅那岐から自分の事を教えて貰った

「まさか二度目の生が許されるとは・・・」

「まあ、神の勝手な気まぐれだな」

少し会話をしているとそこに隻眼の少女が現れる



「おう、デイン。終わったか？」

「ああ、しかし貴様も業が深いな」

「構わんだろうが。ツールはぶきつちよなのか一人しか出来ないからな」

「構わんがな。さてアルトリア・ペンドラゴンよ」

紅那岐と会話をしていた少女が行き成りアルトリアにふつたものだからビクツと反応することしか出来なかったアルトリア

デインと呼ばれた少女はその行動に対して興味を示さずそのまま続けた

「さて、お前はこれよりその姿のまま再び生きてもらうこととなった」

事実のみを告げる少女の言葉にアルトリアは訳が分からず聞き返してしまつた

「どういうことですか？」

「そのままの意味だ。紅那岐から聞いたのであるっ？ならば貴様もまた同じような存在になるだけだ」

威厳を持ちつつ答える少女の言葉に困惑してしまうアルトリア

「お前に聞いただろう？ 土郎と共に生きたいかって？ だからお前に二度目の生を上げるってんだ」

紅那岐の説明にやっと理解が追いついたセイバーは驚くしかなかった

「さて、能力だが生前と英霊として持っていた力を十全に使えれば十分だろう。元々に持っていた加護等もあればいけるだろうしな・  
・では、行くがいい」

パチンと指を鳴らすと足元に魔法陣が展開されていった

「助かったよデイン」

「こんな時くらいはせめてオーデインと呼ばんか」

少女から名を聞いたセイバーは改めて驚いていると突如として紅那岐が呟く

「さて、告白して消えたと思ったお前が振り向いたらいたとなるとどんな反応をしてくれるかな」

「なっ！」／／／

紅那岐に言われ思い出したのか顔を真っ赤にしてうろたえていたが既に転送は始まっており何も出来ないでかの元へ向かったのであった

十

十

十

「と言っわけだ」

紅那岐からアルトリアについて説明を受けた面々は驚く、それ以外の反応が出来なかったのである

「し、士郎……」／／／

「お、おう……」／／／

顔真つ赤でお互いを見合っている二人はもうなんていうか、アレ  
だとしか言えなかった

「さてと……ことも終わったし。アルトリア」

突如として呼ばれたアルトリアはこれ幸いと言った感じで紅那岐の  
下へときていた

「な、なでしょうか」

未だに恥ずかしさが抜けないのか多少どもりながらも紅那岐に聞  
くと突如として紅那岐から剣が渡された

「こ、これは勝利すべき黄金の剣！何故貴方が！？」

「あゝ、その説明しなきゃならんか……」

そう言って再び紅那岐は語りだした

十

十

十

紅那岐 Side

さてと、とつととアルトリアを迎えに行かなきゃならんのに……  
トールの奴送る場所間違えやがって

「どうするかな・・・ん？この湖って」

ふと自分がいる場所が気になって周りを見てみるとそこには湖があっただがこれって・・・

「ああ、やっぱり精霊がいる幻想郷の近くか」

まさか、トールの奴これを狙って・・・無いな、あいつにそんな細かいことできるわけ無い

「ついでだし、いいや。お邪魔します」

宝石剣使って幻想郷にお邪魔すると一人の精霊が俺の下へと来た

「だれだ？」

・・・精霊ってこんなのんびりな声だすんかよ。まあ精霊、ひいては神って見る奴によって姿が変わるって言うからな。てことはトールと違って見る奴が見れば髭もじゃなオッサンかな？あの征服王みたいな感じで

「どうしたの？」

っと考え事していた再び聞かれたから答えなきゃな

「悪い悪い。用事だが・・・勝利すべき黄金の剣くれ」  
カリバーン

我ながら横柄な態度だが別にかまわんだろ

「だめ〜。ない〜」

ああ、そうか。そういえばカリバーンとエクスカリバーって元は一緒に作り直したのがエクスカリバーって話もあるしな

「んじゃ、作り方だけでもいいや」

星の願いの結晶だけならユグドラシルにお願いすればくれるだろ

「ん〜、貴方がもつの〜？」

「うんにゃ、アルトリアにやろうかなって」

「どうして〜？既にそれを超えたのもってるよ〜？」

確かにエクスカリバー持っていれば既にいらないだろうがな

「あの少女にエクスカリバーはもういらんさ、戦いはあるだろうが彼女が手にすべきはあの選定の剣のほうが相応しいからな」

これから転生するが、あの世界でエクスカリバーを振るうことはもうほとんど無いだろう。いざとなったら士郎に作って貰えばいいしな

「ん〜・・・ちょっと待ってて〜」

そう言って精霊はどっかに行ってしまったが、待つか

「はい上げろ〜」

精霊が渡してきたのはカリバーンなんだが・・・何故にある？

「なんか、世界が渡せって〜」

世界って世界の意思か？まあいいや

「サンキュ、じゃあ帰るわ」

そう言って帰ろうとしたら

「待って〜、貴方にも渡せって〜」

声をかけられて振り向くと精霊が再び俺に渡してきたのは指輪だった

「これは・・・？」

「それも世界がいつか必要になるからって〜」

「???まあ貰っていくよあんがとね」

「ばいばい」

こうして俺は幻想郷から抜け出してアルトリアの元へと向かったんだがああ騎士が微妙に邪魔だな・・・こういうときは気絶させるのが一番だな

「夢ですか・・・何者ですか！ゲペラ」

なんか、カエルがつぶれたような声が聞こえたが気にはしないようにしてアルトリアを連れて行くか

その後、トールが転生者を二人も抱えるの無理と言つもんだから仕方なしにデインの所に行ったんだよね

Side End

+

+

+

「こつという訳で俺はカリバーンを手に入れて、持ってきたってことな」

「気絶させるのに殴り飛ばしたのかよ！」

士郎がツツコミを入れる

「いいだろ別に」

ツツコミを軽くスルーする紅那岐にカリバーンを受け取ったアルトリアはとつと

「ありがとうございます、貴方の期待に答え二度とこの剣を失わないようにします」

感慨深くその剣を抱くように抱えるアルトリアに紅那岐は満足そうに頷くと

「さて、すずか。アルトリアの戸籍は？」

「ばつちりだよ！流石に時間が足りなくなりそうだから別荘でちょっと細工したけど気づかれぬ自身はあるよ」

すずかの晴れやかな顔とは裏腹に紅那岐は苦笑いしていた

「まあ、いいや。アルトリア」

「はい」

「お前のこの世界の名前だが、アルトリア・P・セイバーと名乗れ」  
つまるどころ、アルトリア・ペンドラゴン・セイバーである

「何から何までありがとうございます」

「気にするな、やりたい事をやっただけだ」

「何かお礼を・・・ああそつだ」

そついうと突如エクスカリバーを取り出すアルトリア

「この剣を貴方に」

「ティルヴィング持つてるんだが？」

「知っています。ですが私に出来るのはこれくらいしかありません  
し」

そうして剣を差し出す形で止まっているアルトリアに「ふう」と  
息を吐きながら紅那岐は受け取る

「そつか、では貰っていいつ」



一言そういった後宝石剣をだして

「じゃあな！縁があつたらまた会おう！」

宝石剣で空間を歪め自分達の世界へと紅那岐たちは帰って行った

## 第十八夜 新たな運命が紡ぎだす（後書き）

レティ「Fate編いかがでしたでしょうか？神様転生チートなら他の人も転生させていいんじゃないかね？って結論に至ってセイバーを転生させてみました」

トール「私の設定酷すぎない？」

レティ「お前って神話とかでも暴力者ってイメージしかもたれてないから酷くない」

リース「それにしても主はまた宝具を持ちましたね」

レティ「使う機会ないけどね」

アスカ「じゃあなんで？」

レティ「前にも行ったけど理由はあるから待ってね？」

アスカ「は〜い」

レティ「次の話はFateには関係ないけど書きたい話を書こうと思います」

トール「前書きに書いていたhollow？」

レティ「違うよ。まあ書いてからの楽しみしてください」

リース「では、感想ありがとうございました」

アスカ「ばいばい」

コミュを作ろう!! (前書き)

時系列的には第十夜の説明会というなの〜でみんなにお休みを言った後になります

因みに本編とは関係ありませんので

「コミュを作ろう!!」

「紹介するね、マーガレットって言うんだ」

別荘に来ていた一同はさすがに紹介されたマーガレットを見て何この人と言った感じで怪訝な表情をしていた

「よろしくね」

感じ的には年上のお姉さんと言った感じなのだがどういいうわけか全員は緊張していた

「・・・P4？」

「うん！ドクターに教えて貰ってやってみただけど面白かったよ！」

紅那岐の問いに対して興奮気味で答えるすずか

「しかもね、強さで言えばドクターの娘の乱ちゃんと同じくらいになったから名称を【力を超越せし者】ってなすけたんだ！」

なんか聞き捨てなら無いことを興奮気味で答えるすずか

「オーケー、とりあえずそれはいいとして・・・強さが乱さん並？確か乱さんって貴史さんより強かったはずだけど？」

「ドクターと作ったらこんな風になったんだよね」

笑顔でさらりとんでもない事を言うすずかに軽く戦慄を覚えながら紅那岐は気にしないことにしたのかマーガレットに語りかける

「マーガレットはペルソナ召喚できるのか？」

「とうぜんでしょ？まあ、コミュを作らなければ永遠と弱いのか呼べないけどね」

女王様、そう表現できる態度に何故か反感は起こらず紅那岐は頷くと

「その口調って戦う時だった気がまあいいや、じゃあ早速・・・いやまてよ？」

早速みせて貰おうとしたがなにやら思いついたのかニヤリと笑うとマーガレットに語りかける

「なあマーガレット」

「なにかしら？」

「お前さ・・・原作の世界に行ってみたくないか？」

そう告げるとマーガレットも薄く笑い

「いいわね、行ってみたいわ」

「私も行く！」

すずかも反応した後準備を整えると

「さてと、行きますか」

「うん／ええ」

二人が頷くのを確認すると宝石剣を使い世界の壁を歪め世界を渡った

十

十

十

「到着つと・・・ここは？」

「なんか棺桶があるけど・・・影時間かな？」

「そう、これが」

到着した紅那岐たちが見たのは辺りに棺桶が鎮座した場所であった

「ふむ、どうやらP3の世界に来てしまったようだな。マーガレット、感想はどうだ？」

「どつと言われてもね」

「なんでP4じゃないの？」

「すまん、適当に開いた」

紅那岐のあまりの適当さに頭を抑える二人だったが突如として気配を感じた

「紅くん今のつて？」

「マーガレットのぼうが分かるんじゃないか？」

「ええ、シャドウね」

気配がするほうへと向かうと何かの建物があり、そして上から気配がするのでひとつとびでビルの屋上にたどり着くと其処には片目を覆つくらい前髪があり耳に肩に音楽プレイヤーをつけた少年とそれに守られている少女がいた

「おりよ？丁度召喚シーン？」

「みただね……でも銃があつちまで飛んでいて危ないね」

「しょうがないわね……」

マーガレットがペルソナを召喚しようとしたのを紅那岐がとめた

「どっぴいっこと？」

「これからあいつが召喚するんだから先に召喚したらダメだろ？俺が行ってくる」

そして影から腕を生やし仮面を持っている異形に向かっていく

「え？誰……」

「……」

啞然としている二人を他所に紅那岐は手加減しながら攻撃する



「その少年！その銃を取って来い！」

紅那岐が少年に指示をすると少年は我に返って銃を取りに行く  
徐に自分に向けだした

「よつと、お？いよいよか」

なにやら感慨深げに回避しながら少年を見ている紅那岐

「オ・・ル・・フェ・・ウ・・ス」

少年が何かを呟きながら引き金を引くと其処から豎琴を持った人  
形みたいなのが現れる

「あとはよろしく」

紅那岐が引くと同時にオルフェウスに異変が起きる、突如オルフ  
エウスの中から腕が生えてきたと思ったら内から破られたように新  
たなペルソナが現れた

それはまるで死神のような格好をしており、手には剣を周りには  
棺桶を浮かせ顔は骸骨のようなものをつけていた

「タナトス k t k r ! ! ! 」

「すずか落ち着け」

「そうね、少し引くわ」

二人が若干引いていると死神のペルソナはシャドウを駆逐し元の  
オルフェウスに戻っていった

「あの、助けていただいてありがとうございます」

少女が困惑気味にお礼を言ってきたので「気にするな」と返すと少年がやってきた

「ありがとう」

「(マーガレットお前が握手したら?)」

「(急にどうしたの?)」

「(ええ、意味が分からないわ)」

「(こいつのコミュ作れたら面白くね?ww)」

「(いいね/いいわね!!)」

「あー・・・少年、このお姉さんが握手したいそうだがいいか?」

少年に確認すると頷くとマーガレットと握手した後紅那岐達が確かめると確かにコミュが作成されたとの事だった

そして、少年達が後ろを振り向いている一瞬の間に紅那岐達は次の世界と渡った

+

+

+

「さてと、世界を渡ったはずなんだが・・・」

「また影時間だね」

「しかも、戦闘中に出くわすなんて」

「だ、誰!？」

突如現れた人間に驚きを隠せない茶髪の少女の二人

「あ、ハム子」

「ハム子じゃありません! 公子です!！」

ハム子が否定するが、ハム子はハム子だ。その後、先ほどの世界と同じように助けた後、再び世界を渡った3人である

十

十

十

「こんどこそP4か？」

「紅くんこれ」

「ああサンキュ・・・ってなんでメガネ持ってるんだ？」

「この世界はこれをつけないと」

「私は？」

「マーガレットはつけてないじゃん」

すずかの一言に落ち込むマーガレットを励ましつつ3人はあたりを見回す

「さてと、今度はどこだ・・・てか、よく都合よくコミュニケーション作れたな」  
「だね・・・あっちかな？」

「素焼きみたいなものだったのかも知れないわね・・・あっちじゃないかしら？」

あたりを見回しているとビルの方から気配を感じ向かう一同であった、その後には再び同じように対応し今度こそ自分達の世界に帰って行った

十

十

十

「面白かった！」

「ああ、楽しかったな」

「中々有意義だったわね」

3人とも満足げに帰ってきた後は遂にペルソナを召喚しようという話になりやってみると

「・・・は？」

3人の声が重なる、なぜならば召喚して現れたのはハム子であったのだからである

「ちよっ!?!なんでペルソナ使い召喚してるの!?!」

「しかもご丁寧にオルフェウスじゃん」

「知らないわよ！てか、何で私のペルソナがハム子なのよ！」

混乱する3人だったが、マーガレットに別のを召喚させようと交換させると今度は

「ハム男だな」（P3主人公です）

「だね」

「どうして・・・」

「しかも、攻撃しないし」

「どうなってんの？」

とりあえずハム男は置いておいて交換すると今度は

「ハムだな」（P4主人公）

「ハムだね」

「orz」

そして、この後複数回試してみたが分かったことは

「ハム子は魔法のみ、ハムは物理攻撃のみ、ハムに至ってはどつや  
つても攻撃しないな」

「ねえ、ハムについてなんだけどさ」

突如すかがポツリと呟く

「もしかしてミックススレイド専用じゃ？」

「「それだ！／それよ！」」

しかし、その後紅那岐達とコミュを發展させても

「可笑しいわね、初期ペルソナ意外召喚しないわね」

マーガレットが言うとおりのハム子とハムはどうやってもオルフェウスとイザナギしか召喚しなかったのである

ハム男に至ってはミックススレイドが出来ない状態である

「まさか、あいつらのコミュ發展させなきゃこれ以上の召喚できなかったりして」

引き攣った笑いをしながら紅那岐が可能性を述べると二人は「まさかあ」って顔をしながら同じような引き攣った笑いをだす

「マーガレット！今すぐ進めて来い！」

「命令しないで！けど行ってくるわ！」

「私も心配だから行ってくる！」

「俺はその間にこいつを調べとく！」

その後世界を渡った二人を見送った紅那岐は早速ペルソナ全書を調べだした

十

十

十

「「ただいま」」

「おう、お帰り。どうだった？」

「とりあえず、3まで上げて帰ってきたわ」

すずか達が帰ってきたので紅那岐は研究室からでて迎える

「そうか、俺のほうでも調べていたがどうやらペルソナの登録は済んでいたんでな」

そして紅那岐も調べていた結果を言う

「まずは結論だがまさかの通りだとおもう。こいつに登録されているペルソナだが次々と増えていったんでな、恐らく主人公達のコミュを上げないとお前が呼べるペルソナ自体は限られる」

「よく分かったわね」

「まあ、俺も魔導書とかは好きだからな。でだ、恐らく俺達のコミュが低くて主人公達のコミュが高くて逆になって召喚が限られると思う」

「つまりは、平均的に上げていくしかないって事？」

「ああ、それが先にあいつ等のコミュを上げていって後で俺達のを終わらせるかのどっちかな」

そうして、マーガレットの特異の症状の解析が終わり次はマーガレットの代名詞メギドラオンになったのだが

「ちょっとまとうか！俺消えるよ!？」

ターゲットにされている紅那岐から苦情が入るが気にせず打たれた

「メギドラオン!」

「ぎゃあああああつ!?!」

ギャグ補正のおかげで全身黒くなっただけで怪我らしい怪我が無い紅那岐であった

+

+

+

「そついや、あいつらのコミュってなんだったんだ？」

「それはね・・・刑死者・死神・悪魔だったわ」

「つまり、万能主人公を故に能力が高いから死神とか死に関するコミュなのかwww」

「それはそれで・・・」

コミュについて把握するとお互いいかにとんでも能力かを改めて確認したのであった



十

十

十

「そっぴゃ、コミュ進めたって言うていたけどどうやってやったんだ？」

「あゝ・・・紅くん恐らくなんだけどね？患者みたいに恐らく物語が進めばコミュが進展するみたい」

「本当か？」

「ええ、そのようね。私が終わらせたのはそれぞれP3系ならば大型を2体倒したまで。P4ならば千枝のペルソナを手に入れたところまで進めたら3まで上がったから」

「そっか・・・なあマーガレット提案なんだが」

「何かしら？」

「お前さ当分の間、別荘（こゝ）に残ってそのコミュあげないか？」

「理由は」

「今は必要ないかもしれないが、そのうち必要になるかもしれないからな。だからここに残れば時間的にかなり有利に上げられると思うんだが？」

「マーガレット、紅くんの言うとおりでよ？」

「はあ、貴女が言うなら従うわ」

「ありがとうね」

「でも、危なくなったら呼びなさいよ？」

「うん」

こうしてマーガレットは別荘に残りコミュを上げることが優先した  
のであった」

十

十

十

「それはそうと・・・あの世界の妹倒していいかしら？」

「やめなさい」

まさかの妹を倒すのに姉（全く違う存在）が出て行くわけにも行  
かずずかにとめられたのであった

## コミュを作ろう!! (後書き)

後書き座談会はなくし改めてコミュ紹介を

- ・愚者・・・転生者
- ・魔術師・・・リース
- ・女教皇・・・???
- ・女帝・・・???
- ・皇帝・・・???
- ・法王・・・オーデイン
- ・恋愛・・・恋
- ・戦車・・・???
- ・正義・・・ジークルーネ
- ・隠者・・・ヒトリ
- ・運命・・・アスカ
- ・剛毅・・・トール
- ・刑死者・・・P3の世界
- ・死神・・・P3Pの世界
- ・節制・・・???
- ・悪魔・・・P4の世界
- ・塔・・・???
- ・星・・・七星
- ・月・・・すずか
- ・太陽・・・???
- ・審判・・・紅那岐
- ・世界・・・コミュレベルマックスのマーガレット自身

因みに本編でも書きましたがマーガレットの召喚のルールは

・ペルソナ世界のコミュを上げなければ召喚できるものは限られる  
・また、幾らペルソナ世界のコミュを上げても他のが上がっていない  
ければ召喚できるものは限られる

となっております

秋代様すいません、勝手に設定を追加してしまいました

因みに私はP3は全てクリアしオルフェウス改も作っていますが、  
P4にいたっては借りたのをやり一週目でとまっていたりしますw  
w

**S t s への軌跡 Ep11 火災現場にいる傲慢王（前書き）**

これから再びS t s への軌跡となりますが、正直何話に及ぶか分かりません

また、どちらかと言うと外伝的なものを書きたいためですが

後は何だかんだでモンハン3G購入するので更新速度は遅くなると思います

Stsへの軌跡 Ep11 火災現場にいる傲慢王

紅那岐 Side

「おお！ギンガア~~~~！スバルウ~~~~！」

「ゲンヤさんうっさい」

「あなた、黙って！」

現在火災現場にて指揮を取っているのだが、この人ほんと娘の事になると見境がなくなるな

「お前！娘になんかあってみろ！跡形もなく砕いてやる！」

「俺に当たらないくださいよ」

「黙りなさいって言うてるでしょ！」グシャツ！ 夫を物理的に黙らせた

それにしてもここまでの火災つてもすごいなー

「それにしてもクイントさんがここに居るのがいまだ信じられませんよ」

「まあ、貴方の言うことも分かるけど隊長やメガーヌの分まで働きたいなって思ってるね」

本当に驚いた、型月の世界から帰ってきて最初の連絡がクイント

さんでそれが「復帰するから」だったからなあ

「さてと、俺も現場に行ってくるので。ライン、リース管制よろしく」

「はいです!」「はい!」

さてと、行きますか

+

+

+

「わるいごはいねえか〜!」

「ギヤアアアアツ!」

誰かいそうな気配があったから悪ノリして出たんだが、少女が驚きながら後ずさっちゃった、テヘツ・・・って少女が後ずさるのは良かったが像に当たってそれが少女に向かって倒れてきやがった

「チツ、オラ!」

像を蹴っ飛ばして助けたからいつか

「大丈夫か?」

「あわ、あわわ、あわわわわわ」

怖かったんだな、こんなに顔を青くして  
たの悪ノリの時の驚きが抜けてないだけだ

ん?電波が・・・まあいつか

違いますwあん

ゴドオオオン

ん？また誰か来たのか？まあいいがこんな崩れている空間で更に崩すようなまねをする馬鹿は誰だ？

「誰かいますか！」

入ってきたのは白い悪魔・・・なつかしいなあ

「悪魔じゃないの！！！」

心を読むなよ

「それよりなのは！お前は砲撃でしか道作れないのか！！！」

「にゃ！？？」

「『にゃ！？』じゃねえよ、建物自体が崩れてるのにお前の威力の砲撃撃つていて見る、たちまち全員生き埋めになるわ！」

「ごめんなさい・・・」

「まあいい・・・この子を頼む」

「分かったよ」

「俺はこのままもう一方の気配をたどっていくから」

こうして俺はなのはに青髪の少女を預けて離れた



十

十

十

「おつた！今度は・・・つて！ネタやる暇ねえ！」

次のネタを考えていたら足場が崩れて落ちていった

「あぶねえ！」

高速で飛んで助けたから良かった

「大丈夫か？」

「は、はい」

ひやひやしたぞ

「ナギ！」

お、ちょうどフェイトが来たか

「フェイトこの子をよろしく、俺は外に出て指揮を執る」

「分かった」

うつしゃ、あいつらも待ちわびてるだろ。ここに来るまでに大体の人物の特定が出来たのは大きいな。あいつらも痺れを切らしそうだからな

十

十

十

「お待たせ！」

「くーくん、中は？」

「ああ、大体の位置を把握した。リースとユニゾンしろ、あいつにデータを送っておいた」

「分かった！リースたのむな」

「了解」

「ユニゾン、イン！」

「特技隊の赤羽から現状いる救助を担当している魔導師へ、これより広域消火に入る！巻き込まれたくない奴はその場から離れる！」

はやてたちがユニゾンしている間に他の奴らを逃がす指示を出す

「よし・・・はやて！すずか！遠慮するな！一気に決めろ！」

「了解！！」

そして、二人が魔力を高めて

「いくで！氷の中で眠れ！アークテム・デス・アイセス！」

「マーガレット！『ええ、行くわよ』・・・ブフダイン」

はやてとすずかの魔法で全てが凍って火が消えるが・・・すずか

9 に対してはやてが1だな。・・・あまり前か

「ちよー！？すずかちゃんの威力なんやの!？」

おお、はやてがおどろいてらあ

「気にするな、てか気にしたら負けだ」

はやてを黙らせていると誰か来たな

「現場のEース達に感謝する。後は我々に任せて」

あ？今更来ておいて引けだと？嘗めんなよ？

「ふざけるな！今更きた貴様らがなんの役に立つといのだ！邪魔な雑種は消える！」

「なっ!？貴様！」

「雑種が吼えるな！我の前からとっと消えるがよい！」

あれ？なんか慢心王みたいな喋り方になってるんだが、まあいっか

「ふざけるな！所属と名前を言え！」

「ほう、我を知らぬだと？一度しか言わん、ありがたく聞け」

こうして俺が名前と所属を言うと面白いように顔を青くした馬鹿共

「さて、貴様らはとっと消えるか、下に下るか選べ」

そんな風に言つととつと帰つて行つた……つて帰るのかよ

「くーくん、ひどすぎへん？」

「雑種が……ん、んん。そうか？まあちょっとムカついたから切れたんだがな」

とりあえず、この後全てを終わらせてはやての家に向かつた俺達

十

十

十

「やっぱ、部隊持ちたいわ。みんな協力してくれへん？」

なるほど、機能から考えていたのはそれが。終わった後なんか複雑な顔をしていたからな

「もちろん！」

「友達だからね」

なのはとフェイトは協力的だなあ。

「くーくんたちは？」

おっと、考え事していたらふられたか

「俺達は簡単に言えば無理」

事実のみを言つと悲しそうな顔をしていた。なのフェイの視線が

刺さる刺さる

「落ち着けて、理由を言ってやるから」

そついうとこつちをガン見してくる

「俺達の所属がまず部隊ってのが一つ」

部隊がそのまま別部隊に吸収みたいなことはあるっちゃあるが、ほとんど稀だ。それこそ隊長が死んだとかならな

「んで、二つ目の理由が俺達の部隊は陸海空の全部の任務を担うからな、正直どこかの部隊に行くことができん・・・まあ部隊員の数が少ないのもあれだが」

俺達の隊舎って大きいほうだけど部隊員が6人じゃ意味がないんだよな

「そつか・・・」

「まあ、落ち込むな。方法はあるから」

「ほんまか!？」

驚くはやてだが、襟首もって揺らすな。気持ち悪くなるだろうが

「まあ、方法としてはお前達の部隊の監視だな。その名目の元各自で動いたって言えばいいわけが立つだろう」

まあ、好き勝手やっても俺達の部隊を弾劾できるやついないだろう

けどな

「そっか・・・まあその線で進めてもええか？」

「かまわんけど、一番意味があるのはお前の部隊なんだからオレを頼る前に自分でみつけるよ？」

そっとうと分かったと返事して話は終わったから最後に言ってやるか

「さてと、最後にだか」

ごくりと唾を飲む三人娘

「お前らよく男の前でそんな格好でいられるな？」

「「「へ？」「」」

自分達の格好を改めてみて自分達がどういう格好してるのか分かってみるみる顔が赤くなっていく三人娘・・・さてと、逃げるか。後ろで悲鳴見たいのが聞こえてくるがそれよりも前門の虎のほうに怖くて仕方ない

「紅くん？そっうのは先に言うんじゃないのかな？人に朝食を作らせといて・・・」

「ごめんなさい」

その後お仕置きは免れたがどうにかこうにか機嫌を直すのに苦労したと言っておこう。そこ！男の癖に立場弱いとか言うな！仕方ないだろうが！マーガレットとユニゾンしていたらあいついつの間

か実力がマーガレットの60%くらいまでなっていてがんばっていても勝てないんだよ！物理的に・・・

十

十

十

後日クイントさんから連絡が来て

「ああ、助けたのって娘さんだったんだ」

「ええ、それにしても貴方スバルになにしたの？帰ってきてからが  
んばるって言うって今までやってなかったシューティングアーツを習  
いだしたんだけど？」

「俺は別に？」

「それにあの時の事を聞くと高町さん？の事は嬉嬉として話すけど  
それ以外は顔を青くするんだけど？」

やっべ、アレがトラウマになったのかw

「きにしない方向で」

「まあいいけどね。そのうちいらっしやい。私も体を鍛えなおして  
いる最中だから」

「分かりました。時間が出来たら行きます」

こうして長いようで短いGWは終わったのであった

十

十

十

「あ、来月お前らテストか・・・勉強みてやるぞ」

「「「え？」「」」

なんか、絶望的な顔をしていたのは何でだろう？



S t sへの軌跡 Ep11 火災現場にいる傲慢王（後書き）

レティ「さて、当分はS t s前のフラグ作りです」

トール「まさか、すずかがあそこまで……って私より強い？」

レティ「確実にね」

トール「orz」

レティ「因みに単体ですずかがマーガレットの60%なのでこれから更に上がっていくからねw」

トール「紅那岐エ……」

レティ「うんw紅那岐が哀れだw」

アスカ「じゃあ、かんそうありがとー」

ヒトリ「バイバイ」ノシ

紅那岐の修行 VS 真祖・殺人貴（前書き）

すずかとの差を埋める為の処置 W

MH3Gの水中戦は漸く慣れてきた

紅那岐の修行 VS 真祖・殺人貴

紅那岐 Side

「おつす、アルク、志貴」

「おひさー」

「やあ」

突然現れたって言うのに驚かなくなったなこいつら、久々に来た型月の世界だがどれくらい経っているやら

「突然どうしたの?」

「ああ、実はお願いがあつてね」

「お願い?」

志貴が聞き返してくる

「ああ・・・お前らと殺し合いがしたくてな」

殺気を放ちつつ語り掛けるがアルクと志貴はなれたものか警戒してるだけで通常と変わらないように語り掛けてきた

「急にどうしたのよ」

「ちつとな、強くならなくちゃいけないね」

「すずかとの差が一番堪えた理由だけど後は、あの人と戦うのは必然だってノルンも言っていたからな」

「まあ、あなたに治してもらった恩があるからいいけどさ」

「アルクエイドいいのか？」

「あの目を見てみなさいよ、本気よ？ だったら、答えてあげなくちやね」

「助かる」

さて、ここで戦うのは酷すぎるから移動するか

「さていよ」面白そうなことをやっているな「・・・クソ爺が」

移動しようとしたら突如現れたクソ爺ことゼルレッチ

「相変わらず言葉が悪いの」

「あなたに対して礼を尽くすギリが無い」

「まあよい、ではここじゃ被害が大きいかから移動するか」

そう言っつて宝石剣を取り出して俺達は移動した

「ここなら誰の迷惑もかからんぞ」

移動した先は何も無い荒野が広がる世界であった

「さてと、どっちと殺るの?」

「両方だ」

「・・・本気?」

「ああ、それくらいじゃないと意味が無いからな」

いや本当に、噂によると殺したらしいしアルクを

「今の私ってあなたのおかげか力を100%使えるわよ?」

「知っているよ」

直すついでに吸血衝動を改善したからな。どうやってかはご都合主義とを考えてくれ

「まあいいわ。志貴やるわよ?」

「やれやれ」

二人が準備して此方に向き直ったので俺も準備するか

「グラム・タービュランス・バースロードオブブラッド神雷招来・超べてを越えし神」

此方も最大の状態で挑むしかない

「さあ・・・始めようぜ!」

俺が駆け出すとあちらもこっちに向かってきた

Side End

三人称 Side

「はぁ！」

「シッ！」

最初の一撃は紅那岐と志貴の一撃が互いに弾かれるところから始まった

「私を忘れないでね！」

「忘れたわけじゃねえよ！」

一瞬の隙も見逃さないアルク達に紅那岐も何とかついていく

「それ！」

「ぐっ」

紅那岐が苦悶の声を漏らす。当然だろう今のアルクは真祖の力を100%発揮できるのだから

吸血衝動を抑えたアルクの実力は30%、その力だけでもサーヴァント2体分であるのだから今のアルクの実力はどれほどかも想像できない

- 閃鞘・八点衝 -

「くうっ」

アルクに吹き飛ばされると其処に待っていた志貴に無数の斬撃を与えられる紅那岐

「ぎっけんな！」

紅那岐が声を出すと同時に隙とは言えない一瞬の硬直状態の志貴を切り払いお互い再び距離を取った

「きつつ・・・」

「当然よ、私達相手にあんた一人で戦ってるんだから」

「まだやるのか？」

紅那岐は答えずグラムを戻し今度は二つの黄金の剣を出した

「ちよつと！？あんた宝具いくつ持つてるって言うのよ」

「それに、右側の剣・・・あいつのそばそばにいる子の剣に似ているな」

紅那岐が取り出したのは黄金色の聖約と約束テイルヴィングされた勝利の剣である。  
エクスカリバー

志貴が反応したエクスカリバーのほうを見て紅那岐はニヤリと笑う

「そうか、あいつ等はお前とも会っていたのか。しかもその反応を見る限りあいつと戦ったな？」

「知っているのか？」

「ああ、何せこいつはお前が似ているって言った子からじかに貰った剣だ」

それだけ言うと志貴はなんとも嫌そうな顔をした

「そうか、あいつみたいな正義の味方と言うわけか？」

「ちやうよ？俺はどちらかと言うとお前よりだし。・・・まああいつのあり方自体は否定はせんが」

それだけ言うと志貴は突如として包帯を取った

「おいおい、どうしたって言うんだ？」

「なに、嫌なやつを思い出してしまったんで・・・悪いがその憂さを晴らさせて貰う」

それだけ言うと志貴の攻撃が鋭くなった

「くっ・・・いつまでもやられてたまるか！」

気合い一閃紅那岐が剣を振るうと志貴は弾き飛ばされるがその隙を狙ってアルクが攻めてくる

「舐めるな！」

「くっ」



しかし、アルクの攻撃が分かっていたのか紅那岐も迎撃する

「はああああっ!」「」

「やああああっ!」

そしてお互いぶつかり合っていた

+

+

+

それからどれくらい戦っていたかは分からないがお互いかなりボロボロになっていた

「はあ・・・はあ・・・」

「私達二人あいてによくできるわね」

「ああ・・・そうだな」

されど、1対2の状況では流石に紅那岐の方が分が悪いのか二人に対し紅那岐のほうは息も絶え絶えである

「さてと、終わりかしら?」

「アルクエイドまだやるのか?」

「クナギも言っていたでしょ?殺し合いだつて」

そこは元人間と人外の違いなのか割り切った言い方をするアルク

に志貴は仕方ないなあと言った感じで再び構える

「星の息吹よ」

アルクの空想具現化による鎖が紅那岐を襲う、紅那岐も避けようとしたが範囲が広く避けきれず捕まってしまう

「弔毘八仙、無情に服す・・・！」

そして追撃とばかりに志貴の攻撃をモロに食らう紅那岐はそれで糸切れたように倒れた

「うーん、もう少し楽しめると思ったんだけど、思ったりあっけないわね」

「アルクエイド、そんな言い方は無いだろ」

アルクと志貴が話していると突如として強いプレッシャーが襲う。誰が出しているのかなんてこの場にいる人間は限られているのでそちらに目を向けると

「誰があっけないって？」

紅那岐が傷も無くたっていた

「うそ、何で!？」

「確かに手ごたえあつたぞ!？」

アルクと志貴が驚いている

「俺もしらねえ、けど戦いは終わっていないって事だ・・・行くぞ、さっきまでと同じと思うなよ?」

そして駆け出す紅那岐、一瞬でアルクの前まで移動すると右手にもつ剣で斬り飛ばすと今度は志貴に襲い掛かる

「くっ」

「そっぴや志貴聞きたいんだが、俺に死の点つてあるか?」

「何を言つて・・・っ!!!?!?」

志貴が改めてその目で紅那岐を見ると志貴は驚愕した顔をする

「そんな、死の点がないだと?」

「そうか、ありがとな!」

それだけ言つと紅那岐は志貴を再び吹き飛ばし距離を取つた

「さあ、成長の時だ・・・世界よ我が意に答えよ」

紅那岐が世界に呼びかけると首にかけてあつた指輪が光そして変化が起きた、今まで紅那岐が雷神化していたときは雷の色の象徴ともいえる金色に輝いていたが、今は纏っている色は赤であつた。その影響か髪の色も赤くなつていた

「まだだ」

そういつと今度は両手の剣を地面に突き刺すと魔法陣が現れ剣を飲み込んでいく。それが終わると今度は紅那岐の前に魔法陣が再び現れその中から剣と思わしき柄が現れた

「さあ、頭こぶを上げよ、アルテマカリバー聖約されし勝利の剣」

現れた剣は黄金に輝く剣である。これならば先ほどと変わらないが、しかしながらその圧倒的存在感あつぱんは乖離剣かいりけんすら凌駕りやうしていた

「さあ、行くぞ。真祖に殺人貴」

手に剣を持ち直し二人に向かっていく紅那岐

「はっ！」

一閃すると其処には次元を切り裂かれたように穴が開く

「シャレにならないわよ！」

「くっ」

先ほどまでの優勢が嘘のように紅那岐に押し切られていく二人

「仕方ないわね・・・偽りの月よ！」

アルクが分が悪いと思ったのか突き落としを行い倒そうとしたが、紅那岐はそれを真つ向から迎撃に入った

「アルテマカリバー聖約されし勝利の剣!!!」

真名開放を行い月を切り払う

「嘘!？」

アルクが驚きの声を上げるが、志貴は紅那岐の硬直を逃すまいと攻撃に入っていた

「極死・・・」

そしてナイフを投げつけ紅那岐に向かっていく志貴だったが

「残念だな、悪いが視えている」

「なっ!？」

志貴が驚きの声を上げるが仕方ない、今の紅那岐の硬直は確実な隙と思わしかったのにそれを防いだのだから。

しかも今の紅那岐の瞳は赤から虹色に輝いていた

「まさか、魔眼が開眼するなんてね・・・しかもそれが虹ってどう  
いうことよ」

「さてな、さて続きと行くのか？」

再び駆け出そうとしたが

「そこまでじゃ!」

突如としてゼルレッチがストップをかけた

「爺、邪魔をするな」

「そこまでじゃと言ったじゃろう？お前は強くなりたいたいにこやつ等と戦いたいといったんならもう十分じゃろ？今のお前はアルクエイドを上回ったんじゃから」

ゼルレッチの言葉に紅那岐は息を吐き殺気を霧散させた

「分かったよ、志貴・アルク、サンキュな」

「いいわよ別に」

「ああ、それにしても最後のは一体？」

お礼を言った紅那岐に答えた志貴とアルクだが志貴が最後の攻防に疑問があつたのか聞いてきた

「ああ、簡単だお前が極死しかけているのが先に視えたただけだ」

「未来視か・・・」

「ああ、それだけじゃ無いッポイが後は分からん」

それだけ言つと紅那岐は剣を開放し元の状態に戻す

「あれ？戻しちゃうの？」

「ああ、強力すぎるからな。それに後はちょっとした意志で出せるようになつたから別にいいだろからな」

そうして紅那岐は宝石剣を出しかえろうとする

「じゃあな、また会えることを楽しみにしてるよ」

「じゃあね」

「今度は殺し合いは勘弁してくれよ？」

紅那岐は志貴の返しに苦笑いしながら宝石剣を使って帰って行った

## 紅那岐の修行 VS 真祖・殺人貴（後書き）

レテイ「お久しぶりです？」

トール「何故に疑問系？」

レテイ「わからんw」

トール「今回は新たに手に入れた力を説明で終了よ」

ターヒュランス・バースト

### 神雷招来

見た目：金髪 赤髪

能力：新たに雷・電気の支配が可能に

また出力があがり、紅那岐の能力に更にブーストするようになり能力的に前の10倍ほどの出力

アルテムカリパー

### 聖約されし勝利の剣

ランク：EX

対人↪対界宝具

仕手が斬りたいと思ったものを斬る剣であり、それは人でも軍でも城でも世界でも何でも

魔眼：EX

未来視が可能となる、元々持っていた直感がより確実になったもの  
また、未来視は本来可能性だが紅那岐の場合は確定された未来を視るものなのでこれを超えるには視えても反応できないものか、それ以上の事を起さない限り覆らない  
他にも能力があるけどお楽しみに



「トール」では、感想ありがとうございました」

「レティ」では、次回で」

紅那岐の修行2 かつての居場所へ(前書き)

結構アンチ呼びそうな感じ？

## 紅那岐の修行2 かつての居場所へ

「あれ？紅くんスーツなんてきてどうしたの？」

別荘内にて紅那岐が出てきたのを確認したすずかには紅那岐の格好に疑問を持ちすぐさまその疑問をぶつける

今の紅那岐の格好は黒一色に包んだスーツを着ている。普段の紅那岐も基本は黒を基調としたものを好んで着ているがスーツを着ているのを見るのは始めてであった

「ちよつと修行してくる」

「また？それにその格好の理由は？」

すずかの疑問ももつともである、この前にはアルクと志貴とバトつて帰ってきたと思ったらまたなのであるから

「んじゃ、後はよろしく・・・1年くらい帰ってこれないかも知れないけど」

「行ってらっしゃい・・・1年!？」

すずかが紅那岐の言葉を理解したときには紅那岐は既にいなくどうすればいいかわらからず、思わず地団駄を踏んでいたのを発見したマーガレットはなにやら八つ当たりを食らったとか

十

十

十

紅那岐 Side

「ついたか・・・くっ、修正力が半端ないな。グリム俺の能力確認してくれ」

《了解》

流石に世界が拒んでるな、ちょっとでも気を抜けば存在が消えそうだ

《マスター、結果が出ました》

「ご苦労様、報告よろしく」

ふむ、確認したがやはり酷すぎるな。結果はこんな感じだった

- ・宝具は展開可能だが真名開放は不可
- ・復元する世界ダ・カーボ・九つの世界ノートウング・福音の弾丸ヴァイス・シユバルツの発動不可
- ・魔力弾は形成できるが、SLB並みの魔力を使って漸く銃弾くらいの威力
- ・疾風迅雷タイビュランスの発動不可
- ・魔眼は発動可、また修正力の範囲外
- ・身体能力の低下は認められず

「ふむ、魔力関係が軒並みダメか」

《そのようですね、私を使っても効果は薄いでしょ》

そうなるよ、やはり身体能力のみで行くしかないな

「ご苦労休んでいていいぞ。さて、行くか」

俺はそのまま鳳桜を持ち歩き出す、適当に歩いて情報集めるかな

「さてと・・・今は何年だ？」

近くにあった新聞を拾い上げて日付を確認する

「やっぱり、丁度10年経っているか・・・っ!!？」ゾク

新聞を見ていたら急に背中から何かが来たのを感じ振り向く

「誰だ!!！」

「おや、貴方は確かに死んだはずでは？」

後ろを振り向けば漆黒のスーツにロングコート、そしてつばの広い帽子を被った男がいた

「ええ、貴方と同じような存在になったんでね。そして実力をつけようと戻ってきたんですよ」

警戒は怠らず自分に起こったことを話すと目の前の男は驚いたような顔を一瞬したが、一瞬なので直ぐにもとの顔に戻り俺を興味ありげに見てくる

「クス、どうやらそうらしいですね。で、実力をつけようとは？」

「分かっているはずですよ？あそこまで行けたのならば相当な実力がつく。それに貴方が本来いるのはあそこでしょ？」

俺の返しも予想通りだったのか軽く笑うと

「いいでしょう。ならばたどり着いて見せなさい。私もあの方と一緒に待っていて差し上げますよ」

そして目の前の男はどこかに向かって消えていった

「ああ、たどり着いて見せるさ」

こうして俺は自分の生前の世界をもう一度歩き出す

Side End

十

十

十

「さてと、まずは入り口を探さないとな・・・みつけ」

紅那岐がなにやら扉を見つけ開くと其処には地下へと進む階段があり紅那岐は階段を下っていった

「ああん？誰だてめえは！」

降りていって最初の広間にいたのはいかにもごろが悪そうな連中であり、そのうちの犬男が紅那岐にいちゃもんをつけた

「いえ、ちょっと下に用があつてここを通らないといけないんです」

先ほどの男と同じように丁寧に喋る紅那岐であるが男達は紅那岐を取り囲む

「下だあ？ テメエみたいのがいけるわけ無いだろうが」

そう言つて品のない笑みを浮かべる男共に紅那岐は溜め息を吐いて、通り抜けようとしたが肩をつかまれて阻まれてしまう

「まちな、俺達のシマに無断で足を踏み入れておいてただで通れると思つてるのか？」

「はあ・・・昔から上層階は治安が悪かったがここまでとは」

そして紅那岐は刀を抜きながら男達を瞬く間に鎮圧し、とつとと目的の場所へ向かうために歩を進めた

「う・・・あれはまさか？ ありえねえ、あいつは死んだつて噂じゃ」

奇跡的に意識を保っていた男だったが紅那岐の姿を見てまさかと思ひながら完全に意識を手放していた

十

十

十

そんなこんなでドンドン目的地に向かうために階段を下りていく紅那岐だったが再び広いエリアに出た

「どつやら中層階に ついた ようですね」

当たるを見回す紅那岐、其処は先ほどの場所とは打って変わりあ

る程度の治安があるような場所であった

「昔はここらへんで仕事をしていたなそういえば」

感慨深げにあたりを見回す紅那岐に突如として後ろから声が聞こえた

「テメエは掃除屋！？ありえねえ、あいつは死んだって噂だ。それにここ10年確かにあいつはいなかった。下に行ったって噂だがそれも眉唾だ」

後ろを振り向くとなにやらぶつぶつ言っている男があり、そして何より自分の事を知っているようなことを言っていた

「ああ、貴方は・・・確か情報屋の」

「おうよ、てかおめえどうやって？いや聞くまい。それより一体どうしたってんだ」

情報屋と呼ばれた男にこれといって事情を話すことも無く目的を話すとは男は

「いいぜ、情報をくれてやる。代金は昔から貰っていたから今回はつけておいてやる」

それだけ言うと紅那岐は男から情報を貰いある場所を目指す

十

十

十

紅那岐 Side



「ここに来るのも久々だな」

俺が訪れた場所はある一軒家である

「さてと、あいつの話だと俺がいなくなっから誰も住んでいないとは言っていたが法も無い所で守る奴もいないだろうからな」

玄関から入っていくと思いのほか綺麗になっているから恐らく誰かが住んでいるんだろう、まあここでかち合わないことに感謝しつつ、かつての俺の部屋があった場所に向かおうか

「さて、あれは・・・無いか」

部屋に入り床下の隠し保管庫を空けるが目的のものは無かったってことは恐らくどこかに消えたんだろうな

「じゃあない、あいつに貰った情報を元に下に行くか」

家を発ち下へと向かう階段がある場所に向かうと

「ああん？誰だお前は」

階段近くに根城を構える馬鹿共がいた。・・・あの野郎これ知っていただろう？

「いえ、通りすぎりですよ。ただその先の階段に用事があるだけで」

「ほお、じゃあ金目のものよこしな。そうしたら通してやらんこともないぞ」

リーダー格の奴がそんなことを言ってきたら、ここで宝石ばら撒けば通してくれるかな？無いな、ここじゃ弱肉強食がデフォだから力づくのほうがいいけるな

「お断りしますよ。貴方達に恵んであげるほどバカじゃないですからね」

そういうと全員殺気を俺に向けて放ってくる。うん、やっぱり上層階の奴等の100倍強いわ。昔はこころへんで仕事していたんだが・・・昔の俺のほうが強かったんじゃない？魔力もなにも持っていないのにこいつ等くらいは楽勝で相手していたし

「さてと、きなさい」

「やっちなまえ!!」

男の号令と共に俺に向かってくる馬鹿共、手には剣た斧のほかには銃やらなんやら色々なものを使ってきて殺しにくる・・・ああこれだよ俺が求めたものは

「ククク・・・」

「何が可笑的い!!」

「いえ、ただやはりここは異常だったんだと自覚していただけですよ」

そう、異常だ。転生前はこんなのは普通と思っていたが、転生後いろいろな人の話を聞いてみるとやっぱりこんな日常はありえないと結論がついたからな。

騙し騙され、少しでも気を抜けば待っているのは死であり、故に己の本能を如実に現すここがやはり俺の求めたものだな

「さあ、私を楽しませなさい」

「ふう、まさかここまで苦戦するとは思いませんでしたね」

あいつ等を片付けるのに20分以上かかってしまった。昔と大體とんとん位か？そうすると俺自身が弱くなったのか、それともこの中層がレベル上がったかはわからんが次の下層で分かるだろう。

かつて俺が逃げ出すことしか出来なかった場所に行けばね・・・

「目的地は最下層、さあとつとと行くか」

そして俺は下層に続く階段を下りていった

## 紅那岐の修行2 かつての居場所へ（後書き）

レティ「という訳で、紅那岐はかつての自分がいた世界に戻っていききました」

トール「ちょっと、ルール破るのやめなさいよ！」

レティ「でも実際お前もあんなところって知らなかったべ？」

トール「ええまあ」

レティ「という訳で感想ありがとうございました」

トール「この話はだいたい2・3話くらいで完結します」

レティ「それが終わったらクリスマスの特別編です」

トール「では、次回で」

## 紅那岐の修行2 かつての居場所へ part・2 (前書き)

前回の続き

紅那岐の世界の簡単な説明

地上意外にも地下にも世界がありその場所では上層・中層・下層・最下層といったエリアが存在する

またどの層にもある程度の深さがありたとえば地下1階〜5回までが上層と別れているように一口に上層といっても結構統治条件が違う

また、ダンジョンRPGでも同じように深ければ深いほどそこにいる者達の実力は高い

## 紅那岐の修行2 かつての居場所へ part 2

紅那岐 Side

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ〜」

とりあえず息をつけるぐらいには落ち着けたか。下層域に入って早3ヶ月たつが未だに目的地まで遠そうだな。

如何せん、昔はここにとどまるのすら不可能だったから成長したと言えば成長したけど、しかしだ、戦うこととなると命をかける戦いが基本だし。

疾風迅雷タービュランスを使えば何とかなるかもしれないがそれでも強すぎる。中層の連中が可愛く見えて仕方ないな

「　　っ!?!」ゾク

思考に耽っていると殺気を感じ急いでその場を飛びのけば俺が今までいた場所は爆発して吹き飛んでいた

「ほう、今のを避けるか。中々に面白いな」

現れたのは俺と同じくらいの身長の男だったが、手には何も持っていないかった。どうやって爆発を起したって言うのか

「ふう、行き成りご挨拶ですね？下層は行き成り戦いを起すのはほとんどのいと聞いていましたが？」

「お前中層にいたのか？まあ、お前の言葉通りほとんだからな、その例外が俺って言ったところだ」

性質が悪いのに見つかってしまったな

「まあ、私も別に構いませんがね」

鳳桜を抜きながら男を見る。手に獲物を持ってないといったところから格闘ベースだろうか？そうすると爆発が起きたことが説明つかないな。そうすると可能性が低そうだが暗器使いか？

「んじゃ、行くぜ！」

男が此方に向かって拳を突き出してくることからやっぱり、格闘ベースか。とりあえずいなしてから攻撃しよう

「ふっ」

俺が刀で男の拳をいなしたら男がにやりと笑った（この場所ではよっぽどでない限り【斬りにいかなければ】きられることはありません）

「爆ぜろや！」

「なっ!？」

いなした瞬間触れていた部分が爆発を起し俺を吹き飛ばす

「くっ、まさかとは思っていましたが下層ではスキルもちがデフォですか」

「スキルなんだそりゃ？ただ火薬で攻撃しただけだよ！」

そう言って再び攻撃を仕掛けてくる男、俺も避けながら反論させてもらう

「火薬って貴方のスタイルでどうやってですか」

「ああ？俺の体の中に決まってるだろうが！オラもういっちょよ！」

それがスキルだと言いたい！なんだよ体の中って。てか、空気でも何でも任意に爆発できるってのはきついな。

もし万が一避けそこなつた瞬間に体が原型残さず吹き飛ばされる

「くう！ここまで戦いづらいなんて最悪ですね」

「だろうな！俺と戦いたがる連中なんてこのエリアじゃないからな！」

マジかよ、下層の上のほうとは言えこいつこのエリアのボスかよ。  
・マジで厄介な奴に目をつけられてしまったな

「オラドンドン行くぜ！」

そう言って男は走りながら瓦礫をいくつかもつと突如として目の前に放る・・・ってマズイ！

「うおおりゃあっ！」

やっぱり目の前で殴りつけて爆発を起す。爆発によって出来た破片が逃げ場が無いまるでマシンガンのように俺を襲う



「くはっ・・・」

致命傷を避けられたがダメージが深刻だ

「ほう、俺の男の魂マシンガンを食らって大丈夫とはな」

マジでマシンガンだったってかなにそのネーミングセンス。作者大丈夫か？・・・メタ発現はおいといて、加速度的に放たれるつづてがきつすぎる

「さて、終わらせるか。まあまあ強かったがその程度だったか」

「その程度？」

あれ？なんか頭にきた。そっぴや前もアルクに似たようなことを言われたときに一気に頭がさめて力が跳ね上がったな

「フフ、誰がその程度ですか？」

いつの間にか俺は男の隣に立っていた。そういうのは可笑しいな、自分で移動したんだから

「なっ！？お前どうやって・・・」

「どうやっても何も、ただ此方に歩いてきたただけですよ？」

「それにお前殺気を何処にやりやがった！」

あれ？もしかして気づかなくなった？普通に出しているんだが・・・  
そうするとこいつの想像の上を行ったって事か？

「まあいいです。終わりなさい」

「へっ！そう簡単にはいかねえぞ？俺に攻撃したら最後。俺自身を守るように火薬が爆発してお前を吹き飛ばすからな」

男が何か言っているが俺は既に攻撃を終えていて

「・・・は？」

「もう斬りましたよ。さようなら」

俺は男にそう言っただけで背を向けて歩き出す、男が此方に向かってくるようとしたが既に斬り終わってるから動いた瞬間傷口がずれて男の一生が終わる。

感謝するよ、いまだ俺を上を持って言ってくれたことを

+

+

+

「フッフ、可愛いわね貴方。さあ私の人形ペットになりなさい」

「冗談を。猛獣を操れるものなんていませんよ」

「あら？サーカス団だって猛獣を扱ってるわよ？」

「それは、猛獣ではなく牙が無いただの動物ですよ。本当の猛獣など扱えるものなんて存在しませんよ」

まあ、召喚獣とかは別だけどな。俺が今戦っている女性はなんか暗器を使って俺を攻撃して来るんだが一つ下に下りただけで再び苦

戦とかやめてくれないか？マジで鬱になる

「フフフ、ここ最近でこのエリアの気になる男の子は全員ペットになってくれたわよ？」

「まさか、貴女がこのエリアでのトップですか？」

「ええ、そうよ」

綺麗な笑顔をくれる女性・・・マジかorz　なんで会う奴全員最強なんだよ。俺呪われてるのか？【この世全ての悪】ですら俺呪えないはずなんです

「フフフ、君みたいな生きのいい子をペットに出来たらさぞ楽しいでしょうね！」

鋼糸を使って俺を攻撃してくるのを何とか薄皮一枚で防いでいるけどジリ貧だな。一か八かで勝負をかけるしかなさそうだが。しかし今の俺に一撃必殺は無いんだよね。万が一効き浅ければ死ぬし・・・あ！

「魔眼使うの忘れてた」orz

すっかり忘れていたよ本当に。さてと任意で発動できるとはいえちよつとでも意識を間違えると死ぬからな気をつけないと

「ふう・・・」

「あら？君面白いわねその眼」

女が言ってくるが

「おっと」

「ふくん、さっきまで食らっていたのに急に避けるなんてどういうカラクリかしら？」

「知りたいのなら私を倒してからですね」

そして俺は突撃するが女性のほうは一瞬驚いた顔をしたけどすぐさま攻撃態勢に入る。視角や死角にさまざまな攻撃を放ってくるが俺は自分に脅威になるものだけを選んで避ける。

俺が放つのは確実に彼女を倒す一撃だ。視えているものは確定された未来。ならば疑うな、この一撃で終わらせるのだ

全てを込めて彼女に一閃すれば彼女は俺に言った人形と言葉が会うように糸の切れた人形のようにその場で動かなくなった

「それでもこの様か」

何とか避けれたがそれでも体がついていかずに食らった攻撃が多数あった。まあ致命傷は避けたからこのまま次に行くでしょう

十

十

十

そして俺は漸く、そう漸く目的地に到着することが出来た

「待っていましたよ。随分遅かったですね」

俺に語りかけてくるのはこの世界に来て初めてあった人物であった

紅那岐の修行2 かつての居場所へ part・2 (後書き)

レティ「紅那岐の修行編次回完結」

トール「・・・化け物ばかりね」

レティ「まあ、既に下層域で戦った連中ってお前より強いからね」

トール「!!!?」

レティ「すでにすずかがバランス壊したし別にお前最強じゃなくていいや」

トール「orz」

レティ「では、感想ありがとうございました」

紅那岐の修行2 かつての居場所へ part・3 (前書き)

完結

## 紅那岐の修行2 かつての居場所へ part.3

「化け物ばかりですねここは・・・まあ最下層入ったら戦闘は無かったです」

目の前の男性に状況を話す紅那岐に対し男はクスリと笑っただけであった

「そういえば・・・あの人は？」

「ああ、あの方ならば」

黒衣の男性は紅那岐からの視線を外しある方向を見るので紅那岐もつられてみると

「ぐはっ・・・」

突如として背中から衝撃が走りそのまま地面に倒れ付す

「やっと来たな！待っていたぞ」

突撃してきたのは美しいほどの銀髪を膝裏まで伸ばした女性である

「か・・・が・・・ぐふ」

何かを言おうとする紅那岐であるが如何せん先ほどのダメージ＋その後抱きつかれ、その力があまりにも強すぎて喋れないでいる

「クス、櫛那くしなさんそろそろ放して差し上げないと死んでしまいます

よ？」

「黙れクロード、紅がこの程度で死ぬわけ無いだろう。ここまで来たのならばこの程度は受け止められるべきだ。なあ？」「……う……」

櫛那と呼ばれた女性がクロードと呼ぶ男性を一瞥したあと再び紅那岐を見てみると其処には顔を青くしてがっくりとうな垂れる姿があった……なにやら口からでていようような

「うわあああ！し、死ぬな紅おおおおおお！！！」

その後頬に平手打ちをして覚醒させようとしているが如何せんそれもものすごい威力なのか着実に紅那岐のライフを削っていく

30分後

「ここに来て初めて明確な死を感じましたよ」

九死に一生を得て何とか息を吹き返した紅那岐が愚痴をこぼす



「す、すまなかつたな紅。し、しかし私も会いたかつたのだから許してくれ。な？」

目の前で謝る女性にたいし溜め息を吐きながらもその顔は既に許していた

「別にいつもの事だったから起こってはいませんよ」

うな垂れている女性に苦笑いをしながらも紅那岐は立ち上がり二人に向き直る

「改めて久々ですね。父と母」

そう、この二人はなによりも紅那岐の親なのである

「ええ、久しぶりですね」

「アレから10年経って再び会えるとは、神とは本当にいるのだな  
お互いに挨拶もそこそこにし本題に入った

「さて、強くなる為に帰ってきたと言っていましたか？」

「ええ、ちよつと訳ありで「紅！！」・・・なんですか？」

「いつまでそんな喋り方をしてるんだ！クロードを真似ているのは知っているが、お前らしさが無いぞ！」

「はぁ・・・分かったよ」

遂に口調を崩し元の喋りに戻ると櫛那は満足そうに頷いていた

「話を戻すけどちょっと訳ありでね、本当なら帰るつもり無かったん……だけ……ど……」

帰るらへんのくだりで突如プレッシャーを感じ言葉が小さくなっていく紅那岐、見てみれば櫛那がものすごい表情をして睨んでいた

「なにかな、母さん？」

冷や汗を流しながら櫛那に尋ねる紅那岐、なにやらとてつもない地雷を踏んでいるツポイが紅那岐は覚えは無かった

「紅？ちよつと聞きたいのだが……女かな？」

綺麗な笑顔で尋ねる母櫛那、紅那岐は何故分かったといった顔をした瞬間思い出していた

「私は……私は……認めん!!」

この母がものすごい親馬鹿ということ。これが紅那岐が娘で櫛那が父ならばある意味で納得がいく構図なのだが、如何せんこの二人の性別は前述の真逆である。

故にこのやり取りはものすごくアブノーマルな感じになっているのだが

「父さん止めてくれ。わりとマジで」

とりあえず救いを求め父に救援を求めるも

「がんばってください」

それだけ言って取り合って貰えなかった

「さあ・・・紅？覚悟はいいか？」

「いやいやいや、マジで待ってくれ！何ゆえ女がらみで母親に命を狙われなきゃいけないんだ」

「問答無用！！」

それだけ言うとも目の前から急に櫛那の姿が消える、当然消えたのではなく超スピードで目に見えないだけだが

「くそ！」

気配を察知し刀を其処に振るうも空振りで終わる

「さあ、私と共に一緒にいるぞ」

体制を整える前に目の前に櫛那が映る、紅那岐はとっさに体をねじり回避の体制に入るもその動きが遅いといわんばかりに攻撃が叩き込まれる

「ゲホツ・・・ゴホツ・・・」

咽ながらも何とか体制を整え両足で着地を果たすもダメージ量が尋常ではなかった

「全然ダメだな、そんな事で嫁を貰うなど私は許さん」

「いや・・・嫁とかじゃないんだが」

「黙れ！」

そして再び目の前から消え紅那岐を攻撃していく櫛那、それに続いていっているのはクロードだけである

「さすが神速といわれるだけありますね、あの速さと攻撃力でこの最下層を統べる一人だけあります」

観戦しているクロードが言っているが、当然二人には聞こえていなかった。というか紅那岐が完全に袋叩きにされているだけではないが

「ふう・・・これに懲りて、女などにうつつを抜かすなよ？」

全く持つて理不尽である物言いに流石のクロードも苦笑いをしてるが、止める気もないのか静観している

「あー・・・あー・・・あああ！うぜえええ！！！」

突如として紅那岐が吼える。突然の事に櫛那は驚く肩を竦ませるがその言葉に怒りを覚えていた

「ほう、母親にうざいだと？」

金色に輝く瞳で紅那岐を睨むが紅那岐は小さく笑う

「違うさ、俺がうざいと言ったのは世界のほうだ」

「世界だと？」

「ああそうさ、俺はこの世界では死んだからね、だから世界が俺を消そうと修正力を働かせているんだよ、そのせいで思いのほかスキルが封印されていてね」

それだけ言うと紅那岐は大きく息を吸ったあとゆっくりと吐いていく

「世界よ・・・我が意に従え」

それだけ言うと胸にかけてあった指輪が淡く光ったと思うと紅那岐がこの世界に来た時の修正力が嘘のように消えたそして

「さあ、本気に殺し愛を始めようか母さん・・・疾風神雷」  
タイピュランス

紅那岐に紫電が走るとそこには雷を従える雷神がいた

「今までのようにはいかないぞ」

「面白い!..!」

すると先ほどと同じように櫛那が目の前から消えたと思ったが

「悪いが視えているし、追える」

紅那岐が刀を振るうと先ほどは空振りしたが今度は捉え櫛那を斬る

「くっ・・・驚いたぞ、急に髪を染めたと思ったらそこまで強くなるなんてな。これならもう一回り上をだせるな!」

すると、超スピードで動いていた櫛那が更にスピードを上げ再び視界から消える。紅那岐もそれについていこうとするが全く追いつけなかった

「ハッ！」

「くっ！」

それでも魔眼の恩恵で何とか動きについて行きすべての攻撃をいなす

「・・・まさかここまで強くなっているとはな」

突如動きを止め紅那岐に賛辞を送る櫛那だが紅那岐の頬には冷や汗が流れる

「みせてやろう、私の全力の一部を・・・天狼と呼ばれる力をな」

すると櫛那が体制を低くし片手を地面につける（ライダーの戦闘時の姿に近いです）紅那岐はその姿を見て唯一つ、狼と確かにそう思った

「さあ、行くぞ」

「は？」

紅那岐が呆けた声を出す、当然だろう突如として櫛那の姿が消えるのではなくて認識できなくなったのだから

実力がかけ離れていれば起こる現象だがこの場合は違う、あまり

に早すぎて気配すら置き去りにして攻撃を出してきたのであるから

「ゲホツ・・・!?!」

突如として腹に風穴が開き血を吐き出す紅那岐

「はは・・・ありえねえ」

そして紅那岐はそのまま気絶してしまった

+

+

+

「うっ？俺は・・・」

「おきましたか？」

目を覚ますとそこはベットの上であり隣には父が立っていた

「ああ、うん。・・・そっか俺母さんに」

「ええ、どでかい穴を開けられましたからね」

「そっいえば母さんは？」

「彼女なら、穴を開けなおかつ気絶させてしまったことに後悔して下層にる方々に八つ当たりをしている最中ではないですかね？」

その答えに思わず苦笑いしか出ない紅那岐だったが母がいないと  
いうことで聞きたかったことを父に聞いた

「なあ父さん。父さんは何で転生者としてこの世界に来たんだ？それにその能力にした理由は聞いたけど別にそれにする必要はなかったよね？」

「ああ、本当に貴方は知っていますね。まあ私の場合は単純にその理由が本当だったんですが強すぎる力は災いと呼ぶといわれてこの世界に送られただけですよ」

「ふん」

「後はまあ、このキャラは意識して最初は意識して使っていたんですが次第に此方が素になってしまいましたね」

そう言って笑う父であったが突如玄関からドタバタと大きな音が聞



こえてきた

「どつやら帰ってきたようですな」

「そうだね」

そうして二人して耳をふさぐ

「紅おおおおおおお！！」

耳をふさいでもなおでかい声を出しながら入ってくる母だった

「おお！起きたか心配したぞ！」

「しまっ！ゲハッ」

そして紅那岐が起きているのを確認した櫛那が再び紅那岐に抱きつく

「すまなかつたな、お前があそこまで強くなっていてつい嬉しくな  
ってつい本気を出してしまった」

そうして再び紅那岐をより強く抱きしめる櫛那

「ちょ・・・か・・・さ・・・これ・・・さば・・・」(訳: ちょ、  
母さんこれ鯖折りになってる)

そして再び口から何かを吐き出しながらぐったりしている紅那岐  
を視認した櫛那の蘇生<sup>ヒンタ</sup>を食らい一命を取り留める紅那岐であった

「さてと・・・悪いけど後3ヶ月しか俺はこの世界には入れない」

ある程度回復した後紅那岐がこの世界の滞在時間を告げると櫛那は絶望的な顔をした

「そ、そんな。私と居るのがそんなに嫌なのか？」

泣きそうな顔をしながら紅那岐を見る櫛那に紅那岐は申し訳なさそうに説明をする

「さつきも言ったけど、俺はこの世界では死んだ存在なんだ。だから俺自身がこの世界に留まっている時間は限られてしまうんだ。だから残りの3ヶ月間は申し訳ないけど修行をつけてくれないか？父さん、母さん」

頭を深く下げる紅那岐に二人はその真摯な姿を見て息を吐きそれを了承した

「さつきも言ったが、私の本気は確かに出したが全力は出してないからな？最低でも出させてもいいと思えるくらいにはしてやるっ」

「ええ、昔見たくやってあげますよ」

何となく後悔したかな？と思いつつも紅那岐は修行に打ち込んでいった

3カ月後

「じゃあ、世話になったな母さん、父さん」

この3ヶ月間を無事に乗り切り遂に帰る日を迎えた紅那岐

「な、なあ紅？ やっぱり「往生際が悪いですよ？」うっ……分かったよクロード」

うな垂れる櫛那をよそ目に紅那岐は宝石剣を出し世界移動の準備をしていたら突如としてクロードから声がかかる

「これを渡しておきますよ」

クロードから差し出されたのは柄から何かまですべて赤く染まった刀だった

「これは【血霞<sup>ちがすみ</sup>】！？ 父さんが持っていたのか」

「いえ、櫛那さんが貴方が死んだときに棺桶に入れるのは嫌だとダダをこねて家に保管していただけです」

「母さん……」

二人のジト目に一歩引くがお構い無しに言い訳をしていた

「し、仕方ないだろう！それが紅の唯一の遺品だったんだから！」  
そう言っ過ぎてぎゃあぎゃああ騒ぐ母に溜め息を吐いて近づく

「悪いけどこいつは持っていくから、これを二人に上げるよ」

そう言っつて差し出すのは指輪である

「これは俺が作った指輪だ、俺も持っているからおそろいだな」

そう言っつて首にかかっている指輪とは違う別の指輪をだして二人に見せる

「分かったよ、もう何も言わん。元気でな紅」

「ああ、本当にさよならだ・・・」

「お元気で」

こうして紅那岐は両親に別れを告げて自分がいるべき世界へと帰って行った

「うう・・・」

「未練がましいですよ？」

「分かっている！クロード今日は寝かさんからな覚えておけ！」

「クス。わかりました」

+

+

+

「ふいいい・・・ただいま」

「お帰り、紅くん」

紅那岐が帰ってきたところにはさすがが居りそして出迎えていた  
がその笑顔はとてつもなく冷たかった

「えっと、すずかさん？なんでそんな怖い笑顔なんでしょうか？」

「フッフ、紅くんったら本当に1年間帰ってこなかったんだもん。怒るなってほうが無理なんじゃないかな？」

「し、仕事なら分身置いていったから問題ないよな？」

「ええ、ええ。仕事は問題なかったよ？」

「では、何で怒っているのでしょうか？」

「クスクスクス、それを私に言わせるのかな？」

「本当にスイマセンでした!!!」

「何に謝っているか分からないけど・・・あれ？別の女の人の匂いがするね？修行ってのはいい訳で女の人にあってきたのかな？」

「間違ってる、いやあながちあつてるとも言えるけど違う」

「問答無用!!!」

「ぎゃあああああつ!!!!!!」

吹き飛ばされる紅那岐であったがそのとき思ったのはただ一つ

（俺、強くなったはずなのに全く攻撃が見えなかった・・・がふ）

こうして紅那岐は帰ってきて早々にすずかにぶちのめされるとい  
う結果に終わったのである

因みに現在のすずかの強さはマーガレット以上になっているので

どつがんばつても紅那岐が勝てるわけが無かったりする

紅那岐の修行2 かつての居場所へ part . 3 (後書き)

レティ「修行編が終了」

トール「とんでもない強さの親ね」

レティ「どうしてこうなったのかは私もわかんね」

トール「あんだ・・・」

レティ「さて、軽く人物紹介を」

赤羽 クロード

紅那岐の父であり、GBの超越者の力を持って転生した人物。本物とは違い基本的には自分の強さを求めたりはしないがそれでも強い相手がいれば戦いに赴くなど何だかんだでオリジナルと似たり寄ったり

性格や口調は最初意識して真似ていたが今ではそちらが素となった戦闘スタイルはメスを使うよりも武器での攻撃のほうが好き  
また名字も赤羽の理由としては、超越者となる前の彼も尊敬できるとのことだから

赤羽 櫛那

紅那岐の母、モデルは大番長の天楼玖那岐だが中身は別物。  
大の子煩悩と言う名の親馬鹿、昔紅那岐に言い寄った女どもを殲滅したりするぐらい紅那岐を溺愛し放さない

戦闘スタイルは高速戦闘スタイル、どんな敵でも追いつけなければ意味が無いといった感じで本気のスピードは存在すら置いていく  
また、普段は無手で戦うが武器を使った攻撃も得意である。正直高



速戦闘に支障が無ければなんでもいい

レティ「こんな感じかな」

トール「母親の感じだと髪をまとめてないと可笑しくない？」

レティ「あくまでモデルであって、全然違うから問題なし」

トール「てか、さすがの強さ異常じゃない？」

レティ「気にするなw少しリクエスト貰って紅那岐はがんばっても  
すずかを抜けないようにしていただけだw」

トール「紅那岐エ・・・」

レティ「では、感想ありがとうございました」

トール「クリスマスはコラボを実施するわよ」

レティ「24か25かは私の状況次第なので分かりますが」

アスカ「じゃあまたね〜」ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5587w/>

---

神々のゲームと転生者

2011年12月23日01時54分発行